



Title	レトリックと文法（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト． 2023, 2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91576
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2022

レトリックと文法

大 森 文 子

渡 辺 秀 樹

村上スミス・アンドリュー

中 畠 浩 貴

福 本 広 光

中 村 瑞 樹

竹 森 ありさ

Doan Ngoc Minh Tran

山 倉 佐恵子

Luke Malik

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2023

言語文化共同研究プロジェクト 2022

レトリックと文法

目次

大森文子 鏡と水仙 — シェイクスピアの <i>Sonnets</i> における隠されたレトリック	1
渡辺秀樹 <i>Hamlet</i> における動物名の繰り返しと列挙の意味 翻訳で失われるメタファー義の問題、そして雲の場を中心に	15
村上スミス・アンドリュー 翻訳手順の「補償」 — 翻訳で失われたものを補うために —	27
中畠浩貴 英語名詞由来 <i>er</i> 名詞の予備的考察	49
福本広光 John・F・Kennedy の演説にみられる分離不定詞のレトリック効果	57
中村瑞樹 規則に沿って生きること — アメリカ文学における野球規則を読む	67
竹森ありさ 色彩語 <i>red</i> を含む強意直喩表現の分析 — <i>red as blood / fire / rose</i> の比較 —	79
Doan Ngoc Minh Tran フレーム意味論と直接スコープから見たベトナム語、日本語および英語の 感情概念—ベトナム語の <i>giận</i> 、日本語の「怒り」、英語の <i>anger</i> を比較して....	91
山倉佐恵子 期待値からみた取り立て助詞—複合表現シハシナイの特徴をめぐって—	105
Luke Malik Elizabeth Camp's Misreading of Davidson's Theory of Metaphor	115

鏡と水仙—シェイクスピアの *Sonnets* における隠されたレトリック

大森 文子

1. はじめに¹

本稿は昨年度のプロジェクト報告書掲載の筆者の論文（大森 2022）に続けて、シェイクスピアの *Sonnets* のレトリックを考察するものである。大森（2022）では、シェイクスピアによる〈時〉と人との関わりを表す比喩表現を観察し、〈時の翁〉（Father Time）の持ち物とその用途、人間に及ぼす作用を詳細に検討した。本稿では、特に美しい青年への愛を描いた 1 番から 126 番までの詩群を対象にする。〈時〉との関わりの中での詩人の青年に対する認識のしかたと愛情について、人間を〈植物〉として理解するメタファーの観点から考察し、詩に明示されない隠されたレトリックを探る。²

本研究のきっかけとなったのは、言語文化レトリック研究会（本研究科言語文化学専攻内の研究会）第 121 回例会（2022 年 12 月 17 日開催）である。この会で、筆者は大森（2022）に基づき加筆した研究を発表し、当日参加された会員の先生方や院生諸氏からコメントをいただき、大いに刺激を得た。有益なコメントをくださった方々に、この場で感謝申し上げたい。

2. 時の翁と人間

2.1 〈植物〉としての〈人間〉

大森（2022）は西欧文化圏において〈時〉を老人として擬人化した〈時の翁〉（Father Time）の概念について取り上げ、〈時の翁〉がシェイクスピアの *Sonnets* の様々な詩において描出されている様子を観察した。〈時の翁〉とは、（時に前髪を残した）禿げ頭の老人で、通常翼を持ち、大鎌あるいは手鎌、時には砂時計などを携えた姿がルネサンス美術やバロック美術などで描かれている（パノフスキー（2002）および *OED* “time” 34b 参照）。

大場（編注訳、2018、p. 33）には〈時の翁〉を描くシェイクスピアと同時代の 2 つの図版が掲載されている。1590 年頃に Crispin de Passe (the Elder) が描いた図では、両手に大鎌を持った時の翁が翼を広げて空中を飛びながら地上を見下ろし、地上では倒されて息絶えた人間たちが横たわる。1612 年に Otto Cornelisz van Veen が描いた図では、時の翁は背中で翼を広げたまま地上を走り、両手で大鎌を頭上高く振りかざし、その足元には横たわりながら怯えた目で翁を見上げる男性たちや、煉瓦造りの建物の陰でおののく女性たちの姿が見える。鎌は本来、植物を刈るための道具である。ところが、このように時の翁の傍で恐れおののき、あるいは死に絶えた人々の姿からは、〈時の翁〉特有の持ち物（attribute）としての鎌が「人間の命」を刈り取るための道具として機能していることがわかる。〈時の翁〉の側から見れば、人間は植物と異なることなく、鎌で刈り取ってしまえるものなのである。〈鎌〉を携えた〈時の翁〉という文化モデルは、〈人間は植物である〉と捉える概念メタファーを包含するものと言える。

シェイクスピアの *Sonnets* における時と人間の関係を描いた詩の中で、〈人間は植物である〉というメタファー思考そのものが明示されているものがある。以下に引用するソネット 15 番である（以下、本稿での引用の下線部はすべて筆者による）。

- (1) When I consider every thing that grows
Holds in perfection but a little moment;
That this huge stage presenteth nought but shows,
Whereon the stars in secret influence comment;
When I perceive that men as plants increase,
Cheerèd and checked even by the selfsame sky,
Vaunt in their youthful sap, at height decrease,
And wear their brave state out of memory;
Then the conceit of this inconstant stay

¹ 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）。

² 本稿で取り上げた *Sonnets* および *Venus and Adonis* の引用は Burrow ed. (2002) を参照した。

Sets you most rich in youth before my sight,
Where wasteful time debateth with decay
To change your day of youth to sullied night,
And, all in war with Time for love of you,
As he takes from you, I engraft you new. (Sonnet 15)

この詩では 5-8 行目で、人間が植物に等しく (“men as plant”) 成長したり衰えたりする様子が描かれる。9-12 行目では詩人は青春の盛りの青年の姿を思い起こし、横暴な時 (“wasteful time”) ³ が青年の青春の昼を醜い夜に変えようと謀る様子を想像して、13 行目では愛する青年のために〈時〉と全面的に戦争 (“war with Time”) をするのだという姿勢を見せる。

大場（編注訳、2018）は *Sonnets* を二幕構成の劇作品のように解釈して 1 番から 126 番までを Act I とし、「Temps (Time) は *The Sonnets Act I* をとおしての大なる敵役である。」(p. 53) と述べている。*Sonnets* の 1 番から 126 番までのテーマは美しい青年への詩人の愛であると同時に、時との戦いでもあると言える。この「時との戦い」というテーマを最初に打ち出しているのが、Sonnet 1 番の冒頭 4 行である。

(2) From fairest creatures we desire increase,
That thereby beauty's rose might never die,
But as the ripper should by time decease,
His tender heir might bear his memory: (Sonnet 1, ll. 1-4)

この 1 番から 17 番までは青年に結婚を勧める内容で、Marriage Sonnets と呼ばれる (Wilson ed., 1966, p. 89 参照)。引用 (2) では美しい青年を「美の薔薇」 (“beauty's rose”) になぞらえ、美しきものこそ殖えてほしい、薔薇が死に絶えることなく、〈時〉によって老いたものが死んだとしても若い後継ぎがその面影を留めてくれるようにと、青年が結婚して子供を儲けてくれることを願う詩人の思いを表している。美しい青年の命をいつかは奪ってしまう〈時〉に抗おうとする詩人の戦いの姿勢が、薔薇の美の次世代への継承という観点から表現されている。

1 番では青年を「薔薇」に喩えていたが、126 番までを広く見渡すと、15 番に見られたような〈人間〉を〈植物〉の観点からとらえるメタファー思考に基づき、詩人は青年をさまざまな植物に喩えている。青年の喩えとして用いられた植物をまとめると【表 1】のようになる。

【表 1】 *Sonnets* 1 番～126 番における青年の喩えとして用いられた植物

青年	植物		ソネット番号
現在の青年 (若く美しい姿)	花	薔薇 (rose)	1 番、35 番、54 番、67 番、95 番、98 番、99 番、109 番、116 番 (rosy)
		堇 (violet)	12 番、99 番
		百合 (lily)	98 番、99 番
		マヨラナ (marjoram)	99 番 (buds of marjoram)
		花 (flower)	5 番、16 番 (詩人の子の喩えとして)、65 番、68 番、69 番、94 番、98 番、99 番
		蕾 (bud)	(薔薇の蕾) 1 番、35 番、95 番 (budding) (花の蕾) 18 番、70 番
	樹木	木 (trees)	12 番
		樹液 (sap)	5 番、15 番
		葉 (leaves)	5 番、12 番
	植物全般	植物 (plant)	15 番
緑 (green)		63 番、104 番、112 番 (o'er-green)	
穀物	緑 (green)	12 番	
不実な青年	草	雑草 (weed)	69 番、94 番
	果実	イヴの林檎 (Eve's apple)	93 番
	花	腐った百合 (lilies that fester)	94 番
未来の青年 (年老いた姿)	草	雑草 (weed)	2 番
	穀物	芒 (おぎ) (white and bristly beard)	12 番

³ ここでの “wasteful time” の意味について、Duncan-Jones (1997, p. 15) は “time that lays things waste, and is itself wasted” と述べ、大場（編注訳 2018, p. 41）は “wasteful = destructive” との注釈をつけ、“wasteful time” を「暴虐の時」と訳している。

2022 年 12 月 17 日開催の言語文化レトリック研究会第 121 回例会で筆者が発表した際、アンドリュー・村上スミス准教授よりコメントをいただいた。〈時の翁〉が持つ鎌は、本来、殺傷の道具ではなく農耕の道具である。農耕とは毎年季節が巡る毎に、種を蒔き、育て、実らせ、収穫するという、同じ手順で繰り返される活動である。〈時の翁〉が鎌で人を刈るのは、人の命を奪うというより、四季のサイクルの中で農耕、すなわち命を次につなげる仕事を行なっているのではないか、という示唆である。これは鋭い指摘である。〈時の翁〉の文化モデルにおいて、翁の持ち物が殺傷を主目的とする槍や剣のような武器ではないということが重要で、これは、時の経過の中で死を迎えても次の世代に命がつながっていくという人間の死生観を反映していると考えることができる。「時との戦い」をテーマの一つとする *Sonnets* においても、農耕のイメージを描いた詩がある。

- (3) When I do count the clock that tells the time,
 And see the brave day sunk in hideous night;
 When I behold the violet past prime,
 And sable curls all silvered o'er with white;
 When lofty trees I see barren of leaves,
 Which erst from heat did canopy the herd,
And summer's green all girded up in sheaves,
Borne on the bier with white and bristly beard:
 Then of thy beauty do I question make,
 That thou among the wastes of time must go,
 Since sweets and beauties do themselves forsake,
 And die as fast as they see others grow,
 And nothing 'gainst Time's scythe can make defence
 Save breed to brave him when he takes thee hence. (Sonnet 12)

この詩も他の *Marriage Sonnets* と同様、〈時〉に抗うために結婚して子 (14 行目 “breed”) ⁴ を儲けることを青年に勧めるものであるが、〈時〉の手から逃れることのできない青年の行く末を連想させるものとして、時を告げる時計の音 (1 行目)、沈む太陽 (2 行目)、盛りを過ぎた葦の花 (3 行目)、白髪に変わる黒い捲き毛 (4 行目)、落葉した高木 (5 行目) に加え、7-8 行目で、収穫され、束ねられて縛られ (“girded up in sheaves”) 白い芒 (のぎ) (“white and bristly beard”) を見せながら荷車に乗せられ運ばれていく (“Borne on the bier”) 農作物が描かれている。7-8 行目については Tyler (1890, p.169) が「収穫祭 (harvest-home) が葬儀へと変質し、実った麦 (corn) を積んだ荷車が死んだ老人を運ぶ棺台になっている」と述べ、ヨブ記 5 章 26 節と対比する。⁵ Duncan-Jones ed. (1997, p. 134) も「刈りとられた農作物という豊かなイメージで、束ねられた芒の白い (かつては緑だった) 麦を、墓へと運ばれる老人に喩える擬人的含意を伴っている」と述べ、“bier” の二重の意味、およびかつて収穫の儀式ではしばしば麦の刈り取りが老人を殺す儀式のように見なされたことに言及する。⁶ 7 行目 “summer's green” (夏の緑) については Wilson ed. (1966, p. 107) も *A Midsummer Night's Dream* 2 幕 1 場の “the green corn / Hath rotted ere his youth attained a beard” を参照せよと指示する (下線は筆者)。⁷ 8 行目 “bier” については Burrow ed. (2002, p. 404) も「荷車」という古義と「棺台」というより一般的な意味が組み合わさって収穫から弔いへとイメージ

⁴ Burrow ed. (2002, p. 404) は “breed” について「子孫という意味の名詞であるが、切実な命令法動詞の含みがある」 (“offspring. Breed is a noun, but there is just a hint of desperate imperative.”) との注釈をつけている。

⁵ “The pessimistic tendency which emerges in the expression just mentioned (lines 2 to 6) becomes still more apparent when harvest-home is transmuted into a funeral, and the waggon laden with ripened corn becomes a bier bearing the aged dead. Contrast with this, ‘Thou shalt come to [thy] grave in a full age, like as a shock of corn cometh in in his season,’ Job v. 26, A. V.” (Tyler 1890, p.169). (下線は筆者)

⁶ “summer's ... beard a richly inclusive image of crops which have been cut and harvested, with an implicit personification of the trussed-up and white-bearded corn (formerly green) as an old man being carried to his grave. Though a *bier* could be any kind of barrow or litter for carrying heavy goods, its strongest association was with the portage of dead bodies, as in Ophelia's “They bare him barefaced on the bier (*Ham* 4.5.177-8). In harvesting rituals, the cutting of the corn was often seen as the ritual slaughter of an old man, as in the folksong “John Barleycorn” ...” (Duncan-Jones ed. 1997, p. 134). (下線は筆者)

⁷ 【表 1】で 12 番の “green” を「穀物」と位置づけたのは上記の理由による。

が変容し、それは青年が子を生む可能性を自己愛へと変容させることに対応している、との解釈を示す。⁸ 13 行目で「時の翁の大鎌」(“Time’s scythe”) が明記されていることから、この詩には〈人〉を〈農作物〉として捉え、〈時〉はそれを刈り取るとするメタファー思考が反映されていることは明白である。言わば〈時は農夫、人は麦〉とでも言うべきメタファー思考である(〈時は農夫、人は麦〉のメタファーについては上記の言語文化レトリック研究会での発表の際に渡辺秀樹教授より示唆をいただいた)。

一方、【表 1】が示すように、*Sonnets* において青年の喩えとなる植物は花が多く、農作物(穀物)による喩えは 12 番 7-8 行目(引用(3)の下線部)以外見られない。詩人が〈時は農夫、人は麦〉というメタファー思考を顕在的に意識していることは 12 番の描写から明らかであるが、*Sonnets* 全体から推測すると、詩人の目から見た青年は、〈農作物〉と言うよりむしろ、その場限り美しく咲くだけの〈花〉なのではないだろうか。1-126 番まで全体にわたり、詩人は〈時〉の残虐な手から青年を守ろうとする意志を随所で熱心に表明しているが、そのための手段として青年に結婚して子を儲けることを勧めるという内容の詩は Marriage Sonnets のみであり、18 番以降はまるでその方法を諦めたかのように、結婚して子を儲けよとは一言も言わなくなる。⁹ 詩人の声に青年が耳を貸そうとせず、忠告の効き目がないことが、「なぜ君は自分だけのために美の遺産を浪費するのか」(“Unthrifty loveliness, why dost thou spend / Upon thyself thy beauty’s legacy?” (Sonnet 4, ll.1-2))、「意地を張るのをやめなさい」(“Be not self-willed,” (Sonnet 6, l. 13) といった表現からうかがえる。「君が独身のまま空しく人生を費やすのは、妻を寡婦にして泣かせまいとするためなのか?」(“Is it for fear to wet a widow’s eye / That thou consum’st thyself in single life?” (Sonnet 9, ll. 1-2)) という問いかけが示すように、青年は独身を保ちたがっているようである。「君が君自身への信仰から子孫を残すことへと改宗するなら、真と美はともに生き茂ることになるだろう」(“truth and beauty shall together thrive, / If from thyself to store thou wouldst convert;” (Sonnet 14, ll. 11-12)) という言葉からも、青年が子を儲けることよりも自分自身のことのみを考える人であることがわかる。この美しい青年は次の世代に命を「つなごうとしない」、つまり今の自分自身しか愛せない人間であることを、詩人は農作物を避けて花を主たる喩えとするという媒体の選び方によって、意図的に示そうとしているのではないかと考えられる。

2.2 青年を花に喩えるなら

【表 1】が示すように、126 番までのソネット群では、青年を植物に喩える表現としては花、とりわけ薔薇が顕著である。1 番で青年を描写する最初の喩えが「美の薔薇」(“beauty’s rose”) であること、また青年への愛情溢れる呼称として用いられている植物名は薔薇のみであること(“For nothing this wide universe I call, / Save thou, my rose; in it thou art my all.” (Sonnet 109, ll.13-14)) からも、青年を表す主たる比喩は薔薇だと考えられそうである。ところが Harness ed. (2013) を参照した際、疑問が浮かんた。本書では 1 ページにつき 1 つずつのソネットが記され、各ページのソネット本文の下に Ian Penny による色刷りの挿絵が施されている。各ページの上部は同じ赤い薔薇の模様で統一されている。これは、本作品に登場する花の中で薔薇が最も多いことに呼応したもので、挿絵の自然な選択としてうなずける。疑問に思ったのは 3 番の詩が記されたページで、そこには下部に黄色の水仙が大きく描かれている。さらには、本書の扉ページにも、*The Sonnets* というタイトルと William Shakespeare という著者名との間に、3 番のページと同じ黄水仙の挿絵が挿入されている。しかし、3 番の詩本文には、さらに言えばこの *Sonnets* 全体を見渡しても、水仙は一切記述されていない。なぜ扉ページにまで、水仙が挿絵として選ばれているのだろうか。

3 番を詳細に観察すると、その謎は解ける。

⁸ “bier in earliest uses ‘A framework for carrying; a handbarrow; a litter, a stretcher’ (OED 1), with also the more usual sense of ‘The movable stand on which a corpse, whether in a coffin or not, is placed before burial’ (OED 2). The combination of senses turns harvest into funeral, as the friend turns opportunities for reproduction into self-love” (Burrow ed. 2002, p. 404). (下線は筆者)

⁹ 高松 (1986, p. 222) はソネット 18 番に付した注釈で『結婚ソネット』群が終り、このソネット以後は、詩人の青年に対する愛の表明があらわになる。詩人は青年の美貌を称えつつけるが、子孫を得て美を永遠のものとせよ、と説くことはもう二度とない。そのかわりに、詩人は自分の作品によって、若者の美を永遠に伝えるという決意を披歴する。」と述べている。

- (4) Look in thy glass and tell the face thou viewest
 Now is the time that face should form another,
 Whose fresh repair if now thou not renewest
 Thou dost beguile the world, unbless some mother.
 For where is she so fair whose unear'd womb
 Disdains the tillage of thy husbandry?
Or who is he so fond will be the tomb
Of his self-love to stop posterity?
 Thou art thy mother's glass, and she in thee
 Calls back the lovely April of her prime;
 So thou through windows of thine age shall see,
 Despite of wrinkles, this thy golden time.
 But if thou live rememb'red not to be,
 Die single, and thine image dies with thee. (Sonnet 3)

これは独身生活を謳歌する青年に、結婚して自らの顔を再生する（2行目）、すなわち子供を儲けることを勧める詩である。7行目の“fond”は「のぼせ上がった、愚かな」¹⁰ という意味で、7-8行目では「わが身を愛するあまり、子孫をのこすこともなくおのれを愛の墓にする、そんなおろかな男がいてもいいものか。」（高松雄一訳）と青年への諫言が記されている。この描写により、自分自身にうつつを抜かし、女性には目もくれない青年の性格が浮かび上がる。

この青年の自己愛（self-love（8行目））は、換言すれば“narcissism”である。Duncan-Jones ed. (1997, p. 116) は3番の内容を“The poet begins by reinforcing the young man's narcissism, but finds within it an argument for procreation.”と要約している（下線部は筆者）。“narcissism”はギリシャ神話のナルキッソス（Narcissus）の文化モデルに基づく概念である。¹¹ ナルキッソスはニンフのエコーらの求愛を退け、泉の水に映る自分の姿に恋焦がれて死に、水仙の花と化す美青年である（Smith (1884, p. 537) および Roman and Roman (2010, p. 337) 参照）。Harness ed. (2013) において扉ページおよび3番のページを飾る挿絵として水仙が選ばれたのは、「*Sonnets* に明示された青年の植物比喩媒体は主として薔薇であるが、明示されていない（すなわち隠された）媒体は自己愛の具現化としての水仙である」という考え方に基づいているのではないだろうか。

シェイクスピアは長編詩 *Venus and Adonis* で美少年とナルキッソスの取り合わせを描いている（*Venus and Adonis* と *Sonnets* の関連については渡辺秀樹教授より御教示をいただいた）。

- (5) ‘Is thine own heart to thine own face affected?
 Can thy right hand seize love upon thy left?
 Then woo thyself, be of thyself rejected:
 Steal thine own freedom, and complain on theft.
Narcissus so himself himself forsook,
And died to kiss his shadow in the brook.
 ‘Torches are made to light, jewels to wear,
 Dainties to taste, fresh beauty for the use,
 Herbs for their smell, and sappy plants to bear.
 Things growing to themselves are growth's abuse;
 Seeds spring from seeds, and beauty breedeth beauty:
 Thou wast begot: to get it is thy duty.
 ‘Upon the earth's increase why shouldst thou feed,

¹⁰ “**fond** infatuated, foolish, silly” (Burrow ed., 2002, p. 386). 他に “**fond** foolish, silly; but also fond = loving” (Duncan-Jones ed. 1997, p. 116) という注釈もある。

¹¹ *OED* では“narcissus”の語義1番として植物の「水仙」(Any of numerous spring-flowering bulbous plants of the genus *Narcissus* (family Amaryllidaceae), native to Europe and the Mediterranean, which includes the daffodils; (also, in form *Narcissus*) the genus itself.)を、2番として「ナルキッソス」および比喩的に「自己愛のきわめて強い人」(*Greek Mythology*. (The name of) a beautiful youth who fell in love with his own reflection in water and pined to death. Hence (allusively): a person characterized by extreme self-admiration or vanity; a narcissist.)を示している。

Unless the earth with thy increase be fed?
 By law of nature thou art bound to breed,
 That thine may live, when thou thyself art dead:
And so in spite of death thou dost survive,
In that thy likeness still is left alive.' (Venus and Adonis, ll. 157-174)

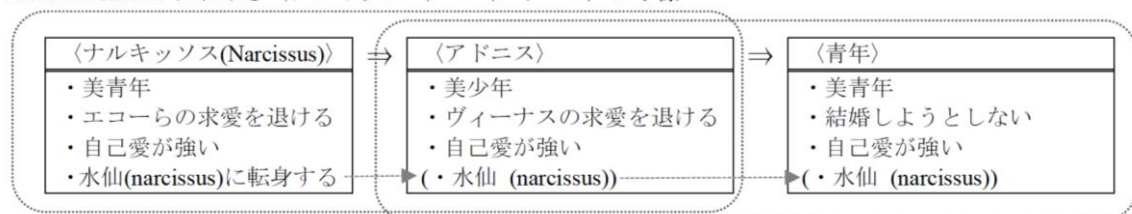
これは美少年アドニスに恋をしたヴィーナスが求愛を拒まれ、切々と思いのたけを訴える言葉の中の一節であるが、161 行目ではアドニスをナルキッソス (“Narcissus”) になぞらえている。Wilson ed. (1966) は *Venus and Adonis* の 163-174 行目の内容と The Marriage Sonnets との言葉選びの共通性について次のように指摘している。

In these opening sonnets, moreover, as often in his plays, Shakespeare did not hesitate to draw upon his own earlier writings. The same theme for example is treated in *Venus and Adonis*, ll. 163-74: ... The thought, sometimes the very words, are the same. (Wilson ed. 1966, pp.90-91)

この指摘に基づき、引用 (5) を *Sonnets* のテキストと比較してみると、166 行目の「濫用」を意味する “abuse” は Sonnet 4 の 5 行目にも動詞の形で用いられ (“Then, beauteous niggard, why dost thou abuse / The bounteous largess given thee to give?” (Sonnet 4, ll. 5-6)), 168 行目の「子を儲けることがあなたの務めだ」とする “to get it is thy duty” の “get”¹² は Sonnet 7 でも用いられている (“So thou, thyself outgoing in thy noon, / Unlooked on diest unless thou get a son.” (Sonnet 7, ll. 13-14)). 169 行目の “increase” は (2) に引用した Sonnet 1 の 2 行目で動詞として用いられ、171 行目の “breed” は (3) の Sonnet 12 の 14 行目で名詞の形で用いられている。さらに、173-174 行目 (「このように、死んでもあなたは生き続けるのだ、あなたの生き写しの姿が生きて残るのだから。」) は、Marriage Sonnets において詩人が青年に子を儲けるよう説く根拠と共通している (“But as the ripper should by time decease, / His tender heir might bear his memory:” (Sonnet 1, ll. 3-4), “Make thee another self for love of me, / That beauty still may live in thine or thee.” (Sonnet 10, ll. 13-14), “But were some child of yours alive that time, / You should live twice, in it, and in my rhyme.” (Sonnet 17, ll. 13-14) 参照)。

以上の観察から、Wilson ed. (1966, pp.90-91) が指摘する通り、(5) に引用したヴィーナスの主張は *Sonnets* の 1-17 番 (Marriage Sonnets) における詩人の主張と同じ趣旨である。ソネット 53 番には「アドニスを描いてごらん、その肖像画はあなたを下手になぞった模写にしかない」 (“Describe Adonis, and the counterfeit / Is poorly imitated after you.” (Sonnet 53, ll. 5-6)) と、青年とアドニスを明確に関連付ける描写が見られる。このことから、シェイクスピアが *Sonnets* における青年の人物造形にあたり、自らが著した *Venus and Adonis* でヴィーナスからナルキッソスになぞらえられた美少年アドニスを重ね合わせていることは明らかである。すなわち、*Sonnets* の美青年は、明示こそされていないが、〈ナルキッソス〉、ひいてはその転身後の姿である〈水仙〉のイメージをまとっている存在であり、Harness ed. (2013) における Ian Penny の水仙の挿絵は、〈青年〉の中に隠された〈水仙〉の概念要素を映し出したものと言える。【図 1】は、*Venus and Adonis* および *Sonnets* の 2 作品を通して、〈アドニス〉の領域を介して〈ナルキッソス〉から〈青年〉へと写像関係が成立し、ナルキッソスと同じ名が冠され “narcissism” と所縁のある〈水仙〉(narcissus) という概念要素が〈青年〉に転写される様を示したものである。

Venus and Adonis における 〈ナルキッソス〉 ⇒ 〈アドニス〉 の写像



Sonnets における 〈アドニス〉 ⇒ 〈青年〉 の写像

【図 1】 *Venus and Adonis* および *Sonnets* における 〈ナルキッソス〉 〈アドニス〉 〈青年〉 の概念写像

¹² ここでの “get” は “beget” (男親が子を儲ける) の意味である (Burrow ed. 2002, p. 184 および OED “get” の語義 25 参照)。

なお、Penny の挿絵では水仙の花弁は黄色で描かれ、花心の副冠はラッパに似た形をしている。この花は daffodil (ラッパズイセン) と呼ばれ、スイセン属 (Narcissus) の一種である。花の象徴的意味すなわち花言葉を、神話、伝説および文学作品、特に詩での描かれ方を例にとって解説した Ingram (1887, pp. 251-253) では、narcissus の花言葉は「自己愛」(self-love)、daffodil の花言葉は「報われない愛」(unrequited love) と記され、daffodil については、多くの詩人から愛された美しい花であるが、冥界の王プルートー (Pluto) がプロセルピナ (Proserpine) を誘拐し冥界へ連れ去ったときに車からこの花が落ちたという逸話があることが示され、*Winter's Tale* の一節 “O Proserpina, / For the flowers now that, frightened, thou lett'st fall / From Dis's wagon: daffodils / That come before the swallow dares, and take / The winds of March with beauty.” が引用されている (p. 252)。Penny の水仙の描画は、*Sonnets* の青年が「自己愛」に取りつかれていることを表すとともに、いつか冥界へ連れ去られる、すなわち「死ぬ」運命にあること (Sonnet 3, l. 14 “Die single, and thine image dies with thee” 参照)、そして (後続ソネット群で青年の裏切りを嘆いたり不実をなじったりする詩が多発することからもわかる通り) 詩人の愛が「報われない」ことの暗示と考えることもできる。

3. 青年の自己愛と詩人の愛を表すレトリック

3.1 〈鏡〉のメトニミー

2.2 節で (4) に引用した 3 番のソネットでは、“self-love” (8 行目) の前後に “glass” という語が登場するのが興味深い。詩人は青年に鏡を見るよう勧め、鏡に映る自分の顔に「今こそこの顔がもう一つの顔を作る時だ」と告げよと促す (“Look in thy glass and tell the face thou viewest / Now is the time that face should form another;” (Sonnet 3, ll. 1-2))。さらに、青年のことを「君の母上の鏡」だと述べ、青年の母が青年の姿から彼女自身の春の盛りの頃を思い出すのだと語る (“Thou art thy mother's glass, and she in thee / Calls back the lovely April of her prime;” (ibid. ll. 9-10))。

“glass” という語はナルキッソスが水面に映った自らの姿に見惚れたことを想起させる。ナルキッソスの像を映した水面は鏡の役割を果たしたのである。まるでナルキッソスの行動をなぞらせるかのように、3 番で詩人が青年に “Look in thy glass” と勧めるのはなぜなのか。

Garber (2021, pp. 106-109) は Sigmund Freud の、列車内の手洗いのドアの鏡に映った自身の姿を、鏡と知らずに他人の姿と見間違い、嫌悪感を覚えた (“I thoroughly disliked his appearance”) という経験談、さらに、精神分析療法は患者が鏡に映った自分の像に感じる恐怖感によって阻害されるとの Freud の叙述を紹介している。¹³

このことから、鏡は自己嫌悪を覚える人にとっては正視したくないものであることがわかる。逆に、自分のことが好きな人は (ナルキッソスが水鏡を見惚れたように) 鏡を見ることを好むとも言える。「鏡」は自己を愛するという行動において登場する必須アイテムである。その意味で、〈鏡〉の概念は〈自己愛〉を表すメトニミーであると言える。

(2) で引用した 1 番のソネットでは、鏡は明示されはしないが、鏡を連想させる表現が 5 行目にある。(2) では冒頭 4 行のみ引用したが、以下に全文を引用する。

(6) From fairest creatures we desire increase,
That thereby beauty's rose might never die,
But as the ripper should by time decease,
His tender heir might bear his memory:
But thou, contracted to thine own bright eyes,
Feed'st thy light's flame with self-substantial fuel,
Making a famine where abundance lies,
Thy self thy foe, to thy sweet self too cruel.
Thou that art now the world's fresh ornament,
And only herald to the gaudy spring,
Within thine own bud buriest thy content,
And, tender churl, mak'st waste in niggarding:
Pity the world, or else this glutton be,
To eat the world's due, by the grave and thee. (Sonnet 1)

¹³ Garber (2021) のこの記述については渡辺秀樹教授から御教示いただいた。

5 行目以降は青年が結婚を考えもせず独身生活を謳歌するのを戒める内容で、5 行目では、青年が（女性とではなく）自分自身の輝く目と婚約した（“contracted to thine own bright eyes”）と述べる。高松（1986, p. 216）は「ギリシア神話のナルキッソスのごとく、我とわが姿に見惚れているがゆえに。」という注釈を付けている。6 行目については Burrow ed. (2002, p. 382) が Ovid の *Metamorphoses* における Narcissus からの引喩を指摘する。¹⁴ 青年がまるでナルキッソスのように鏡に映る自らの美しい目に見入っている様子が、5 行目の描写から想像できる。

このように鏡に映る自らの顔にうっとりする青年であれば、3 番のソネット 1 行目の青年への「鏡を見よ」（“Look in thy glass”）という呼びかけは、おそらく容易に受け入れられるであろう。詩人は自己愛と親和性の強い「鏡」というアイテムを用いて、9 行目の「君は母の鏡」（“Thou art thy mother’s glass,”）という比喩表現につなげ、実体と鏡像が 2 世代にまたがる、すなわち自分の次の世代（子供）が自分の鏡像として見える可能性を示すことにより、鏡を通してただ自分自身を見るだけではなく次の世代に思いを致すよう促し、青年の美が次世代に受け継がれて〈時〉を越えて残るという詩人の願望を実現しようとしているのである。

3.2 鏡が映し出すもの

詩人が認識する鏡の役割は、自己愛の強い人にその人自身の姿を見せてうっとりさせることだけではない。鏡は時に目にしたくない現実をも映し出し突きつけるものでもある。22 番では鏡は若く美しい青年ではなく、年齢を重ねた詩人自身の姿を映し出す。

- (7) My glass shall not persuade me I am old,
So long as youth and thou are of one date,
But when in thee time’s furrows I behold,
Then look I death my days should expiate. (Sonnet 22, ll. 1-4)

詩人の鏡（“My glass”）が映す像は詩人が老いた（“I am old”）ことを示すが、青年を愛する詩人は、青年の若々しさに心強さを得て、その実態を認めようとししない。ただし、青年の顔に皺（“furrows”）を見るときが来れば、自分の人生が終わることを意識するだろう、と述べる。

また、(8) に引用する 62 番では、(4) に引用した 3 番と同様、“glass”（鏡）と “self-love”（自己愛）の共起が見られるが、¹⁵ ここでは自己愛の罪を負っているのは詩人自身で（1-2 行目）、8 行目までは自分の顔も姿も人格も他の追随を許さず、自分の価値はこの上ないと自負する。ところが 9 行目以降で、鏡（“my glass”）が映し出すのは詩人の真実の姿、老いて日焼けし打ちのめされひび割れた（“Beated and chapped with tanned antiquity”）顔である。これを見て、詩人は自分と青年を同一視して自分のつもりで青年を賛美していたのだと悟る（13-14 行目）。

- (8) Sin of self-love possesseth all mine eye,
And all my soul, and all my every part;
And for this sin there is no remedy,
It is so grounded inward in my heart.
Methinks no face so gracious is as mine,
No shape so true, no truth of such account,
And for myself mine own worth do define
As I all other in all worths surmount.
But when my glass shows me myself indeed,
Beated and chapped with tanned antiquity,
Mine own self-love quite contrary I read;
Self so self-loving were iniquity:
'Tis thee (my self) that for myself I praise,

¹⁴ “The friend is accused of burning up the substance of his own life in an echo of Ovid’s Narcissus, ‘uror amore mel: flammis moveoque feroque’ (‘I am burned by love of myself: I produce and am consumed by flames’, *Met.* 3.464).” Burrow ed. (2002, p. 382).

¹⁵ Harness ed. (2013) における 62 番のページには、3 番よりも少し小ぶりの黄水仙が描かれている。62 番の詩本文にも水仙の描写はないが、“Sin of self-love” という語句から始まり、「自己愛の罪」に着目した詩であるから、水仙の挿絵は当然の配置と言える。

Painting my age with beauty of thy days. (Sonnet 62)

さらに 77 番では、鏡がゆくゆくは青年の老いた姿さえも映し出すことを予言する。

(9) Thy glass will show thee how thy beauties wear,

Thy dial how thy precious minutes waste,

The vacant leaves thy mind's imprint will bear,

And of this book this learning mayst thou taste:

The wrinkles which thy glass will truly show

Of mouthèd graves will give thee memory;

Thou by thy dial's shady stealth mayst know

Time's thievish progress to eternity. (Sonnet 77, ll. 1-8)

ここで青年が覗き込む鏡(“Thy glass”)が映し出すものは、青年の美しさが衰えてゆき(1行目)、皺が刻まれ(5行目)、死が近づく(6行目)という、容赦のない時の流れである。鏡は自己愛と親和性が強く、愛する対象である自分自身を見たいと思う願望を叶え、自分の姿を明瞭に映し出してくれるが、自己愛の強い者の目に心地よい幻覚を見せてくれるものでは決してない。人間の実態を映し出し、人間が〈時〉の威力に対して脆弱な存在であることを赤裸々に見せつけるものでもある。¹⁶ この鏡の機能を利用して、詩人は *Sonnets* を通して青年に鏡を覗き込ませ、〈時〉に立ち向かい青年の美を守る手立てを模索する必要性を主張しようとしているのではないだろうか。

3.3 文法形式に隠された〈鏡〉のレトリック

2.2 節で (5) に引用した *Venus and Adonis* 166-168 行目で、ヴィーナスはアドニスに「ただ自らのために成長するものは成長の濫用だ。種は種から生まれ、美は美を生み出すのだ。あなたは生み出されたのだから、生み出すことがあなたの務めだ」(“Things growing to themselves are growth's abuse; / Seeds spring from seeds, and beauty breedeth beauty: / Thou wast begot: to get it is thy duty.”) と説く。166 行目の “to themselves” に対し、Burrow ed. (2002, p. 184) は “A similar enclosed reflexive form is used also to condemn the self-love of the friend in Sonnet 94. 10.” (下線は筆者) という注釈を付けている。この “enclosed reflexive form” (閉じられた再帰形) とは、再帰代名詞の用法の中でも強調のように単に先行する(代)名詞と同一指示というだけではなく、文中の主語が指す主体が行う動作の及ぼす作用が他者に向くのではなく自分自身に向くことを表す、すなわち作用が自分から発せられて自分に帰る(すなわち「閉じられる」)ことを表すような再帰形という意味だと考えられる。上記の例で言えば、成長という動作が、それによって種を残すでもなく、自分と同じ美しさをもつ次世代を生み出すわけでもなく、単に自身を目的として自身に帰結するという閉じられた作用であることを、“to themselves” という再帰代名詞が表しているのである。Burrow ed. (2002, p. 184) が言及したソネット 94 番の 10 行目には「類似の再帰形」として “to itself” が見られる。

(10) The summer's flower is to the summer sweet,

Though to itself it only live and die, (Sonnet 94, ll. 9-10)

この 9-10 行目に対し、高松 (1986, p. 131) は「夏の花は、たとえ、種を結ばずにひっそりと枯れていくにしろ、夏にあまい香りをまきちらす。」という訳を、大場 (編注訳 2018, p. 207) は「夏の花は、ただ己れの美しさのためにひとり咲き死んでいくだけだが、夏のその季節にとってなんとかぐわしい存在であることか、」という訳を付けている (いずれも下線は筆者)。夏の花が生きて死ぬという行動がただ自分のみに向いた閉じられた行動であることが、この再帰形によって表されていることがわかる。まるで水鏡に映った自分の姿に向き合うように、花が自分のみに向き合い自分だけを思って行動することを表す表現である。

¹⁶ ありのままの実態を映し出すという鏡の機能についてのシェイクスピアの認識は、*Hamlet* 3 幕 2 場でハムレットが旅回りの役者に演技指導をする場面で、演劇の役割を鏡に喩えて時代の実態を映し出すものと主張する表現 (“the purpose of playing, / whose end, both at the first and now, was and is, to hold, as / 'twere, the mirror up to nature; to show Virtue her own feature, / scorn her own image, and the very age and body of the time his / form and pressure.” (cf. Edwards, ed. 2019)) の中にも表れている (*Hamlet* におけるハムレットと臣下とのやりとりに見られる鏡面反射のような繰り返しについては、本プロジェクト報告書の渡辺秀樹教授の論文を参照されたい)。

そうすると、この「閉じられた再帰形」(enclosed reflexive form)の使用は、文法形式を利用して詩の中に〈鏡像〉(reflection)を作り出す隠された工夫だと言えるのではないか。さらに、3.1 節で確認したとおり、(6)に引用した1番では、5行目“contracted to thine own bright eyes”が鏡を連想させ、6行目は Ovid の *Metamorphoses* に描かれた Narcissus からの引喩であるが、さらに6行目および8行目には再帰形が見られる。以下に5-8行目を再度引用する。

- (11) But thou, contracted to thine own bright eyes,
Feed'st thy light's flame with self-substantial fuel,
Making a famine where abundance lies,
Thy self thy foe, to thy sweet self too cruel. (Sonnet 1, ll. 5-8)

6行目に示された「自分自身を燃料として」(“with self-substantial fuel”)自分の輝く炎をかき立てる行為、¹⁷ 8行目の「自らを自らの敵に回す」(“Thy self thy foe”)という「美しい自身への」(“to thy sweet self”)残酷な行為は、自分の姿を鏡に映した結果その像が自分の目に映るかの如く、その自分の行為の結果が自分に帰ってくるという性質を備えている。これらの再帰表現の頻出からは、鏡の反射のイメージを重ねようとする隠された詩人の意図がうかがえる。

野島(1988)¹⁸は *Hamlet* の構造を「鏡の迷宮」と捉え、さまざまな主題(父と子、叔父と甥、復讐、毒など)が「合わせ鏡の鏡像のようにこだまし反復し合っている」と述べるが、登場人物たちが互いに陰謀を企み、自分で仕掛けた罠にはまる、つまり「すべての企みが仕掛けた当人にはね返ってくる」様を「企みの行為の再帰動詞、企みの行為者の再帰代名詞」に喩え、「これはまさしく鏡(リフレクター)のイメージ」だと論じる(p. 23)。野島が論じた *Hamlet* のプロット内の鏡面反射が、上記ソネットでは文字通り再帰形によって表されているのである。

次の13番では、再帰代名詞をbe動詞の補語とする表現が1行目と6-7行目に見られる。

- (12) O that you were yourself; but, love, you are
No longer yours than you yourself here live.
Against this coming end you should prepare,
And your sweet semblance to some other give.
So should that beauty which you hold in lease
Find no determination; then you were
Yourself again after your self's decease,
When your sweet issue your sweet form should bear.
Who lets so fair a house fall to decay,
Which husbandry in honour might uphold
Against the stormy gusts of winter's day
And barren rage of death's eternal cold?
O none but unthrifths, dear my love, you know:
You had a father, let your son say so. (Sonnet 13)

詩人は「あなたが(いつまでも)あなたのままであったなら」(1行目)という願望は叶えられないこと、やがて来る人生の終わりに備え、青年の美しい似姿(すなわち子供)を誰かに与えるべきであることを述べ(2-4行目)、そうすれば死後も「あなたがあなたのままでいられる」と述べる(6-7行目)。2箇所“you were yourself”は主語と補語の指示対象が同一で、これも主体と鏡像の関係を文法形式で表現したものと言える。青年が子孫を残すことによって〈時〉との戦い(11-12行目“Against the stormy gusts of winter's day / And barren rage of death's eternal cold”)に勝つことができ、美しい鏡像が(青年に生き写しの子供という形で)保たれるのだということを、“you were yourself”の繰り返しによって強調しているのである。

この詩に表され、また *Marriage Sonnets* に共通する、子孫を残させることで〈時〉と戦おうという詩人の主張は、18番以降は影を潜め、詩人は自分が不滅の詩を作り、その詩の中で青年を永遠

¹⁷ Duncan-Jones ed. (1997, p. 112) はこの6行目に描写された行為を「まるで蠟燭のよう」だと指摘している (“Like a candle, the young man sustains his beauty (flame) with fuel made from his own body (substance) ...”).

¹⁸ 野島(1988)の論考の存在は渡辺秀樹教授から御教示いただいた。

に生かそうと戦法を変える（注 9 で言及した高松（1986, p. 222）参照）。この戦法、および自分の詩の価値の高さへの自負を、詩人は複数の詩にわたって繰り返し提示する（次節参照）。(13) に引用する 84 番でも、自分ほど青年を的確に称賛できる詩人は他にはいないという自信を披歴する。詩人が考える、青年へのこの上ない称賛の言葉は 2 行目の「あなただけがあなただ」(“you alone are you”) であり、8 行目でも同様に、「あなたはあなただ」(“you are you”) と言えばそれで青年への立派な称賛になるのだと述べる。主語と be 動詞の補語を同一語とするこれらの同語反復表現（トートロジー）も、(12) の “you were yourself” と同様、主体と鏡像の関係の文法形式上での再現であり、ここにも〈鏡〉のレトリックが隠されている。

- (13) Who is it that says most, which can say more
 Than this rich praise: that you alone are you,
 In whose confine immurèd is the store
 Which should example where your equal grew?
 Lean penury within that pen doth dwell,
 That to his subject lends not some small glory,
 But he that writes of you, if he can tell
 That you are you, so dignifies his story.
 Let him but copy what in you is writ,
 Not making worse what nature made so clear,
 And such a counterpart shall fame his wit,
 Making his style admired everywhere.
 You to your beauteous blessings add a curse,
 Being fond on praise, which makes your praises worse. (Sonnet 84)

4. 〈鏡〉となり〈こだま〉となる詩人の愛

上述の通り、結婚して子供という〈鏡像〉を作れという詩人の忠告を聞こうとしない青年に対し、詩人は〈時の翁〉との戦いに勝利するため、自分の詩の中で青年を永遠に生かそうと作戦を変更する。この詩人の決意は *Sonnets* の中で以下のように繰り返し表現される。

- (14) So long as men can breathe or eyes can see,
 So long lives this [= eternal lines (l. 12)], and this gives life to thee. (Sonnet 18, ll. 13-14)
 (15) Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong,
 My love shall in my verse ever live young. (Sonnet 19, ll. 13-14)
 (16) And so of you, beauteous and lovely youth:
 When that shall vade, my verse distills your truth. (Sonnet 54, ll. 13-14)
 (17) So, till the judgement that yourself arise,
 You live in this [= this pow'rful rhyme (l. 2)], and dwell in lovers' eyes. (Sonnet 55, ll. 13-14)
 (18) And yet to times in hope my verse shall stand,
 Praising thy worth, despite his [= Time (l. 8)] cruel hand. (Sonnet 60, ll. 13-14)
 (19) His beauty shall in these black lines be seen,
 And they shall live, and he in them, still green. (Sonnet 63, ll. 13-14)
 (20) You still shall live (such virtue hath my pen)
 Where breath most breathes, even in the mouths of men. (Sonnet 81, ll. 13-14)

(14) から (20) は一貫して、詩人自らが作る詩は永遠に残る価値あるもので、(たとえ青年の命は尽きても) 詩の中で青年の若々しい美しさは保たれ生き続けるという同じ内容の宣言である。詩人は随所で、自分がいつも同じ内容を繰り返し詩に書いていることを自覚している。105 番では「私の歌も賛辞もいずれ変わらず、一人に向けられ、一人のことを、いつも同じように語り続ける」(“Since all alike my songs and praises be / To one, of one, still such, and ever so.” (Sonnet 105, ll. 3-4)) と述べ、76 番では「わかってほしい、愛する人よ、私はいつもあなたを書く。あなたのこと、愛のことがいつも私の主題なのだ」(“O know, sweet love, I always write of you, / And you and love are still my argument;” (Sonnet 76, ll. 9-10)) と訴えかけ、108 番では以下の (21) のように、これまで自分の真心を語り尽くしてきた、これ以上自分の愛を、君の美点を、新たに語ることがあろうか、いや何もないのだ、まるで神への祈りのように、「毎日まったく同じ言葉を繰り返す他ないのだ」

(6 行目) と語る。これらの言葉を実証するのが (14) から (20) の同一内容の繰り返しである。自分の詩の中で青年が永遠に生き続けると唱えるこれらの繰り返しは、確かに切実なる神への祈り (108 番 5 行目 “prayers divine”) の様相を呈している。

- (21) What's in the brain that ink may character,
Which hath not figured to thee my true spirit?
What's new to speak, what now to register,
That may express my love, or thy dear merit?
Nothing, sweet boy; but yet, like prayers divine,
I must each day say o'er the very same,
Counting no old thing old, thou mine, I thine,
Even as when first I hallowed thy fair name. (Sonnet 108, ll. 1-8)

青年を称賛するという詩人の一貫した姿勢において注目すべきは、詩の中に青年の美しさを「そのまま映し取ろう」とする態度である。(13) に引用した 84 番から語を借りれば、青年の “copy” (9 行目) を作り “counterpart” (11 行目) としようとする態度である。詩人は 82 番では「真に美しい者よ、君は、この真実を語る友の真実で平明なことばによってこそ、真実そのままに描かれるのだ」 (“Thou, truly fair, wert truly sympathized / In true, plain words, by thy true-telling friend.” (Sonnet 82, ll. 11-12)) と述べる。“thy true-telling friend” とは詩人自身を指し、OED によると “sympathize” は “To represent or express by something corresponding or fitting; to apprehend mentally by the analogy of something else. *Obsolete*.” (OED “sympathize” †3.†b. 下線は筆者) と定義され、82 番のこの箇所が用例に挙げられている。美しい青年の真実そのままに一致する (correspond, fit) 言葉を用いて青年の真の姿を詩の中に描き出しているのだという詩人の自負が、“truly” “true” “true-telling” という修辭的な繰り返しにより強調されている。¹⁹ ここには、〈詩そのものを鏡と見なす〉というレトリックが隠されていると言えよう。詩人は自らの詩という〈鏡〉の中に、青年のありのままの姿を映す〈鏡像〉を作ろうとしているのである。

この考察に対し、渡辺秀樹教授より「ここに mirror/glass のもう一つの比喩義『模範』の意味をも見るならば『自分の Sonnets154 編が英詩の鑑になるであろう』と言う自負までも読み取りたいのは沙翁最良と言ふべきか」というコメントをいただいた。Ophelia が悲痛な独白で Hamlet を語る言葉「流行の鑑、礼儀の手本」 (“The glass of fashion and the mould of form” (Hamlet III. i. 174)) における “glass” の意味である。感謝とともにここに紹介したい。自らの詩を〈青年を映す鏡〉であると同時に〈英詩の鑑〉だと見なす詩人の矜持は、確かに引用 (14) から (20) にも、また「(自分の詩に著した) あなたへの賛辞は後世代々あらゆる人々の目に留まりこの世の終末まで生き続けるだろう」 (“your praise shall still find room, / Even in the eyes of all posterity / That wear this world out to the ending doom.” (Sonnet 55, ll. 10-12)) という断言にも表れている。

同時に、上で観察した、詩人が同じ内容を繰り返し歌い続ける様子は、ナルキッソスに恋をした精霊エコーを思い起こさせる。ヘリコーン山のニンフであるエコーは女神ヘラの罰を受け、自ら主体的には何も言えず、他人の言葉を繰り返すことしかできなくなる。エコーの恋心はナルキッソスから退けられ、エコーは悲しみのあまりやせ衰え、最後には声だけが残し、こだまとなる (Smith (1884, p. 275) および Roman and Roman (2010, p. 141) 参照)。

126 篇もの詩をしたためて青年への思いを歌い上げる詩人の雄弁さは、主体的にものを言うことができず他人の言葉を繰り返すだけのエコーとは一見、似ても似つかない。ではなぜ、Sonnets を読むたびにエコーが連想されるのか。そのヒントは 78 番にある。

- (22) So oft have I invoked thee for my Muse
And found such fair assistance in my verse
As every alien pen hath got my use,
And under thee their poesy disperse.
Thine eyes, that taught the dumb on high to sing,
And heavy ignorance aloft to fly,

¹⁹ 大場 (編注訳 2018, p. 181) はこの箇所についての注釈で “truly, true, true-telling (alliteration) の polyptoton は art of rhetoric の最たるもの。” と述べている。

Have added feathers to the learned's wing,
 And given grace a double majesty.
 Yet be most proud of that which I compile,
Whose influence is thine, and born of thee.
 In others' works thou dost but mend the style,
 And arts with thy sweet graces gracèd be;
 But thou art all my art, and dost advance
 As high as learning my rude ignorance. (Sonnet 78)

詩人は幾度となく青年を詩神（ミューズ）として祈りを捧げて詩作を支えてもらい（1-2 行目）、青年の目は「ものを言えない」（“dumb”）詩人に高らかに歌うすべを教えてくれた（5 行目）、詩人が書いた詩のもつ力は青年から生み出されたもので（10 行目）、青年こそが詩人の芸術のすべてだ（13 行目）と述べる。詩に具現化された靈感はすべて青年に帰するものであり、自力ではものを言えない詩人が青年の力を借りて歌っているにすぎないのだという趣旨である。もちろん、青年を賛美したいあまりに自身を誇張して卑下するものではあるが、詩人自身の表現能力について、また詩人の詩作のインスピレーションをかき立てるという青年が果たしてきた役割についてのこの捉え方は、エコーの発話能力、エコーの恋情をかき立てるナルキッソスの存在を容易に連想させるものと言える。Sonnets には詩人自らをエコーに明示的に喩える表現は見当たらないが、言わば「隠れ媒体」として詩の中にエコーを潜ませ、青年と詩人の関係性をナルキッソスとエコーの関係性の観点から描こうとしているのだと考えられる。

鏡像もこだまも、ともに reflection である。詩人は自ら、ナルキッソスの神話における泉、あるいはエコーとなって、青年の真実を詩の中に鏡のように映し出し（reflect）、青年の真実をこだまのように反響させ（reflect）繰り返していると言える。〈ナルキッソス〉と〈青年〉の間、〈泉〉・〈エコー〉と〈詩人〉の間には【図2】のようなメタファー的対応関係が成立している。図の上半分は明示的な写像、網掛けをした下半分は隠された写像を表している。〈ナルキッソス〉と〈青年〉の対応関係は、【図1】で示したように〈アドニス〉を介して明確になり、〈ナルキッソスが自分の鏡像に見惚れる〉様子に対応する青年の〈鏡に映る自分の目に見惚れる〉様子は（6）に引用した1番のソネットに明示されている。それに対し、〈泉〉・〈エコー〉と〈詩人〉、〈鏡像〉・〈こだま〉と〈詩における青年の描写〉を結ぶ対応関係は、ソネット群の様々な箇所がちりばめられたヒントから推測できる隠されたレトリックと言える。

根源領域 〈ナルキッソスの神話〉		目標領域 〈青年への愛を歌う詩群〉
・水仙の前身ナルキッソス ・ナルキッソスが水に映る自身に見惚れる（＝〈自己愛〉を表すメトニミー）	⇒	・青年 ・青年が鏡に映る自身に見惚れる（＝〈自己愛〉を表すメトニミー）
・泉 ・水鏡 ・水鏡に映る鏡像 ・精霊エコー ・エコーが発するこだま ・エコーがナルキッソスを愛する		・詩人 ・詩人の詩 ・詩における青年の描写 ・詩人 ・詩のことばの繰り返し ・詩人が青年を愛する

【図2】 青年への愛を歌う詩群をナルキッソスの神話から理解するメタファー

5. おわりに

本研究ではシェイクスピアの Sonnets を対象とし、〈人間は植物である〉というメタファーの観点から詩人が〈時の翁〉の鎌に刈られる存在としての青年を「ただ自らのためにだけ咲き、死にゆく」（“to itself it only live and die” (Sonnet 94, l. 10)）〈花〉に喩え、ギリシャ神話に基づく文化モデルにおいて〈ナルキッソス〉と〈水仙〉が強い結びつきを有することから、自己愛の強い青年を表す隠された比喩媒体として〈水仙〉(narcissus) を選んでいると考えられること、また、ナルキッソスの自己愛を象徴する〈水鏡〉に対応する〈鏡〉のレトリックが、ソネット詩群の中に明示され、あるいは文法形式や詩人の詩作態度の中に隠されていることを論じた。さらには、詩人が同じ内容をソネット詩群の中に繰り返すという表現手法に、ナルキッソスを愛する〈エコー〉のレトリックが隠されていることも併せて論じた。

詩人が詩の中に青年の姿を映し出し、青年への愛の歌を繰り返すのは、〈ナルキッソス〉のごとく自己愛の強い青年に詩という〈鏡〉を提示し、あるいは〈こだま〉を響かせて、青年の関心を詩人の方へ向けたいからであり（“O learn to read what silent love hath writ:” (Sonnet 23, l. 13) 参照）、同時に〈時の翁〉の鎌から〈水仙〉のごとくか弱い青年を守り、その美を永遠に残したいからでもある。そこには詩人の青年へのひたむきな愛、切実な祈りがうかがえる。

参考文献

- Burrow, Colin, ed. (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.
- Duncan-Jones, Katherine, ed. (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Edwards, Philip, ed. (2019) *Hamlet, Prince of Denmark*. Third edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Garber, Marjorie (2021) “As 'Twere; or, Misrecognition,” *Raritan*, 41.1. 96-120. Rutgers University.
- Harness, Peter, ed. (2013) *The Sonnets* (Collector's Library). London: CRW Publishing Ltd.
- Ingram, John (1887) *The Language of Flowers*. London: Frederick Warne.
- 川西進 (編注) (1971) *Shakespeare's Sonnets*. 東京：鶴見書店。
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 嶺卓二 (編注) (1974) *Sonnets by William Shakespeare*. 東京：研究社。
- 野島秀勝 (1988) 「ハムレットの鏡」 笹山隆編『ハムレット読本』3-26. 東京：岩波書店。
- 大場建治 (編注訳) (2018) 『ソネット詩集』(研究社シェイクスピア全集別巻) 東京：研究社。
- 大森文子 (2018a) 「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
- (2018b) 「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1』(鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京：ひつじ書房、175-104.
- (2021) 「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.
- (2022) 「時のメタファーとシェイクスピア」『英語のレトリック・日本語のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2021)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、17-29.
- パノフスキー、エルヴィン (著)、浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏 (訳) (2002) 『イコノロジー研究』(上) 東京：筑摩書房。
- Roman, Luke and Monica Roman (2010) *Encyclopedia of Greek and Roman Mythology*. New York: Facts On File.
- Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* Vols. I and II. New York: Dover Publications.
- Schoenfeldt, Michael, ed. (2007) *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. MA: Blackwell.
- Smith, William (1884) *A New Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology and Geography*. New York: Harper and Brothers.
- 高松雄一 訳 (1986) 『ソネット集 (シェイクスピア作)』(岩波文庫) 東京：岩波書店。
- Tyler, Thomas, ed. (1890) *Shakespeare's Sonnets*. London: David Nutt.
- 渡辺秀樹 (2019) 「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション (言語文化共同研究プロジェクト 2018)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.
- (2021) 「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~”の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.
- (2022) 「Shakespeare における時の擬人化のヴァリエーション：英国 16~17 世紀詞華集を基礎資料にした Time の epithets と apostrophes 再考」『英語のレトリック・日本語のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2021)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、3-15.
- Wilson, John Dover, ed. (1966) *The Sonnets (The New Shakespeare)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』2003. 新潮社。
- OpenSourceShakespeare, George Mason University, 2003-2023. (<https://www.opensourceshakespeare.org/>)
- The Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press, 2023. (<https://www.oed.com/>)

Hamlet における動物名の繰り返しと列挙の意味 翻訳で失われるメタファー義の問題、そして雲の場を中心に¹

関西外国語大学（大阪大学名誉教授）渡辺秀樹

1 序

Caroline Spurgeon は名著 *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* において *Hamlet* に見られるイメージを 279 あげ、自然現象(Nature) 32、病気・医学(Sickness and Medicine) 20 などと大分類、動物(Animals) 27 では鳥、四足獣、爬虫類、昆虫、魚、空想と下位分類もしているが、不思議なことに 3 幕 2 場終わりの、所謂「雲の場」に出る camel, weasel, whale を採らず、劇中 3 度現れる mouse も、死の表象として本劇に重要な印象を与えているはずの蛆虫 (maggot / worm) への言及がないことにも疑問を持った²。不思議と言えば、歴代の群雄割拠 *Hamlet* 校訂テキストの中で、camel, weasel, whale の含意について何の注も付けていない Israel Gollancz, ed., Temple Shakespeare や大場建治版もある。これらは Dover Wilson, New Cambridge Shakespeare 版と並ぶ筆者愛読版である。何故これらの動物名の意義が無視されているのか、これが本論執筆の直接動機である。

20 年ほど続けている「英語動物名の人間比喩の構造と歴史」という科研費共同研究において、日本語と英語での同種の動物名のメタファー義にかなりの相違があることがわかった。加えて、英語では別語が与えられてメタファー義も異なる 2 つの動物名が、日本語では同じ名前になることに日本人は気づきにくいこと、そして日本語訳ではそれらのメタファー義の相違も消えてしまうという翻訳上の問題を指摘せねばならない。

Shakespeare の動物名使用の作品ごとの有様、そしてその寓意的・隠喩的意味についての論考はあまたある。全てを読んで評価するのは筆者の時間・力量に余り、責務でもないと思うが、入手可能な研究書の幾つかと直接関係する論文は読んだ。最も詳しいのは Karen Raber, and Karen Edwards, 2022. *A Dictionary. The Arden Shakespeare Dictionary Series* の 1 冊 *Shakespeare and Animals* で、全作品に登場する動物名と関連語句がアルファベット順に解説されて、作品毎の動物名リストもあり、至便である。³

2 Hamlet に出現する動物名の特徴

戯曲 *Hamlet* はテキストが他作品より長いこともあるが、哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、虫など広範囲の動物名がメタファーとして使われて (60 余り)、動物名の出現数が少ない *King John* や *Julius Caesar* (ともに 23 個) などと対照的である。他劇にしばしば出現する serpent, wolf, worm のようなメタファー義が定まっている動物名に加え、数少ない bat, camel なども見られること、そして同じ種を表す類語の使用が複数見られることが特徴であろう。筆者が注目するのは、ほとんど全ての日本語訳で同じ訳語になっている「鳩」「蛆虫」「鼠」のメタファー義の相違と有名な雲の場 (3 幕 2 場) の “camel, weasel, whale” の連結の意義である。

3 鳩 pigeon or dove

日本語で鳩となる名詞 pigeon と dove の両方が *Hamlet* に現れており、どの日本語訳でも「鳩」と

¹ 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」(研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子)、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」(研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹)、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」(研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹)。本稿で取り上げた *Hamlet* からの引用は Jenkins ed. (1982) *Arden Shakespeare* を参照した。引用文中の太字表示は筆者のもの。

² Four-footed 9: dogs 2, porcupine, mole, donkey, ape, Hyrcanian tiger, tether, feed on moor. (1935, pp. 367-68.)

³ *Hamlet* については adder, angling, animal, bait, Barbary, bat, beast, bug, camel, canker, capon, centaur, chameleon, crab, crocodile, crow, dog, dove, eyas, falcon, fish, fly, fox, frog, fur, glowworm, handsaw, hart, hobby-horse, honey, horse, human, jade, kite, lapwing, lion, maggot, mole, monster, owl, peacock, pearl, pelican, pigeon, porpentine, quill, rat, raven, roe, sable, satyr, serpent, shark, sheep, swine, tiger, venom, water-fly, weasel, whale, woodcock, worm (p. 450) と 63 個、総称名 (animal, beast, fish)、種名 (lion, peacock)、縁語 (angling, bait)、空想動物 (satyr, centaur) が混じっている。Julius Caesar については Actaeon, adder, ape, ass, bait, bee, crow, dog, eagle, egg, ferret, hart, herd, hunt, kite, lion, raven, serpent, sheep, spaniel, unicorn, wasp, wolf (p. 451) の 23 個が書かれている。

訳出されている。まず、復讐を執行できない Hamlet の自己評価で自分は「俺は鳩みたいに意気地がなく (pigeon-liver'd)、あいつの暴虐を憤る勇氣にも欠けている。でなければ、とうの昔にあの下衆野郎のはらわたを大空の鳶に食わせ、」(松岡和子訳) と猛禽の鳶 (the region kites) と対比している。

But I am **pigeon-liver'd** and lack gall
To make oppression bitter, or ere this
I should ha' fatt'd all the **region kites**
With this slave's offal. Bloody, bawdy villain!
Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain!
(2 幕 2 場 572-552)

一方、名詞 dove は気のふれた Ophelia の歌う ballad の歌詞に「可愛い人」の意味で現れ、Hamlet に向けて言われているように聞こえる。

They bore him barefac'd on the bier
And in his grave rain'd many a tear—
Fare you well, my **dove**.
(4 幕 5 場 164-166)

Harold Jenkins は “Fare you well, my dove!” は Ophelia が ballad の歌詞に付け足した自分の台詞とみている。⁴ この dove が、母 Gertrude の息子 Hamlet の評価では「みんな狂気のせい。しばらくは発作が続くけれどすぐ治まります。金色の双子の雛をかえそうとじっと卵を暖めている母鳩のように黙って坐り込んでしまうから」(松岡和子訳) のように「辛抱強い人」の意味の直喩で再出することはもっと注目してよいだろう。⁵

This is mere madness,
And thus a while the fit will work on him.
Anon, as patient as the female **dove**
When that her golden couplets are disclos'd,
His silence will sit drooping.
(5 幕 1 場 279-283)

Hamlet を dove に見立てているのは Ophelia と Gertrude で、自身では pigeon に比しているからだ。5 節の「鼠」に対応する rat と mouse の比較論考で、Claudius が Gertrude を “my mouse” と呼んでいるだろうと詰る Hamlet の言葉 (3 幕 2 場) があるが、同じく endearment の動物表象でありながら、mouse は dove の清純なイメージに及ばない。

4 蛆虫 maggot or worm

「蛆」に相当する maggot が 2 度、worm が 3 度現れるが、第 2 例で近接して言い換えられているように pigeon と dove のような相違は感じられないし、差をつけて訳している日本語訳はない。

For if the sun breed **maggots** in a dead dog, being a
god kissing carrion—Have you a daughter?
(2 幕 2 場 181-182)

Not where he eats, but where he is eaten. A
certain convocation of politic **worms** are e'en at him.
Your **worm** is your only emperor for diet: we fat all

⁴ “Printed by F[irst Folio] as though part of the song, and indistinguishable from it in Q2, but more plausibly an endearment added by Ophelia to it” (*Hamlet*, The Arden Shakespeare. 1982, p. 358)

⁵ 多くの校訂版や訳本で Gertrude の台詞とされている部分を大場は Claudius の発言とし男言葉で訳しているのは興味深く、大場対訳・注解『ハムレット』で p. 316 の注は「Q2 では Gertrude の台詞」と記し、「凡例」(p. v)で「本選集のテキストは、基本的に 1623 年出版のシェイクスピア最初の戯曲集、通称第 1 二つ折り本 (First Folio, F1 と略記) 収録の本文を底本として、これの現代綴り化によって編纂された。」と記している。後掲図参照。

creatures else to fat us, and we fat ourselves for
maggots. Your fat king and your lean beggar is but
variable service—two dishes, but to one table. That’s the end.
(4 幕 3 場 19-25)

Why, e’en so, and now my Lady **Worm’s**, chapless,
and knocked about the mazard with a sexton’s spade.
Here’s fine revolution, and we had the trick to see’t.
Did these bones cost no more the breeding but to play
at loggets with ’em? Mine ache to think on’t. (5 幕 1 場 87-91)

名詞 **worm** は古英語では蛇や竜まで含み、爬虫類や昆虫など這って動く細長い生き物や寄生虫などを広く意味して使われていた (*Beowulf* では **fire-dragon** に使われている)。OED ではその中でも特に「ミミズ」と「蛆虫」を別項に分けて古英語以来の用例を並べている (3. a. A member of the genus *Lumbricus*; a slender, creeping, naked, limbless animal, usually brown or reddish, with a soft body divided into a series of segments; an earthworm. More widely, any annelid, terrestrial, aquatic, or marine. 6. a. (a) A maggot, or, in popular belief, an earthworm, supposed to eat dead bodies in the grave.) OED は「良心の呵責」の意の “worm of conscience” に *Richard the Third* から用例を引いている。

1597 Shakespeare *Richard III* i. iii. 219 The worme of conscience still begnaw thy soule.

Hamlet においては蛆虫自体を指しており、「良心の呵責」でも OED があげる人間メタファー義 II. 10. fig. a. A human being likened to a worm or reptile as an object of contempt, scorn, or pity; an abject, miserable creature. でもない。

OED の maggot には “maggots are worms” の意味の John of Trevisa からの引用や言い換えの意味の or に結ばれた “worms or maggots” が見える Oliver Goldsmith の引用もあり、*Hamlet* の 5 幕 1 場からも引用がある (下線は筆者)。

1495 Trevisa’s *Bartholomeus De Proprietatibus Rerum* (de Worde) xviii. cxv. 856 Magottes ben wormes that brede of corrupt and rotyd moysture in flesshe.

1774 O. Goldsmith *Hist. Earth* VIII. 4 Caterpillars may be easily distinguished from worms or maggots, by the number of their feet.

人を意味するメタファー義は OED で 1. b. *figurative*. Used of parasitical people, pernicious influences, etc. と † 3. A whimsical or capricious person. *Obsolete*. の 2 つが別に記されているが、初例は両方とも Shakespeare 死後の作品からである。以上から *Hamlet* においては maggot と worm は同じく蛆虫を意味して言い換えで用いられており、人のメタファーではない。2 幕 2 場で Hamlet は Polonius に向かって maggots を含む謎のような句を吐き、4 幕 3 場で Polonius はどこにいるのかと聞かれて、「今、蛆虫たちに食われている」と答えており、Polonius 関連で maggot と worm を用いているので、日本語訳で「蛆虫」で統一訳出すれば、その関連に気づく観客もいるだろう。⁶

5 鼠 mouse or rat

類義名詞の使い分けについて終わりに、4 回出てくる鼠 (mouse /rat) の比喩義について考える。2 幕で Hamlet が Claudius の兄弟殺しを確認するために旅役者に「ゴンザーゴ殺し」を演じさせるが、その劇の題を Claudius に聞かれた Hamlet は、企みを仄めかして挑発的に mousetrap と答え、叔父を mouse に見立てているが、1 幕 1 場の城壁の場面で歩哨 Francisco と Bernardo の確認挨拶 “Not a mouse stirring.” が前置きとなっていると考えれば、二重の皮肉となろう。1 幕では、「鼠一匹出ない」の後で亡霊が出るという皮肉であったものが、2 幕になると鼠とは Claudius 王という

⁶ 筆者は「良心の呵責」という意味で用いられてきた “worm of conscience” という表現の起源と継承について、中世宗教散文を主たるテキストとしてしばらく考察してきたが、まとまった段階で稿を改めて発表する。

わけだ。次いで第3幕、Hamletは、母Gertrudeの寝室においてカーテンに隠れていたPoloniusを刺し殺す前にratと呼んだのは、潜むのがClaudiusとみてそう呼びかけたならばmouseからratへの転換、それも統一メタファーとなるし、誰か分からぬ間諜の意味でのratならば、それこそこの場に相応しい。

続く母への改悛を促す説教の中で「先夫の弟に不義の床(sty 豚小屋)で可愛いネズミ(mouse)と呼ばれているのか」と詰ることにより、Claudius, Polonius, Gertrude 3名がmouse / rat に比されていることになる。多くの動物表象が連続・錯綜して現れるこの劇で(2幕4場では豚のイメージに鼠が続く)、この動物メタファーの皮肉な統一用法は注目すべきである。上演された劇を見ている観客は、この連続使用に気が付かないかもしれないが、脚本を何度か精読する読者には、意図的なメタファーの繰り返しと観取される。

以前数年をかけて、英語の諺と英詩、17世紀から19世紀の辞書の記述を資料に、英語動物名の人間メタファー義を種ごとに分類し、歴史的なメタファー義の発達と継承の様を考察したが、日本語の「ネズミ」に相当する英語のratとmouseのメタファー義は際立った対照があり、前者は「ならず者、密告者、裏切者」というネガティブな面を表し、後者には「臆病者、若い女、可愛い娘」という前者にない比喩義が顕著に存在することが分かった。⁷ この比喩義の歴史的傾向から見ると、GertrudeがClaudiusにmouseと呼ばれるのは(母を論ずHamletの想像ではあるが)「可愛いお前」の意味でendearmentであろうが⁸、直前の場でPoloniusがHamletに「裏切者・間諜」の意でratと呼ばれていることを見れば、ClaudiusのGertrudeへのmouseの呼びかけは観客には「お前も先夫を裏切った女だ」とのアイロニーを感じるかもしれない。そしてClaudius、彼がmouseに比されているのは、デンマーク国、王家内に潜む他者、兄を殺した篡奪者と「ゴンザーゴ殺し」の「ネズミ捕り」で露見し、甥による復讐を極度に恐れている臆病者という解釈もできよう。

翻訳における問題もまた露呈した。英語原文のmouseとratへの松岡訳は、ネズミ(城壁)、ねずみ(観劇)、鼠(Poloniusへ)、ネズミ(Hamletが想像するClaudiusのGertrudeへの睦言)のヴァリエーション・文字の差が見えるが、これはメタファー義を反映したものなのだろうか。原文ratに対してのみ漢字の鼠を当てている。注はない。他のHamlet日本語訳を見ても鼠、ねずみ、ネズミという表記に指示された人物やメタファー義の相違を反映させているものはなかった。⁹

6 camel, weasel, whale 再考¹⁰

最後に考察したいのは、一度しか現れない3つの動物名が連続する雲の場である(3幕2場)。先行研究として諸校訂版での注釈と、この場面を特に論じた短い論文での動物名の解釈をまとめながら、筆者の見方を加え、終わりに自説を述べる。その前に指摘したいのは、本劇中で名詞cloud(s)は5回出現し、最初に謁見の場でのClaudius王が甥で義理の息子となったHamletにかけた言葉に複数形で現れることだ。

How is it that the **clouds** still hang on you? (2幕1場 66)

続いて、同じClaudius王が、長い発言の締め括りに即位を祝う夜通しの飲み会に言及して、自分が杯を飲み干すごとに大砲が雲に向けて放たれる、と述べる。

⁷ 同様に日本語「鳩」にはpigeon, doveが対応するが、後者の「夫婦愛・真の恋人・平和主義者」というポジティブなメタファー義と完全に対立する前者の「阿呆・カモ」の蔑義を踏まえずに「鳩」と訳出すれば、原文での意図は霧消するだろう。

⁸ Israel Gollancz, ed. 1895. Temple Shakespeare, *Hamlet* の Glossary (p. 197) では mouse III. iv. 183 “a term of endearment” とあり、他の出現箇所への言及はない。The Larger Temple Shakespeare, *Hamlet* (1900) の Glossary も同様。

⁹ 後掲の表2参照。

¹⁰ ネット上で公開されているShakespeare研究者のForumともいべきShakesper: The Global electronic Shakespeare Conferenceでは“Four Riddles in Hamlet”中の3件に動物名が入っていること、この雲の場が挙げられていることを指摘しておく(1 hide Fox, and all other, 2. Camel, Weasel, Whale, 3. little more than kin, and less than kind, 4. I know a Hawk from a Handsaw)。

Why, 'tis a loving and a fair reply.
Be as ourself in Denmark. Madam, come.
This gentle and unforc'd accord of Hamlet
Sits smiling to my heart; in grace whereof,
No jocund health that Denmark drinks today
But the great cannon to the **clouds** shall tell,
And the King's rouse the heaven shall bruit again,
Re-speaking earthly thunder. Come away. (2 幕 1 場 121-128)

こうして、2 幕 1 場の「雲」の表象は、有名な 3 幕 2 場の雲の場の前置きとなっている。

Do you see yonder **cloud** that's almost in shape of a camel? (3 幕 2 場 366)

さらには、Hamlet に父 Polonius を殺されたと知ってフランスから帰国し、暴徒を率いて息巻く Laertes の行状を心配する Claudius が Laertes は「雲の中に籠っている」と述べる事、これは *Hamlet* における周知の事実、Hamlet, Laertes, Fortinbras という 3 人の息子の共通性、親を殺されて復讐を目指す、のメタファー的証左でもある。

Last, and as much containing as all these,
Her brother is in secret come from France;
Feeds on his wonder, keeps, himself in **clouds**,
And wants not buzzers to infect his ear
With pestilent speeches of his father's death,
Wherein necessity, of matter beggar'd,
Will nothing stick our person to arraign
In ear and ear. (4 幕 5 場 87-94)

この部分の松岡和子訳は「猜疑心に凝り固まったまま身を潜めている」となって、原文 *clouds* の連続使用の意義は失われているのである。最後に *clouds* が現れるのは、その Laertes を王にと叫ぶ民衆の声が「雲まで鳴り響いている」という文句で、先の 2 幕での Claudius 新王祝賀の飲み会の砲声が「雲間に鳴り響くこととの対比であり、この 2 幕 1 場と 4 幕 5 場で名詞 *clouds* が近接して 2 度現れるのは偶然ではなく、1 度目が「ふさぎこむ」「身を隠す」というメタファー義、2 度目は「天に向かって」という同じ意味で、父を殺された二人の相似と相違の対照、Claudius に対しては痛烈な皮肉となっていることだ。

Save Yourself, my lord.
The ocean, overpeering of his list,
Eats not the flats with more impetuous haste
Than young Laertes, in a riotous head,
O'erbears your officers. The rabble call him lord,
And, as the world were now but to begin,
Antiquity forgot, custom not known—
The ratifiers and props of every word—
They cry 'Choose we! Laertes shall be king'
Caps, hands, and tongues applaud it to the **clouds**,
'Laertes shall be king, Laertes king' (4 幕 5 場 98-108)

ここを松岡は「「我々で選ぼう！レアティーズを王に」と叫んでおります。天にも届けと、帽子を投げ」と訳出しているので、またしても 2 幕から続くはずの名詞 *cloud(s)* の連続性は失われている。¹¹ Norman Blake は “As part of Shakespeare's habit of repetition it has been noted that he sometimes

¹¹ 日本語訳では 5 例を全て「雲」と訳出すべきだろう。松岡和子は雲の場の台詞 “Do you see yonder cloud that's almost in shape of a camel?” に「天井画を指して言っている」との注を加えている (p. 153)。Dover Wilson は当時の劇場に天井がなかったこと、役者が空の雲を指さして述べていた可能性を指摘する (378. *yonder cloud* Ham. Speaks

seizes on a particular word which he uses in one play.”¹² と述べて、*King Lear* や *Much Ado about Nothing* における nothing の語意に注意するよう述べているが、先に見たように「蛆虫」を意味する maggot(s) と worm(s) は Polonius に向けて使われていた。名詞 cloud(s) も複数形では Hamlet と Leartes にのみに使われている。これを見逃しては以下の議論はできない。

では、数ある *Hamlet* 校訂本の注釈や先行論文でどのような解釈が見られるのか。古注で興味深かったのは Theobald で、weasel の代わりに Q3 に見える black から ouzle (oozel)「黒歌鳥=blackbird」を採り、これにより 3 つの動物名が “beast, bird, and fish” となるユーモアだとする。この説に同意する現代の校訂者は皆無であるが、ouzel であるとしたら、筆者は “fish, flesh, or fowl” 「得体のしれない・日和見主義の人」の頭韻句での 3 分類の如く、“camel, weasel, whale” は語尾の子音韻 (consonance) を用いた言葉遊びであるととる。いずれの解釈を取る場合も、Hamlet の言葉を肯定するだけの「日和見主義の人」の Polonius に対する皮肉であろうし、「雲の形」が見る人によって異なることをも示し、現実を理解しえない人間への嗟嘆ともなる。

Roger J. Trienens, “The Symbolic Cloud in *Hamlet*” (1954) の先行論考のまとめによれば、まず、従来広く受け入れられ来た解釈に、これら 3 つの動物名は、camel が好色、weasel が狡賢、whale が大酒呑みのメタファーとなって Polonius への皮肉・当てつけとなっていること、次いで Harold Goddard 説 (1951) が紹介され、この動物名は Polonius ではなく Hamlet 自身の劇中での状況変化を象徴するもの、つまり、駱駝は復讐の義務の重圧にあえぐ (1-2 幕)、鼬は狡賢く立ち回る、意志と怒り (3 幕)、そして鯨が大海 (a sea of troubles) に挑んで自身が飲み込まれる最期 (5 幕) を象徴するものだという。これらの説を紹介して Trienens 自身が主張するのは、3 種の動物名は全て好色の象徴であり (“the three creatures which Hamlet sees in the cloud all connote lust.” p. 211)、父の死から間もない母の叔父との結婚を責めるものとするのだ。この解釈は、この雲の場面がゴンザーゴ殺しの劇中劇の後、そして母の寝室へ向かう直前に起きていること、Claudius と Gertrude の「不義」の結婚、それが二人の好色によると悩む Hamlet の心中を示し、次の場、王妃の寝室で Hamlet が Gertrude を諷める内容を先行示唆するものだとする。そして、中世の動物伝説と Shakespeare の他の戯曲でのメタファー義により、3 種の動物が好色を表し、かつ鯨が前 2 者よりも強くその意味で使われていると主張する (the whale which Hamlet sees in the cloud should suggest lust even more strongly than the camel or the weasel. p. 213)

以上四様、それぞれ筋の通った解釈であり、新たな解釈は何も出せそうに思えなかったが、筆者は昔からこの 3 つの動物名が -(e)l で脚韻・子音韻を構成しており、類音効果で観客を笑わせたと思っていた。John Frow (2019, p. 370) も、雲自身の形態の変異の様子をロマン派が言語表現で表現していたこととの関連で、“when Hamlet is mocking Polonius about what he can see in the shapes of clouds, the shift from “camel” to “weasel” repeats the /el/ phoneme, and then from “weasel” to “whale” repeats the initial /w/” と述べて、このセリフに見られる類音連鎖の交代を指摘しているが、動物名の含意に関しては沈黙している。

Trienens の説に基づいて、3 つの動物名が「好色・淫蕩」のイメージを重ねて強調しているとしても、一つの雲の形が、つまり同じ事態が見方ではいかようにも異なって見えることを示している、つまり人の観察は真実を捉えられないことを意味しているともとれる。これは Polonius 自身が旅回りの役者たちの演ずる劇が悲劇か喜劇か悲喜劇か、とどうにでも取れると発言することとも呼応する。

また、人間は自分を見ることはできないことを、この劇では 3 幕の鏡の喩えで示している。「ハムレットの鏡」という論考で野島秀勝氏は

ハムレットも母の墮落以後、「なにもかも二重に見えてしまう」「奇妙な遠近法」の捕囚とな

in the royal palace, but also in the unlocalized Eliz. theatre open to sky; thus he can point upwards to a cloud or to ‘this brave o’erhanging firmament (2. 2. 304), and the audience is conscious of no incongruity.(p. 208))。これらの役者の動作への指摘は興味深く、後の議論への示唆を得た。

¹² Blake 1989. p. 50.

る。彼の目には雲はラクダにもイタチにも鯨にも見える（三幕二場）。¹³

とハムレット自身の視覚の定めなさと解釈している。本劇の鏡 (mirror, (looking) glass) の譬えと Sonnets の鏡のモチーフを比較考察するのは、本論集の冒頭論文の大森文子教授で、“You are you” “You are yourself” のような主語と補語や主語と目的語に同一人物を指す文型、「文法的鏡面構造」の多出と関連付けている。同じ言葉を繋辞を挟んで左右に配置するような文型が鏡のメタファーとなっているという観点から *Hamlet* を見ると、王子 Hamlet の矛盾する 3 個の言葉を繰り返して、御機嫌を取ろうとする臣下とのやりとりも鏡面的対話と言えよう。これは有名な雲の場面 3 幕 2 場の Polonius との対話、5 幕 2 場の Osric とのやりとりに見られる。注目すべきは後者に出現する “as ’twere” と前者における almost like, like, very like という変異の繰り返しである。この “as ’twere” の *Hamlet* における繰り返しについて Allison K. Deutermann の指摘は傾聴に値するので、長いがここに引用したい。

From camel to weasel to whale, Polonius dutifully sounds out the word Hamlet breathes into his ears. Later, the prince similarly sounds out the courtier Osric, perversely responding to his “it is very hot” with “No ’tis very cold.” Osric agrees (“It is indifferent cold, my lord, indeed”) only to be contradicted again (“it is very sultry and hot”). Once more, the courtier adjusts his weather report accordingly: “Exceedingly, my Lord, it is very sultry” (5.2.80-86). In their desire to please the prince, both Polonius and Osric seem to relinquish control of their sensory perception and their bodies more generally, allowing themselves to become Hamlet’s instruments. And yet, of course, it is not their sensory perception that has changed but rather their accounts of it. The exchanges display Hamlet’s power over these men and Guildenstern’s comparable powerlessness over the prince; though the King’s counselor, Polonius is nonetheless subservient to Hamlet and can therefore be forced, like Osric, to discourse according to his suggestions. Such pliant receptivity is at least in part an occupational hazard. Hamlet is aware of the conditions that have shaped Polonius and Osric’s deferential reception. Still, he mistakenly assumes that how people hear will always inevitably, consistently, and predictably be predetermined by rank or, occasionally, by other factors, such as guilt or innocence. His application of these assumptions to the reception of theatrical speeches, I will show, tests their validity while extending Hamlet’s interest in audition offstage.

(Allison Deutermann, ““Caviare to the general”? Taste, Hearing, and Genre in *Hamlet*” p. 245)

ここまで先行研究での様々な解釈を挙げながら、それらに対して筆者の考察を付加してきたが、最後に自説を述べたい。先に全 5 例の出現状況を見た名詞 cloud(s) では、雲の場に出る cloud が他の 4 例と異なり単数形であること、そして Claudius 王の名前と類音であること、その Claudius 王の台詞 (1 幕 2 場) で clouds という名詞が本劇で初めて用いられたことから、“Do you see yonder cloud that’s almost in shape of a camel?” 以下の動物名は、Claudius 王の不徳をあげつらうメタファーではないかという仮説を得た。¹⁴ これを前提としての動物名の比喩義のありようをもう一度文脈から見てみれば、従来の説の一つ「3 つの動物名は雲の形に事寄せた Polonius への批判・皮肉」を、そっくりそのまま、兄王妃と即座に再婚するという好色で (camel)、兄を毒殺するように狡賢で (weasel)、即位の晩に新王として大酒を呑む (whale) というメタファーとなって叔父 Claudius 王への皮肉・当てつけと容易に解釈されるのである。特に whale が「大酒呑み」の蔑義で Claudius 批判として用いられているならば、1 幕 4 場、城壁で深夜の砲声を聞いた Hamlet がデンマーク人が大酒のみであると外国から馬鹿にされていると嘆くこととも結びつく。

3 幕 3 場で Claudius 王は、初め Guildenstern と Rosencrantz、次いで Polonius と対話しており、Polonius 退場後に、入れ替わりに Hamlet が入ってくる。3 幕 2 場の雲の場の前は、ゴンザーゴ殺しの劇が上演されており、王家の人々と Polonius や Ophelia が Claudius と言葉を交わしている。前後で舞台にずっと出ている Claudius は雲の場の間は舞台の袖付近にいるはずだ。ので、これは Hamlet の問い “Do you see yonder cloud” の表意「あそこに見える雲」が「向こうにいる王 Claudius」 「お前がさっき話していた王 Claudius」 という裏の意味を含むという解釈を許すだろう。

¹³ 野島秀勝 1998. 「ハムレットの鏡」『ハムレット読本』 p. 16.

¹⁴ 人名 Claudius と cloud の類音性は科研共同研究者の大森文子教授より示唆された。

ここからさらに後の場を見れば、本論 5 節で見た「鼠」と日本語訳出される名詞 **rat** が 3 幕 4 場に出ていることが面白い。王妃の居室に Hamlet が入った直後に、盗み聞きのためにカーテンに隠れていた Polonius は、これを叔父 Claudius と勘違いした Hamlet に刺殺される。この時の “How now! A rat?” 「何だ鼠か」という Hamlet の台詞は、「密告者・スパイ」の意味では Polonius に相応しいが、「ならず者・卑劣漢」の蔑義であれば、camel, weasel, whale から続く、動物メタファーで叔父 Claudius への罵倒となるのだ。

Hamlet は独白部でも母 Gertrude への諫めの言葉でも、Claudius への軽蔑・憎しみを激しい侮蔑語の列挙で表している。「鳩」の節での引用部を繰り返す。

But I am pigeon-liver'd and lack gall
To make oppression bitter, or ere this
I should ha' fatt'd all the region kites
With this **slave's** offal. Bloody bawdy **villain!**
Remorseless, treacherous, lecherous, kindless **villain!**
(2 幕 2 場 572-577)

ここでは Claudius を名詞 **slave** と **villain** で罵倒し、**villain** には bloody, bawdy, remorseless, treacherous, lecherous, kindless と罵倒形容詞を列挙しなければ気が済まない。母への諫言では murderer が加わって、「偽物の王」の意味の表現を繰り返す饒舌な息子である。

A **murderer** and a **villain!**
A **slave** that is not twentieth part the tithe
Of your precedent lord, a **vice of kings;**
A **cutpurse of the empire and the rule,**
That from a shelf the precious diadem stole
And put it in his pocket—
……
A **king of shreds and patches—** (3 幕 4 場 96-102)

Claudius の獣への喩えは、早くも 1 幕 2 場の独白中で父と叔父を比較した「太陽神とけだもの」(松岡訳)に端を発する。¹⁵

So excellent a king, that was to this
Hyperion to a satyr; (1 幕 2 場 139-140)

ギリシア神話のサチュロスは半人半馬で酒飲み騒ぎ好色とされる半獣神である。3 幕 3 場で Hamlet は一人で祈りをささげている Claudius を見て殺害を思い、躊躇って止めたのであるが、3 幕 4 場、母の居室のカーテンに隠れる Polonius を Claudius と間違えて、**rat** と呼んで刺し殺した。先王 Hamlet に続き新王 Claudius の忠臣? となった「饒舌の」Polonius は、死ぬ前に同じく「饒舌の」Hamlet から Claudius の正体を動物名侮蔑メタファー列挙 “camel, weasel, whale and rat” で聞かされたというわけである。

¹⁵ 父王 Hamlet が Hyperion に喩えられているのは、Claudius に son と呼ばれ clouds の中にいるのか? と問われた Hamlet が son と sun の掛詞で返したと結びつくだろう。自分が sun(son)なら本当の父は Hyperion であると。ギリシア神話では Hyperion は日の神 Helios、月の神 Selene、夜明けの神 Eos の親とされているのであるから。

ハムレットの「鳩」 pigeon-liver'd/dove 日本語対照 訳語に差はない

訳者	2 幕 2 場 pigeon-liver'd	5 幕 1 場 dove
坪内逍遙	成程、俺は臆病者で、虐げられても腹を立つだけの意気地さへも無いに相違ない。(鳩を出さない)	やがては母鳩が黄金色の雛を孵した時のやうに、おしだまって鎮静らうわいの。
福田恒存	鳩のように気の弱い腑ぬけでもなければ、いつまでこんな辛い我慢をするものか。	まるで牝鳩が金色の雛を孵すときのように、じっと黙りこくってしまう。
大山俊一	鳩のようにおとなしく、気が弱いのだ。	ちょうど雌鳩が金色のひなをじっと辛抱して抱いているときのように静まってあの子は黙ってしまいます。
木下順二	鳩のように心弱く勇気がないからここまで重荷に悩んでしまう。	でもじきにうなだれて黙ってしまいます。黄色い雛をかえす時の雌鳩のように。
久米正雄	成程私は鳩のやうに、圧制を受けても怒るだけの意気地がない。	やがては母鳩が黄金の雛を孵した時と同じやうに、黙って面伏せくなるだらうよ。
本田顕彰	おれが鳩みたいに優しく意気地なしで、圧迫を受けても腹を立てることも出来ないのは、本当のことなんだ。	すぐ、二羽の黄金色の雛が孵った時の雌鳩のやうにおとなしく、黙って考へ込むでせう。
横山有策	おれは鳩のような臆病もの、暴君に苦いめ見せるだけの胆汁が足りない男なのだ。	やがて、母鳩が黄金色の対の雛を孵した時のやう、彼の沈黙が静かに彼に戻って来よう。
永川玲二	なにしろおれの肝っ玉は鳩同然、迫害されて煮えたぎる血が一滴でもおれにあれば、この界限のとんびはもう。。。。	金色の雛をかえそうと卵を抱いている牝鳩のように、じっとうなだれてしまいます。
小田島雄志	鳩のように気弱で、屈辱を苦々しいと思う勇気さえ欠けているのだ。	金色の雛がかえったときの雌鳩のように、黙りこくってしまいます。
松岡和子	俺は鳩みたいに意気地がなく、	金色の双子の雛をかえそうとじっと卵を暖めている母鳩のように黙って坐り込んでしまうから
大場建治	きっとおれは鳩のように臆病で、怒りの感情に欠けているのだ。	(Claudius の台詞とする) だがすぐに黙りこくってうなだれてしまうからな、鳩が卵を抱いて二羽の黄金色の雛を孵すときのように。

ハムレットの「蛆虫」 worm/maggot 日本語対照 訳語の差はない

訳者	2 幕 2 場 maggots	4 幕 3 場 politic worms; Your worm; maggots	5 幕 1 場 my Lady Worm
坪内逍遙	天日の淨き光とても。。。狗児の屍に蛆を醸す	さる蛆虫共が談合会を始めて、今ちようど宴会じゃ。や、蛆というふやつは、ほんに会席の王さまぢや。。。さて其肥った果が蛆虫の餌食ぢや。	しかるに今は只蛆虫の天侍の所有。
福田恒存	日の御子。。。犬の屍に蛆をばわかしたまえば	政治屋の蛆虫どもが集まって、あの男の腹に総がかり。。。蛆虫というやつは食いしん坊の大関だからな。。。それで太ったわが身を蛆虫どもに提供するというわけだ	それが、今では蛆虫の思いもの。
大山俊一	もし太陽が犬の死骸に蛆をわかせるなら	蛆虫どもがうようよとあの御仁を取り巻いて、今や汚らしい政治集会の真つ最中というところだな。。。あなたのような国王をも食べてしまう蛆虫は、さしずめ食事の帝王だと言える。。。そしてわれわれがわれわれ自身を肥らすのは蛆虫を肥らすため。	そして今は完全に蛆虫姫の想いものだ。
木下順二	太陽が犬の死骸に蛆虫をわかせると思えば	政治屋の蛆虫がちようど今あの男にたかっているところです。蛆虫というのは食うことにかけては王さまだ。。。そして肥らせた自分を蛆虫に食わせる。	それが今は蛆虫夫人のお気に入りか。
久米正雄	天日とても。。。死狗の屍に蛆をも湧かすべければ	ある蛆虫の会合が今ちようど彼の処で宴席を初めたのです。あの蛆虫といへばほんとに会議の王ですよ。。。そして蛆虫のために吾々を肥らすのです。	しかるに今は蛆虫婦人の持ちもの。
本田顕彰	もし太陽が犬の死骸で蛆を育てるなら	政治屋につく蛆虫どもの集会が、彼を食べてゐるところです。蛆虫という奴は会食の唯一の皇帝です。。。今度は蛆のために自分を太らせるからです。	今はといふに、蛆夫人のものだ。
横山有策	若しそれ太陽が犬の屍に蛆虫を発生せしむれば	政治家気取りの蛆虫が寄り集まって、今宴会を開いてゐます。あの蛆虫という奴は宴席の帝王です。。。今度は蛆のために自分を太らせるからです。	で今では、蛆虫姫の家来。
永川玲二	何しろ太陽は犬の死体に蛆をわかす	政治好きの蛆虫どもが寄ってたかつて食いものにしてる。なにしろつまみ食いにかけて蛆虫は天下無敵。。。肥った自分を蛆虫に食ってもらう。	今はもっぱら蛆虫夫人のご寵愛。
小田島雄志	太陽が犬の死骸に蛆虫をわかすは	政治屋の蛆虫どもがよってたかつてあの男を食いものにしております。。。そして太らせた自分を蛆虫に食わせる。。。王様を食った蛆虫を餌にして魚を釣り、	それがいま蛆虫婦人のしもべだ。
松岡和子	もしも太陽が犬の死体にウジをわかすなら	政治屋の蛆虫どもが寄ってたかつてあの男を平らげています。。。王を食った蛆虫を餌に魚を釣り、その蛆を食った魚を人が食うかもしれない	それが今では蛆虫夫人の所有物だ。

大場建治	太陽たる王子は 犬の死骸を照ら して蛆をわかす	抜け目ない政治家の蛆虫どもがたがいま会食のまつ最中。なにしろ蛆 虫ってやつは。。。だが自分を太らせるのは蛆虫のため。	それがいまは 蛆虫夫人の囲 いもの。
------	-------------------------------	---	--------------------------

ハムレットの「鼠」 mouse/rat 日本語訳対照

訳者	1 幕 1 場 mouse	3 幕 2 場 mousetrap	3 幕 4 場 rat	3 幕 4 場 mouse
坪内逍遙	鼠一疋出ませなんだ	鼠おとし	や！鼠？	いとしいの、可愛いのと甘ったる い言葉に誑されて
福田恒存	鼠一匹出なかった	わな。おおそのわけ をとおっしゃる？	おお、さては！鼠か？	「ういやつ」とでもなんとでも言 わせておけばいい
大山俊一	ねずみ一匹でなかっ た	「ねずみ取り」	なんということだ！ね ずみか？	「かわいこちゃん」と呼んでもら い
木下順二	うん。鼠一匹。	「鼠おとし」	何だ！鼠か？	わが小鼠よといわせたらしい
久米正雄	鼠一匹騒ぎませぬ	鼠罠	どうしたと。鼠だな。	可愛い者と呼ばれたり
本田顕彰	鼠一匹動いちゃみ ない	「ねずみおとし。」	なんだ！鼠か？	可愛い鼠さんと呼んでもらったり
横山有策	鼠一匹騒ぎません	『捕鼠機（ねずみと り）』	何ッ！鼠か？	「わしの小鼠」などと呼ばれたり
永川玲二	ねずみ一匹現われん	「ねずみ取り」	なんだ、ねずみか？	かわいいとささやかれたり
小田島雄志	ネズ一匹	『ネズミ取り』	おお、ネズミか？	かわいい子ネズミとでも呼ばれる がいい
松岡和子	ネズミー一匹出な かった	「ねずみ取り」	何だ？鼠か！	ネズミちゃんと呼ばれ
大場建治	鼠一匹出なかった	「鼠とり」	なに、鼠か？	睦言はかわいいねずみちゃん

参考文献

- ジャン＝ポール・クレベール著 1989. 竹内信夫他訳『動物シンボル事典』大修館書店
- 大森文子, 2006. 「動物比喩に表れる獣性と人間性 共同研究英語動物名のメタファー(5)」『詩的言語とメタファー 言語文化共同研究プロジェクト 2005』47-60.
- , 2018a. 「喜びと悲しみのメタファー: Shakespeare の Sonnets をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
- , 2018b. 「人の心と空模様: シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1』(鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京: ひつじ書房、175-104.
- , 2021. 「Shakespeare の Sonnets における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.
- , 2022. 「時のメタファーとシェイクスピア」『英語のレトリック・日本語のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2021)』(大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、17-29.
- 笹山隆編 1998. 『ハムレット読本』岩波書店
- 野島秀勝 1998. 「ハムレットの鏡」『ハムレット読本』 pp. 3-26. (初出『英語青年』1984 年 1～2 月号 研究社出版)
- 渡辺秀樹 2006. 「イヌ科の動物名の人間比喩の意味範囲と構造 共同研究英語動物名のメタファー(4)」『詩的言語とメタファー 言語文化共同研究プロジェクト 2005』35-46.
- , 2007. 「メディア英語の犬品種名メタファー poodle と rottweiler を中心に: 共同研究 英語動物名のメタファー (7)」『詩的言語とメタファー 言語文化共同研究プロジェクト 2006』31-45.
- , 2008. 「イヌ科名詞・派生語の人間比喩のレベルと構造 共同研究 英語動物名のメタファー(8)」『言語文化研究』34: 93-108.
- , 2009. 「名詞 cat を含む諺・成句・イディオムと人間比喩義の構造 共同研究 英語動物名のメタファー(10)」『言語の歴史的変化と認知の枠組み 言語文化共同研究プロジェクト 2008』大阪大学 5-21.
- , 2011. 「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『文化とレトリック認識 言語文化共同研究プロジェクト 2010』大阪大学 1-20.

- , 2019. 「英詩感情語メタファーの系譜第2回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.
- , 2021. 「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~”の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.
- , 2022. 「Shakespeareにおける時の擬人化のヴァリエーション：英国16～17世紀詞華集を基礎資料にしたTimeのepithetsとapostrophes再考」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、3-15.

日本語訳

- 松岡和子訳 1996. 『ハムレット シェイクスピア全集1』筑摩書房.
- 大場建治対訳・注解 2004. 『ハムレット 対訳・註解 研究社シェイクスピア選集』研究社

Hamlet 校訂注釈本

- Furness, Horae Howard, ed. 1963. *Hamlet: A New variorum Edition of Shakespeare*. Volume I. Dover Publications, Inc. New York.
- Gollancz, Israel, ed., 1919. *Shakespeare's Tragedy of Hamlet*. The Temple Shakespeare. London: J. M. Dent & Sons.
- , ed., 1900. *The Works of Shakespeare, Volume X. The Tragedy of Macbeth, The Tragedy of Hamlet, & The Tragedy of King Lear*. The Larger Temple Shakespeare. London: J. M. Dent & Sons.
- Jenkins, Harold, ed., 1982. *Hamlet*. The Arden Shakespeare. Methuen & Co, Ltd.
- Wilson, John Dover, ed., 1936. *Hamlet (The New Shakespeare)*. Cambridge: Cambridge University Press
- Blake, Norman, F., 1989. *The Language of Shakespeare*. The Language of Literature. Macmillan.
- Boehrer, Bruce, 2007. *In the Renaissance: A Cultural History of Animals*. Vol. 3. Berg.
- , 2002. *Shakespeare Among the Animals: Nature and Society in the Drama of Early Modern England*. (Early Modern Cultural Studies 1500–1700) Palgrave Macmillan.
- Cheney, David R., 1959. “The Meaning of the Cloud in Hamlet” *Shakespeare Quarterly*, Vol. 10, pp. 446-447.
- Deutermann, Allison K., 2011. ““Caviare to the general”? Taste, Hearing, and Genre in Hamlet” p. 245
- Frow, John, 2019. “On the Modifications of Clouds” *Sympleke: Lincoln* 27, 1-2, pp. 369-373. University of Nebraska Press. (p. 90-91 Camel)
- Garber, Marjorie, 2021. “As 'Twere; or Misrecognition,” *Raritan*; New Brunswick 41, 1: 96-120. Rutgers University.
- Goddard, Harold, 1951. *The Meaning of Shakespeare*. Chicago, pp. 357 and 374.
- Phipson, Emma, 2014. *The Animal-Lore of Shakespeare's Time Including Quadrupeds, Birds, Reptiles, Fish and Insects*. Cambridge University Press. (Digitally Printed Version of 1883)
- Raber Karen and Dugan, Holly, 2020. *The Routledge Handbook of Shakespeare and Animals* (Routledge Literature Handbooks) (English Edition)
- Raber, Karen and Edwards, Karen, 2022. *Shakespeare and Animals; A Dictionary*. The Arden Shakespeare.(pp. 90-91 Camel)
- Spurgeon, Caroline, F. E., 1966. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. Cambridge University Press.
- Trienens, Roger J., 1954. “The Symbolic Cloud in Hamlet,” *Shakespeare Quarterly*, Vol. 5, pp. 211-13.

電子版

- シェイクスピア大全 CD-ROM 版 2003. 新潮社
- Arden Shakespeare CD-ROM: Text and Sources for Shakespeare Studies. 1997. Thomas Nelson.
- OpenSource Shakespeare. (<https://www.opensourceshakespeare.org>)

翻訳手順の「補償」 —翻訳で失われたものを補うために—

村上スミス・アンドリュース

0. はじめに

伝統的な翻訳哲学や翻訳に関する一般的な言説では、二種類の翻訳方法が提唱されてきた。時代や提唱者によって呼び方が異なるが、つまり「直訳」と「意訳」に当たる訳し方である。これらは例えば、キケロの「直訳主義の解釈者のごとく」(“ut interpres”)と「演説者のごとく」(“ut orator”)、シュライアーマハーの「異化作用」(foreignizing)と「同化作用」(domesticating)の翻訳方法であり、テキスト全体の訳し方、あるいは翻訳者の翻訳に対する姿勢を示すものと考えられる。

一方、ミクロレベルの個々の語句や文に焦点を当て、原文(起点テキスト=source text, ST)の表現がどのようにして訳文(目標テキスト=target text, TT)として表れているかに着眼する「翻訳手順」(procedures)がある。ST と TT とで語の指示対象、品詞、語順、文法などが等しいか等しくないかで様々な手順を提唱し分類する理論である。この論文では、まず翻訳手順を概観して、手順の一つである「補償」(compensation)を詳しくみていき、文学作品の翻訳における補償の可能性について考える。

1. 翻訳手順について

伝統的な翻訳手順の分類として Vinay & Darbelnet (1958)がある。彼らはフランスの言語学者で、特に文体論が専門であり、語彙・文法の細かいところに着目した翻訳手順の分類を提唱した。翻訳の基本分類である「一般手順」といくつかの「韻律効果」がある。

1.1 翻訳の一般手順

まずは翻訳の「一般手順」を表1に示しておく。

翻訳手順	具体例	
1. 借用 (loan)	(仏) bulldozer (日) コンピュータ (英) manga	(英) fuselage (日) コンプライアンス (英) anime
2. 語義借用 (calque)	(仏) Compliments de la Saison (日) 11 年生 (英) Moon viewing	(英) Governor General (日) よい週末を (英) Representative Director
3. 直訳 (literal translation)	(仏) L'encre est sur la table. (日) 赤い風船 (日) 止まれ	↔ (英) The ink is on the table. ↔ (英) red balloon ↔ (英) Stop
4. 転位 (transposition)	(仏) Défense de fumer (日) 差出人 (日) 不合格だった	↔ (英) No smoking ↔ (英) From : ↔ (英) I failed
5. 調整 (modulation)	(仏) peu profond (日) 満室 (日) 年をとってきた私	↔ (英) shallow ↔ (英) No vacancies ↔ (英) I, who am older now
6. 対応 (correspondence)	(仏) comme un chien dans un jeu de quills (日) 猫に小判 (日) メートル	↔ (英) like a bull in a china shop ↔ (英) Pearls before swine ↔ (米) フィート
7. 適合 (adaptation)	(仏) Cyclisme (日) お帰りなさい (日) 夏祭り	↔ (英) cricket ↔ (米) baseball ↔ (米) Hi! ↔ (米) Fourth-of-July fireworks

表 1. Vinay & Darbelnet (1958)の一般手順

(Vinay & Darbelnet (1958); 英訳は Pym (2010); 例は Pym (2010)および筆者による)

Vinay & Darbelnet にとって望ましい翻訳とは、TT が目標言語 (target language = TL) 文化において自然に読まれる、つまり「同化作用」の働く翻訳であった。例えばまずは「直訳」で訳し、自然な訳が得られない場合は表1の上方(起点言語 (source language = SL) 寄り) または下方 (TL 寄

り)へ移動し、自然な訳が得られるまで手順を次々に試すことを想定していたようである。西欧言語、特にフランス語と英語を念頭においた分類のため、「直訳」の定義は厳密であり、STとTTとで品詞・語数・語順・語義がすべて同一で初めて「直訳」と分類されるようである。翻訳において品詞が変われば「転位」、「視点」が変われば「調整」になるなどと説明されている。(転位と調整の見分けが難しく、さらに英語と日本語のようなかけ離れた言語同士では「直訳」が珍しく転位や調整が非常に多くなるなど、Vinay & Darbelnet の分類を研究に応用するときに考慮しなければならない点がある。)

表1のさらに下方へ移動するとSTの語や表現をTTでは異なる語や表現に置き換える「対応」と「適合」がある。特に「適合」はSL文化のものをTL文化において同様の位置を占めるものに大胆に置き換える手順であり、議論が分かれる手順である。しかし、対応や適合と同じように「置き換える」手順である「補償」はVinay & Darbelnet の分類において表1にある「一般手順」ではなく、「韻律効果」に分類される。

1.2 韻律効果

韻律効果	具体例
・ 拡大化 (amplification)	(英) “the charge against him” > (仏) “l'accusation portée contre lui” [= the charge brought against him]
・ 縮小化 (reduction)	(仏) “Accès aux quais” [= access to the platforms] > (英) “To the trains”
・ 明示化 (explication)	(英) “queen of the South” (聖書ルカ伝) > (日) 「南の国の女王」 (英) “gun license” > (露) “udostovereniye na pravo nosheniya oruzhiya” [= license for right to carry weapon]
・ 暗示化 (implication)	(仏) “étudiantes de l'école St. Mary” > (英) “students of St. Mary's”
・ 一般化 (generalization)	(英) “mutton” [= 羊肉] > (仏) “mouton” [= 羊・羊肉] (日) 「弟」 > (英) “brother”
・ 特定化 (particularization)	(仏) “mouton” [= 羊・羊肉] > (英) “sheep” [= 羊] (英) “sister” > (日) 「姉」
・ 補償 (compensation)	(以下に示す)

表2. Vinay & Darbelnet (1958)の韻律効果

(Vinay & Darbelnet (1958); 英訳は Pym (2010); 例は
Pym (2010)、ペイカー&サルダーニャ (2013)および筆者による)

表2から分かるように、Vinay & Darbelnet の「韻律効果」は音韻とは無縁の文体的効果・レトリックの効果であるが、「韻律効果」というネーミングがやや謎めいていることが Pym (2016) に指摘されている(27)。しかし、下記2.1.1節で示すVinay & Darbelnet の「補償」の定義が音楽メタファーを用いており、彼らは翻訳行為を楽譜(ST)の演奏(TT)に例えていたかも知れない。

いずれにしても、「補償」は語や表現を置き換えてSTと同様の効果を上げる翻訳手順であり、置き換えることにより品詞や視点が変わったら転位や調整、文化的な置き換えがある場合は対応や適合に当たるため、独立した「一般手順」と分類せず「韻律効果」に分類されたようである。

1.3 Pym (2016)の分類

Pym (2016) はVinay & Darbelnet の分類およびその系譜を引き継いだ様々な翻訳手順分類、そしてVinay & Darbelnet と無縁の翻訳手順分類の系譜(ソビエト連邦や中国)を概観して、西欧言語のみならず世界の様々な言語に応用可能な翻訳手順分類を提唱する。日本語を例にとってVinay & Darbelnet の分類の非西欧言語への応用の可能性を追究し、例えば「直訳」のVinay & Darbelnet の狭隘な定義では、英和・和英翻訳は直訳が少なく転位や調整が極めて多くなると指摘する(190-191)。

しかし、「直訳」の定義を広げれば、直訳の概念が英和・和英翻訳にも応用可能だと言及する。つまり、直訳を“word-for-word”ではなく“chunk-for-chunk”(この場合のchunkはphraseに近い意味)と解釈すれば、英和・和英翻訳においても直訳はあり得ると考える。ただし、チャンクの順を変えることを可能とする。このような「chunk-for-chunk 直訳」の例を以下に示しておく。

(Russell Scheinberg; Pym (2016) (191)による)

ST: Venice is built on a number of sand islands.

TT: ベネチアはたくさんの砂地の島の上に建っている。

Venice = ベネチア a number of = たくさんの
is built = 建っている sand islands = 砂地の島
on = の上に

Pym (2016) の翻訳手順分類を表 3 に示す。

Copying (模写)	Copying Words (語彙模写)	Copying Sounds (音声模写) Copying Morphology (語形模写) Copying Script (標記模写) ...
	Copying Structure (構造模写)	Copying Prosodic Features (韻律要素模写) Copying Fixed Phrases (定型句模写) Copying Text Structure (テキスト構造模写) ...
Expression Change (表現変更)	Perspective Change (視点変更)	Changing Sentence Focus (文の焦点を変更) Changing Semantic Focus (意味論的焦点を変更) Changing Voice (変種・代名詞変更) ...
	Density Change (密度変更)	Generalization/Specification (拡大化・特定化) Explication/Implication (明示化・暗示化) Multiple Translation (多重翻訳・複数翻訳) Resegmentation (文構造変更) ...
	Compensation (補償)	New Level of Expression (表現レベルを変更) New Place in Text (テキスト内箇所変更) ...
	Cultural Correspondence (文化的対応)	Corresponding Idioms (対応する慣用句) Corresponding Culture-Specific Items (対応する文化固有物) ...
Content Change (内容変更)	Text Tailoring (テキスト編集)	Correction/Censorship/Updating (修正・検閲・更新) Omission of Content (内容削除) Addition of Content (内容追加) ...

表 3. Pym (2016)の翻訳解決策分類 (Pym (2016), 220; 日本語訳は筆者による)

ただし、Pym (2016) は「翻訳手順」(translation procedures)という用語を使わず “translation solutions” を採用している。翻訳過程において複数の訳し方が考えられる (「正」か「誤」のような二者択一ではない) 場合を “translation problem” (翻訳問題) と呼び、翻訳者が選んだ訳し方を “translation solution” (翻訳解決策) と呼んだ。

表 3 右側のそれぞれの翻訳解決策の例を表 4 に示す。

翻訳解決策	具体例・説明
Copying Sounds (音声模写)	(英) “football” > (西) “fútbol”
Copying Morphology (語形模写)	(英) “skyscraper” > (西) “rascacielos” [= 「空をひっかく」]
Copying Script (標記模写)	(英) “McDonald’s” を「マクドナルド」ではなく「McDonald’s」と表記する場合
Copying Prosodic Features (韻律要素模写)	(英) “The Price Is Right” > (独) “Der Preis ist heiß” [= “The price is hot”] (韻を踏む)
Copying Fixed Phrases (定型句模写)	(日)「猫に小判」を “Gold coins for a cat” と訳す場合
Copying Text Structure (テキスト構造模写)	一文を一文で訳す、一段落を一段落で訳す場合
Changing Sentence Focus (文の焦点を変更)	(英) “I see Mt. Fuji” > (日)「富士山が見える」
Changing Semantic Focus (意味論的焦点を変更)	(英) “No vacancies” > (仏) “Complet” [= “Full”]
Changing Voice (変種・代名詞変更)	(西) “nuestra economía” > (英) “the Spanish economy”
Generalization/Specification (拡大化・特定化)	「スシローやくら寿司」 > “conveyor-belt sushi restaurant chains”
Explication/Implication (明示化・暗示化)	「長い間端座の形を崩さずにいたので、努力しなければ立ち上がれなかった。」 > “The long hours of unrelieved kneeling had so paralyzed his legs that he could pick himself up only with a special effort.”

Multiple Translation (多重翻訳・複数翻訳)	“Gemeinde (German unit of local government)” (複数の翻訳解決策を顕在的に用いること “visibly applying more than one translation solution”)
Resegmentation (文構造変更)	ST の長い文を TT では複数の短い文に分割することなど
Compensation: New Level of Expression (表現レベルを変更)	(仏) “On se tutoie...” [= “We can use the intimate second-person pronoun...”] > (英) “My friends call me Bill...”
Compensation: New Place in Text (テキスト内箇所変更)	脚注、文末注などのパラテキストを含む
Corresponding Idioms (対応する慣用句)	(日) 「猫に小判」を “Pearls before swine” と訳す場合
Corresponding Culture-Specific Items (対応する文化固有物)	(仏) cyclisme ↔ (英) cricket ↔ (米) baseball
Correction/Censorship/Updating (修正・検閲・更新)	「北極がペンギン鳥を産み、印度が象を産み出す如く[略]」 > “Just as the South Pole gives rise to penguins and India to elephants...”
Omission of Content (内容削除)	『一千一夜物語』の訳は 1,001 編の物語を含んでいない等、TT の目的に合わせて内容を省略すること
Addition of Content (内容追加)	説明、注釈、語録、訳者あとがき等を付け加えること

表 4. Pym (2016) の翻訳解決策の具体例

(Pym (2016), 221-232; 例は Pym (2016) および筆者による)

表 4 にあるように、Pym (2016) は「補償」を二種類に分けており、下記 4 節で取り上げる Harvey (1995) の「補償」の細分化に似ている。

1.4 翻訳手順分類の意義

「補償」の定義や具体例を取り上げる前に、上述したような翻訳手順分類の意義について少し考えたい。まずは、このような分類は翻訳行為の認知的プロセスを把握するものではないと断っておきたい。つまり、「ヴィネイとダルベルネが比較しているのは、翻訳者がすると推定されるものの研究結果である [略] 翻訳者が実際にどのように起点から目標へ辿り着くかという軌跡には一切基づいていない」(ピム (2010), 24)。また、マンデイ (2009) が指摘するように、「ヴィネイとダルベルネは翻訳の『プロセス』を記述しようとしたが、彼らのモデルは実際には翻訳の『産物』に焦点を合わせている」。(マンデイ (2009), 106)

しかし、上で触れたような翻訳手順分類は教育上・研究上の意義はあると考えられる。Pym (2016) は次のように、提唱した分類は翻訳行為の認知的プロセスの解明にはならないと認めた上で、教育上の意義に言及している。“The typology does not purport to describe the actual cognitive process of translating translators. It should be judged successful only when trainee translators and interpreters are able to grasp the terms and use them to extend their initial conceptions of the translator’s task.” (Pym (2016), 233)

Harvey (1995) も「補償」に限定してその教育上の意義について次のように主張する。“compensation is first and foremost a technique available to translators engaged in the *process* of transferring meanings and effects across linguistic boundaries. Hence, its importance in translation pedagogy is possibly greater than its significance as a descriptive category in translation criticism.” (Harvey (1995), 66)

翻訳初心者は ST にあるものを全てそのまま翻訳する義務があると考えられるようで、直訳しがちだが、いろいろの翻訳手順を学ぶことにより、ST の個々の単語や表現に固着することなく、翻訳のエンドユーザである TT 読者とのコミュニケーションを図るためには、様々な翻訳方法が可能であることを認識させる効果があると考えられる。

上記の Harvey (1995) よりの引用にあるような「翻訳批評における記述的カテゴリーとしての意義」など、研究上も一定の意義はあると考えられる。分類の線引きが難しいが、手順一つに焦点を当て厳密に定義すれば ST と TT との比較、複数の TT の比較検討に役立つと考えられる。また、翻訳手順分類は等価理論、翻訳シフトなどの翻訳研究の基本的理論と密接に関わっている。

2. 補償 (compensation) について

2.1 「補償」の定義

まずは各研究者の「補償」の定義をみていく。

2.1.1 Vinay & Darbelnet (1958)の定義

“Procedure whereby the tenor of the whole piece is maintained by playing, in a stylistic detour, the note that could not be played in the same way and in the same place as in the source.”

(Vinay & Darbelnet (1958); 英訳は Pym (2010)による)

「原典と同じ方法及び同じ個所で演奏できないような旋律を、迂回するようなスタイルで演奏することによって、楽曲全体の主旋律が維持されるような手段」

(Vinay & Darbelnet (1958); 和訳は ピム (2010)による)

上記 1.2 節で触れたように、この定義では翻訳行為を音楽メタファーで捉えており、Vinay & Darbelnet のこのような考え方が「韻律効果」のネーミングにも影響したかも知れない。

Vinay & Darbelnet の定義では、「補償」がなされるところは「同じ個所」ではないことに注目したい。(Vinay & Darbelnet は同じ個所でなされる処理を他の翻訳手順として分類するであろう。)

2.1.2 Munday (2012)の定義

“Translation does inevitably involve some loss, since it is impossible to preserve all the ST nuances of meaning and structure in the TL. However, ... a TT may make up for (‘compensate’) this by introducing a gain at the same or another point in the text.” (Munday (2012), 89-90)

「起点テキストの意味や構成のすべてのニュアンスを目標テキストで維持することが不可能なので、翻訳は必然的に損失を伴う。しかし [略] 目標テキストは損失があった個所または別の個所での付加により、補う（補償する）ことができる場合がある。」

(和訳は筆者による)

Vinay & Darbelnet の「同じ個所でない」定義に対して、マンデイは「同じ個所または別の個所」でなされる処理を「補償」として定義する。

2.1.3 Harvey (1995)の定義

“a technique for making up for the loss of a source text effect by recreating a similar effect in the target text through means that are specific to the target language and/or the target text.”

(Harvey (1995), 66)

「ST の効果が失われた際に、目標言語や TT に固有の手段を使って、ST と同様の効果を TT の中に再現して埋め合わせる技法」 (ベイカー&サルダーニャ編 (2013), 244)

Harvey の定義は、「埋め合わせる」個所は特定しない定義になっている。

3. 補償の具体例（先行研究より）

次に先行研究が挙げる補償の具体例を示しておく。

“French must choose between intimate and formal second-person pronouns (*tu* or *vous*); contemporary English cannot. To render the distinction... the translator might opt for a switch from the family name to the given name, or to a nickname, as in ‘My friends call me Bill,’ to render ‘*On se tutoie...*’ (meaning, ‘We can use the intimate second-person pronoun...’).” (Pym (2010), 15-16)

「フランス語では、二人称単数で親称 ‘tu’ か 敬称 ‘vous’ を選ばなければならないが、現代英語ではそれはできない。この区別を訳出するために、[略] ‘On se tutoie’（「私たちは君僕で話す」という意味）の訳として、‘My friends call me Bill’のように翻訳者が名字をファーストネームあるいはニックネームに代える選択をするかもしれない。」

(ピム (2010), 27)

Munday (2012) も同じフランス語人称代名詞を例に取り上げ、異なる対処法を提示する。

“One example is the translation of dialogue: if the SL is a t/v language and shows a switch from formal to informal address (...French *vous* to *tu*), English will need to find a compensatory way of rendering this, perhaps by switching from the use of the character's given name (e.g. Professor Newmark > Peter).” (Munday (2012), 90)

日本語の人称代名詞は親称／敬称の二通りのみならず様々なバリエーションがあり、和英・英和翻訳の場合は Pym の例にあるような工夫が翻訳者に求められる。Hasegawa (2012)もこのようなことを取り上げて補償について説明している。

“When some information is lost in one place in a translation, it can be compensated for at some other place. For example, a Japanese utterance using the addressee's name with *-chan* might be rendered in English by an informal speech style and/or the use of a nickname.” (Hasegawa (2012), 180)

上記の Pym (2010)、Munday (2012)、Hasegawa (2012) の具体例はいずれも「補償」を説明するためのものであるけれど、次に、実際の翻訳において補償を検証する Harvey (1995)より、補償の具体例をいくつか取り上げる。

“‘*Suivez mes Thraces! Suivez mes Thraces!*’
(Literally: ‘Follow my Thracians! Follow my Thracians!’, with a pun on the expression *suivez mes traces*, or follow in my footsteps.)
The target text translates this by using its own pun:
‘Heavy-duty nimble Hoplites!’
The humorous effect of the source text is lost and then recreated by different means in the target text (Hoplites and its homophone lights contrasting paradoxically with Heavy-duty).” (Harvey (1995), 67)

この例について、ST（漫画の『アステリックス』）ではフランス語の *Thraces* と *traces* の音の近さに拠るダジャレの効果を、TT では重い (Heavy[-duty])／軽い (Hoplite [=light]) のコントラストによる効果に置き替えていると説明されている。（さらに言えば、TT にある “nimble”（敏捷な）が “hop”（跳ぶ）とともに軽いイメージに貢献していると思われる。）

“‘*Aber mit seiner Chaussure, hore mal, da steht es scheusslich.*’
(Literally: ‘But with his shoe, listen, there it stands hideously.’)
‘*Maar zijn schoeisel, zeg, dat is affreus.*’
The French word ‘*Chaussure*’ makes this sentence sound pretentious.
In Dutch the word ‘*chaussure*’ for shoes, footwear, is never used, not even by the most affectedly speaking people. The Dutch translator has therefore opted for the more neutral ‘*schoeisel*’ (footwear) and has inserted the French element elsewhere in the sentence by translating ‘*scheusslich*’ (awful) by ‘*affreus*’, a French word (*affreux* = hideous) which is used in Dutch and does have the affectedness that is called for by the SL text...” (Langeveld (1988), quoted in Harvey (1995), 80)

この例では、ST（ドイツ語）が「靴」に当たるフランス語（からの借用語）を会話に取り入れることにより、気取った、上品ぶった雰囲気を出しているが、TL であるオランダ語では、「靴」のフランス語をどんな気取った人でも会話に用いないため、代わりに借用語として使用可能な「ひどく醜い」に当たるフランス語を会話に用い、ST 同様の気取った、上品ぶった雰囲気を出している、と説明されている。

4. Harvey (1995)の記述的枠組み

Harvey (1995) は上記 1.4 節で触れたように、補償の教育上の意義を指摘している。それまでの

翻訳研究では「補償」が厳密に定義されず (“poorly defined”)、実際のテキストからの具体例が少ないと指摘し、“compensation is the procedure which in the last resort ensures that translation is possible” (「補償は翻訳が最終的に可能であることを担保する手順である」) との Peter Newmark の言葉を引用して補償の重要性を訴え、補償の記述的枠組み (descriptive framework) を提唱する。

Harvey (1995)はまず “...one of the central problems we face is establishing what does or does not count as an instance of compensation” (77)と、補償の判別の問題について言及する。「直訳から逸脱する翻訳手順」 (“non-literal translation procedures”) がすべて補償であるということは勿論なく、「単なる文法的転位の例」 (“straightforward instances of grammatical transposition”) や対応する単語の欠如による言い換え、さらには「文化的置き換え」 (“cultural substitution” = Vinay & Darbelnet の「適合」) と補償との区別が重要であると指摘する。

このような補償の区別の問題が補償の記述的枠組みが捉えなければならない問題の一つであり、もう一つは ST と TT の関連する個所の対応関係に関する問題である。Harvey が提唱する記述的枠組み (descriptive framework) は以下の三つの軸で補償を捉えようとする。(Harvey (1995), 78)

- (1) 類型論的軸 (typological axis) - 補償かどうかを決定する基準に関わる
- (2) 対応的軸 (correspondence axis) - ST の言語手段と TT の言語手段の対応関係に関わる
- (3) 位置的軸 (topographical axis) - ST の損失のあった個所と TT の補償の個所との距離に関わる

類型論的軸について、Harvey は以下の二種類の補償を提唱する。(78)

- (1-1) 「文体的補償」 (stylistic compensation) とは、補償の効果が ST・TT のテキスト特有のもので、そのテキストの文体・雰囲気・変種へ独自の貢献する場合である。
- (1-2) 「文体・体系的補償」 (stylistic-systemic compensation) とは、補償の効果が SL・TL の習慣化された言語体系的資源を用いている場合である。

対応的軸で、ST と TT がそれぞれ用いる言語手段について、以下の三種類の対応関係があるという。(79-81)

- (2-1) 直接的対応 (direct correspondence) とは、ST で効果を上げるのに用いられた言語的工夫と同類の言語的工夫が TT でも用いられている場合である。
- (2-2) 類推的対応 (analogical correspondence) とは、ST が用いた工夫と TT の用いた工夫は同類ではないが、同じ言語的レパートリーを用いる場合である。
- (2-3) 非対応 (non-correspondence) とは、ST の用いた工夫と TT の用いた工夫とでは言語的な共通性がない場合である。

そして位置的軸では、ST が効果を上げている個所と TT が効果を上げている個所との関係について三種類の位置関係がある。(82-84)

- (3-1) 並列関係 (parallel relationship) - ST と TT とで、効果が上がる個所は同一である場合 (“the compensation occurs at exactly the same place in the target text as the effect that has been lost in the source text.”) (Harvey (1995), 82)
- (3-2) 近接関係 (contiguous relationship) - ST において効果が上がる個所と TT において効果の上がる個所が近接している場合 (“the compensation occurs in the target text within a short distance from the lost effect of the source text.”) (Harvey (1995), 82)
- (3-3) 遠隔関係 (displaced relationship) - ST において効果が上がる個所と TT において効果の上がる個所との距離が長い場合 (“the instance of compensation in the target text is a long distance from the source text loss.”) (Harvey (1995), 83)
- (3-4) 一般化補償 (generalized compensation) - TT には ST とほぼ同じ数量・質の効果を目的とする文体的工夫が含まれるが、それらが ST の特定の損失個所と結びつかない場合 (“the target text includes stylistic features ... that aim to achieve a comparable number and quality of effects, without these being tied to any specific instances of source text loss.”) (Harvey (1995), 84)

補償は翻訳者の自由と創造性を増す翻訳手順であるが、Harvey (1995) が提唱する「一般化補償」が特に翻訳者の創造性を解放してくれると考えられる。下記 6 節で取り上げることにする。

5. 補償の具体例の検証（文学作品の翻訳より）

次に文学作品の翻訳における補償の具体例を取り上げて検証する。5.1 節では英米文学作品の日本語訳より例を取り上げ、5.2 節では日本文学作品の英訳より例を取り上げる。

5.1 補償の具体例の検証（英米文学作品の日本語訳より）

5.1.1 Raymond Chandler, *The Long Goodbye* の日本語訳

【原文】

“The valley had a thick layer of smog nuzzling down on it. ...
‘My God, I thought Southern California had a climate,’ he said. ‘What are they doing, burning old truck tires?’
‘It’ll be all right in Idle Valley,’ I told him soothingly. ‘They **get** an ocean breeze in there.’
‘I’m glad they **get** something besides drunk,’ he said.” (Chandler (1953/1992), 296)

この例では、話者 B が話者 A が用いた “get” を繰り返すことにより、ちょっとした言葉遊びを会話に取り入れている。よって、談話における結束性がうまれる。些細の効果ではあるけれど、できれば工夫して TT にも同様の効果がでるように訳したいところである。

【清水訳】

「スモッグがそのへん一帯におおいかぶさっていた。[略]
『まったく驚きましたね。私は南カリフォルニアは気候のいいところと聞いていた』と、彼はいった。『いったい、どうしようというんでしょう——トラックのタイヤを焼こうというんですか？』
『アイドル・ヴァレーはこんなに暑くはないんです』と、私は彼を慰めていった。『海から風が吹いてくるんです』
『酔っぱらいだけでなく、風も吹くんですか？』と、彼はいった。」
(チャンドラー『長いお別れ』清水俊二訳、411)

【田口訳】

「スモッグがぶ厚い層となってヴァレーにその鼻先を突っ込んでいた。[略]
『まったく。南カリフォルニアというのは気候がいいところだと思っていたよ。いったい何をしてるんだ？誰かがトラックの古タイヤでも燃やしてるのか？』
『アイドル・ヴァレーにはいればスモッグはなくなる』と私は彼をなだめて言った。『あそこは海風がふくから』
『アイドル・ヴァレーには酔っぱらいがいるだけじゃなくて、ほかにも何かあることがわかって嬉しいかぎりだ』と彼は言った。」
(チャンドラー『長い別れ』田口俊樹訳、448)

【村上訳】

「ヴァレーには、まるで鼻先を地面につけるみたいにスモッグが重く厚く垂れ込めていた。[略]
『なんてことだ。南カリフォルニアは気候がいいというのが通り相場じゃないか』と彼は言った。
『いったい何が起きている？古タイヤでも燃やしているのかね？』
『アイドル・ヴァレーは問題ありません』と私は有めた。『あそこは海風に恵まれていますから』
『酔っぱらい以外にも恵まれたものがあそこにあるとわかってなによりだ』と彼は言った。」
(チャンドラー『ロング・グッドバイ』村上春樹訳、411)

清水訳、田口訳とも “get” の繰り返しを無視し、意味のみを訳している。これらに対して、村上訳では「恵まれて」「恵まれた」と訳すことにより ST 同様、談話の結束性を実現していると言える。

5.1.2 Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* の日本語訳より

Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* や *Through the Looking-Glass* は、周知のとおり、様々なダジャレや言葉遊びを含んでおり、日本語へ訳すとき、同様の効果を上げようと努めるなら工夫が必要になる。第9章 The Mock Turtle's Story と第10章 The Lobster-Quadrille より例をいくつか挙げて、四通りの和訳での翻訳の仕方をみていく。

5.1.2.1 “We called him Tortoise because he taught us”

“‘When we were little,’ the Mock Turtle went on... ‘we went to school in the sea. The master was an old Turtle -- we used to call him Tortoise ---’

‘Why did you call him Tortoise, if he wasn’t one?’ Alice asked.

‘We called him Tortoise because he taught us,’ said the Mock Turtle angrily. ‘Really you are very dull!’”

(Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*, 83)

これはイギリス英語の発音が根拠にあるダジャレである。稲木・沖田 (2015) によると「イギリス英語の方言では、母音の後の r 音は、その後に子音が続くとき発音されないのので、[tɔ:təs] と発音される。これは丁度 taught us を発音するのと同じになる。」(稲木・沖田 (2015), 146)

【田中訳】

『わたしたちが子どもの時分には、』と、にせ海ガメはどうとうつづきを話しました。[略]『海の底の学校へいったものです。先生は年よりの海ガメで—わたしたちは正覚坊（しょうがくぼう）先生（正覚坊は海ガメの一種）と言っていました。』

『正覚坊じゃないのに、なぜそう言うの？』と、アリスがたずねました。

『小学校の先生だから正覚坊先生と言ったんだよ。』と、にせ海ガメは怒って言いました。『ほんとうにおまえさんは頭がにぶいね。』（『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、153）

【柳瀬訳】

『わしらが子供の時分は』と、海亀フーがやっと先をつづけた。[略]『海んなかで学校へ通ったもんだ。先生は年寄の海亀だったが—みなして地亀（ちかめ）先生と呼んどったよ—』

『どうして地亀先生なの、海亀なのに？』アリスは尋ねた。

『先生ってのは、たいてい近目（ちかめ）に決まっとるじゃないか』海亀フーは怒ったようにいった。『まったくもって鈍い子じゃな！』（『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳、133）

【矢川訳】

『ぼくたち、子供の頃には、海の中の学校へかよってたんだ』ウミガメモドキはやっとまたしゃべりだした。[略]『先生は年とったウミガメだったけど、ぼくたちゼニガメってよんだ』

『どうしてゼニガメなんてよんだの、ほんとうはそうじゃないのに』アリスが口をだす。

『だってゼにかねとって勉強教えるじゃないか』ウミガメモドキはぷりぷりして、『まったくもう、なんてとろいんだ！』（『不思議の国のアリス』矢川澄子訳、131）

【河合訳】

『小さかったころ、』ついに海ガメもどきが[略]続けました。『海の学校に通っていたんだ。先生は年寄りの海ガメだったけど、茶々（ちゃちゃ）と呼ばれていた—』

『どうして海ガメなのに茶々と呼ばれていたの？』アリスはたずねました。

『先生はティーチャだろ。ティーとは茶のことだ。だから茶々じゃないか。』海ガメもどきは怒って言いました。『まったく君はにぶいなあ！』（『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、128）

四通りの日本語訳がそれぞれ工夫して何とか面白おかしく訳そうとしているが、どれも ST が効果を上げていたのと同じ個所で効果を上げようとしていることに注目したい。Vinay & Darbelnet（上記 2.1.1 節参照）等、伝統的な「補償」の定義が定める、ST と「同じでない個所」よりも、Munday (2012) や Harvey (1995) など、効果を上げる個所を限定しない定義がこの例では翻訳の実

情に合っていると考えられる。

河合訳の訳し方がやや飛躍するようと思われるかも知れないが、下記6節で触れるように、上記引用の後続する部分では更なる工夫がある。

5.1.2.2 “That’s the reason they’re called lessons: because they lessen from day to day.”

“‘And how many hours a day did you do lessons?’ said Alice...

‘Ten hours the first day,’ said the Mock Turtle: ‘nine the next, and so on.’

‘What a curious plan!’ exclaimed Alice.

‘That’s the reason they’re called lessons,’ the Gryphon remarked: ‘because they lessen from day to day.’”

(Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland*, 85)

これは“lesson”と“lessen”の発音が同一もしくは近似していることに拠るダジャレである。

【田中訳】

『で、毎日おけいこは、いく時間あったの?』アリスは、いそいで話題を変えようとして言いました。

『最初の日は十時間。』と、にせ海ガメが言いました。『つぎの日は九時間、といったやり方さ。』

『ずいぶんきみょうなやり方なのね。』と、アリスはさげびました。

『一日一日少なくなっていくからね、だから少学校と言うんだよ。』とグリフォンが説明しました。」

(『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、158-159)

【柳瀬訳】

『それで、一日に何時限あったんですか?』アリスは急いで話題を変えた。

『最初の日は十時限』海亀フーがいった。『あくる日は九時限、そんなぐあいに減っていく』

『変わった時間割なこと!』アリスはいった。

『だからこそ時限というんだろ』グリフォンがいった。『毎日、時間が減(げん)ずるから時減(じげん)』というわけだ』

(『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳、136)

【矢川訳】

「アリスは話題をかえようと、おおいそぎで、

『授業は一日何時間?』

『はじめの日は十時間、つぎの日は九時間って、だんだんへってくの』

『へんな時間割!』アリスが思わずいうと、

『そりゃお勉強だもの、少しずつおまけしますってわけさ』とグリフォンの説明だ。」

(『不思議の国のアリス』矢川澄子訳、135)

【河合訳】

『それで、毎日何時間の授業があったの?』急いで話題を変えようとしてアリスは言いました。

『最初の日は十時間』と海ガメもどき。『次の日は九時間、といった具合さ。』

『へんてこりんな時間割ね!』アリスはさげびました。

『だから、時間割っていうんじゃないか。』グリフォンが言いました。『なんとか割(わり)って
いうのは、少し減らしてくれることをいうんだよ。』

(『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、132)

この例でもそれぞれの和訳が工夫して訳しているが、矢川訳は「勉強」＝「利益を無視して、商品を安く売ること」(新明解国語辞典)という表現を用いた工夫である。

5.1.2.3 “No wise fish would go anywhere without a porpoise”

“‘No wise fish would go anywhere without a porpoise.’

‘Wouldn’t it, really?’ said Alice, in a tone of great surprise.

‘Of course not,’ said the Mock Turtle. ‘Why, if a fish came to *me*, and told me he was going on a journey, I should say ‘With what porpoise?’

‘Don't you mean “purpose”?’ said Alice.

‘I mean what I say,’ the Mock Turtle replied, in an offended tone.”

(Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*, 90-91)

この例でも、“porpoise”と“purpose”の発音の類似をベースにしたダジャレである。

【田中訳】

『りこうな魚はみな、どこへいくにもイルカを連れていくんだ。』

『まあ、ほんとう？』アリスは、たいへんびっくりしたように言いました。

『もちろんさ。だって、もし魚がわたしのところへ来て、これから旅行に出かけますと言うときには、わたしは、「おともはイルカ」と言うからね。』

『「おともは居るか」という意味じゃないの？』

『今言った通りだよ。』にせ海ガメが怒ったように言いました。」

(『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、169)

【柳瀬訳】

『賢い魚なら海豚を連れずにはどこへもいかんね』

『えっ、ほんとうに？』アリスはとても驚いた調子でいった。

『もちろんだとも』海亀フーはいった。『よいかな、もしどこかの魚がわしのところへやってきて、これから旅に出るといったなら、わしはこういう。「どこの海豚？」とな』

『「どこにいるか」でしょ？』アリスはいった。

『わしのいうことにけちをつけるのか』海亀フーは機嫌をそこねた口調で答えた。」

(『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳、145)

【矢川訳】

『かしこい魚はイルカなしじゃあどこへも行かないぜ』

『ええっ、ほんとう？』アリスはびっくり仰天だ。

『そりゃそうだよ。なんか魚がぼくどこへきて、これから旅にでますっていったらば、ぼくとしちゃ、〈どこイルカ〉ってきくやねえ。』

『〈どこ行くか〉ってことじゃない？』とアリス。

『ぼくのいったとおりだって』ウミガメモドキはむっとしたらしい。」

(『不思議の国のアリス』矢川澄子訳、143)

【河合訳】

『かしこい魚なら、イルカなしにどこにも行きやしないよ。』

『本当？』アリスはたいへんおどろいた口調で言いました。

『もちろんさ』と海ガメもどき。『だって、もしどこかの魚が来て、旅に出るって言ったら、「どちらの、まあ、イルカちゃんと？」って聞くもの。』

『そうなの？』

『「どちらのう、まあいるか」ってちゃんと。』

『ひょっとして、「どちらへまいるか？」ってちゃんと聞くってこと？』

『今言ったとおりの意味です。』海ガメもどきはむっとして答えました。」

(『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、139)

この例では、田中訳の工夫は表記（カタカナ・漢字）に拠るもので、登場人物が会話をしていることを考慮すればやや不適切な訳し方と考えられる。また、河合訳の工夫ではやや理解しにくく、問題の表現「どちらのう、まあいるか」STよりも一回多く繰り返している。なお、稲木・沖田 (2015)がSTのこのダジャレを説明するために用いられる日本語訳は簡潔で分かりやすいため、ここに提示しておく。

【稲木・沖田訳】

『魚が私のところへ来て、旅に出ると言ってきたら「用がイルカ」と聞くもの』。

思わずアリスが『それを言うなら、「用があるか」じゃないの』と、[略] 突っ込みを入れる [略]

(稲木・沖田 (2015)、156)

5.1.2.4 海の学校の授業科目

Alice's Adventures in Wonderland 第9章 The Mock Turtle's Story はダジャレ・言葉遊びが特に多い箇所であり、中でもニセ海亀が通ったという「海の学校」の授業科目名がすべてダジャレで、圧巻である。表5の1列目に示す科目名がどれもイギリスの学校の科目名をもじっており、それぞれの和訳の訳し方が表5に示すとおりである。

海の学校	イギリスの学校	田中訳	柳瀬訳	矢川訳	河合訳
(1) Reeling	Reading (読み方)	よろけ方	海用感字の読み方	酔いかた	もみ肩 (かた)
(2) Writhing	Writing (書き方)	もがき方	海用感字の書き方	掻き方	掻 (か) き肩 (かた)
(3) Ambition	Addition (足し算)	大志算 (だいしざん)	海程式 (かいていしき)	大志 (タシ) 算	めでたし算
(4) Distraction	Subtraction (引き算)	変気算 (へんきざん)	釣亀算 (つりかめざん)	鼻肩 (ヒキ) 算	かぜひき算
(5) Uglification	Multiplication (掛け算)	美欠算 (びかけざん)	因数分海	見せカケ算	かびかび ぶっかけ算
(6) Derision	Division (割り算)	笑い算	侮数計算 (ぶすうけいさん)	よワリ算	わりいわりい算
(7) Mystery	History (歴史)	溺死	礫史 (れきし)	霊奇史	おせっかい史
(8) Seaography	Geography (地理)	水理	海理学	汐理学 (シオグ ラフィ)	海理 (かいり)
(9) Drawling	Drawing (線描画)	のろのろ体操	貝画 (かいが)	海画 衰彩画	デッぷり おっサン
(10) Stretching	Sketching (写生画)	あくびの仕方	蛤作 (こうさく)	遊彩画	写 (しゃ) らく 生 (せい)
(11) Fainting in Coils	Painting in Oils (油彩画)	とぐろを巻いて 気絶する方法	捻努細工 (ねんどざいく)	腺病画 (センビ ョウガ)	天ぷら油絵
(12) Laughing	Latin (ラテン語)	へそで茶を わかす法	悲事記 (ひじき) や 万陽集 (まんようしゅう)	楽天 (ラテン) 語	チンブン漢文
(13) Grief	Greek (ギリシャ語)	べそのかき方		義理者 (ギリシャ) 語	

表5. 海の学校の教科の訳し方

(Carroll (1865/1998) 85、Carroll (1865/1998) 317、キャロル(1955/1985) 156-158、
キャロル(1987) 135-136、キャロル(1994) 134-135、キャロル(2010) 130-132 による)

日本語訳には、ST の海や海洋生物の動き方に関連するネーミングに倣って日本語訳を作成したものもあれば、独自の発想で訳しているものもある。特に柳瀬訳や河合訳では国語や日本史を意識した工夫が施されている。また、河合訳の (8) Seaography を「地理」に倣って「海理」と訳したのち、「先生は海狸 (かいり)、つまりビーバーだった」と続き、上記 5.2.1.2 節でみたように、テキスト全体を面白おかしく訳す努力が感じられる。

5.2 補償の具体例の検証 (日本文学作品の英訳より)

次に日本文学作品の英訳より例を取り上げて検証する。

5.2.1 永井荷風『瀟東綺譚』の英訳より

5.2.1.1 候文と東京下町言葉

「[略] 虫干しをしていた物の中に、柳橋の妓 (ぎ) にして、向嶋小梅の里に囲われていた女の古

い手紙を見た。手紙には必ず「候文」（そうろうぶん）を用いなければならなかった時代なので、その頃の女は硯を引き寄せて筆を乗れば（とれば）、文字を知らなくとも、おのずから候べく候の調子を思い出したものらしい。[略]
文中『ひき移り』を『しき移り』となし、『ひる前』を『しる前』に書き誤っているのは「東京下町言葉の訛り」である。」（永井荷風『墨東綺譚』80-81）

この例では「候文」と「東京下町言葉」という、それぞれ書き言葉と話し言葉の日本語の変種を指し示す語の訳し方に着目したい。

【Anderson 訳】

“... when airing out my books, I’d come across an old letter from a geisha trained at Yanagibashi. She was in Koume then. Those were times when a certain degree of formality was expected in a letter, and despite perhaps not always knowing proper spellings, when she took up brush and ink she saw to it that her letter was true to form. ...
Many sentences carry distinct traces of a downtown woman’s speech pattern.”
(*Something Strange Across the River*, tr. Glenn Anderson, 83-84)

【Seidensticker 訳】

“... airing my books, I had come upon an old letter from a graduate of the Yanagibashi geisha quarter who was being kept in Koume, across the river. In those days a certain formality was required in the writing of letters, and even if she did not know how to spell properly, a woman would remember the forms when she reached for her ink and brush. ...
Certain passages, it will be noted, carry traces of the woman’s downtown speech.”
(“A Strange Tale from East of the River,” tr. Edward Seidensticker, 133)

どちらの訳も「候文」を「丁寧な言葉」として置き換えており、候文の「手紙に適した書き方」というニュアンスを表していると言えるけれど、「古めかしい」ニュアンスが脱落している。また、どちらの訳も「下町言葉」を“downtown speech”としており、「下町」と“downtown”のずれを感じさせてしまう。¹

さらに、どちらの訳も“woman’s downtown speech”と訳しており、ST にない、一種の性差別が TT に付け加えられていることも指摘しておきたい。さらに、Seidensticker 訳では、“the woman’s downtown speech”となっており、東京下町で広く用いられている地域言語ではなく、特定の登場人物の描写に結びついてしまっている。

5.2.1.2 古い手紙

前節で取り上げた「古い手紙」の文面は次のとおりである。

『一筆（ひとふで）申上まゐらせ候。その後は御ぶさた致し候て、何とも申わけ無之（これなく）御免下されたく候。私事（わたくしこと）これまでの住居（すまい）誠に手ぜまに付（つき）この中（じゅう）右のところへしき移り候まま御（おん）知らせ申上候。まことにまことに申上かね候へども、少々お目もじの上申上たき事御ざ候間、何とぞ御都合なし下されて、あなた様のよろしき折御立（おたち）より下されたく幾重にも御待（おんまち）申上候。一日も早く御越しのほど、先は御めもじの上にてあらあらかしく。』

竹屋の渡しの下にみやこ湯と申す湯屋あり。八百屋でお聞下さい。天氣がよろしく候故御都合にて啞々（ああ）さんもお誘ひ合され堀切へ参りたくと存（ぞんじ）候間御しる前からいかがに候や。御たづね申上候。尤（もつとも）この御返事御無用にて候。』

（永井荷風『墨東綺譚』80-81）

¹ ちなみに、林芙美子の短編である「下町（ダウントウン）」の英訳のタイトルは、Ivan Morris 訳が “Downtown” としているのに対して、Lawrence Rogers 訳は “The Old Part of Town” にしており、「下町／downtown」のずれを回避していると考えられる。

【Anderson 訳】

“Please do understand that I wished to write you a letter. The duration of my silence has been far too long. I know it to be so and I am sorry. I also wish to inform you that I have moved to new quarters, as the state of my former rooms was in disarray. There is a matter that is difficult for me to give expression to in writing, but I simply must discuss it with you. At a time of your own convenience, do pay me a visit. I shall be waiting. Pardon the brevity of this letter. I am in a terrible hurry. I will tell you all of it when I see you. Please do hurry.

‘Down by the ferry you will discover a boathouse. Ask the boy working there. The weather has been so nice lately, you might invite Aa to accompany you as well. It would be wonderful if the three of us could go to Horikiri. Would it be easiest to make the trip in the morning? Pardon all these questions. Respond only if you feel inclined.’” (*Something Strange Across the River*, tr. Glenn Anderson, 83-84)

【Seidensticker 訳】

“Please be advised that I wish to write you a letter. My silence has been of long duration. I’m very sorry, I really am. I wish you to be advised further that I have moved to new quarters, for the ones but recently mine were a mess. It is a matter difficult to give expression to, but there’s something I got to talk over with you. I shall be waiting, at your convenience, whenever you choose to call. You must excuse the brevity of this note. I’m in an awful hurry. I’ll give you the whole lowdown when I see you. Make it quick.

‘You will come upon a boathouse, by over there where the ferry is. Ask the grocery boy there. The weather these days being of a rare order, you might invite Aa to accompany you. I’d love to go to Horikiri with the both of you. Would the morning hours be convenient? This is the question I would ask of you. No need for an answer if you don’t feel like it.’”

(“A Strange Tale from East of the River,” tr. Edward Seidensticker, 133)

両英訳を比較して、候文に当たる「丁寧な言葉」だと思われる表現（網掛け）、「東京下町言葉」に当たるとされる口語的な表現（二重下線）とも、Seidensticker 訳が多く、訳に工夫の跡が感じられる。ただし、“downtown speech”の訳し方に関して、どちらの訳も特定の地域や街ではなく、広く一般的に使われている（アメリカ）英語の口語的表現を訳に取り入れているため、ST との大きなずれを感じるように思われる。

5.2.2 谷崎潤一郎『細雪』の英訳より

次に東京の上品な山の手言葉だと思われる例を取り上げ、その英訳の仕方をみる。

『[略] 失礼でございますけれど、相良さんはどちらにお住まいでいらっしゃいますの』『北鎌倉なんですよ。でもわたくし、去年帰って参りまして、その家に一二箇月おりましたけ
なんであんですけど』
この『……なんであんですけど』というところが、『ざあます』とも違う一種不思議な言い方で、幸子は自分には真似もできないが [略]” (谷崎潤一郎『細雪』166)

“... And where do you live, Mrs. Sagara?”

‘North Kamakura. But I came back from abroad only last year, and I’ve been there only a month or two.’
There are many strange ways of pronouncing ‘been,’ but Mrs. Sagara had an affectation all her own. Sachiko could not possibly have imitated it.” (*The Makioka Sisters*, tr. Edward G. Seidensticker, 95-96)

TT では、ST の「なんであんですけど」を “been” に置き換えている。訳者がこの言葉の二通りの発音/bi:n/と/bm/を念頭にこのように訳したと思われるが、相良夫人の発音の仕方に “affectation”（上品ぶったところ）があるという情報を TT に付け加えている。

5.2.3 織田作之助「大阪・大阪」の英訳より

『[略]いくら大阪の善悪についてことごとく論じてみたところで、近松の浄瑠璃の文句にある『なにが善やらあくびやら』と、私はつい白々しい想にとらわれてしまうのである。ここらが、私の大阪人であるゆえんだろうか。』 (織田作之助「大阪・大阪」)

“And what is more, to propound upon all the virtues and vices of Osaka would just leave me with a feeling of hollowness, like the line in Chikamatsu’s puppet play: ‘Too tiresome to say what is virtue and what is vice.’ This feeling marks me as an Osakan.”
 (“Osaka, Osaka,” tr. Murakami-Smith)

これは筆者が英訳した織田作之助のエッセイである。近松の浄瑠璃からの引用である「なにが善やらあくびやら」は「悪（あく）／あくび」にかかる言葉遊びである。筆者が訳すにあたり、同じような効果を上げる訳が思いつかなかったため、説明的に訳し、さらにはSTに言葉遊びがあったことを示すために次の注を付けた。「なにが善やらあくびやら A play on words that hinges on the similarity of sound of *aku* (evil) and *akubi* (yawn).」したがって、この例は補償が実現できなかった例として挙げる。

5.2.4 織田作之助「アド・バルーン」の英訳より

「腫物の神さんの石切の下の百姓に預けられた [略] その百姓家のおばはん、ものの十日もたたん内にチビスにかかりよった。なんぼ石切さんが腫物の神さんでも、チビスは専門違いや、ハタケは癒せても、チビスの方はハタケ違いや。」
（織田作之助「アド・バルーン」）

このSTは「ハタケ（疥）」（「顔のうぶ毛の生えぎわに、白い粉をふいたような点点の出来る皮膚病」= 新明解国語辞典）と「畑」という同音の単語に拠るダジャレを含む。なお、「チビス（チフス）」(typhus) は「高熱や発疹を伴う細菌感染症の一種」（ウィキペディア「チフス」）、つまり皮膚病ではない重病である。筆者がこのSTを英訳するにあたり、次のように訳してみた。

“...left in the care of a farmer living below the Ishikiri Shrine, whose god is supposed to be good against rashes and boils... the wife of that farmer came down with typhus not 10 days after I arrived. The god of Ishikiri’s good against boils and rashes, but typhus was a rash of a different color.”
 (“Ad Balloon,” tr. Murakami-Smith)

この英訳は「畑違い」に似た英語表現 “Horse of a different color” (“a very different thing or issue” = merriam-webster.com) をもじって、“rash of a different color” を採用してSTと似た効果を狙ったものである。

5.2.5 宇野浩二「十軒路地」の英訳より

「[行燈（あんどん）の] 正面の一侧にだけ、[略]『ちよと一ぱい』と認めてあつた。この『ちよと一ぱい』の読み方について、いつか宇三吉と議論したことがある。『ちよと』はをかしい、『ちよっと』でなければ間違ひだといふのと、『ちよと』といふのは早口に『ちよと』一ぱいといふ意味だらうから、かまはないといふ二つの説だつた。そんなことをいひながら、『ちよと一ぱい』が多分酒のことだらうが、どうしてそんな事を書くのだらう、酒屋にしてはをかしいし、などと考へた程度の私たちは少年だつたのだ。[略] 今考へると、これは大阪の所調待合といふやつに違ひなかつた。私たちがもう少し年を取つてゐたなら、色んな男女が出入りをするのを見つけたのに違ひないのだが。」
（宇野浩二「十軒路地」）

この短編には、行燈（「四角な木の枠に紙を張り、中に油受けを置いて火をともしたもの」= 新明解国語辞典）の側面に「ちよと一ぱい」と書かれているのを少年たちが不思議がって解釈を試みている。筆者が次のように英訳してみた。

“...on the front side [of the lantern] alone ... were the words, ‘A Quik One.’ Usakichi and I once debated the spelling of this ‘Quik One.’ There were two theories: one, that ‘quik’ was wrong, and that it should be spelled ‘quick;’ and the other, that ‘quik’ was a quick way of spelling ‘quick,’ and so it meant an even quicker quick one, and so was all right. Talking along those lines, we thought that ‘A Quik One’ must mean a drink, but wondered why it would say such a thing, because it couldn’t be a liquor shop. As is evident from the contents

of our discussion, we were still just boys. ... I now realize that this house must have been what is known in Osaka as a *machiai*, the equivalent of a house of assignation. If we had been a little older, we probably would have noticed the various men and women coming and going.” (“Ten-House Alley,” tr. Murakami-Smith)

店の「看板」である「ちょと一ぱい」を“A Quik One”と訳すことは、アメリカなど英語圏で企業名、看板、宣伝などでよく用いられる方法、つまり単語のスペルをわざわざ変えること(“quik,” “lite,” “thru”など)を TT 読者に思い起こさせられる。これは ST になかったニュアンスを余分に付加してしまうともとれるかも知れない。しかし、江戸時代以来発達した日本の近代的資本・消費システムが現代アメリカのそれと近似していることを思い合わせると、行き過ぎた訳し方と必ずしも言い切れないと考えられる。また、英語の俗語 “Quickie” をも TT 読者に連想させ、別の効果も上げていると考えられる。“Quickie” は以下のような意味である。

- “something done or made in a hurry: such as
(a) a quickly and usually cheaply produced work (such as a motion picture or book)
(b) a hastily performed act of sexual intercourse” (merriam-webster.com)

上記の (b) の意味を TT 読者に思い起こさせることによって、その店の「正体」である「待合」の看板にもふさわしいとも考えられる。(なお、ST では「待合」が大阪方言として扱われており、その違いを TT にも反映させるために “...a *machiai*, the equivalent of a house of assignation” のようにローマ字で残し、意味の説明を付け加える方法で訳すことにした。これは多重翻訳または複数翻訳(multiple translation)という翻訳手順である。上記 1.3 節で触れた Pym (2016) の分類 (表 3、表 4) 参照。

6. 一般化補償 (generalized compensation) の可能性

これまで補償の具体例をみてきたが、それぞれの例で、ST で失われた効果が TT の補償で果たして適切に補われたかという問題の検証には至っていない。文学作品における様々な「効果」は読者の感じ方や解釈によって大きく異なり、ST を読んだ SL 読者が享受した効果と TT を読んだ TL 読者のそれとの比較が本論文の範囲を超えているが、翻訳手順分類そのものの同様、補償を翻訳者目線で捉えようとした。補償は翻訳者が用いられる翻訳手順の中でも、翻訳者の自由を増し創造性を引き出す手順であり、上記の具体例を挙げることで、補償を用いた場合、どのようなことが可能なかを少しは示すことができたと考えられる。

「補償の可能性」について、最後に Harvey (1995) の「一般化補償」(generalized compensation)の可能性について考えていきたい。

6.1 一般化補償について

上記 4 節でみたように、「一般化補償」とは、「TT には ST とほぼ同じ数量・質の効果を目的とする文体的工夫が含まれるが、それらが ST の特定の損失個所と結びつかない場合」である。TT のそれぞれの補償個所が ST の損失個所と結びつかないため、特定しにくい場合もあるが、一般化補償と思われる例をいくつか挙げることにする。

6.1.1 Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* の日本語訳

補償の具体例 (5.1.2.1 節) でみたように、“tortoise/taught us” のダジャレを河合訳では次のように訳している。

『小さかったころ、』ついに海ガメもどきが [略] 続けました。『海の学校に通っていたんだ。先生は年寄りの海ガメだったけど、茶々 (ちゃちゃ) と呼ばれていた—』
『どうして海ガメなのに茶々と呼ばれていたの?』アリスはたずねました。
『先生はティーチャだろ。ティーとは茶のことだ。だから茶々じゃないか。』海ガメもどきは怒って言いました。『まったく君はにぶいなあ!』 (『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、128)

その続きが次のように訳されている。

『まったく君はにぶいなあ！』

『そんなかんたんな質問をしたりして、はずかしいと思わなきゃいけないよ』と、グリフォンもつけ加えました。それからふたりはだまってすわったまま、かわいそうなアリスをじっと見つめたので、アリスは穴があったら入りたい気持ちになりました。ついに、グリフォンが海ガメもどきに『話を進めな、おまえさん！茶々を入れられるたびにこんなことやってたら、日が暮れちゃうよ』と言いました〔略〕
(『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、128-129)

「茶々を入れる」はちなみに「人がせっかく話している時に、横合いから口をはさんで、じゃまをする」(新明解国語辞典)という意味だが、訳者が ST の“tortoise/taught us”の言葉遊びを工夫して訳すのみならず、テキスト全体を面白おかしく訳す努力が感じられる。よって、一般化補償の例だと考えられる。また、チャンドラーの例(5.1.1 節参照)同様、テキスト内の結束性を実現する例でもある。

6.1.2 Daniel Keyes, *Flowers for Algernon* の日本語訳

この作品は知的障害のある主人公が自ら書き留めていく日記風の「経過報告」(Progress Reports)からなる。主人公が手術を受け、知能が急速に発達するけれど、手術の効果が一時的なものであり、最後には元の知的障害に戻る。知能の移行が「経過報告」の文体・スペリング・文法に表れており、例えば冒頭(手術前)では以下のような書き方になっている。

“progris riport 1 martch 3

Dr Strauss says I shoud rite down what I think and remembir and evrey thing that happins to me from now on. I dont no why but he says its importint so they will see if they can use me.” (Keyes (1966/2004), 1)

スペルミスや文法の間違ひはストーリー展開の大切な要素であり、日本語訳でも似た効果を狙い以下のように訳されている。

「けえかほおこく 1 —— 3 がつ 3 日

ストラウスはかせわぼくが考えたことや思いだしたことやこれからぼくのまわりでおこたことわぜんぶかいておきなさいといった。なぜだかわからないけれどもそれわ大せつなことでそれでぼくが使えるかどうかわかるのだそうです。」 (キイス(1999/2015), 15)

手術後、知能が目覚ましく伸び、ついには手術を施した精神科医たちのそれを超える。主人公はしかし、以前知的障害があったころ同様、孤独である。この時期に書いた「経過報告」には例えば次の内容が書かれている。

“Then, in a sudden intuition, right outside the Keno Amusement Center, I knew it wasn’t the movies I wanted, but the audiences. I wanted to be with the people around me in the darkness.

The walls between people are thin here, and if I listen quietly, I can hear what is going on.”

(Keyes (1966/2004), 197)

「ところが、キノ娯楽センターから出てきたとき、私が求めていたのは実は映画ではなく、観客なのだというのを直観的に悟ったのである。暗闇の中で大勢の人たちにとりかこまれていたかったのだ。

他人とのあいだの壁はここでは薄く、じっと耳をすませば、どんなことが進行しているのかわかる。」 (キイス(1999/2015), 292)

そして、主人公よりも先に手術を受けたラットのアルジャーノンが奇異な行動が目立つようになり、知能が退化し、ついには死ぬ。そして主人公の知能も失われていき、元の知的障害に戻る。作品は次の言葉で終わる。

“Please if you get a chanse put some flowrs on Algernons grave in the bak yard.” (Keyes (1966/2004), 311)

「どーかついでがあつたらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください。」
(キイス(1999/2015), 449)

日本語訳はいくつかの方法を用いて ST のスペルミス・文法ミス等と似た効果を TT で試みる。つまり漢字をほとんど使わずひらがなを多用する、ひらがなの間違いを取り入れるなどであるが、ST の一つ一つのスペルミス・文法ミスに対応しておらず、一般化補償が用いられている。ストーリー展開とともにひらがな／漢字の割合やひらがなの間違いの回数を調整し、この場合、一般化補償が TT の雰囲気のみならずストーリー展開にも大きく貢献している。

6.2 一般化補償を地域方言の翻訳に用いた例

6.2.1 谷崎潤一郎『細雪』の英訳

谷崎潤一郎が関東大震災後、関西へ移住してから関西の街並み、食べ物、文化とともに関西弁に大きな関心を寄せて、「阪神見聞録」「私の見た大阪及び大阪人」などのエッセイを執筆するのみならず、移住後の多くの小説に関西弁をしゃべる人物を登場させた。よく知られるエピソードとして『卍(まんじ)』の執筆の話がある。阪神間在住の夫人である主人公が自ら話す内容として語られるこの作品は新聞連載当初、谷崎が標準語で書き出したが、途中から女学校の学生二人を雇い、主人公の言葉を全て関西弁に書き直してから新聞に掲載した。しかし、『卍』を含む多くの谷崎作品の英訳では、関西弁が特徴のない平準な英語に訳されている。

しかし、『細雪』の英訳では、訳者のサイデンステッカーが登場人物たちの関西弁を他の登場人物の標準語と区別させることにした。関西弁のセリフはすべて、短縮形(*can't, don't, she's, would've* 等)を用いず短縮なしの従来形(*cannot, do not, she is, would have* 等)で表す方針をもって訳した。例えば、次に引用する会話では、関西人の幸子と関東の夫人である相手との言葉の違いを、サイデンステッカーが以下のように訳している。

『あなた御病気？どこがお悪いの？』
『黄疸になってんわ。見てごらん、——眼エ黄色いでしょ』
『ほんと。とても黄色いわね。』
『御気分がお悪いんじゃない？』と、下妻夫人が聞いた。
『えゝ。——でも今日は大分ええ方なんですの。』
『済みませんわね、こんな時にお邪魔に上がって。[略]』 (谷崎潤一郎『細雪』、165)

“‘You’ve been ill? What’s the trouble?’

‘I have had jaundice. If you look you can see the yellow in my eyes.’

‘You’re right. They’re very yellow.’

‘You’re still not feeling well?’ asked Mrs. Shimozuma.

‘Today I am much better.’

‘We shouldn’t have bothered you.’ ...” (*The Makioka Sisters*, tr. Edward G. Seidensticker, 95)

言うまでもなく、TT の非短縮形が ST の一つ一つの関西弁の要素に対応しているわけではなく、一般化補償となっている。サイデンステッカーはこの翻訳方針を徹底して、『細雪』の阪神間在住の登場人物たちのしゃべる上品な、まったりした関西弁の雰囲気を英訳に反映させようとした。しかし、短縮形の有り無しはそれほど際立つ差異ではないため、説明なしで登場人物の会話を読んだ TT 読者はその違いに気付くかどうかは疑問があると言わざるを得ない。よって、地域方言の翻訳方針として不十分とも考えられる。

6.2.2 川上未映子『乳と卵』の英訳

川上未映子の『乳と卵』の登場人物たちが大阪出身で、大阪弁が三つの位相で見られる。つまり、登場人物たちの会話のセリフ、登場人物の一人である緑子の日記、そして作品の基調を成す主人公の夏子の一人称の語りである。芥川賞受賞の「乳と卵」(2007 年) がのちに改訂・加筆され

て『夏物語』(2019 年)の前半部分として出版され、『夏物語』の英訳が *Breasts and Eggs* として 2020 年に出版された。しかし、英訳の出版に先立ち、Louise Heal Kawai による 2007 年版「乳と卵」の部分訳が 2012 年にネット上に発表された。興味深いことに、Heal Kawai が大阪弁の英訳に英国マンチェスター方言を用いている。訳者が以下に述べているように、大阪とマンチェスター、両都市の住民と方言に共通点を見出している。

“I’ve long been aware of the many parallels between Mieko Kawakami’s home city of Osaka, Japan, and my own hometown, Manchester in the UK. ... The inhabitants of both cities are said to be friendly, down-to-earth, and very outspoken, just as the characters in Breasts and Eggs. And most importantly, the dialect spoken in Osaka and Western Japan is markedly different from that of Tokyo and the East. Often frowned upon as sounding rather rough or unsophisticated, Mancunian (adjective meaning “of Manchester”) is to my ears a perfect rendering of Osaka dialect.”
(Heal Kawai (2012))

次に『乳と卵』の大阪弁が現れる三つの位相からの具体例とそれぞれの英訳をみていく。

【主人公の一人称の語り・登場人物の会話】

「卷子はわたしの姉であり緑子は卷子の娘であるから、緑子はわたしの姪であって、叔母であるわたしは未婚であり、そして緑子の父親である男と卷子は今から十年も前に別れているために、緑子は物心ついてから自分の父親と同居したこともなければ卷子が会わせたと話も聞かぬから、父親の何らいつさいを知らんまま、まあそれがどうということもないけれども、そういうわけでわれわれは今現在おなじ苗字を名のっている、ふだんは大阪に住むこの母子は、この夏の三日間を卷子の所望で東京のわたしのアパートで過ごすことになったわけであります。

卷子から、今回の上京に関する電話があったのはそもそも一ヶ月くらい前のこと。

『あたし豊胸手術を受けたいねんけども』という内容であった。」(川上未映子『乳と卵』、11)

2007 年版「乳と卵」からの引用だが、主人公の一人称の語りは大阪弁の要素が少しはみられるものの、「である」「われわれ」等、書き言葉の要素が多く含まれる。卷子のセリフは当然、大阪弁の要素を含む。上記の引用部分を、Heal Kawai 訳では以下のように訳されている。

“Makiko’s my older sister and Midoriko’s her kid so that makes Midoriko my niece and me her unmarried auntie, and because it’s been nearly ten years since Makiko broke up with Midoriko’s dad she doesn’t remember living with him, and I haven’t heard anything about her mum having them meet so she knows sod all about the bloke—but that’s by the by—and we all go by the same name now. So Makiko asked and now the two of them are coming up from Osaka in the summer holidays to stop with me in Tokyo for three days.

It was about a month ago Makiko phoned me to say she was coming.

‘Natsuko, I’m thinking of getting me boobs done.’”

(Kawakami Mieko (2012), tr. Heal Kawai)

マンチェスター方言の要素を多く含み、書かれたテキストよりも、主人公が声に出して話しかけてくる印象を受ける。なお、2020 年の英訳 (Bett & Boyd 訳) がベースにしている『夏物語』は「乳と卵」を改訂・加筆しているため、上記引用部分の前半と後半の間に数ページの叙述が挟まれているが、卷子のセリフが次のようになり、Bett & Boyd 訳では以下のように訳されている。

『わたし、豊胸手術うけよ思てんねんけども』

宣言のような報告のような、そんな電話が卷子からかかってきたのは、今から三ヶ月くらいまえのこと。」(川上未映子『夏物語』、47)

“‘I’ve been thinking about getting breast implants.’

It had been three months since Makiko had called me up to make this declaration.”

(Kawakami Mieko (2020), tr. Bett & Boyd, 36)

なお、2007 年版「乳と卵」には、大阪の实在の地名「京橋」や、大阪を中心に関西に多くの支店があるスーパー「イズミヤ」が現れるけれど、『夏物語』では「笑橋(しょうばし)」「ミズノヤ」

に改められている。しかし、登場人物の会話や緑子の日記には 2007 年版「乳と卵」同様、大阪弁の要素が多く含まれている。

【緑子の日記】

「お母さんとあまししゃべらず。っていうかまったく、お母さんはなんか豊胸手術、について、毎日調べてて、あたしは見んふりしてるけれど、でも胸、うそののなんかいれておっきい胸にするんやって、信じられへん、だいたいそれって何のためによ？って何のためにか仕事のために？考えられん。気持ちわるい気持ちわる気持ちわる気持ちわる気持ちわる気持ちわる、テレビでみだし写真もみたけど、手術ざっくり切るのやで。ぐっぐっとおしこんでいくのやで。いたいのやで。お母さんはなんもわかってない。あほやわ、あほすぎ、あほすぎ [略]」

(川上未映子『乳と卵』、77)

“Me and Mum don’t talk much. Well, I’ve stopped speaking to her at all. Every day she’s researching this breast surgery crap, and I pretend not to be looking, but to put fake stuff in your chest just to make your boobs bigger? I can’t get my head around it, what’s it for? For her job? I don’t get it. PUKE PUKE PUKE PUKE PUKE! I’ve seen it on the telly, and in photos too, they cut you open. Then they shove this thing in and it’s dead painful. Mum doesn’t understand anything. She’s off her trolley, my Mum, daft, barmy, bonkers, thick as two short planks.”
(Kawakami Mieko (2012), tr. Heal Kawai)

“Mom and I aren’t really talking. Not at all, actually.

... All my mom ever does is research breast implants. I pretend like I’m not looking, but she’s too busy thinking about boobs to notice anyway. Is she serious? I mean, why? I can’t even begin to understand it. It’s gross, I really don’t understand. It’s so, so, so, so, so, so, so gross. So gross. I’ve seen what it looks like. I’ve seen it on TV and online. It’s surgery. They cut right into you. They slit you open so they can stuff you, literally. It hurts. What’s wrong with her? What the hell is wrong with her? She’s being an idiot, the biggest idiot. ...”
(Kawakami Mieko (2020), tr. Bett & Boyd, 92-93)

Bett & Boyd 訳がティーンエージャーの書きそうな文体を心掛けていているという印象を受けるけれど、アメリカ英語の平準的な言葉になっている。Heal Kawai 訳ではイギリス英語の方言・俗語の要素が多く含まれ、ユーモアのある文体になっている。

大阪弁をマンチェスターという特定の地域の方言に訳す試みは議論が分かれるところであろう。一読者として、筆者は大阪弁の雰囲気英語に載せることに成功しているように感じるけれど、マンチェスターをよく知るイギリス人などにはイギリスの都市と日本の都市とのギャップが大きすぎて違和感を覚えるかも知れない。しかし、地域方言を一般化補償を用いて訳す可能性を示す例として評価に値すると考えられる。

6.2.3 中場利一『岸和田のカオルちゃん』の英訳

次は日本の地域方言の英語への訳し方のもう一つの方法として、筆者が中場利一の『岸和田のカオルちゃん』の英訳で採択した方法をみる。その方法とは、岸和田弁のセリフをいわゆる「四字字語」(卑猥な言葉)を含むアメリカ英語の俗語へ訳すことである。この方法が突飛に思われる上に、「大阪弁は下品、乱暴」という偏ったステレオタイプを助長する弊害もあると批判されるかも知れない。しかし、『岸和田のカオルちゃん』や『岸和田少年愚連隊』の中場利一作品に登場する、岸和田弁を使う少年たちは暴力に明け暮れて、インパクトの強い言葉でしゃべる。作者も登場人物のしゃべる言葉と小説の内容との相乗効果を意識して書いたと思われる。両作品の冒頭で岸和田弁の「汚さ」を強調する叙述がある。

『もう！何度言ったらわかるの。言葉づかいをもっと良くしなさいと言ってるでしょう』

[略] 確か五年生か六年生の頃だったと思う。それまでも何度も何度も言葉がキタナイと注意を受けていた。

毎年、新しい学年になるたびに『ご家庭の方でも、言葉づかいに注意してあげてください』という母への手紙らしきものをもらった。

『そらえらいこっちゃ。明日からおまえ、きれいな言葉しゃべりー』と母は毎年その手紙を読ん

では私に注意をした。

『きれいな言葉でお母（か）ん、どんな言葉な』と母に聞き返すと、『お父さんに聞き』と決まってそう言った。

その父は『あほやノオーおまえは。そんなもん簡単やんけ、テレビとおんなじ言葉しゃべったらんかい』と言う。」
(中場利一『岸和田少年愚連隊』、6)

「大阪の中心部から南に向かい、どんどん進んで行くとどんどん言葉がきたなくなっていく。耳をすまして聞いていくとちょうどこの辺がきたない言葉のピークかな、と思える場所がある。そこが大阪、泉州岸和田である。

〔略〕岸和田に生まれた私は、周りに荒くれた大人しかいなかったせいか、すくすく荒ぶって育ったのであった。」
(中場利一『岸和田のカオルちゃん』、5)

このように、岸和田弁ないしは大阪弁の一面を強調したステレオタイプではあるものの、著者自身が登場人物たちのしゃべる言葉の「汚さ」に言及している。小説には暴力沙汰が数多く含まれていると考え併せれば、TT でインパクトのある「四文字語」を含むアメリカ英語の俗語を使用することが妥当だという結論に至った。例えば、少年たちがヤクザにケンカを売る場面のセリフを以下のように訳してみた。(TT のキタナイ英語はお許しいただきたい。)

『『これワレ、なにメンチ切ってんじやい』〔略〕
『メンチ切ったて……ボくらわしらに言うてんかいや』
(中場利一『岸和田のカオルちゃん』、6)

“‘What you starin’ at, motherfucker?’ ...

‘Starin’...? You talkin’ to us, boys?’”

(Nakaba Riichi, *Kaoru-chan of Kishiwada*, tr. Murakami-Smith)

ST、TT のそれぞれの言葉の「汚さ」の度合い、インパクトなどに違いはあるかも知れないが、一定の効果を狙い、この方法で訳すことにした。TT の俗語や「四文字語」が必ずしも岸和田弁の一つ一つの「汚い言葉」に対応しているとは限らないため、これは「一般化補償」の例である。

『細雪』、『乳と卵』の例もそうであるように、地域方言が作品全体に醸し出す雰囲気や、何とか TT にも匂わせようと努めた結果である。

7. むすび

これまで取り上げてきた具体例からも分かるように、「補償」は ST の効果を TT で再現するために、逆に ST から飛躍して訳す翻訳手順である。補償を用いた際に生じる ST と TT との「ずれ」の弊害、どれほどの「ずれ」が許容範囲内かの議論、さらには「同様の効果」とは何かという問題、翻訳者が恣意的に訳しているのではないかとの疑問など、補償はいろいろの問題点があるのは確かである。文学作品その他言語行為から受け手が受ける効果は受け手の解釈、経験、背景などにより異なる以上、ST の効果と TT の効果が同様であるという保証はない。しかし、どの言語行為もそうであるように、発言者がメッセージを送る（表現し説明する）努力と受け手がそのメッセージを受け取る（理解し解釈する）努力の双方があって初めてコミュニケーションが成功すると考えられる。「補償」を含む翻訳手順はどれも翻訳者が ST から汲み取ったメッセージを何とか TT に表す努力にほかならない。

これまで挙げた具体例から明らかなように、「補償」は翻訳者の自由を増し創造性を引き出す、つまり翻訳者の主体性を確立させる翻訳手順である。特に「一般化補償」は言葉遊びやユーモアの効果、作品全体の雰囲気や地域方言など、他の翻訳手順では不可能な翻訳を可能にし、機械翻訳がまだまだなしえないことが翻訳者には可能だとアピールできると確信する。ST の個々の語句から飛躍することによって TT を ST 全体に近づけるという逆説的な手法である補償は、フィクションという「作り話」によって「真実」に迫るという文学にふさわしい手法だと言えるかも知れない。

《先行研究》

— 48 —

1. はじめに

英語には新たな語を作り出す様々な接辞がある。このうち、現代英語でも生産性が高いもののひとつとして、er 接辞がある。この接辞が興味深いのは、様々な品詞の語にくっついて、名詞を作り出すことができる点である。この接辞によって作り出された語を er 名詞と呼ぶ。典型的には、*singer*〈歌手〉や *player*〈選手〉〈再生機〉のように、動詞の後について、〈～する人〉や〈～するためのもの〉などという意味の er 名詞を作り出す。

本稿で注目したいのは、この er 接辞が名詞について作られる名詞由来 er 名詞である。このような名詞には(1)のようなものがある。

- (1) a. birder, caver, philosopher
b. Berliner, Londoner, New Yorker
c. backbencher, backpacker, outfielder

(Bauer, Lieber and Plag 2013: 218-219)

名詞由来 er 名詞にも(1)のように、様々な意味が見られる。(1a)は行為の対象となるものを表す名詞に接辞がついて、〈野鳥観察者〉や〈洞窟探検家〉、また〈哲学者〉などを表す。(1b)は場所を表す名詞を基に作られたもので、〈ベルリン出身者〉や〈ロンドン出身者〉、また〈ニューヨークで生活している人〉というような意味をあらわす。さらに、(1c)の例は複合名詞に er が付いたものであり、〈後方席の議員〉や〈バックパックに荷物を詰めて旅をする人〉、また〈(野球の)外野手〉を表す。

名詞由来 er 名詞は現代でも生産的な接辞である。例えば、近年では、インターネット上でのコミュニティや SNS の発展により、SNS の個々のサービスが登場している。これらの SNS の広がりに対応するように、SNS を表す名詞をもとに(2)のような新規の er 名詞が作られている。

- (2) blogger, Instagrammer, TikToker, YouTuber, vlogger

これらの新語はおおよそ、〈該当する SNS 上でコンテンツを投稿するなどの活動を通して、一種の職業として収入を得ている人〉のことを表す。

従来の研究においては動詞由来の er 名詞が主要な研究対象となっており、項構造からの分析(e.g., Rappaport and Levin 1992)や主語述語関係に基づく分析(e.g., Marchand 1969, Heyvaert 2003)など、統語的な観点からの分析が提案されてきた。ただし、本稿で注目する名詞由来 er 名詞では、er 接辞がくっつく名詞(基体名詞)がそのような項構造などを持つとは考えにくい。そのため、統語的なアプローチとは異なる説明が必要となると考えられる。

本稿はこのような名詞由来 er 名詞について、現在までの中間報告を行うものである。具体的には、名詞由来 er 名詞を扱った主要な先行研究を概観し、提案されている分析の整理と特徴づけを行う。そして先行研究の問題点や残された課題を整理し、今後解明されるべき課題と、可能な研究の方向性および分析案を提示する。

2. 先行研究

2.1 基体名詞ベースのアプローチ

名詞由来 er 名詞をめぐる先行研究では、大きく分けて基体の名詞に注目したアプローチと、er 接辞に基づくアプローチが提案されている。基体の名詞に基づくアプローチをとるものとして、まず、Ryder(1999)がある。Ryder によると、名詞由来 er 名詞の意味は、基体の名詞から連想される様々な知識(スキーマ)を基に理解されるとされる。また、名詞由来 er 名詞の意味にかかわる

¹ 本稿の研究は JSPS 科研費 22K13137 の助成を受けたものである。

² 本稿の一部は関西大学言語学研究会(2022 年 3 月 28 日、関西大学)での発表に基づいている。発表時に有益なご助言を参加者よりいただいた。また、草稿の段階で林智昭先生にスタイルや内容について有益な助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

スキーマの選択には、(3)のような語用論的な制約が働くとされる。

- (3) a. 基体の指示対象は *er* 名詞の指示対象が参与しうるスキーマの数を可能な限り制限しなければならない
 - b. *er* 名詞の指示対象は選択されたスキーマにおいて際立ちや情報性の程度が高い必要がある
 - c. 基体は一般によく定着し、話者と聴者の両方が想起しやすい形(式)である
- (Ryder 1999: 291)

増淵 (2012)も Ryder と同様、基体となる名詞の知識に基づいた分析を提示している。ただし、Ryder と異なり、*er* 名詞の意味理解に利用される知識が特定の種類のものであると増淵は分析している。具体的には、Pustejovsky (1995)の生成語彙意味論の枠組みから、特質構造と呼ばれる名詞の種々の知識を記述する構造のうち、指示対象全体とそれを構成する部分や要素との関係にかかわる知識(主題役割、AGENTIVE Role)と、名詞の指示対象の目的や機能にかかわる知識(目的役割、TELIC Role)に分類される2種類の知識が利用されるとしている。これらの例として(4)が挙げられている。

- (4) a. *roofer*<屋根職人>, *gardener*<庭師>, *floorer*<床に打ち倒す人>
 - b. *outfielder*<外野手>, *Londoner*<ロンドン住人>, *townner*<町人>
- (増淵 2012: 59-63)

(4a)の *er* 名詞は基体名詞の目的役割にある知識が利用されている例とされる。また、(4b)は基体名詞の目的役割の情報が利用されている例とされる。

このように、増淵の分析では、基体名詞の知識のうち、利用される知識を特定することによって、*er* 名詞の意味の特徴づけを行っている。

2.2 -*er* ベースのアプローチ

Panther and Thornburg (2001, 2002)は上記とは異なり、-*er* に注目したアプローチをとっている。ただしこのアプローチは、-*er* 接辞自体がどのような意味構造を持つか、ということよりもむしろ、語形成の結果生じる X-*er* という構造自体がどのような意味パターンを示すかという見方を取るものである。このようなアウトプット指向の見方を取る Panther and Thornburg の分析は、構文文法(e.g., Goldberg 1995, 2006, 2019)で提案されてきた構文という概念を、形態論に応用したコンストラクション形態論(Booij 2010)の見方を先取りする先駆的なものであるといえる。

以降では *er* 名詞のより詳細な分析を展開している Panther and Thornburg(2001)を概観する。Panther and Thornburg によると、*er* 名詞は基体が動詞か名詞かといった区別は設けず、一括して扱うべきとされる。これを踏まえ、本稿では品詞を区別しない *er* 名詞を X-*er* と表す。彼らによると、この X-*er* が *er* 名詞の取りうる意味のパターンを指定する意味ネットワークを有しているとされる。言い換えれば、この意味ネットワークによって、個々の *er* 名詞がとりうる意味が説明される。

Panther and Thornburg (2001)の分析を具体的に見てみよう。X-*er* はまず、彼らがプロトタイプの他動シナリオ(Prototype Transitive Scenario)と呼ぶ、他動的行為についての抽象的な知識構造を喚起するとされる。このシナリオは次の通りに特徴づけられている。

- (5) a. 場所や時間といった場面設定が存在する
- b. 非対称的な相互関係を持つ、異なる参加者が(少なくとも)2人以上存在する
- c. 参加者の1人は意図的に行為を行う人間である。もう1つの参加者は、その行為によって直接的に影響を受けたり変化を被ったりする。

(Panther and Thornburg 2001: 156)

これに基づき、X-er は<職業としてある行為を行う人>³という意味をプロトタイプの意味として持ち、他の意味はそこからの拡張関係にあるとする分析が提案されている。このプロトタイプの意味における名詞由来 er 名詞の例としては、次のものが挙げられている。

- (6) tinner<ブリキ職人>, hatter<帽子職人>, whaler<捕鯨員>, driftnetter<流し網漁師>, Wall Streeter<ウォール街で金融業を生業とする人>, submariner<潜水艦乗組員>, philosopher<哲学者>

(Panther and Thornburg 2001: 157)

(6)のような名詞由来 er 名詞では、基体の名詞が直接職業としてなされる行為を表してはいないものの、仕事の作業が向けられる材料や対象を表している。

(6)のような名詞由来 er 名詞は、基体の意味がメトニミーを介して<もの>から<職業の行為>へと遷移し、その行為と人間の動作主を表す er とによって<職業人>の意味が得られるとされる。例えば、tinner<ブリキ職人>では、名詞 tin はそれが喚起する職業のシナリオにおいて、<行為を受ける対象である素材>から<職業的ブリキの加工>とメトニミー的に意味が遷移し、これに人間の動作主を表す er がつくことで、<ブリキ職人>の意味が作られるとされる(Panther and Thornburg 2001: 158)。

上記の<職業人>が er 名詞の中心義と仮定されているが、これは動作主性、習慣性、際立ちの高さ、そして文脈的独立性といった観点をすべて満たすものであるとされる。er 名詞のその他の意味は、これらのパラメータを何らかの形で満たす、概念的に近いものとして、中心義と拡張関係にあるとされる。拡張関係にある意味の例としては(7)が挙げられている。

- (7) a. <ある行為に特徴的にかかわる人・もの>
e.g., backpacker<バックパックを背負っての旅行者>, marathoner<マラソン選手>, hooper<ダンサー>
b. <習慣的・思想的に(行為志向の)傾向を持つ人・もの>
e.g., nutter, right/left hander<右・左ききの人>, flat earther<地球平面説を信じる人>
c. <持続的な所属先・関係・属性を持つ人・もの>
e.g., GOp, villager, six footer
d. <習慣的でない行為に基づく持続的な属性を持つ人・もの>
e.g., Fullbrighter<フルブライト奨学金の採用者>
e. <文脈依存の行為・過程に基づく一時的な属性を持つ人・もの>
e.g., keynoter<特別講演の登壇者>

(Panther and Thornburg 2001: 159-168)

(7a)は職業ではないが動作主性が高く、すなわち際立ちが高いものとされる。また、(7b)は習慣性があるもの、(7c)は様々な程度の行為志向性を持つもの、そして(7d)は習慣的ではないが、動作主性の高い行為の参与者であるものである。さらに、(7e)のように特定の文脈で使われる臨時的なものもあるとしている。

Panther and Thornburg と類似の分析に、Hamawand (2011)がある。ただし、Hamawand の研究は接辞としての er の役割をより重視した分析となっている。Hamawand は認知文法(Langacker 1987, 1991, 2008)の枠組みから、動作主性のドメインにおいて、er 接辞が特定のプロファイルを持つものとして分析している。具体的には、(8a)のように特徴づけられる動作主性のドメインを仮定し、er 接辞は(8b)のプロファイルを行うと述べている。

³ “a human Agent who performs an action or engages in an activity to the degree that doing so defines a primary occupation” (Panther and Thornburg 2001: 154)

- (8) a. 動作主性のドメイン：人やものが何らかの効果を生み出すための役割を表す。このドメインは特定の行為を行ったり、特定の分野で特化している人や物にかかわるものがある。

(Hamawand 2011: 160)

- b. プロファイル：er 接辞は非専門的分野や一般的な文脈をプロファイルする。

(Hamawand 2011: 183)

(8)のような分析に基づき、Hamawand は er 名詞のプロトタイプの意味を<基体によって表される一般的な行為を行う人>⁴としている。Hamawand も品詞の区別なく er 名詞を扱っているが、名詞由来 er 名詞は次のように分類されている。

- (9) a. <人が基体が表す対象物を作る>
hater, furrier, miller, sealer, slater, tinner
b. <人が期待が表すものを研究する・学ぶ>
astrologer, astronomer, geographer, lawyer, philosopher
c. <人が基体が表す場所に由来を持つ>
Londoner, Berliner, New Yorker, northerner, villager
d. <人が基体が表す属性を持つ>
nutter, corker, miser

(Hamawand 2011: 126-127)

このほかにも、Baeskow (2010)も er 名詞についての形態統語的観点からプロトタイプ分析を提案している。本稿ではその議論の詳細には立ち入らないが、Baeskow (2010)は er 名詞がプロトタイプ構造を持つものととらえ、個々の意義について形態統語的な観点からのより詳細な表示を行っている。

以上、本節では名詞由来 er 名詞に関する基体名詞ベースのアプローチをとる先行研究と、er ベースのアプローチをとる先行研究を概観した。ただし、これらの先行研究では、注目されている側面や意味的分析など、他の先行研究とどのような関係性にあるのかには、少なくとも明示的には触れられていない。このため、これらの研究を総合する形で名詞由来 er 名詞を説明していくという課題が残っている。

3. 先行研究を踏まえた名詞由来 er 名詞の分析の方向性

2 節では名詞由来 er 名詞の意味的アプローチについて概観した。本節では、さらに名詞由来 er 名詞の意味構造を解明していくために、先行研究の分析について論点を整理し方向性を提示していく。

名詞由来 er 名詞が取りうる意味について意味的なアプローチをとる際、2つの観点について検討する必要がある。ひとつは、名詞由来 er 名詞が表す意味がどのように得られるか、という点である。例えば、*Londoner* は<ロンドン出身者>という意味を表す。この時、この意味のもととなる<ロンドンで生まれ育った>という情報はどのようにしてもたらされるか、ということについての説明が求められる。

もうひとつは、名詞由来 er 名詞が表す所与の意味において、他ならぬその意味に定まることをどのように説明するか、である。さきほどの *Londoner* を例に考えると、*Londoner* は<ロンドン出身者>という意味に定まるのであって、他のどのような意味でも表すわけではない。つまり、<ロンドン出身者>という意味に定めるものについての説明が必要になるのである。

一見すると、これら2つの観点は同種のものと思われるかもしれないが、理論でどのように扱うかは別にして、基本的には別のものである。というのも、*Londoner* が<ロンドン出身者>という意味を表すことができるという説明は、必ずしも<ロンドン出身者>以外の意味は表さない、ということを含意しないからである。

上記の2つの観点を踏まえると、先行研究は決して対立するものではなく、むしろ er 名詞の異

⁴ 'a person who performs the generic action labelled in the root'. (Hamawand 2011: 183)

なる側面に注目した相互補完的な関係にあることがわかる。まず、Ryder (1999)の語用論的制約は、語が有意味なものとして理解されるために基礎となる部分であり、基盤的な側面を特徴づけたものと位置づけられる。ただし、いわばこれは他の表現についてもあてはまるものとなっており、名詞由来 *er* 名詞がそれらの語用論的制約を具体的にどのように実践しているかまでは踏み込まれていない。

Ryder の語用論的制約が様々な形で意味的に実践されているものとして、増淵の基体名詞の意味論や、Panther and Thornburg および Hamawand の *er* の意味論を位置づけることができる。すなわち、基体名詞は *er* 名詞がとりうる意味のもととなる情報を提供する役割を担う一方で、*X-er* は実際にとる意味パターンを指定する（制限する）役割を担うのである。例えば *Londoner* に見られる〈～出身者〉という意味は、*villager* など共通の意味を示すものがほかにもあるため、確かに意味パターンとして *X-er* に由来するものであると分析することができるかもしれない。ただし、*X-er* 自体に〈出身地がロンドンである〉というような情報があるわけではなく、そのような情報は個々の基体名詞に由来する、つまり、基体名詞の *London* によってもたらされるものである。

4. 名詞由来 *er* 名詞の分析における課題と総合的分析の可能性

4 節では基体名詞と *er* それぞれの役割について提案されてきた先行研究の分析について、説明が不十分なところやその背後にある前提などを指摘し、名詞由来 *er* 名詞の総合的な説明を目指す上で克服すべき課題を整理するとともに、分析案を提示する。

名詞由来 *er* 名詞の意味を基体名詞の意味から説明しようとするアプローチが直面する課題として最たるものは、名詞由来 *er* 名詞が基体名詞の意味に含まれていないような意味情報を持つ場合である。実際、増淵 (2012)はこのことについて自覚的であり、(10)の例を挙げて「自然物の目的役割と主体役割は無指定であることが多い。派生に使われるはずの目的役割や主体役割が指定されていないので、様々な意味が出てくることになる」（増淵 2012:64）と述べている。

(10) whaler, forester, laker, lander, islander, wester, easter, afternoon

(増淵 2012: 64)

増淵によると、例えば、*wester* は〈西から吹く風〉という意味であるが、*west* に〈吹く〉という情報は含まないとされる。これらについて、生成語彙意味論の特質構造だけでとらえることが難しいものであると述べている。これについて増淵は「具体的には、社会常識で動詞的な要素を補って、その動詞的な要素を「名詞-*er*」の目的役割や主体役割に組み込むという操作を行う」（同上）と述べており、理論的に興味深い。しかし、どのようにそのような操作が起こるかは論じられていない。

この課題の背後に存在するの言語の知識と現実の知識の区別である。増淵の生成語彙意味論的アプローチは、名詞にまつわる様々な一般的知識を言語の意味論に取り込むものと理解できる。しかし実際には、ある名詞について、その指示対象全般が共有する知識を名詞の意味の中に取り組んでいる形となっており、必ずしも当該名詞の個々の指示個体についての知識を参照するものとはなっていない。

実際、上記の区別が問題となる例が存在する。野球において、特定の球種を得意とする投手を、その球種を表す名詞に基づいた *er* 名詞で表すことがある。次の例はどれも、「球種を表す名詞+*er*」のパターンを示す。

(11) fast baller〈速球派投手〉, knuckle baller〈ナックルボーラー〉,
sinkerballer〈シンカーボーラー〉, forkballer〈フォークボーラー〉

ここで注目すべき点は、これらの名詞で表される投手が単に上記のような球種を投げる、という意味ではない点である。例えば、fast baller を考えてみると、投手ならほぼ全員が速球を投げるものであるし、投げる球種の割合で速球が最も多いのが一般的である。その意味で、〈主たる球種としてストレートを投げる〉というのは、fastball の特質構造において、目的役割に記載されている情報であると考えられる。しかし投手であれば全員が fast baller と呼ばれるわけではない。この単語は投手の中でも特に速球の球速が早い投手について使われるものである。つまりこの情報は、

他の投手との比較や打者をどのぐらい抑えたかということによってはじめて生じるものである。このことは、言語の意味を理解する際に、文脈などに応じて語が表す対象の様々な知識が動員されることを示している。一方、増淵 (2012)の生成語彙意味論では、名詞由来 *er* 名詞の意味として利用される知識が、基体名詞の特質構造から得られるとされる。しかし(11)の例における＜得意球種である＞という知識は、基体名詞が指す特定の個体を持つものであり、基体名詞の指示対象が一般的に共有しているものではない。つまり、そのような個別の知識までも名詞の意味の一部として含まれているとは考えにくく、その知識を名詞の意味から説明しようとするのは無理が生じる。

次に、同じ種類に属すると考えられる知識が複数想定される場合を見てみよう。(12)の例は基体名詞が表す指示対象の機能や役割といった、目的役割の情報が利用されていると考えられる。

(12) blogger, Instagrammer, TikToker, YouTuber, vlogger (=2))

(12)の例は SNS を表す基体名詞に *er* が付いたものであり、＜～にコンテンツを投稿して収入を得ている人＞という意味である。これらの動画投稿サイトや SNS は確かに動画などのコンテンツを投稿するという使われ方がなされる。しかし一方で、大多数の人にとっては、それらの投稿されたコンテンツを視聴するという行為が主たる利用目的であり、その知識も目的役割に記載されていると考えられる。実際の名詞由来 *er* 名詞では、＜コンテンツを視聴する＞という知識ではなく、＜コンテンツを投稿する＞という知識が利用されており、加えて、＜それによって収入を得ている＞という知識もあわせて利用されていることがわかる。このような場合では、利用される知識の種類という観点だけでは、具体的な意味の制限に十分な説明を与えることは難しい。

(12)のような例はむしろ、*X-er* 自体が＜～を職業として行う人＞という意味指定を持っていることを示唆している。実際、Panther and Thornburg や Hamawand は＜～を職業として行う人＞という意味をプロトタイプとして仮定している。また、プロトタイプの意味に合う形で新規の *er* 名詞がより作られやすいというのはプロトタイプの性質を考えても、*X-er* の意味パターンに基づくことは自然な説明である。

次に *er* 接辞や *X-er* という語に着目するアプローチを検討しよう。このアプローチで課題となるのは、名詞由来 *er* 名詞が利用する様々な知識をどのように扱うか、ということである。このことはさらに2つの観点に分けて考える必要がある。1つ目は、基体名詞が参照する知識と、*er* 接辞または *X-er* が喚起する知識 (Panther and Thornburg ではシナリオ、Hamawand ではドメインで表しているもの) との関係である。これら二者の関係性について、両研究は少なくともはっきりと分析しているわけではなく、また何らかの一般化を提示しているわけでもない。ただし、Panther and Thornburg では *tinner* の説明において、*tin* の意味が＜物質＞から＜その物質を扱う仕事＞へと遷移することを説明する際に、*occupation(al) action scenario* というものに言及している (Panther and Thornburg 2001: 158)。ただしこの *occupation(al) scenario* とはどのようなものかについての詳細な説明は与えられておらず、またそれが *X-er* によって喚起される *Prototypical transitive scenario* と同一のものであるのか、または何らかの関係にある別のものなのかははっきりしない。また、Hamawand (2011)も両者の関係性について明示的ではなく、同様の課題を抱えていると言える。

er 接辞や *X-er* に着目するアプローチの2つ目の課題は、それらが喚起するとされる知識構造の妥当性である。Panther and Thornburg と Hamawand は、詳細に差異はあれど、共通して動作主性や他動性に関する情報を内実を持つ知識構造を仮定している。しかし、(13)の例は、動作主による何らかの行為についての知識が関連しているとは考えにくいものである。

(13) fifth grader<5年生の生徒>, seven footer<身長が7フィートある人>, teenager<13-19歳の間の年齢の人>

これらの中で取り上げられている特徴は、何らかの他動的な行為を踏まえて得られるものではなく、単に指示対象が持つ性質や状態、または分類である。そのため、何らかの動的な行為を想定する知識構造では説明がつきにくく、単純に拡張義と分析してしまうと、アドホックな印象がぬぐい切れない説明となってしまう恐れがある。よって、名詞由来 *er* 名詞には、＜能動的な行為＞

のパターンを動機づけるスキーマやドメイン、またフレームと同時に、＜特定の状態にあったり性質をもつ人＞というパターンを動機づけるスキーマやフレーム、またフレームが存在するとみなす方が自然であると考えられる。

それでは、名詞由来 *er* 名詞の2つのアプローチを組み合わせるとどのような分析が可能だろうか。ここでは、(13)の *fifth grader* を例に分析案のスケッチを提示する。Štekauer (2005: 46ff)に従えば、語形成に先立ち、表現したい概念がまずもって存在するはずである(cf. Baeskow 2010)。この考え方は *fifth grader* の場合でも当てはまるはずであり、表現したい＜5年生の生徒＞という概念がまずもって存在する。この＜5年生の生徒＞という概念が名詞由来 *er* 名詞によって表現される際、＜学年が5年生である＞という情報と＜特定の学年である人＞という情報が *er* 名詞の構成要素によって表現される。これらは、*fifth grade* によって喚起された①「学校における学年の制度の知識」、また *-er* によって喚起された②「特定の状態にあることの知識」に由来するととらえることができる。先行研究では、表現の意味理解のもととなる①や②のような知識がドメインやシナリオと呼ばれているが、フレーム意味論(Fillmore 1982, 1985, Fillmore and Baker 2010)では、このような知識を表すカバータームとして、フレームという用語が提案されている。このフレーム意味論に従うと、*fifth grade* と *-er* のそれぞれが喚起する知識は次のように特徴づけることができる。

- (14) a. 「学年フレーム」：ある人物が学校制度の中で、年齢や学習の習熟度などに合わせて、適切な内容の学習が提供される特定の学年に割り振られる (=①)
- b. 「状態フレーム」：ある人物が何らかの状態にある (=②)

fifth grader という語が形成される際、これらのフレームが組み合わされることによってその語の意味が形成されると説明できる。Booij (2010)のコンストラクション形態論の表記法を参考にとすると、⁵ *fifth grader* における個々の構成要素のフレームの組み合わせは(15)のように表示することができる。

- (15) a. *fifth grade* ⇔ 「{5}年生」
- b. *-er* ⇔ 「一の{状態にある人}」
- c. [[*fifth grade*]*r*] ⇔ 「{5}年生の{状態にある人}」(＝＜5年生の生徒＞)

(15)では、左側に言語表現、右側に理解される意味が表されている。矢印(⇔)は言語表現と意味の結びつきを表している。左側における角カッコ(⟦⟧)は言語表現のまとまりを表している。また右側において、鉤カッコ(「」)は言語表現によって喚起されるフレームを表している。ただし、便宜上フレームの中心的情報のみ記載している。波カッコ({})は言語表現によって指定される情報を表している。さらに、ダッシュ(—)はその部分の情報が未指定であることを示している。これらを踏まえて(15)を説明すると、*fifth grade* によって＜5年生＞という情報の指定を持つ(15a)右側のフレームが、(15b)のフレームで未指定となってる＜一の状態＞の箇所埋め込まれ、全体として＜5年生の生徒＞という意味情報が得られる、となる。

以上、名詞由来 *er* 名詞についての先行研究を踏まえ、名詞由来 *er* 名詞の全体像にかかわる分析として(15)のような分析が可能であることを示した。

5. おわりに

本稿では、英語名詞由来 *er* 名詞について、意味的アプローチを採用している先行研究について概観し、その特徴や位置づけを確認するとともに、先行研究における分析の関係性や残された課題を整理した。そして、先行研究における基体名詞に基づく分析と *er* に基づく分析は相互補完的な関係性であり、両者の知見を組み合わせることで、名詞由来 *er* 名詞の意味のより全体的な説明へとつながっていくことを論じた。また、*fifth grader* を例に分析案を提示した。今後の研究課題としては、提案した分析案を様々な表現へ展開し、またその精緻化を図りつつ、名詞由来 *er* 名詞

⁵ ここではあくまで分析案の荒削りのスケッチであり、また、フレームの扱いも含めた表示を目指しているため、Booij (2010)の表記法を厳密に用いたものとはなっていないことに注意されたい。また、Booij (2010: 81-84)では、オランダ語の名詞由来 *er* 名詞についてのコンストラクション形態論的分析を提案している。

のさらなる解明を目指すことが求められる。

参考文献

- Baeskow, Heike. 2010/2016. “Derivation in Generative Grammar and Neo-Construction Grammar: A Critical Evaluation and a New Proposal.” In Susan Olsen (ed.), *New Impulses in Word-Formation (Linguistische Berichte – Sonderhefte 17)*, 21–60. Hamburg: Helmut Buske Verlag. Kindle 版.
- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag. 2013. *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles. 1982. “Frame Semantics.” In Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*, 111–137. Seoul: Hanshin Publishing Company.
- _____. 1985. “Frames and the Semantics of Understanding.” *Quaderni di Semantica* 6(2): 222–254.
- Fillmore, Charles and Collin Baker. 2010. “A Frames Approach to Semantic Description.” In Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.), *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, 313–339. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.
- _____. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- _____. 2019. *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Hamawand, Zeki. 2011. *Morphology in English: Word Formation in Cognitive Grammar*. London and New York: Bloomsbury Publishing.
- Heyvaert, Liesbet. 2003. *A Cognitive-Functional Approach to Nominalization in English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- _____. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. II: Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
- _____. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Marchand, Hans. 1969. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*, 2nd ed. Munich: Beck.
- Panther, Klaus-Uwe and Linda Thornburg. 2001. “A Conceptual Analysis of English -er Nominals.” In Martin, Pütz, Susanne Niemeier, and René Dirven (eds.), *Applied Cognitive Linguistics II: Language Pedagogy (Cognitive Linguistics Research 19.2)*, 149–200. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- _____. 2002. “The Role of Metaphor and Metonymy in English -er Nominals.” In René Dirven and Ralf Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast (Cognitive Linguistics Research 20)*, 279–319. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 1992. “-ER nominals: Implications for the Theory of Argument Structure.” In Tim Stockwell and Eric Wehrli (eds.), *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, 127–153. New York: Academic Press.
- Ryder, Mary Ellen. 1999. “Bankers and Blue-chippers: An Account of er Formation in Present-Day English.” *English Language and Linguistics* 3(2): 269–297.
- Štekauer, Pavol. 2005. “Onomasiological Approach to Word-Formation.” In Pavol Štekauer and Rochelle Lieber (eds.), *Handbook of Word-Formation*, 207–232. Dordrecht: Springer.
- 増渕佑亮. 2012. 「名詞を基体にとる -er 名詞の意味について：クオリア構造による分析を通して」『学習院大学英文学会誌 2021』 54-66.

John・F・Kennedy の演説にみられる分離不定詞のレトリック効果

福本 広光

1. はじめに

アメリカ合衆国 (以下米国) 第 35 代大統領である John・Fitzgerald・Kennedy (1917-1963, 以下 Kennedy) は、歴代大統領の中でも国民からの人気が高く、評価も高い人物の一人であるとされる。任期途中に暗殺されてしまったこともあり、大統領であった期間は 3 年弱と比較的短いものの、彼の人気の要因の一つとして、その若さや優れた政治的手腕もさることながら、人を惹きつける力を持った演説にあるといえるだろう。

本稿では分析項目として分離不定詞 (split infinitive) を扱うが、分離不定詞とは、*to* 不定詞を構成する不定詞マーカー *to* と原形動詞の間に副詞(相当句)が挿入された以下(1)強調部に該当する語法である。英語圏における規範主義に照らし合わせると、現代英語においてもその使用の可否を巡っては議論を巻き起こすことが往々にしてあるようだ。

(1a) I'd like to really understand philosophy.

(Swan 2017: 145)

(1b) He began to slowly get up off the floor.

(*ibid.*)

本論では Kennedy による演説原稿を言語資料として、そこに出現する分離不定詞の機能ならびに効果に関して、修辞技法、レトリックの一つとしての側面から説明を加えることを試みたい。

議論は、以下の手順で進める。第 2 節で先行研究を概観し、本研究の位置付けを行う。第 3 節にてデータと調査手法について説明し、第 4 節ではそれぞれ認知言語学と音韻 (英語のリズム) の観点を軸とした枠組みを概観し、複数の実例に当てはめながら分析・考察を行う。第 5 節では研究をまとめつつ、今後の展望を述べる。

2. 先行研究

分離不定詞は伝統的に、「英語圏における規範主義と実際の使用の乖離」という点から注目を集めがちな文法項目であるが、本格的な研究対象とされることはあまりなく、研究書においても簡潔な言及にとどまっている場合が多い。しかし近年は多様な言語コーパスの普及に伴い、機能的観点からの研究 (Close 1987) のほか、実態の記述を目的とした大規模コーパスを用いた量的分析 (e.g. Perales-Escudero 2011)、通史的調査 (Calle-Martín and Miranda-García 2009)、英語教育への応用事例 (e.g. Phoocharoensil 2012) や所謂「世界英語 (World Englishes)」における分離不定詞の振る舞いを調査分析した研究 (Gonzales and Dita 2018)、現代英語の話し言葉コーパスを用いた量的・質的観点を組み合わせた研究 (廣田 2021) など、実証的研究が充実しつつある。

一方で、大統領の演説などの政治的談話を言語資料として活用した分離不定詞研究は極めて少なく、さらにそれらに対して認知言語学の見地を援用した視点からの分析は、管見の限りほぼなされていない。演説を始めとする政治的談話は発信者たる政治家による、聞き手に対する何らかの強いメッセージや意図が含まれていることが常である。筆者は、そこに含まれるいわゆる「破格的」な文法構造に対しても何らかの意味があり、それらを採用することでメッセージの伝達に何らかの有用性が生じると考えており、使用の動機を複合的な視点から分析するのは妥当かつ必要なことと考えている。

上記により、本研究は演説という媒体に含まれる分離不定詞の持つ(文体・修辭的)有用性を分析し、当該分野のケーススタディの一端を示すものとして機能することが見込まれる。

3. データと調査方法

調査にあたって使用したデータは、ヴァージニア大学、Miller Center が開発した *Presidential Speeches* というオンライン上のデータベースである。これは、就任演説や一般教書演説をはじめとした「米国大統領」としての演説原稿のほか、テレビ番組での討論、企業や兵士、大学生に向けて送られたスピーチのスクリプトなど、バラエティに富んだ談話データが収録されていることに加え、現在も順次データの更新が進んでいることが特徴である。Kennedy の項には、全部で 44

種類のスピーチが収録されており、それら全てに Brill Tagger を用いてそれぞれの Plain text に品詞標識を付与してコーパスとした。そして当該のデータを AntConc (ver 4.1.1.) にかけて、分離不定詞に該当する検索式から構造を検索し、用例文を収集した。

4. 分析

上記の手法に基づいて検索を行った結果、コーパスから抽出された分離不定詞の用例は 10 本の演説からわずかに 13 件のみと、極めて少ない結果となった。さらに、就任演説や一般教書演説から収集された用例は一例もなかった。調査に使用したデータは Kennedy の政治的キャリアの一部に過ぎないことを加味しても、彼が政治的なディスコースにおいて分離不定詞を活用する機会是非常に稀なものであったことが推察される。しかしながら、それは却ってどのような場面で、どのような効果を狙って Kennedy が分離不定詞を使用したのかを綿密に分析する動機につながり得る。以下では、質的観点から収集された全用例をその用法ごとに分類し、文脈 (コンテキスト) も適宜踏まえつつ考察を行う。

4.1. 副詞の意味を強調する効果

一般的な機能文法の観点からは、分離不定詞を使用する有益性は *to* 不定詞に挟まれる副詞がどの動詞を修飾するかを明確にすることが頻繁に指摘される (e.g. Huddleston and Pullum 2002: 582)。一方、分離不定詞を使わなければ文意に曖昧性が生じる文脈はそれほど多くなく、実際の用例も必ずしもそのような局面でしか出現しないわけではない。そもそも副詞は「飾りことば」としての意味合いが強いので、仮に政治演説というテキスト内でメッセージを正確に伝達することに集中するならば、*to* 不定詞を、副詞を用いてわざわざ修飾する必要はなく、言語規範的に制限を受け、自身の「無教養」を晒しているともとられかねない、分離不定詞を殊更に用いる理由は限られてくる。つまり、この構造を用いることで、大統領は自身の主張点や強調点を聴衆に印象付けてアピールしているのではないかというのである。¹

尤も、今回収集することができた Kennedy が用いた分離不定詞の用例の中にも、その動機が「別の語順にしてしまうと適切な文章にならないため」という理由で「やむなく」分離不定詞になっていると捉えられるものもある。以下の 3 例は、1961 年 5 月 25 日に行われた、“The Goal of Sending a Man to the Moon” という演説からの抜粋であるが、中でも(2)はそれに該当する。

(2) In short, these new plans will allow us to almost double the combat power of the Army in less than two months, compared to the nearly nine months heretofore required.

ここでは *double* は「倍増させる」という意味の動詞で、副詞 *almost* はそれを修飾するが、*to double* を修飾する要素として *almost* を機能させるためには、この間に置くのが最も適切ということになってしまう (換言すれば、別の位置に置くと英文としての容認性が大幅に下がるということ)。しかし本節で主に扱うのは、このような場合ではなく、他の箇所において文が成立するか否かにかかわらず「敢えて」分離不定詞にしている、というパターンであり、残り 2 例はそれに該当すると考えられる。

(3) The Office of Civil and Defense Mobilization will be reconstituted as a small staff agency to assist in the coordination of these functions. To more accurately describe its role, its title should be changed to the Office of Emergency Planning.

先ほどとは異なり、*to* と動詞 *describe* に挟まれた副詞句 *more accurately* は動詞(句)の後ろに置き換えても、ここで文意が変化するということはない。しかし、民間・国防動員局のタイトルの変更という局面において、「その役割をより正確に表現する」という目的を前面に押し出して説明することが可能になる。

¹ 機能言語学の点から、分離不定詞は有標 (marked) な語法とみることも可能だろう。Givón (1995: 28) は、分布上稀な、低頻度の形式 (有標) は、高頻度の形式 (無標; unmarked) と比較して、文内において際立った (salient) 存在であることを述べている。調査では Kennedy の演説中における「分離不定詞を避けた方の用法」の頻度を実際に数えてはいないが、分離不定詞が使われている用例よりも多いことはほぼ自明と言ってよい。

(4) But in my judgment, this is a most serious time in the life of our country and in the life of freedom around the globe, and it is the obligation, I believe, of the President of the United States **to at least make** his recommendations to the Members of the Congress, so that they can reach their own conclusions with that judgment before them. You must decide yourselves, as I have decided, and I am confident that you finally decide in the way that I have decided or not, that your judgment — as my judgment — is reached on what is in the best of our country.

本用例は、演説の結論部において、まとめとして自身の見解を述べる場面である。Kennedy は、国民に負担を強いる予算計上を議会で行うことを不本意であるとしつつも、当時が米国、そして世界中の自由の生活における最も重大な時期であることを強調し、米国大統領として最低限自分のなすべきことを主張するのである。

make 以下の要素を修飾する際には、統語的観点からすると *at least* は *to* と *make* の中間に入れざるを得ない要素であろう。しかしその要因のみならず、ここでは、Kennedy が *at least* を *to* 不定詞に挿入し、分離不定詞の形にしてまで、米国大統領としての自身の任務や矜持を強調したいという意志のあらわれである、と捉えられよう。従って、本用例は(2)と(3)のバタンの中間に位置付けられるとした。

この動機に類する例としては、例えば次のようなものがある。

(5) Mythology distracts us everywhere — in government as business, in politics as in economics, in foreign affairs as in domestic affairs. But today I want **to particularly consider** the myth and reality in our national economy. In recent months many have come to feel, as I do, that the dialog between the parties — between business and government, between the government and the public — is clogged by illusion and platitude and fails to reflect the true realities of contemporary American society.

(Commencement Address at Yale University, 1962/6/11)

当演説では、政府の規模と分配、公的財政政策、ビジネスと米国に対する国民の信頼という経済問題に焦点を当てている。Kennedy が企業と政府、政府と国民の間の対話が現代米国社会の真の現実をあらわしてはいないということを「幻想」(「神話」)と称し、イエール大学の学生たちにその実態を伝えるという文脈である。この文脈においては、分離不定詞はその場面において考慮する内容を絞って特定する働きを持つ。つまり、副詞 *particularly* を *to* 不定詞に挟むことで、議論、主張点のポイントを絞って伝達することができるのだ。

また、下の例 (6) は全米製造業者協会にて行われた演説であるが、副詞 *ever* を *to* 不定詞の間に挟むことで過去の大統領 McKinley と自身を対比させることにより、そこで演説できるという自身の立場の希少さをアピールしていると解釈できる。

(6) I understand that President McKinley and I are the only two Presidents of the United States **to ever address** such an occasion. I suppose that President McKinley and I are the only two that are regarded as fiscally sound enough to be qualified for admission to this organization on an occasion such as this.

(Address to the National Association of Manufacturers, 1961/12/6)

最後に、以下の用例を確認しよう。当例は、第二次世界大戦以後に米国の外交の基本政策として、他地域の独立や同盟を支持するなど、様々な働きかけをしてきたのは、ソビエト連邦や中国といった、特定の国家が米国を凌駕するのに十分な国力を有しないようにするという理由からだ、と述べる文脈である。

(7) The reason that we moved so far into the world was our fear that at the end of the war, and particularly when China became Communist, that Japan and Germany would collapse, and these two countries which had so long served as a barrier to the Soviet advance, and the Russian advance before that, would open up a wave of conquest of all of Europe and all of Asia, and then the balance of power turning against us we would finally be isolated and ultimately destroyed. That is what we have been engaged in for 18 years, to prevent that happening, to prevent any one monolithic power having sufficient force to destroy the United States. For that reason, we support the alliances in Latin America; for that reason, we support NATO to protect the security of Western Europe; for that reason, we joined SEATO to protect the security of Asia—so that

neither Russia nor China could control Europe and Asia, and if they could not control Europe and Asia, then our security was assured. This is what we have been involved in doing. And however dangerous and hazardous it may be, and however close it may take us to the brink on occasion, which it has, and however tired we may get of our involvements with these governments so far away, we have one simple central theme of American foreign policy which all of us must recognize, because it is a policy which we must continue to follow, and that is to support the independence of nations so that one bloc cannot gain sufficient power to finally overcome us. (Address at the Mormon Tabernacle, 1963 / 9/26)

ここでは、米国政府、あるいは社会が恐れていることが最終的に起こってしまわないように努めるとし、人々に対する警鐘を鳴らしつつ、政府の狙いを的確に説明する役割を担っているということを取り立てて強く表明しているととれる。*finally* を伴う分離不定詞を文末に配置することにより、受容者の意識を向け、強い印象を与えながら演説を終えることに成功している。

本節で見たように、Kennedy は、決して多くないものの演説の随所で分離不定詞を使用しているが、文脈の点から考えても当構造を用いることで、話者たる大統領の伝達事項、主張点を強調できる可能性が高まると考えられる。この主張のメカニズムにさらに説得力を持たせるうえでは、認知言語学の観点の中でもゲシュタルト (Gestalt; configuration) の考え方を適用することが効果的であろう。次節にてまず概略を示す。

4.1.1. 心理学の用語としてのゲシュタルトとゲシュタルト要因

実際にゲシュタルトの考え方を分析に援用するにあたり、この概念を概観する。²

これは元来、心理学の用語で、視野にある対象を 1 つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を体制化 (organization) といい、体制化によって形成されるまとまり (構造体) がゲシュタルトと呼ばれる。主たる性質として、「全体の性質は部分の総和でなく総和以上の価値を持つ」「部分の性質は全体の中で規定される」というものがある。ゲシュタルトの概念は、知覚のみならず、記憶、思考、要求、発達、行動、集団特性など、広く心的過程一般に適用され、言語においても、語や構文が個別の用法の総和としては特徴付けられないことからこのことが理解できる。

ゲシュタルトとして体制化される一般的な要因として、ゲシュタルト心理学の観点からは「ゲシュタルトの要因」が指摘される。Ungerer and Schmid (2006: 36) では、それらの要因の主要なものとして、具体的に以下の 4 つを挙げている。³

- (I) ‘**principle of proximity**’: individual elements with a small distance between them will be perceived as being somehow related to each other;
- (II) ‘**principle of similarity**’: individual elements that are similar tend to be perceived as one common segment;
- (III) ‘**principle of closure**’: perceptual organization tends to be anchored in closed figures;
- (IV) ‘**principle of continuation**’: elements will be perceived as wholes if they only have few interruptions.

本枠組みに基づき、次節では、分離不定詞が演説中でどのような機能を果たしているかについて分析してゆく。

4.1.2. ゲシュタルトの要因の適用

分離不定詞を使用することにより、話者としての大統領の伝達事項を明快にし、強調する効果をもたらし得るとの旨を先に述べた。言及したゲシュタルトの概念のうち、ここでは中でも principle of proximity の視点を援用することが適切であると考えられる。

(5) ‘Mythology distracts us everywhere — in government as business, in politics as in economics, in foreign affairs as in domestic affairs. But today I want to particularly consider the myth and reality in our national economy. (Commencement Address at Yale University, 1962 / 6 / 11, 再掲)

² 本説明においては、クルト (1988)、河上 (1996)、菅井・黛 (2005)、Evans and Green (2006) 他を参照した。

³ (1) には「近接の原理」、(2)には「類同の原理」、(3)には「閉合の原理」、(4)には「連続の原理」という訳が充てられる。(池上ほか訳 1998)

太字下線部の場所では分離不定詞を避けて、以下のような文章にしたとしても、これらが意味するところは同じである。

(5) "I want **to consider** the myth and reality in our national economy **particularly**."

しかし、本文の目的語 *the myth and ...* の箇所が長く、副詞 *particularly* が *consider* を修飾しているかどうか不明確であるし、場合によっては副詞の意味が薄まった結果、かえって意味が捉えづらくなってしまう可能性があるほか、文意を誤解してしまう恐れもある。Ungerer and Schmid においては「人間は近くに存在している言語要素をまとめて一つにとらえる傾向がある」と記述されているが、ここからは意味の繋がりが強い副詞と動詞の原形を隣接させることにより、結果として *to* 不定詞を分離することになったとしても、分離不定詞を避けた場合に比べて意味が通りやすくなると解釈できる。すなわち、目的語が長い場合や、そうでない場合でも文意を明快に伝えたい場合は語と語の間隔が開きすぎるのを防ぐため、可能な限り隣接させたほうが良い、というわけである。さらに演説という媒体では、伝達的手段としては言うまでもなく「音声」が中心であるため、聴衆にとっては、その内容は前から順に理解されることが多い。故に文字情報であれば比較的容易に理解できることであっても、目的語によって動詞と副詞の間に距離を作ってしまうことで、*principle of proximity* で言語を理解する人間には、それらの関連性を認めるのが困難になる可能性が高い。そのような事態を避けるために、分離不定詞は適切かつシンプルな手法として、「話者 (発信者) の主張を的確に伝える」という効果を発揮していると考えられる。⁴

4.2. 分離不定詞を「用いた構文」と「避けた構文」を並列した意味の強調

さらに興味深いことに、本調査では分離不定詞を用いた構文と使用を避けた構文とが並列されている用例が複数確認された。こちらでも「分離不定詞を用いることで話者の伝達事項をより強く示すことができる」という点からゲシュタルトの考え方を応用することが可能である。

1 つ目は、1961 年 4 月 27 日に行われた以下の“Address: The President and Press”からの引用である。これは、ニューヨークのウォルドーフ・アストリア・ホテルで、アメリカ新聞発行者協会を前に行った演説で、この場において彼は、共産主義との戦いにおいて、冷戦下での機密資料の公開に関して、公式に宣言された戦争と同じ基準を適用することで報道機関に協力を要請した。

(8) ...Without debate, without criticism, no Administration and no country can succeed—and no republic can survive. That is why the Athenian law-maker Solon decreed it a crime for any citizen to shrink from controversy. And that is why our press was protected by the First Amendment—the only business in America specifically protected by the Constitution—not primarily to amuse and entertain, not to emphasize the trivial and the sentimental, not **to simply “give the public what it wants”**—but to inform, to arouse, to reflect, to state our dangers and our opportunities, to indicate our crises and our choices, to lead, mold, educate and sometimes even anger public opinion. ...

本用例は、*primarily to amuse and entertain* の箇所で分離不定詞を避け、*to simply give...* の箇所で分離不定詞の形になっている。筆者はこれらを意図的に使い分けていると判断したのであるが、文字情報として見た際に興味深いのは、後者の *give the public what it wants* といった動詞句の箇所が引用符で括られている点である。文脈から判断すると、ここでは「米国のあるべき報道のスタンス」が論じられている。*give the public what it wants* というフレーズはそれまでに出てきた *amuse, entertain, emphasize the trivial and sentimental* といった具体的な動作の一つにまとめたものであり、これを通して Kennedy はメディア業界の「大衆が欲しがる記事を与えて彼らに迎合する」姿勢を批判していると捉えられる。前者では *not* と *to* の間に副詞を置くことにより個々の動詞をまとめて修飾しているが、*not to...* の繰り返しの箇所で Kennedy が最も強く伝えたいのは恐らく *not to give the public what it wants* の箇所であろう。そこで動詞句 *give...* に最も近い位置に *simply* を置くことにより、後続する動詞句への「制限」の意味合いを強めようとしていると解釈できる。さらに、

⁴ 演説という「音声言語を中心とした」媒体とゲシュタルト要因との関連について、大森文子先生より御助言・御教示をいただいた。本研究における主張を強めるうえで非常に有益な視点であったと思われるため、ここに特に記す。

not に可能な限り近いところに副詞 *simply* を置いて、「否定」の意味合いを可能な限り強めることも意図していると推測できる。すなわち、ここで使われている副詞がそれぞれ持つ「否定」と「制限」を表す副詞を近づけておくことでそれぞれの意味合いを可能な限り最大化して聴衆に訴えかけ、印象付けられることが可能になるのである。ここで Kennedy が分離不定詞を用いているのは、その効果を狙っているのではないだろうか。

もう一つの例は、1961 年 6 月 6 日の “Report to the American People on Returning from Europe” からの引用である。これは欧州歴訪から帰国した際に行ったテレビ演説で、Kennedy はドイツの分裂状態について語り、ソビエト連邦の Nikita Khrushchev 首相との会談の経緯や様子などを米国国民に伝えた。

(9) I wanted to present our views to him **directly, precisely, realistically**, and with an opportunity for discussion and clarification. This was done. No new aims were stated in private that have not been stated in public on either side. The gap between us was not, in such a short period, **materially** reduced, but at least the channels of communications were opened more **fully**, at least the chances of a dangerous misjudgment on either side should now be less, and at least the men on whose decisions the peace in part depends have agreed to remain in contact. This is important, for neither of us tried to merely please the other, to agree merely to be agreeable, to say what the other wanted to hear. ⁵ (※we = Kennedy and Khrushchev)

ここでは、*to merely please* の箇所では分離不定詞が使われている一方で、直後の *to agree merely to be agreeable* (下線) の箇所では分離不定詞が避けられている。*merely* が *to* 不定詞を修飾する共通の副詞として使われていることで、筆者にはその忝意性がより明確に感じ取れるのであるが、こちらは(7)とは逆に、文脈的に(*try*) *to please the other* がまとめの役割を果たす動詞句となっており、*to agree, to be agreeable, to say what the other wanted to hear* の三つが動作の具体的な内容を表している。つまり、Kennedy は国民に対して当時の「敵国」の首脳である Khrushchev に「互いの耳触りの良いことを言って単に媚びた」のではなく、「あくまで一国の国家元首として対等な立場で合意に至った」という内容を印象付けたい意図が、敢えて言語学的に有標な⁶ 分離不定詞を使用することによって浮き彫りになっている。本節では、分離不定詞を用いた構文と避けた構文を並列させたパターンについて考察し、Kennedy が分離不定詞を演説に含める意図の一つとして、ゲシュタルト要因の観点から、聴衆にその箇所に自然と意識を向けるインセンティブを与える可能性が高いためであることを述べた。

4.3. 韻律 (リズム) との関連

Kennedy は、その有名な就任演説を筆頭に、音韻的に優れた演説を行ってきたことは有名である (cf: 松尾 1987: 46-50)。既に述べたように、演説は音を伴ってメッセージを伝えるメディアであるため、効果的な伝達を行うためには、受容者が聞いて心地の良いリズムを整えることは極めて重要な要素である。英語の文章、特に韻文において、Leech (1969: Chapter 7) が主要な韻律として以下を挙げている (太字は強勢を置いて読む箇所)。

i) 弱強格 (iambic meter)

The **ploughman** homeward **plods** his weary way, (ibid: 113)

ii) 強弱格 (trochaic meter)

Mirth with **thee** I mean to live (ibid: 112)

iii) 弱弱強格 (anapaestic meter)

I am **monarch** of **all** I survey; (ibid: 115)

⁵ 言語文化レトリック研究会にて、渡辺秀樹先生より、「本用例では副詞が頻出しており、特に *-ly* 副詞の多用が目立つ (太字)。中でも用例末尾に位置する副詞である *merely* は本文における意味合いとしても際立たせておくべき副詞として、分離不定詞の形として印象付けることに成功していると思われる。分離不定詞と強意の関連を指摘するのであれば、そこにも言及が必要ではないか」との旨の御指摘をいただいた。筆者にとって、発表時には気づき得なかった視点であり、興味深い点であると考えられるので、談話に含まれる分離不定詞と既出の副詞との関連性に関する問題も今後取り組むことを予定している。

⁶ 本稿脚注 2 を参照されたい。

iv) 強弱弱格 (dactylic meter)

Ladybird, ladybird, **Fly away home**, (ibid: 112)

リズムと分離不定詞との関連を中心的話題として扱った文献に、van Draat (1910) がある。彼は特に英語の散文において、副詞を置く箇所によって特定の効果を生み出せると説き、その例として、分離不定詞は以下の 5 つの強勢パターンにおいて自然な韻律を形成するとしている (ibid: 103-123) (x=弱 (強勢を置かない箇所), / =強勢を置く箇所)。

① x / x / (x / x /)

Little did it enter my hand **to even use** the place in summer.

(ibid: 108; *Elizabeth and German Garden*, T.12)

② x / x x /

Let us be too grateful for what his nature gave **to rashly conjecture** the effect of modifications

(ibid: 115; Preface to *Vicar of Wakefield*, Scott Libr.8.)

③ x / x x / x /

It is our interest **to absolutely ignore** these insulting attacks

(ibid: 118; *Times* 16 March 1909)

④ x / x x / x x /

To calmly relinquish the struggle at that point would have been the act of Stoic, but not of a woman.

(ibid: 119; Th. Hardy, *The Hand of Ethelberta*, Chapter 28.)

⑤ x x / x x /

For **to deliberately knock** her head against the certainties

(ibid: 120; Stopford Brooke, *Tennyson I*, 272.)

Crystal (1984:30 / 1995: 194) は *Star Trek* に出現する台詞の一部である *To boldly go*⁷ という一節が、英語の自然なリズムに則っており、例えば ‘The curfew tolls the knell of parting day...’ という文章と同様に英語の詩学的伝統に則った韻律を構成すると述べている (‘The tum-te-tum rhythm’)。⁸ これを踏まえ、Kennedy の演説に出現する分離不定詞が現実には英語の自然なリズムを構成しているか、複数の実用例を観察しつつ再考したい。一つ目の用例は、1961 年 5 月に行われた、カナダ議会の合同会議にて行った国際関係と安全保障に関する演説からである。

(10) Both of these measures — improved conventional forces and increased nuclear forces — are put forward in recognition of the fact that the defense of Europe and the assurances that can be given to the people of Europe and the defense of North America are invisible — in the hope that no aggressor will mistake our desire for peace with our determination to respond instantly to any attack with whatever force is appropriate-and in the conviction that the time has come for all members of the NATO community **to further increase** and integrate their respective forces in the NATO command area, coordinating and sharing in research, development, production, storage, defense, command and training at all levels of armaments.

(Address before the Canadian Parliament, 1961 / 5 / 17)

通例、不定詞マーカの *to* には強勢が置かれないことから、本用例を上記の基準に沿って強勢のマーク付け(分類)をすると、下のように、x /x x/x x/x というリズム構造となる。これは弱強調 (iambic) ならびに弱弱強調 (anapaestic) が混在したもので、英語散文の音韻としてはありふれたものといえる。

to **fur**-ther in-**cre**-ase and in-**teg**-rate (iambic / anapaestic)

一方、先述の(8)の該当箇所においては、前後の文脈と合わせて考えても、本分離不定詞が弱強調

⁷ Space: the final frontier. These are the voyages of the Starship Enterprise. Its five-year mission: to explore strange new worlds. To seek out new life and new civilization. **To boldly go** where no man has gone before! (Star Trek: The Next Generation.)

⁸ Crystal (1984/1995)では具体的な名称までは述べられていなかったが、Crystal (2006: 126)では‘The curfew tolls the knell of parting day...’の文は弱強五歩格 (iambic pentameter) であると明確に述べられている。

(iambic) を構成する上で重要な存在であることは明白であり、リズムを生み出す役割を果たしている。⁹

本用例以外にも、分離不定詞を採用することによって英語における適正な音調を形成すると判断されるパターンもみられる。以下の用例を見られたい。

(9)' This is important, for neither of us tried **to merely please** the other, to agree merely to be agreeable, to say what the other wanted to hear. (=9)の抜粋再掲)

上の用例において、該当箇所が強勢の有無に基づいて分類すると、以下のようになる。

to **mere-ly please** the **o**-ther (iambic) (x /x / x /x)

to a-**gree mere-ly** to be agreeable (x x/ /x x x/x)

前者は上記のように弱強調が見事に編み出されているのに対し、後者の *to agree merely ...* は分離不定詞を避けてしまったために強勢を置く音節が連続して「かち合う」状態が形成されてしまっている。Crystal (1984) によるとこの状態は 'ponderous' であり、あまり望ましくないものようだ。

¹⁰この文構造が成立した動機の一つとして、ゲシュタルト要因が作用すると推測されることは4.2節にて既に述べたが、分離不定詞を使う場合と避ける場合において、音の変調が見られてしまうため、こちらも動機として作用している可能性があることを確認できる。

さらに下の文は、(7)でみた用例の周辺箇所を抜粋したものである。

(7)' that is to support the independence of nations so that one bloc cannot gain sufficient power **to finally overcome** us. (= (7)の抜粋再掲)

(7)'では、分離不定詞を用いることにより「弱強弱弱強弱強(弱)」の、英語散文における適正なリズムを導き出すことに成功している(*overcome* の語頭の *o*-は第二アクセントとしてカウントした)。

to **fi-nal-ly o-ver-come** us (x /xx /x/ x)

本例からは、分離不定詞を文末に配置し、聴き心地の良いリズムで文章を終えて、聴衆に自身の主張点に関して強い印象を残させよう、という Kennedy の戦略が見え隠れしないだろうか。

最後に、*to* と原形動詞の間に複数語が嵌入している分離不定詞の事例も観察したい。分析にあたっては(3)の用例に再び着目する。

(3)' **To more accurately describe** its role, its title should be changed to the Office of Emergency Planning. (= (3)の抜粋再掲)

これを強勢の有無で分類すると、以下のようになる。

to **mor-e ac-cu-rate-ly de-scribe** its role,... (x /x /xxx x /)

副詞 *accurately* に音節数が多いことで、van Draat の提示するリズムには一見そぐわないようにも思われるが、強勢を伴う音節がかち合うことはなく、実際には音節ごとに区切って発音することはほぼないため、表記以上に弱音節の連続が音調を崩すことに直接繋がらないと判断できる¹¹。

以上のように、複数語の副詞(相当句)が挟まれた場合でも、分離不定詞が韻律に沿って使用される

⁹ 渡辺秀樹先生より御指摘をいただいた。

¹⁰ 英文が「自然な英語のリズム」にかなっているどうかの議論は韻文を対象としている場合が多く、その規則が散文テキストに応用できるか、断言することは困難である。散文を対象とした文献である van Draat (1910)は「*to* + 副詞 + 動詞の原形」(あるいはその前後数語)というかたまりのみに着目していたが、むしろ散文の場合は分離不定詞を含む文章全体の韻律を確認した方が望ましいかもしれない(本稿は便宜的に前者を採択した)。

¹¹ ネイティヴのインフォーマントによると、この箇所は実際には「弱強弱強弱弱強 (x/x/xx/)」くらいに聞こえたのではないかと、との意見であった。

場合があることが明らかになった。

Kennedy の演説は、かねてより音韻的効果を重視したものであることが指摘されてきたが、これは単なる印象などではないこと、そして分離不定詞という要素を介在させて文章のリズム感を整えられている場合がある可能性も示唆された。無論、予め示された弱強勢の分類に従わない用例も一定数見受けられる。それらは別の文体的事由によって用いられたのであるが、リズムを整えることは、談話においては自身の主張点や強調したい事柄を聴衆の耳により残し、結果として内容的に伝達できることを意味するため、特に演説においては分離不定詞が主張点を強調するための談話戦略 (ディスコース・ストラテジー) として機能するという主張を支持する根拠の一つとなり得る。

一方で、音韻的側面の分析法に対しては、限界と呼べる点もある。今回のように音声中心の媒体を用いてリズムの点から言語を分析しようとする場合、音声データ (あるいは映像データ) などを伴った、視覚・聴覚的に訴えるデータを提示することで論の説得力を高められる可能性が高いが、その開催時期が古いものや知名度の点で有名と言い難い演説に関しては音声・映像データ自体が残されていないケースもある。その場合には例えばどの箇所に強勢を置くか、という点も分析者の知識や辞書の表記などに頼りつつ、書き言葉テキストの一つとして分類せざるを得ない。これについては今後の検討課題となる。

5. おわりに

以上、本研究では、John F. Kennedy が大統領であった時代に行われた演説の中から分離不定詞が用いられていた用例をピックアップし、その修辭的效果に関して、認知言語学の観点並びに音韻的側面から分析を行った。

Kennedy は決して頻繁に分離不定詞を用いていたわけではなかったものの、それでも自身の主張点や任務を明確にするなど、要所に分離不定詞を織り交ぜることによって、聴衆の関心を的確に引きつけようと努めていることが読み取れ、その談話戦略の一つとして、当時「破格」とされ、使用が忌避されがちであった分離不定詞を自らの演説に織り交ぜたのではないだろうか。その効果に対し、ゲシュタルト要因や韻律といった多面的な視座から説明を加え、従来の研究では殆ど指摘されてこなかった幾つかの新しい知見を得ることができたのは特筆すべきだ。

本論では Kennedy に対象を絞っているが、現時点ではそれが彼の演説にのみ認められる特徴といえるかの十分な比較検討には至っていない。他の(著名な)大統領が演説を行う際に用いられた分離不定詞からも同じような効果が得られるかという点を中心に、今後引き続き調査を行い、究明してゆく所存である。

謝辞

本稿は 2023 年 3 月 7 日開催の言語文化レトリック研究会での筆者の発表に基づき、大幅な加筆修正を施したものである。渡辺秀樹先生、大森文子先生、中畠浩貴先生、および司会を御担当くださった田村幸誠先生をはじめ、出席者の方々より数多くの貴重なコメントやアドバイスを賜った。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 明石和康. (2012) 『大統領でたどるアメリカの歴史』 (岩波ジュニア新書 723) 東京 : 岩波書店.
- Calle-Martín, J., & Miranda-García, A. (2009) On the use of split infinitives in English. In: *Corpus Linguistics: Refinements and Reassessments*. 347-364. London: Brill.
- Close, R.A. (1987) Notes on the split infinitive. *Journal of English Linguistics*, 20 (2), 217-229.
- Crystal, D. (1984) *Who cares about English Usage?* London: Penguin Books.
- Crystal, D. (1995[2003]) *The Cambridge Encyclopedia of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2006) *The Fight for English: How Language Pundits Ate, Shot and Left*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, V. and M. Green. (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Givón, T. (1995) *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gonzales, W.D.W. and Dita, S.N. (2018) Split infinitives across World Englishes: a corpus-based investigation. *Asian Englishes*, 20 (3), 242-267.
- 廣田友晴. (2021) 「否定分離不定詞の変遷 : 1990 年代から 2010 年代における話し言葉の分析を通じて」 『語法と理論の接続をめざして-英語の通時的・共時的広がりから考える 17 の論考』 東京 : ひつじ書房.
- Huddleston, R. and G.K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- 河上誓作 (編著). (1996) 『認知言語学の基礎』 東京 : 研究社.
- クルト, コフカ (著), 鈴木正彌 (完訳). (1988) 『ゲシュタルト心理学の原理』 東京 : 福村出版.
- Leech, G. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman.
- 松尾弐之. (1987) 『大統領の英語』 東京 : 講談社. (講談社現代新書)
- 岡部朗一. (1994) 『大統領の説得術 : 人を動かすレトリック』 東京 : 講談社. (講談社現代新書)
- Perales-Escudero, M.D. (2011) To split or to not split: The split infinitive past and present. *Journal of English Linguistics*, 39(4), 313-334.
- Phoocharoensil, S. (2012) The English split infinitive: A comparative study of learner corpora. *International Journal of Research Studies in English Learning*, 1 (1) 1-12.
- 菅井三実・黛穂高. (2005) 「言語能力と認知機構の互換性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』 27: 63-71.
- Swan, M. (2017) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Ungerer, F., and H.J. Schmid. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Routledge. (= F. ウンゲラー・H.-J. シュミット. 池上嘉彦ほか訳. (1998) 『認知言語学入門』 東京 : 大修館書店.)
- van Draat, F. (1910) *Rhythm in English prose*. Heidelberg : Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.

データベース

Miller Center, *Presidential Speeches*. Virginia University.
<https://millercenter.org/the-presidency/presidential-speeches>.

1. はじめに

筆者は2023年2月に、大阪大学次世代挑戦的研究者育成プロジェクトの北米研修に参加し、サンフランシスコに約1週間滞在する機会があり、現地滞在中に Alcatraz 島に行くことができた。Alcatraz 島とは Al Capone をはじめとする、アメリカの凶悪犯罪者たちを収容していた刑務所が位置した孤島であり、現在はその跡地が観光施設として残っている。その中で筆者の興味を引いたのが、囚人たちの余暇について言及するパネル（図1）である。20世紀初頭の囚人たちが余暇の野球で用いていたとされるバットやグローブが展示されていたのである。

この展示を見て、筆者がまず思い出したのが、Robert Elias が *Baseball and the American Dream* にて言及している次の一節である。

Baseball has been used to demonstrate the benefits of play, team spirit, and sportsmanship. Playing the game has been regarded as a preventative against things such as crime, violence, delinquency, and even the stresses of modern life. Baseball, it is said, promotes positive values such as honesty, fair play, wholesomeness, and other aspects of the American way. (12; underline mine)



【図1】 Alcatraz 島での Recreation Yard に関する展示（筆者撮影）

これに従えば、アメリカの刑務所における余暇の野球は、囚人に対して「好ましいアメリカ的価値観」を教育し、再犯防止を目指すための場の一つとして機能していたことになる。規則に準じてゲームが進み、その枠組みの中で勝敗が決する野球をすることは、ルールに従って社会で生きていくことのアナロジーであり、野球は受刑者たちが規則遵守を学び直し更生するための教材としての役割を担ったのである。もちろん、野球以外のスポーツでもこうした目的は達成されうるだろうし、さらには、社会の法を犯した者だけでなく、これから社会の法を学ぶ少年なども対象となりうるのだが、規則に従って野球をすることが、法治国家アメリカで生きていくための健全な精神の育成に寄与すると考えられていたのである。²

さて、今年度の言語文化共同研究プロジェクトのテーマ「レトリックと文法」に対して、筆者の専門であるアメリカ野球文学からどのようなアプローチが可能かを考えていたところ、ちょうど Alcatraz 島でのこの経験があり、アメリカ野球文学と文法のリンクを見出すことができた。本稿では、同じ「法」という枠組みから、野球における法である「野球規則」に焦点を当てて、アメリカ文学を論じてみようと思いついたのである。

野球規則の話に入る前に、言語学の視点から、文法とレトリックの関係について少しだけ言及しておきたい。例えば、Raymond W. Gibb による“the widely held assumption in linguistics and philosophy [is] that tropes violate, or ‘flout,’ norms of cooperative conversation.” (253)という指摘がその一例となるように、比喩や修辞表現は日常言語からの逸脱であると扱われてきたところがある。これを言い換えると、言語やコミュニケーションには素地となるルール（文法）があり、それらを逸脱することが、修辞的效果を生み出すきっかけとなりうるのである。（もちろん、後述するよ

¹ 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2138 の支援を受けたものです。

² Wiley Lee Umphlett は、スポーツがアメリカ文学で使われ始めた頃は、若者向けの作品がほとんどだったことを指摘したうえで、その理由を“[J]uvenile sports novels . . . had societal approval in the main in that their primary objective was didactic: to teach young readers manly virtues such as fair play and the rewards of hard work in meeting a challenge and/or achieving a goal and, most importantly, to create a healthy respect for authority.” (12)と説明している。ここに示されているように、スポーツそのもの、そして文学におけるスポーツは、若者が社会で生きる上での教材として長年利用されてきたのだ。

うに、現実的なレベルで言えば、破格を許容させるほどのレトリックの効果の存在が前提になるのだが。)

さて、これをスポーツに当てはめると、どうなるだろうか。言語では文法が修辞技法を生む素地を提供する一方で、スポーツにおいては「規則から逸脱する」ことは原則許されず、処分の対象となる。上述の囚人と野球の関係でも見られたように、スポーツとは、規則を遵守すべき場なのである。こういったスポーツにおける規則を文学作品はどのように扱っているのか。これを、筆者の専門である野球を例に取り上げ探っていくのが本稿の目的である。本稿では、野球を定義する要素の1つである「野球規則」のアメリカ野球文学中での役割を概観し、1)野球規則を作品に取り入れることにはどのような効果があるのか、2)野球規則が持つ文化的・文学的意義とは何なのか、さらには 3)ルールを守る/破るということはどのように扱われるのか、といった視点から、アメリカ文学作品からの引用を含めつつ、議論を行ってみたい。

2. 野球を学びアメリカに生きるアイロニー

まず、本節では「はじめに」のセクションで言及した「囚人と野球」を出発点に、刑務所で野球を学んだ人物が主人公である August Wilson の *Fences* (1986) という劇作品を取り上げたい。Wilson はアメリカを代表する黒人劇作家で、「ピッツバーグ・サイクル」という、20 世紀を 10 年ごとに区切った各年代を時代背景に設定した、アメリカ黒人の苦悩を描く合計 10 作品から成るサイクル劇を完成させたことで著名である。*Fences* はその 3 作目に当たる、1950 年代を描いた作品である。主人公は、元ネグロ・リーグのスラッガー Troy Maxson で、劇は 1957 年、彼が 53 歳の頃から始まる。彼は青年期に犯した強盗殺人が原因で投獄されていたが、53 歳の彼は“that fifteen years [in the penitentiary] cured me of that robbing stuff.” (55) と刑務所での日々を振り返っているように、服役を経て更生できたと考えている。事実、妻 Rose と結婚し、貧しいながらも一家の長として勤労に奮闘しているなど、出所後の彼は健全なアメリカ市民として生きているようにみえる。(実際には、彼の不倫が明るみになり、家族の調和が失われていくのだが。) さらに、彼は刑務所での日々で野球を学んでおり、出所の際にはプロ野球選手になるという、彼なりのアメリカン・ドリームを手にしてもいた。これらを踏まえると、「規則のもとに行われる野球をしたこと」が彼の更生の一翼を担っていたと考えることは決して的外れではないだろう。その意味で Troy は、先ほどの Elias からの引用にあった、再犯防止の目的も期待された、規則に従い野球をすることを通してアメリカ的価値観・健全な市民像を手にした 1 人であり、良き市民を育てるための教材としての野球の価値を証明する存在とも呼べるのである。

野球を通して、健全なアメリカ市民像だけでなく、彼なりのアメリカン・ドリームまでも手にした Troy だったが、一方で、出所後のアメリカの現実、野球が促進するとされる「好ましいアメリカ的価値観」だけでは生きていけないことを彼に思い知らせる。例えば、1904 年生まれの Troy にとって、Jackie Robinson が Major League Baseball (以下、MLB) でデビューしたのは彼が 43 歳の頃であり、彼が選手として全盛の頃は、MLB は黒人に対して門戸を開いていなかった。たとえ刑務所で野球を楽しめたとしても、出所後のアメリカ社会で彼がプロとして活躍できる場はネグロ・リーグしかなく、アメリカでの名声をほしいままにできる場などそもそもなかったのだ。そんな彼は、1957 年時点でも、MLB でプレーする黒人選手に対して懐疑的であり、いまだに自身の方が優れていると主張している。さらに、息子 Cory がアメリカン・フットボールの推薦選手として大学進学目だったにもかかわらず、黒人がアメリカスポーツ界で活躍できないことを身に染みるほど実感していた Troy は、その推薦を勝手に破棄してしまう。こうした彼の状況が示すように、Troy は野球を通してアメリカ的価値観を塗り込まれたものの、その理想的なアメリカ観が称揚するような民主主義的思想の恩恵を受けることはできず、対照的に、人種差別の現実、つまり、WASP 中心のイデオロギーのもとに叶うことのない黒人のアメリカン・ドリームの悲劇を思い知らされたのだ。野球を通して得られるとされる「好ましいアメリカ的価値観」は、WASP 中心主義的な社会への順応 (conformity) を促す媒体に過ぎず、個人がアメリカで花を咲かせられるかどうかは、また別問題であり、Troy らマイノリティーは、規則に沿って野球をしたところで、白人中心の不文律という bylaw に翻弄され続けていたのである。野球を学ぶことで、アメリカ文化へのリテラシーは身に付くかもしれないが、そのリテラシーを手にも彼らが眺めるアメリカの現

実は、まさにアメリカン・ナイトメアだったのだ。

こうした事例は、Troy のような黒人選手だけに当てはまるものではない。今やイチロー選手が日米両方の野球史に残る偉大な名選手であることに異議を唱える者は誰もいないだろうが、これほどまでの伝説的な功績を数々残した彼に対して、Ichiro と Cockroach を合わせた“Ichiroach”という侮辱的なニックネームが生まれてもいる。辞書を引くまでもなく、人間をゴキブリに喩えることが褒め言葉になるはずはない。豪快なホームランに代表される、アメリカで好まれるような spectacular なプレーではなく、(内野)安打を狙い、盗塁をし、俊足でダイヤモンドを駆け抜けていくイチロー選手の姿は、まるでゴキブリが部屋を走り回るかのような不快な野球スタイルに映ったのだろう。イチロー選手のような模範的な野球選手さえも、好意的に受け入れられない人がいたということは、野球規則が表象しうるアメリカ文化の現実を炙り出す。野球と関連付けられる「好ましいアメリカ的価値観」は氷山の一角にすぎず、実際には「アメリカ人になれる」人物を選抜する不文律も含めてはじめて、アメリカの現実を読み解くことになると言えるからである。

以上みてきたように、野球規則を学ぶ/知る、そしてその規則に従って野球をすることは、アメリカ的価値観を身に付けるという表向きの利益だけでなく、アメリカ社会・文化への順応 (conformity) への足固めとして機能している。そして、上で取り上げた Elias の指摘する「好ましい価値観」は、WASP 中心主義的なイデオロギーが優位であるアメリカで好ましいとされるもの、として捉えられるべきなのである。アメリカの鏡としての野球を定義する野球規則は、アメリカ的価値観を保持する土台を提供する一方で、その価値観に従いアメリカで生きていくには、それに付随する不文律の存在は見逃せないのだ。

3. 明文化と文明 – アメリカの覇権のメトニミー

野球とアメリカ精神の密接な関係に言及する際に必ず引用される Jacques Barzun の“Whoever wants to know the heart of America should learn baseball.” (159)という言葉が示すように、Barzun は野球を学ぶことはアメリカ人になるための通過儀礼の 1 つとしてふさわしいと捉えていた。彼の意図に反し、この言葉がアイロニックなコノテーションを運びうることは、前節で確認した通りである。とはいえ、野球がアメリカ人の心に住み着いた national pastime であることに相違なく、アメリカ文化において揺るぎない存在価値を持ち続けているのもまた真である。例えば、野球好きとして知られる現代アメリカを代表する作家の 1 人 Paul Auster はエッセイ *The Invention of Solitude* (1982) で、変わりゆくアメリカで変わらないものとしての野球の地位について語っている。

He [Paul Auster] reads in a book: since 1893 (the year before his grandfather was born), when the pitcher's mound was moved back ten feet, the shape of the field has not changed. The diamond is a part of our consciousness. Its pristine geometry of white lines, green grass, and brown dirt is an icon as familiar as the stars and stripes. As opposed to just about everything else in American life during this century, baseball has remained constant. Except for a few minor alterations (artificial turf, designated hitters), the game as it is played today is remarkably similar to the one played by Wee Willie Keeler and the old Baltimore Orioles. (123-4; underline mine)

彼が示しているのは、野球規則によって規定されるダイヤモンドの形、塁間の長さが星条旗同様にアメリカを表象するアイコンであること、そして、これらが長年変更されなかったことで、野球は変わり続けるアメリカの中で変わらないものとしての存在価値を手にし、アメリカ文化の sanctuary のような役割を担ってきたことである。野球規則の存在は、野球というスポーツの枠組みを維持してきただけでなく、たとえ普段意識されなくとも、その枠組みが維持されることで、アメリカ人の心に安らぎまでもたらしてきたのである。

Philip Roth の *The Great American Novel* (1973、以下 *GAN*) に登場する General Oakhart も、野球規則 (the Rules and the Regulation) を変えることは、アメリカ性までも揺るがす大事件だと捉えており、野球規則を遵守することの重要性を子どもたちに次のように熱弁している。

And that is why I would impress upon your young minds a belief in following to the letter, the Rules and the Regulations, as they have been laid down by thoughtful and serious men before you or I were ever born, and as they have survived in baseball for a hundred years now, and in human life since the

dawn of civilization. Boys and girls, take away the Rules and the Regulations, and you don't have civilized life as we know and revere it. If I have any advice for you today, it's this – don't try to shorten the base paths in order to reach home plate faster and score. All you have accomplished by that technique is to cheapen the value of a run. (53; emphasis original)

後述するように、こうした General Oakhart の野球規則への盲信は Roth による皮肉の対象なのだが、Oakhart 曰く、先人の知恵の集積と言える野球規則を軽んじることは、アメリカの心の拠り所を手放すことに等しい。さらに、Oakhart の発言では、野球規則をないがしろにすることは、その対の概念である「野蛮(wild)」な劣悪世界への回帰と結びつけられている。野球規則そのものが、アメリカ性を体現するテキストであるだけでなく、成文化された規則制度に則ってプレーされる球技の存在が、アメリカが文明化した社会であることの象徴として捉えられているのである。³事実、明文化された規則に沿って行われる国技の存在は、アメリカが文明化していることのメタファーとして、さらにはアメリカ例外主義のメタファーとして機能している。

ここでは、Nakamura (2023)で論じた、Don DeLillo の *Underworld* (1997)におけるアメリカ例外主義のメタファーとしての野球に言及してみたい。本作中では、アメリカ人男性 3 人とイギリス人女性 1 人の 4 人組が野球を見ながら会食しているシーンがあり、BBC のプロデューサー Jane Farish は、野球について全く知らない人物として造形されている。イギリス人かつ女性が野球を知らないという、ステレオタイプが二重に反映されている Farish に対して、アメリカ人男性 3 人は野球を紹介していく。この会話では、Donnie Moore という黒人野球選手の悲劇への言及がその役割を担うように、野球はアメリカ社会の縮図として、Farish がアメリカを理解するための教材として機能している。さらに、彼らの別れの場面では、“Farish had some questions about the infield fly rule. Sims and Glassic were able to get together on this by the time we got out to the car. It was an unexpected boon for the BBC” (100)とも書かれている。インフィールド・フライという、比較的専門的なルールについて彼女が知ることについて「予期せぬ恩恵(an unexpected boon)」と書かれていることは、野球のある国アメリカと、野球のない(≡野球ではなくクリケットを楽しむ)国イギリスとの対比を通して、アメリカ例外主義がほのめかされていることの証左となる。

さらに、1951 年 10 月 3 日のポロ・グラウンドを舞台とする *Underworld* のプロローグは、翌日の *New York Times* の表紙で、この試合を決した Bobby Thomson によるサヨナラホームランとソ連が核実験に成功したニュースが並置されていることに着想を得て書かれたものである。John N. Duvall が “if October 3, 1951, exists as part of American consciousness, it is for Bobby Thomson's heroics, not Russia's atomic bomb.” (294) と指摘していることは、この *Underworld* のプロローグでは、冷戦によるアポカリプスが目前に迫りつつあるなかで、ソビエトの核爆弾の恐怖を「打ち返し」、アメリカの意識から恐怖をかき消すことができるほどの強国アメリカのメトニミーとして Thomson のホームランが機能しうることを示しているとも考えられる。ここでも、冷戦期における東西の二項対立が、野球がある西側代表アメリカと野球がない東側代表ロシア(ソ連)として捉えられ、前者が優位であるとする視点の存在が垣間見えるのである。(Nakamura (2023)では、*Underworld* でこうしたテーマがいかに表象されているかも議論した。詳細はそちらをご参照いただきたい。)

*GAN*においても、ソビエトに亡命した元プロ投手 Gil Gamesh が、ソ連のスパイであることを隠しつつアメリカに戻ってきたのは、ロシアに野球がなかったからだと述べているし、さらにはロシアの子供たちは野球ではなく「粛清(Purge)」という遊びをしていると皮肉ってもいる(344)。このように、野球規則によって秩序が保たれている国技の存在は、共産主義に侵されていない健全な法治国家アメリカの代名詞として、政治的なコノテーションをも含み持っている。そして、こうした規則を持たない、もしくは守れない人種は、アメリカ人よりも劣った野蛮な人種という論理が働くことになるのである。

*GAN*にはこの論理に関連したエピソードが登場する。Mr. Baseball と呼ばれる Ulysses S. Fairsmith

³ 佐伯泰樹は『ベースボールのアルケオロジー』の中で、アメリカで野球がプレーされるようになった 19 世紀初期は、規則が明文化されていなかったため、地方によって規則がまちまちであったこと、そして「ルールをわざわざ明文化しようという動きも起こらなかった」ことを指摘している (122)。その一方で、各地方で乱立状態だった規則も、1845 年に Alexander Cartwright らによって成文化されたことにより統一されはじめ、結果として現在の形に近い野球(ニューヨーク・ボール)が普及したとしている (143)。野球の歴史的にも、成文法の存在が競技の普及と発展につながっていたのである。

は、Albert Spalding が世界中に野球を広めようとした帝国主義的な試み同様、⁴彼の甥と共に野球を布教するためにアフリカまで赴いた。野球を学んだ現地の選手たちは、スライディングに楽しみを見出し、四球で一塁に出た際という、必要のないケースにおいてまでスライディングをするようになった。それを見た Fairsmith は、そうした野蛮な行為を中止するように指示する。しかし、現地人たちは、野球規則のどこにそんなことが書かれているのかと問いたす。Fairsmith は通訳の甥に、現地人に次のように返答するよう指示を出す：“You must explain to him that what we are dealing with here is a matter of *unwritten law*, or custom, but one so universally respected as to have the force and effect of every last rule in the rulebook.” (312; emphasis original)。確かに、四球で出塁した際に一塁にスライディングしてはいけないとは規則に書かれておらず、彼が認めるように不文律の一部なのだが、こうした不文律までの理解を現地人に求める姿勢は、前節の議論を補強する例となる。こうした無駄なプレーを否定するという実用主義的な思想を反映した不文律に納得ができない現地人は、槍を持って彼らを囲うという暴力的な訴えを起こす。そして、Fairsmith は儀式の生贄になりかけたところを、命からがら生き延びる、というのがこのエピソードの顛末である。

もちろん、不必要な場面でのスライディングはケガのリスクを高めるだけであり、中止するように指示すること自体は妥当な判断だろう。しかし、本作ではそういった安全面に言及されるのではなく、彼らがスライディングを続けるのは野蛮だから、という短絡的な思考に埋もれていることがポイントだろう。このエピソードで浮かび上がるのは、アフリカにおいて、アメリカにとっての「かくあるべし」を押し付けるとともに、彼らの行いを野蛮として蔑視し、あくまでもアメリカの優位性を保とうとする横暴さだからである。先ほどは、野球規則には「好ましい価値観の教材」としての一面があったことを指摘したが、Roth の作品中での野球規則は、法治国家アメリカのメトニミーとしての表向きの様相だけでなく、その裏側までも暴くための格好の皮肉の対象だったのである。⁵

他にも、GAN はルールの番人としての審判の役割も戯画化している。連戦連勝の天才ルーキー投手 Gil Gamesh は、人気であるだけでなく、強気で奔放な態度を取り続ける選手でもあり、その結果として、審判側が付度しつつあった。

Because of the rookie's enormous popularity, because of the records he was breaking in game after game, because many in the crowd had laid out their last quarter to see Gamesh pitch (and because they were just plain intimidated), the umps tended to tolerate from Gamesh what would have been inexcusable in a more mature, or less spectacular, player. (58)

こうした野球規則が支配する世界の崩壊を危惧した Oakhart は、彼が “the toughest, fairest official” (58) と考える審判 Mike the Mouth に、Gamesh に対しても厳格にジャッジするように依頼する。そして、Mike は Gamesh に対しても容赦なく退場を宣告するなど、球界の秩序を保つことに努めたのである。

しかし、事件が起きる。Mike が球審を務めていた試合で、Gamesh は完全試合を達成しようとしていた。ところが、かつて娘を誘拐され殺害されたトラウマがある Mike は、その犯人の姿が目に入ったように感じ、Gamesh の最後の投球（おそらくストライク、打者見逃し三振で完全試合達成のはずだった）を見逃してしまったのだ。こうした状況で、Mike と Oakhart は「審判が見ていないプレーは無効」というアドホックなルールをでっちあげ、その場をやり過ごそうとする。しかし、Gamesh は次の投球で3塁打を打たれ、完全試合はおろか、ノーヒットノーランすら達成できなくなってしまった。この結末に憤慨した Gamesh は Mike に向けてビーンボールを投げつけ、球界から追放されるという悲劇的な結末を迎える。Mike 側も、一命はとりとめるものの、発声できなくなり、審判として生きることはもはや出来なくなっており、どちらにとっても後味の悪い

⁴ 平出隆『ベースボールの詩学』では、Albert Spalding による「スポルディングのオーストラリアン・ベースボール・ツアー」や後の「スポルディングのアラウンド・ザ・ワールド・ツアー」(1)について、詳述されている。

⁵ Fairsmith たちを部族の儀式を通して暴力的に処刑しようとした現地人たちが、自らを“a proud race” (312)と定義していることも、Roth のアメリカへの皮肉として読み取れないだろうか。自らを誇り高い国家であると標榜している一方で、世界の警察として武力に頼っている国家アメリカは果たして野蛮でないと切り切れるのであろうか。Roth が描く架空のアフリカ野球は、逆説的に文明化しているはずのアメリカの野蛮性を逆照射しているとも考えられる。

結果になってしまったのだ。

こうした規則が伴いうる恣意性が招いた悲劇は、規則とは絶対的な文書である一方で、状況に応じた恣意的な解釈を許す揺らぎを孕んでおり、決して安定しきったものではないことを示唆していると言える。野球規則側もちろんこうした状況を想定しており、「審判員は、本規則に明確に規定されていない事項に関しては、自己の裁量に基づいて、裁定を下す権能が与えられている」

（『公認野球規則』8.01[C]）と規定している。しかし、どこまで審判員の裁定を信頼できるだろうか。こうした要素も、Roth にとっては皮肉の対象だったのだ。⁶

このように、野球規則に付随する恣意性がアメリカの帝国主義的思考や審判という権威に結びつく様を振り返ってみると、いかに Oakhart の野球規則への盲信が皮肉の対象とされているかが理解できる。彼が盲信する通り、野球規則は万能で、アメリカの好ましい精神性を表象するものかもしれないが、実際には Roth が巧みに皮肉ったように、決して絶対的なものではない。むしろ、規則とは恣意性を排しているようで排しきれていないという点で、脆いものでもあるのだ。GAN がアイロニックに描く野球規則を巡る物語は、「変わりゆくアメリカで変わらないものである野球」を定義する野球規則に内在する脆弱性をも浮き彫りにしているのである。

4. 規則が規定する「野球の物語」

Joseph S. Walker は、本稿でも先ほど紹介した Paul Auster の作品では、野球が繰り返し登場するモチーフであることに触れつつ、Auster が Paul Benjamin の偽名を用いて書いた探偵小説 *Squeeze Play* (1978)における野球の役割を論じる際に、以下のように述べている。

Like life in any contemporary society, baseball is governed by a set of strictly enforced rules and regulations. . . . These rules, however, do not make the outcome predictable; as in life (particularly life in an Auster novel), chance and circumstance combine to produce wildly unexpected results. This occurs . . . constantly: every pitch, every swing of the bat reshuffles the cards, establishing a new order that will itself shortly be demolished. The game, then, is a continual confrontation between order and chaos. (399–400; underline mine)

つまり、ルールが存在は、野球を野球としてプレーさせるための条件である一方で、それはあくまでスポーツとしての枠組みを提供しているに過ぎず、野球というスポーツの可能性を縛るものでは決してない。有限の規則は、選手を縛り秩序を維持しつつも、それ以上に無限の予見不可能なイベントを引き出す触媒であり、ルールの中で思いもよらないことが起きることこそが、野球（ひいては人間・世界）の面白さを保証する要素となるのである。

Auster 作品においても、こういった人生の無限の可能性を体感する人物が多々登場する。ここでは、彼の 1989 年の作品 *Moon Palace* の主人公 Marco Fogg を取り上げてみよう。コロンビア大学を卒業したものの、孤児であった彼は無一文の状態にまで沈んでいき、セントラルパークでホームレス生活を送るなど、人生の浮き沈みについて否が応でも意識することになる。彼はセントラルパークでのホームレス生活中に、ごみ箱から漁った新聞でシカゴ・カブスについての記事を読み、次のように考える。

I tracked the spectacular fall of the Cubs with special interest, marveling at how thoroughly the team had unraveled. It was difficult for me not to see correspondences between their plunge from the top and my own situation, but I did not take any of it personally. . . . [T]o witness their sudden, wholly improbable surge from the depths seemed to prove that anything in this world was possible. There was consolation in that thought. Causality was no longer the hidden demiurge that ruled the universe: down was up, the last was the first, the end was the beginning. . . . reality was a yo-yo, change was the only constant. (61; underline mine)

人生のどん底に沈んだ Marco にとって、カブスの順位が急落し、予定調和にならない世界の可能

⁶ こうした権力側の恣意的な解釈変更の危険性への言及は、近年の例で言えば、Black Lives Matter 運動などで明るみになりつつある、警察の黒人への暴力や不当な取り調べなどに対し、信頼に足るべき警察側が、恣意的に解釈変更を繰り返し、暴力を正当化してきたことへの皮肉にもなる。

性を知ること、人生においても、法律や規範・制約に縛られつつも、偶然の連鎖の果てに、何が起きてもおかしくないことを悟らせる。このような可能性や不確実性を生み出すのは、規則の存在によって野球界の調和が保たれてきたからなのであり、それにより、Marco は自らの物語を野球の物語に重ね合わせ、野球を精神的支柱として捉えていたのである。

もちろん、こうした要素は野球に限らず全てのスポーツに当てはまることではあるが、規則により枠組みが設定されつつも、結果は決して予定調和にならないことが数々の「劇」を生み出し、多くのファンを魅了してきたことは紛れもない事実である。本稿を執筆している頃、侍ジャパンは World Baseball Classic で3大会ぶり3度目の優勝を果たし、日本中が大いに沸いていた。特に盛り上がったのが、準決勝メキシコ戦での「劇的な」逆転サヨナラ勝ちであろう。⁷そもそも、このサヨナラ勝ちが劇的になるのは、「9回裏が終わった地点で得点の多い方が勝ち」という規則が存在するからである。たとえ普段意識されることはなくとも、野球規則は野球というスポーツをドラマ化(Dramatize)する縁の下に力持ちなのである。⁸

こうした土台に支えられ、アメリカ野球文学史の系譜でも、9回裏を舞台とした物語が多数生み出されてきた。Ernest Lawrence Thayer の *Casey at the bat: A Ballad of the Republic, Sung in the Year 1888* という野球文学作品の始祖として位置づけられる作品ですら、すでに9回裏を舞台としていた。The Mudville の強打者 Casey が、2対4の2点ビハインドの9回裏2アウト2、3塁で打席に立つ。ホームランが出れば逆転サヨナラ勝ちの期待が球場で高まる中、この詩は Casey の結末を次のように描く：

The sneer is gone from Casey's lip, his teeth are clinched in hate;
He pounds with cruel violence his bat upon the plate.
And now the pitcher holds the ball, and now he lets it go,
And now the air is shattered by the force of Casey's blow.

Oh, somewhere in this favored land the sun is shining bright;
The band is playing somewhere, and somewhere hearts are light,
And somewhere men are laughing, and somewhere children shout;
But there is no joy in Mudville – mighty Casey has struck out. (qtd. in Dawidoff 15)

球場中の期待を裏切るかのように、Casey は最後の打者として三振を喫し、チームの敗北が確定する。しかし、平出隆は『ベースボールの詩学』で、このアンチクライマックス的展開こそが、後のアメリカ野球文学において、この詩が語り継がれてきた理由であると述べている：

最終回二死ランナーなしという絶望的な状況が、徐々に大逆転の可能性に変わり、二点差で二死二、三塁というこのうえないお膳立てのととのったところで、いよいよケーシーの出番となる。彼の一手一投足を、観衆は固唾を呑んで見守る。(中略) 最終連の絶唱に入り、うららかな大地のひろがりが増えられたところで、そのひろがり、ケーシーの一撃によって、ではなく、彼の空振りによって、一挙に打ち消されるのである。

この詩篇が、のちに書きつがれてきたベースボールの詩群の総体にとって、なお重要な位置を占めつづけている理由は、(中略) 劇的な設定の無化、つまり台無しに向って一気に雪崩れていくところにある、といわなければならない。(中略)

空振りであることによって残されたものは、反対に、じつに豊かである。(中略) つまり、

⁷ この逆転サヨナラ勝ちが特に印象的なものとなったのは、前年度 NPB の日本人左打者の年間ホームラン記録を打ち破った村上宗隆選手がサヨナラ打を打ったからとも言える。「村神様」の異名を得るほど、その実力に日本中が期待した半面、WBC 大会前半期間、彼は不調で、この準決勝でもすでに前の4打席で凡退していた。そんな彼の復活を示した5打席目のサヨナラ打は、村上選手個人のナラティブと合成され、「村神様復活譚」とでも呼ぶべき「逸話」として、メディアで大々的に扱われた。本件は、こうした「逸話」の集積こそが野球の歴史であることを示す好例となろう。

⁸ Paul Auster が、先ほども引用した *The Invention of Solitude* において次のように子供時代を回顧していることは、ヒーローに憧れるアメリカの少年が自らを主役に据えた想像上の野球ドラマにおいても、9回裏が格好の舞台であったことを示す好例となる：“It always came down to two outs in the bottom of the ninth, a man on base, the Giants trailing by one. He [Auster in his boyhood] was always the batter, and he always hit the game-winning homerun.” (123)。

バットで空を切る豪快な裏切りによって、詩は、夢見られた「大逆転」をまったき夢の中に凍結させ、そのことでかえって、このベースボール空間の細部から全体にわたるヴィヴィッドな緊張を成就しているのである。(175-176)

すぐそこに負けが待ち構えている絶望的な状況を打破できるような一抹の希望への期待が最大化したところで、Caseyの空振りにより、作品は一気に幕を降ろすというこの物語の構図は、まさに予定調和にならない、希望通りの結果が約束されていない野球（スポーツ）の性質を如実に示すとともに、いかに野球が文学作品において豊かな世界観を構築するポテンシャルを持つかを示している。そして、平出が指摘したように、こうした「敗北の物語」がアメリカ野球文学の系譜におけるプロトタイプともなったのである。⁹

野球小説の先駆者とされる Bernard Malamud の *The Natural* (1952) も、こうした敗北の物語を引き継ぐ一例である。主人公 Roy Hobbs は、作品の終盤、9 回裏、一打逆転サヨナラ勝ちのチャンスで打席に立つ。まさに Casey さながらの状況で打席に立つ彼は、その試合に負けるようにと八百長を持ち掛けられていた。彼は最終的に、チームのためのバッティングをし、チームに勝ちをもたらそうと決意したものの、運命は彼がヒーローになることを許さず、彼は三振に倒れてしまう。さらに、八百長が発覚し、彼は球界追放処分を受けてしまう。彼は、9 回裏の最後のバッターとして、チームの負け（死）だけでなく、自らのプレーヤーとしての「死」までも引き起こしてしまったのである。¹⁰

ここまで、9 回裏を例に、野球の枠組みが提供する物語性が反映された文学作品をいくつか取り上げたが、ここで再度おさえておきたいのが、9 回裏が劇的になりうるのは、すぐそこまで結末が近づきつつも、それでもまだ何が起きるか分らないというスリルがあるからである。選手も観客もこの規則の枠組みがもたらしうる偶然性を受け入れることで、野球のドラマを楽しむことができるのであり、ドラマティックであるには予定調和であってはならないのである。

こうしたことを踏まえると、枠組みの軸となる野球規則を不用意に変更することは慎まれるべきという見方もできる。もちろん、現状の後追いに過ぎない野球規則は、現状に適応すべく改善が求められるものだ。しかし、それを「不用意」に行う、つまり、何らかの理想化された野球を作り出すために規則の改変をした場合、それには危険が伴うことになる。

この点を考えるために、Robert Coover の *The Universal Baseball Association, Inc., J. Henry Waugh, Prop.* (1968) を取り上げよう。この物語は、こうした野球規則が生み出しうるナラティブの蓋然性を恣意的に破壊した人物の物語だからだ。中年の会計士 Henry が自身の頭の中で作り上げている野球協会「ユニヴァーサル野球協会」では、彼のサイコロの出目にしたがって、試合が進められていく。しかも、現実の野球界でプレーなどが起こりうる確率と、3 つのサイコロの出目の確率を近づけることで、彼の脳内野球の現実性を高める工夫までしているという徹底ぶりである。そのように行われたある 1 戦で、ルーキー投手 Damon Rutherford が完全試合を達成することになる。この完全試合は、先述したような規則に沿って行われた、サイコロの出目による偶然の産物であり、ゆえに Henry は名状しがたい恍惚感を得ることになった。しかし、Damon が投球する場面をより頻繁に見たいと思う有頂天な Henry は “It wasn’t the recommended practice to start a pitcher after only one day of rest, but it wasn’t against the rules.” (63) と正当化し、Damon の通常の登板スケジュールを変更してまで、彼を先発投手に選んでしまう。協会の秩序が Henry の恣意的な判断により歪められつつある中行われたその試合で、Damon は、これもまたサイコロの出目により頭部死球を

⁹ Nicholas Dawidoff が “The lesson, it seems, is that baseball is interesting to writers because the game and its practitioners are as prone to fever and flaw as the real world they inhabit. . . . There is so much failure in baseball, and the good writers, like Don DeLillo, can never get enough of it.” (9) と述べるように、3 割打者でさえ 7 割は凡退している野球の世界は、成功ばかりではなく、むしろ失敗の方が多く現実世界の反映をしているとも言える。その一方で、年間 100 を超える試合があり、その試合の中でも複数打席が回ってくるように、野球は「次のやり直すチャンス」を期待しやすいスポーツであるとも言える。こういった要素をもとに、野球は「敗北の物語」の素地を提供してきたのである。

¹⁰ Malamud の *The Natural* は Black Socks Scandal を下地にした野球選手の失墜の物語であるなど、アメリカ野球史への引喩がふんだんに盛り込まれており、クライマックスに 9 回裏が設定されていること以外にも、野球表象については枚挙にいとまがないほどの論点がある作品である。有名な話だが、本作の映画版では、Roy は逆に逆転サヨナラホームランを打つという、カタルシスのあるエンディングに変更されており、小説とは違ったハリウッド映画としてのイメージがかなり前景化されている。

食らい、命を落とす。Damon という名選手を英雄化すべく自らの理想に沿った物語を作り出すことに偏重し始めた Henry に、この Damon の殉職は甚大なショックを与えた。そして、その後の Henry は、Damon を殺したピッチャー Casey が罰されることを望みながらサイコロを一心不乱に振り続けるも、むしろ、Casey が好調を維持するという皮肉な結果が続くことになる。こうした思い通りにならないサイコロとそれが生み出すナラティブに落胆した果てに、Henry は自らサイコロの出目を指定し、Casey を殺す選択をするに至る。サイコロの出目によって結果が決まる、つまり、偶然に左右されるもののルールによって安定化された聖域を、彼は自らの手によって破壊したのだ。

Henry は理想を追求するあまり規則を破ってしまったが、これは野球というドラマの筋書きの出来/不出来に関わるという点で、まさに「野球の物語論」に関わる問題である。こうした観点について、吉田恭子は次のように論じている。

ヘンリーの空想世界は登場人物たちの命運を創造主のヘンリー自身が自在に決定することができないことで蓋然性を保っていたが、ここに至って恣意的な介入を行い、空想世界の住人を処刑することになる。これは文学的効果を成就させるために、韻律・文法・論理・事実（物理法則など）に関する破格や逸脱が許容される、詩的特権（poetic license）の行使といえるかもしれない。サイコロですべての運命が決まるというリスクとチャンスに支配されていたゲーム世界の根幹にかかわる決まりに例外を導入したことで、ユニヴァーサル野球協会は同じ試合を宗教的再現劇（passion play）のようによりくりかえし再現し続けるようになる。（138）

吉田が指摘する「詩的特権」は、本プロジェクトのテーマ「文法とレトリック」と本稿の接続点を担いうる概念である。ここで、詩的特権とは、必要に応じて使用が認められる特権であることに注意したい。詩的特権はレトリックとして効果がある範囲においてのみ有効であり、濫用された場合、もはや芸術としての価値が損なわれることになりうるからだ。Henry による詩的特権の行使は必要だったのか。答えは No だろう。これまでの議論で明らかにしてきたとおり、そもそも存在する野球規則、そしてそれに基づき Henry が作り上げたサイコロの出目による可能性を示したチャートだけで、Henry の脳内物語は物語として十分機能していたからだ。Henry によるプロットへの恣意的な介入は、不用意な特権の行使であり、結果として Henry の虚構世界は彼の理想に従って再生するのではなく、むしろ「硬直し、猥雑な活気を失い、（中略）『かくあるべきである』というドグマに支配された儀式世界へと変貌してしまう」（吉田 139）のである。「ドグマに支配された儀式世界」とは予定調和な世界の一部であり、Henry による規則への、そして規則が維持してきた偶然性への越権行為は、野球が持つ「本来の美德を破壊し」（吉田 140）、結果として予定調和で生気のない世界を作り上げる行為だったのだ。さらに、この虚構世界が崩壊することで、Henry 自身の現実世界も崩壊したという点において、彼の越権行為はまさに命とりでもあったのだ。

ここまで述べてきたことは、詩的特権を行使し規則を破ったとしても、それに見合うだけのリターンが必ずしも存在しないことを示している。むしろ、平衡感覚のない行き過ぎた行為が引き起こす代償は、Henry の場合のように、取り返しがつかない結果を招きうる。¹¹この意味で、結局は何事も「バランスが大事」という陳腐な命題に回帰しうる。とはいえ、この命題は陳腐でありつつも、簡単に達成できるものでもない、誰しもが経験知として持っていると言っても過言ではない。事実、このバランスの追求という命題は、野球規則が苦心してきたものである。

Steven P. Gietschier は *The Cambridge Companion to Baseball* の“The Rules of Baseball”という章で、野球規則の変遷を要約しているが、“Since baseball’s rules were first codified in the nineteenth century, various rules committees have made adjustments to maintain a suitable competitive balance between offense and defense.” (9)と述べることから始まり、“The quest for equilibrium between offense and defense” (13)、“frequent adjustment to achieve a desirable balance between offense and defense” (14)、“Several twentieth-century rules changes . . . addressed the delicate balance between batter and pitcher” (16)と、言葉を変えつつも、いかに「バランスの維持」が野球規則改正で重要視されてきたかを繰り返して述べている。

¹¹ Henry のこうした平衡感覚を失った行動により、バランスを失ったユニヴァーサル野球協会の歴史をまとめた書物のタイトルが “*The UBA in the Balance*” (212) というのも、なんともアイロニックである。

野球規則が攻撃側と守備側の「suitable で desirable で delicate なバランス」を維持するという難題を解決すべく存在していることを踏まえると、文学作品に野球規則が言及されることの意義のもう一つの側面が浮かび上がる。既述の通り、*UBA* の Henry は仕事/プライベート、現実/虚構のバランス感覚を失うだけでなく、野球規則と彼が作り上げたサイコロの出目によって試合が進む、蓋然性が維持された世界を恣意的な介入により破壊した存在だった。これは、「suitable で desirable で delicate なバランス」を維持すべく存在していた規則を Henry が破ったことが招いた破滅と言え換えられる。皮肉なことに、Henry 自身は、こうしたバランスについて自覚していた存在だった。

American baseball, by luck, trial, and error, and since the famous playing rules council of 1889, had struck on an almost perfect balance between offense and defense, and it was that balance, in fact, that and the accountability – the beauty of the records system which found a place to keep forever each least action – that had led Henry to baseball as his final great project. (19)

こうした野球が持つバランスに魅了されていた Henry ですら、私欲に抗えず破滅を迎えてしまうという本作の展開が示唆することは多いだろう。このように、*UBA* における野球規則は、バランスの取れた調和世界を描く媒体であり、「詩的特権の行使」であった Henry の行為が招いた悲劇の下地として機能しているのだ。

他にも、先述の Roth による *GAN* においても、詩的特権の行使について言及がある。本作の語り手 Smitty は 87 歳で入院中の存在であるが、文章中に頭韻を使いすぎると医師から注意されるというコミカルな描写がある。彼は医師から頭韻を使って文章を書くことを禁止されたのち、次のような会話をしている。

“And – and how’s about reading alliteration, if I can’t write it?”

“For the time being, I’m going to ask you to stay off it entirely.”

“Or?”

“Or you’ll be a goner. That’ll be the ballgame, Smitty.” (11)

野球に関連した慣用句で医師が Smitty に警告しているという、Roth のユーモアが見える会話であるが、やはりここでも野球に関連し、「バランス」がキーワードとなる。というのも、ここでは、Smitty 自身の文字書きとしてのバランスを失うことが命取りになると医師から警告されているからである。¹²詩的特権にも限界があり、ある閾値を超え文学作品としてのバランスが破壊されてしまえば、それはもはやレトリックではないということが、改めてここでも示されていると言える。Smitty が本作の長大なプロローグで行うような頭韻の連続は、行き過ぎた場合、文学作品として何も伝えないことになりうるからである。

こういった点を踏まえると、*UBA* では Henry によるナラティブへの詩的特権の行使が、*GAN* では Smitty による頭韻の使用過多という詩的特権の行使が引き起こしうる物語世界の崩壊という共通点が、ともに野球小説のキャノンとされる作品で反映されていたことになる。ここに、野球文学について文学研究の立場から述べてきた本稿が、本プロジェクトのテーマ「レトリックと文法」と奇しくも接点を見出したと言えるだろう。野球も一つのフィクションであり、ナラティブを作り出すものである以上、こうした詩的なレトリックと無縁ではないのである。

5. 終わりに – アイデアとしての野球の行方

本稿では、アメリカ文学作品における野球規則に関連する言及に着目しながら、作家の想像力とアメリカ的価値観を代弁する文書としての野球規則が接続されることで、いかにアメリカが表象されてきたかを議論してきた。最後に、こうした野球規則を出発点に文学を読み解くことで得られる視点が、言語学者や文学研究者に、そして、野球というスポーツの未来に与える示唆について言及し、本稿を閉じたいと思う。

¹² *GAN* において、Smitty の友人として登場する Ernest Hemingway が作家としてのバランスを失い、自ら命を絶ったことに言及されていることも、バランスの重要性を暗示していると言えるだろう。

まず、野球規則がアメリカ的価値観を教示する媒体でありつつ、そこに規定される「好ましいアメリカ的価値観」はアメリカへの同化を求めるための下地に過ぎず、その好ましい価値観を享受できるのはある種特権的であり、付随する不文律まで理解する必要があると述べた。これを言語のケースで考えてみると、例えば、規範文法の議論との接続が可能であろう。「文法的に正しい」とはどういうことか、誰にとって正しいのか、どう正しいのか、といった問題を考える際、野球規則をめぐる議論は援用可能だろう。こうしたアナロジーは、規則なしでは混沌が訪れる一方で、規則が存在することで浮かび上がりうる「副反応（差別・特権化など）」、もしくは規則が権力と結びついた時の危険性などに目を向けさせることに貢献しうるだろう。

その一方で、ルールを破ることが *UBA* の *Henry* を破滅させたように、規則は越えてはならない一線を規定するものでもある。上述した通り、*UBA* や *GAN* から読み取るべきは、文法を逸脱し、音韻・比喩を優先するなどして、読み手の心に訴えかけようとする芸術家たちの試みにおいても、越えてはならない閾値の存在なのである。その意味で、野球規則がバランスの追求に苦心してきたように、芸術家にもバランスの追求が求められていると言える。「形無し」と「型破り」は違ふとよく言われるが、言語における形を文法とし、本論と接続するならば、前者は「文法を無視（軽視）したもの」、後者は「あくまで文法を踏まえた上でのバランスの追求の結果」と言い換えられはしないだろうか。

さて、締めくくりとして、本論が試みたような野球文学を読み解くことで得られる視点を、野球というスポーツそのものに対して投げかけてみたい。本論では、*UBA* の *Henry* は、野球規則によって調和が保たれていた世界に恣意的に介入することによって、その世界を破壊した人物だと指摘した。その一方で、*Henry* は「一見無味乾燥な数字の羅列にナラティブを読み解くことができる職業、会計士」（吉田 120）であり、野球の統計が持つ歴史性を十分に認識していた存在であることも見落としてはならない。吉田恭子が指摘するように、野球の歴史は統計によって紡がれており、「20 世紀初めにプレーした物故選手と今日なお活躍している選手が統計という数字を通して出会い対決すること」を可能にしてきた（117）。しかし、恣意的な規則の改正は、このような野球の歴史が時代を超越していくことに終止符を打ちうるというリスクもある。先述のように、規則は現実の後追いに過ぎず、プレーヤーの能力・道具・環境など、様々な要因により野球がその容貌を変化させる以上、規則改正は必須のプロセスである。しかし、規則が「野球の物語」の構成要素の 1 つであること、そして野球の歴史とは「野球の物語・逸話」の集積である以上、不用意な規則改正は、統計を通した超時間的なナラティブとの邂逅を不可能にしうる。野球の逸話を作り出す縁の下の方持ちとしての野球規則の存在意義を認識することは、*Paul Auster* や映画 *Field of Dreams* に登場する隠遁作家 *Terence Mann* などが指摘する、「変わりゆくアメリカで変わらない心の拠り所」としての野球の存在意義を維持することに寄与しうるのではないだろうか。

GAN の *General Oakhart* は、上で取り上げた引用で“don't try to shorten the base paths in order to reach home plate faster and score. All you have accomplished by that technique is to cheapen the value of a run.”と子供たちに熱弁していた。奇しくも、本稿執筆中の 2023 年の規則改正では、*MLB* がより大きなサイズのベースへの変更を決定した (*Castrovince*)。ベースが大きくなったことにより、走者が走る塁間距離は実質短縮されたことになるわけだが、これに対して *Oakhart* は何と言うだろうか。なお、この規則改正は、選手の安全面を保証することを目的としたものであるが、その一方で、野球人気の低迷への対抗策として講じられたという側面もある。つまり、ベースを大きくすることで、盗塁を増やし、試合中の見せ場（＝動の部分）を増やすことを目的にベースが拡大されたのである。野球人気の落ちつつある 21 世紀においては、野球も生き残りをかけ、こうした規則改正が必要性に迫られているのである。

こうした 2023 年の規則改正は、2023 年版の『公認野球規則』の「はしがき」では、「野球の本質的な面白さ」を増やすためのものとされているが、とはいえ、「野球の本質」とは何なのか。棒で球を打つという野球の起源は、少なくとも古代エジプトにまでさかのぼれる以上 (*Gietschier* 9)、こうした野球の本質をどこに探し当てるべきなのだろうか。佐伯 (2014) や平出 (1989) などでも何度も言及されているように、アメリカにおいては歴史的正確さよりも、クーパーズタウン神話に代表されるような理想論の方が好まれており、野球の本質をたどることは困難な試みである。実際、おそらくどの立場に立ったとしても、その時代時代に沿った理想論のアマルガムが、野球の本質を定義してきたと言うより他にないだろう。こうした野球人気の復興を目的とした規則改正が目

立つ近年、Henry が自らのアイデア世界を構築するために恣意的に規則を改変したような、ある特定の立場から恣意的に野球というスポーツを定義する規則を変更することが起こらないとも言いきれない。Henry の物語が示唆するのは、一瞬のアイデアを作り上げるための規則への介入の危険性だった。この視点は、こうした現実世界での規則改正を考える際の視座にもなる。本稿で見てきたように、野球規則自体も、様々な思想（イデオロギー）、時代背景のアマルガムであるという点で、文学作品の一種とも呼べ、時代によって揺れ動きうるナラティブに過ぎない。こうしたことを踏まえると、改めて、本稿で試みたような野球規則に言及した文学作品を読み解いていくことが示唆することは多いと言えるのではないだろうか。

参考文献

邦文文献

- 佐伯泰樹『ベースボールのアルケオロジ』悠書館、2014 年。
平出隆『ベースボールの詩学』筑摩書房、1989 年。
日本プロフェッショナル野球組織、全日本野球協会（編）『公認野球規則』ベースボール・マガジン社、2023 年。
吉田恭子「野球ゲームに詩はあるか？ーロバート・クーヴァー『ユニヴァーサル野球協会』の統計と詩学」『テキストと戯れるーアメリカ文学をどう読むか』、高野泰志・竹井智子（編）、松籟社、2021 年、pp.115–143.

英文文献

- Auster, Paul. *The Invention of Solitude*. Faber and Faber, 1982.
---. *Moon Palace*. Faber and Faber, 1989.
Barzun, Jacques. *God's Country and Mine: A Declaration of Love Spiced with a Few Harsh Words*. Little Brown, 1954.
Castrovince, Anthony. "Pitch Timer, Shift Restrictions among Announced Rule Changes for '23." *MLB.com*, 2 Feb. 2023, <https://www.mlb.com/news/mlb-2023-rule-changes-pitch-timer-larger-bases-shifts>.
Coover, Robert. *The Universal Baseball Association, Inc., J. Henry Waugh, Prop.* Plume, 1968.
Dawidoff, Nicholas, editor. *Baseball: A Literary Anthology*. The Library of America, 2002.
---. Introduction. Dawidoff, pp. 3–11.
DeLillo, Don. *Underworld*. Picador, 1997.
Duvall, John N. "Baseball as Aesthetic Ideology: Cold War History, Race, and DeLillo's 'Pafko at the Wall'." *Modern Fiction Studies*, vol. 41, no. 2, 1995, pp. 285–306.
Elias, Robert. "A Fit for a Fractured Society: Baseball and the American Promise." *Baseball and American Dream: Race, Class, Gender, and the National Pastime*, edited by Elias, Routledge, 2016, pp. 3–33.
Gibbs, Raymond W., Jr. "Process and Products in Making Sense of Tropes." *Metaphor and Thought*, edited by Andrew Ortony, 2nd ed., Cambridge UP, 1993, pp. 252–276.
Gietschier, Steven P. "The Rules of Baseball." *The Cambridge Companion to Baseball*, edited by Leonard Cassuto and Stephen Partridge, Cambridge UP, 2011, pp. 9–20.
Roth, Philip. *The Great American Novel*. Vintage Books, 1973.
Umphlett, Wiley Lee, editor. Introduction. *The Achievement of American Sport Literature: A Critical Appraisal*. Associated University Presses, 1991.
Malamud, Bernard. *The Natural*. 1952. Farrar, Straus and Giroux, 1980.
Nakamura, Mizuki. "Embracing Failure: Baseball as a Catalyst for Self-Reflection in Don DeLillo's *Underworld*." *Ex Oriente*, vol. 27, 2023, pp. 285–306.
Walker, Joseph S. "Criminality and (Self) Discipline: The Case of Paul Auster." *Modern Fiction Studies*, vol. 48, no. 2, 2002, pp. 389–421.
Wilson, August. *Fences*. Plume, 1986.

色彩語 *red* を含む強意直喩表現の分析

—*red as blood /fire /rose* の比較—

竹森ありさ

1. はじめに

本稿は *red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の 3 つの強意直喩表現を分析するものである。筆者は竹森(2022)において、*white* を含む強意直喩表現—*white as snow*, *white as a sheet*, *white as marble*—を比較し、それぞれの直喩表現の叙述対象に着目した上で考察を行った。どのような事物が叙述対象となるかはそれぞれの *white as N* のフレーズで差が見られ、どのように現在の意味が定着していったのかという点について分析した。本稿でも同様の手法を取り、*red* を形容詞にとる 3 つの強意直喩表現の使用傾向を明らかにする。

強意直喩表現(intensifying simile) は、基本的に [(as) adj. as N] という形式をもっており、形容詞が示す性質の程度を高める proverbial な表現である。最初の *as* はしばしば省略されることがある。

(1)は強意直喩表現の例である。

- (1) a. good as gold
- b. free as a bird
- c. cool as a cucumber
- d. red as blood

強意直喩表現には多様な形容詞、多様な喩辞が現れる。本稿では(1d)の *red as blood* に加え、*red as fire*, *red as rose*—すなわち、形容詞は共通しているが *as* に続く名詞が異なる 3 つの直喩を研究対象とする。名詞部分を様々に入れ換えることができるのは、強意直喩表現の特徴の一つである。強意直喩表現の中心的な意味は形容詞であるため、これらは基本的には全て「真っ赤」の意味をもつが、名詞が換わることで直喩の使用傾向は異なる。竹森(2022)では、*white as snow*, *white as a sheet*, *white as marble* の 3 つを比較し、*white as snow* の叙述対象は、顔や衣服、動物など多様であること、*white as a sheet* は 18 世紀ごろから顔面蒼白の文脈に使われ、それが現代に定着していったこと、*white as marble* は美しいもの・青白いものの両方に使える点とその理由を指摘した。強意直喩表現がそれぞれどのように使用されているか、そして *as* に続く名詞がどのように文化の中で捉えられているかを明らかにするのが本稿の目的である。どのような文脈において使用される直喩であるのか、そしてなぜその叙述対象であるのかを詳細に検討する。

以下、2 節で先行研究を紹介し、3 節で研究方法を説明する。4 節で強意直喩表現のデータを示し、使用傾向を指摘した上で、5 節でその考察を行う。6 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

[(as) adj. as N] の形式をもつ直喩は、Svartengren(1918)で「強意直喩表現(intensifying simile)」と呼称されている。この形式の直喩には 'intensifying similes' の他に、'stock similes' (Norrick1986)、'as-similes' (Moon2008)、'closed similes' (Tartakovsky et al.2019) などがある。また、本稿では、“Her cheeks are red as blood.” の “her cheeks” にあたる形容詞の叙述対象である名詞(句)を N1 あるいは tenor(趣意)、*adj. as* に続く二つ目の名詞(句) “blood” を N2 あるいは vehicle(媒体)と呼ぶ。

本稿では、共通した形容詞をもち、異なる N2 が使われる直喩表現を扱うが、一つの形容詞に異なる N2 が連なる場合の意味について Norrick(1986)が触れている。例えば “*Black as night*, *Black as soot*, *Black as the devil*” などは、それぞれの含意(connotation) があることを指摘している(1986: 42)。また、N2 によっては含意が生じない強意直喩もあると述べているが(1986:47)、なぜ含意を付加しない N2 があるのかは論じられていないため、個々の N2 の認識について議論が十分でない。意味が把握しにくい直喩(e.g., “*black as a building*”)を Tartakovsky et al.(2019)は扱っており、機能と目的について考察しているが、慣用化したものと新奇性の高い直喩を区別して分析していない。強意直喩表現は慣用化したものが含まれるため、使用されるうちに意味が把握しにくくなった直喩が存在する。例えば *black as one's hat* は、現代において帽子は様々な色の生地によって作られるため、*hat* と *black* につながりがないように見える。これはフォーマルな帽子の色が黒だったために

生まれたフレーズである¹が、現代の英語話者はその知識を有していない。こういった点を踏まえると、歴史的視点が分析に必要と言えるだろう。

また、強意直喩表現は文学作品に多用される傾向が見られ、Svartengren(1918)、Moon(2008)、菊地(2022)などが指摘している。直喩の機能について菊地(2022)は、文学作品の内容は読者にとって初見であり共有されていないため、「誰もが想像できるイメージを用いて送り手の意図と受け手の解釈のズレを小さくする」と論じている。N2に誰もが想起できるイメージがあるという点については、Norrick(1986)が、N2はその言語話者の間でよく認識されているものであると指摘している(1986:40)。

先行研究は、N2 あるいは adj. と N2 のつながりに注目されているという共通点がある。N2 は含意を与える機能があるが、含意がない、あるいは意味がつかみづらい直喩は、慣用化の影響が考えられる。繰り返し使用されたことによって N2 の認識が変化していることを考慮に入れなければいけない。N2 がどのように捉えられているかを明らかにするには、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の 3 つの強意直喩表現が何を叙述対象とするか、つまり、N1 も合わせて見る必要があると言える。N2 が伝達する含意についても、N2 で表される事物が文化的にどう扱われてきたかに注意した上での考察が必要である。以上の問題点を踏まえ、次節で研究方法を説明する。

3. 研究方法

本節では、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の使用傾向の比較方法を述べる。

強意直喩には慣用化したものが多い。後述するように、本稿での分析対象である 3 つの強意直喩も、英語史の中では古くからある表現と言える。歴史的な視点が分析に必要であるため、異なる時代のデータを比較する。

用例を採取したコーパス及びデータベースはイギリス英語を扱ったものであり、表 1 に示した。本稿では 19 世紀以降のデータと、Early English Books Online(EEBO)でのデータとを比較する。19 世紀以降の用例については、強意直喩表現は文学作品に用いられる傾向が強い(Svartengren 1918、Moon 2008) ため、小説を扱った HUM19UK や British National Corpus(BNC)の Fiction 部分から採集した。これらのコーパスから得られた 3 つの直喩表現の用例数は 6 例以下と非常に少ないため、HUM19UK と BNC に加えて、Google Books から例を集めた。Google Books では 1800 年代~1890 年代に時代を限定して検索している²。

表 1 本研究使用のコーパス・データベース

コーパス・データベース名	時代	ジャンル	総語数
British National Corpus (BNC)	1980 年代~1990 年代	Spoken/Written	S:約 1000 万 W:約 9000 万 FIC:約 1600 万
The Huddersfield, Utrecht, Middelburg corpus of 19th century British fiction (HUM19UK)	1800 年代~1890 年代	小説のみ	約 1300 万
Early English Books Online (EEBO ³)	1470 年代~1690 年代	Written	約 7 億語 約 25,000 巻
Google Books	1800 年代~1890 年代	Written	- ⁴

¹ *The Oxford English Dictionary* の名詞 hat の項目を参照。P6. (*as*) *black as one's (also a) hat*: of a deep black colour; completely black. With reference to the usual colour of formal hats (e.g. top hats, bowler hats, etc.).

² Google Books の用例は British English に限定して検索した。Google Books での書誌情報はデータをスキャンした施設の所在地に基づいている場合があるので、著者の出身地を確認した上で、イギリス英語の書籍と判断した。

³ EEBO には異綴が含まれるため、*red* のスペルは *rede*, *redd*, *reed*, *reede*, *rid*, *reade*, *redde* を検索している。また、EEBO で複数の版が収録されているために内容が重複したものは計上していない。

⁴ 正確な冊数を Google Books は公表していないため全体のサイズは不明である。

データベース・コーパスから用例を検索し、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の3つの直喩のN1が何か、また、文脈(どのような状況で使用されているか)を明らかにし、使用特徴を整理する。また、直喩の意味や叙述対象には時代を通じて変化があるのか、変化しているならばどのような要因が関わっているのかを探る。

red を含む強意直喩表現の媒体には、*blood*/*fire*/*rose* のほか、*apple*/*cherry*/*lobster* などの語も入る。*blood*/*fire*/*rose* のN2を調査対象とするのは、EEBOにおいて最も頻度の高い媒体であるからである。コロケーションで“red as”右4語に現れる名詞を検索した。EEBOでの用例数は表2に示した通りである。

表2 EEBOにおける*red as N*の上位5位

直喩	頻度	直喩	頻度
1) <i>red as blood</i>	217	4) <i>red as cherry</i>	17
2) <i>red as fire</i>	47	5) <i>red as coral</i>	11
3) <i>red as rose</i>	46		

4節ではそれぞれの直喩について、いつ出現したフレーズであるのかを確認し、コーパスから得られた用例を観察して、どのような使用特徴が見られるかを検討する。

4. 3つの直喩の比較

4.1節では分析する3つの直喩と、*blood*/*fire*/*rose*の由来を押さえ、4.2節ではコーパスから採集したデータを提示する。

4.1 N2の語彙・強意直喩表現の出現

それぞれの直喩を比較する前に、*blood*/*fire*/*rose*の3語の出現した時期と、これらが強意直喩表現として使用され始めたのはいつかを確認する。それぞれの出現時期を図1に明示した。*The Oxford English Dictionary* (以下、*OED*)では、*blood*と*fire*はOEの初例があり、どちらもゲルマン語系である。*rose*もOEの初例があるが、ラテン語・フランス語からの借用である。

強意直喩の形で用いられ始めたのは、*blood*の場合は1275年の例が、*fire*は1325年の例が*OED*に記載されている。実際はより古く、*blood*の例は1200年以前に、*fire*は1300年頃にすでにあったことが示されている⁵。*rose*が強意直喩として使用される例は、OEの時代にすでにありとSvartengren(1918)は指摘している(1918:249)⁶。

blood/*fire*/*rose*の単語はそれぞれOEから存在しているが、強意直喩としては*red as rose*が最も歴史がある。*red as blood*と*red as fire*の直喩は、MEに入ってから現れ、両者の間には100年ほどの開きがある。

図1 *blood*/*fire*/*rose*の語彙・強意直喩出現時期 ※初出年は*OED*とSvartengren(1918)による。

Mod E	
1500	
ME	° <i>red as blood</i> 1275 ° <i>red as fire</i> 1325
1100	
OE	° <i>red as rose</i> OE - <i>blood</i> OE - <i>fire</i> OE - <i>rose</i> OE
700	

⁵ c1275 (▶ ?a1200) *Lazamon Brut* (Calig.) (1963) 7955 þe oder is milc-whit..þe oðer ræd alse blod [c1300 so read so blod]. / c1325 (▶ c1300) *Chron. Robert of Gloucester* (Calig.) l. 3179 Yfourmed as a dragon as red ase fur. (*OED*)

⁶ Svartengren(1918:249)に挙げられているOEの例は出典が示されていないが、*Blickling Homilies*からのものである。なお、この例は*OED*にも記載がある(OE *Blickling Homilies* 7 Seo readnes þære rosan lixep on þe [sc. the Virgin Mary]. (*OED*))

4.2 N1 と文脈

red as blood/fire/rose について、それぞれ N1 と文脈を比較しながら、使用傾向を指摘する。

表 3 は EEBO から、表 4 は 19 世紀以降のコーパスから集めた 3 つの直喩の N1 の使用状況を表したものである。灰色に塗り潰した箇所は、その直喩において喩えられたものがあつたことを、白い箇所はなかったことを示している。

表 3、4 に設定した N1 のカテゴリーは「身体部位」、「人工物」、「自然物」、「無形/抽象概念」の 4 つである⁷。カテゴリー内の項目数が表 4 では少ないが、19 世紀以降の例が以前の例よりも少ないためである。表の中に斜線を引いたが、この斜線の上の語彙は EEBO と 19 世紀以降で共通して見られたものであり、斜線より下の語彙は EEBO、19 世紀以降のデータのどちらか一方だけに観察されたものである。

表 3 では、4 つのカテゴリー全てにおいて、*red as blood/fire* が、*red as rose* は「無形/抽象概念」以外の 3 つのカテゴリーに使用されている。表 4 では、*red as blood* は「無形/抽象概念」以外の 3 つ、*red as fire* は「身体部位」と「自然物」の 2 つに、*red as rose* は「人工物」以外の 3 つの分類に見られる N1 を叙述する。

red as blood は時代を通して適用できる N1 が幅広く、カテゴリー内の項目を見ると白いセルの方が少ない。「身体部位」については、時代が降ると適用される N1 の減少が見られ、白いセルが多くなるが、これは近代の用例数の少なさが影響していると考えられ、今後白いセルの名詞が叙述対象となる例が観察される可能性がある。(2)は身体部位が N1 の例である。

(2)a. but lo the shame fast boye was dasht, and out of countenaunce cleane: he blusht as **red as blood**...
(EEBO/1565)⁸

b. where his thighs were fastned there the cullour was as **red as blood**...
(EEBO/1604)

強意直喩表現の N2 の語彙は、N1 と N2 の色以外の共通点、すなわち肌触りや温度といった質感の共通点にも注目した上で選ばれている。blood は液状であるため、液体の N1 が用例に見られる。これは時代を通して観察される。(3a)は “the oyll”, (3b)は “the vinegar”, (3c)は “wine”である。

(3)a. ...till the oyll haue gotten a colour as **red as blood**...
(EEBO/1559)

b. ...the vineger also wyl become so **red as blood**...
(EEBO/1576)

c. Rab looked at her glass, wine **red as blood**...
(BNC)

また、液体の N1 は人工物、自然物問わず見られる。上の例は人工物であり人間の手が加えられている。次の例は自然物の例であり、N1 は “well”, “the sea” である。この他の自然物では、空や月食・日食の様子も *red as blood* が使われる。

(4) a. ...also in idumea is a well, that chaungeth colour foure times a yeare: for thre moneths it semeth troublous, as it were tempered with powder, thre months **red as blood**...
(EEBO/1582)

b. ...during the daytime it [= the sea]⁹ was as **red as blood**...
(Google Books/1880)

⁷ 身体部位名詞以外を英語表記にしていないのは、その他のカテゴリーにおいて実際に使用されている単語にそれぞればらつきがあるためである。例えば「動物」の場合 “horse”や “duck”などが実際の例で見られるが、表の見やすさを優先し、「動物」と表記した。また、*He blushed red as blood.* などのように 顔あるいは顔の部位を表す名詞が明示されていない例は、“face”の N1 として数えた。

⁸ 以下、コーパスからの用例の強調は筆者による。

⁹ 用例に角かっこ内で示す内容は筆者の注である。

表3 EEBO の N1 の使用

			N2						N2			
			blood	fire	rose				blood	fire	rose	
N1	身体部位	face				face						
		cheek				cheek						
		nose				nose						
		eyes				eyes						
		hair				hair						
		beard				beard						
		skin				flesh						
		visage				ears						
		thigh				hand						
		lips				cheek-bones						
							temple					
	人工物	鉄/製鉄所										
		刃										
		鎧										
		金貨										
		衣服/装身具				衣服/装身具						
		布製品				布製品						
		染料/薬液										
		燃える石										
		石炭										
		ガラス										
		飲料				飲料						
		食材				食材						
		文字										
		テーブル										
		手榴弾の火				建築材						
	自然物	動物				動物						
		血										
		花										
		川/海/泉				花/木の実						
		光				川/海						
		空										
		星										
		月/太陽			太陽のみ						太陽	
		宝石				宝石						
		果物				果物						
		穀物										
		体液										
		石/岩									石/岩	
		火				火						
							霧					
		無形/抽象概念	罪				季節					
			性格/感情									

表4 19世紀以降の N1 の使用

c. the easterne brow which erst was wan and pale, now in the dawning blusheth **red as blood**...
(EEBO/1593)

d. but in the first watch of the night the moon suffered an eclipse; and losing her brightness, became afterwards **red as blood**, and then waxed dim and dark...
(EEBO/1674)

「無形/抽象概念」の例での N1 は “sin” である。

- (5) ...so farre canst thou put this my grieuous sinne from mee: which, though it be as **red as blood**, yea blood it selfe;

(EEBO/1626)

red as fire は *red as blood* よりも叙述対象の幅が狭く、その中でも集中しているのは身体部位の N1 である。EEBO では 47 例中 24 例、19 世紀以降では 43 例中 36 例が身体に使われている。そのうち顔色の描写が EEBO では 16 例、19 世紀以降では 28 例である。怒りや恥、焦りといった感情が赤面の原因となるのが主である。

- (6) a. ...at this reproch did phaton wax as **red as any fire**...

(EEBO/1567)

- b. the maiden nipt thus by the nose, straight blusht as **red as fire**: and with his girde displeased, thus she spake to hym in ire...

(EEBO/1577)

- c. she replied, whilst her glorious dark eye kindled, and her snowy temples got **red as fire**...she added, "you are the last man from whom I should have expected an insult."

(Google Books/1852)

- d. She gave a little scream, and turned as **red as fire**.

(Google Books/1869)

また、19 世紀以降の例では身体部位名詞が増加しており、EEBO の時点では 5 つの語彙のみであったが、*face/cheek/nose/eyes/hair/beard/ears/hand/cheek-bones/temple* という様々な N1 がある。

red as rose は、時代を通して 3 つのカテゴリの N1 にまたがって使われているが、カテゴリ内の下位分類や語彙は限定されている。最も用例が多いのは身体部位であり、EEBO では 46 例中 26 例、19 世紀以降では 30 例中 26 例ある。EEBO よりも近代の方が身体部位の例の占めている割合が大きい。これらの N1 には通時的に変化はないため、意味が固定化されていったと言える。

rose には「健康な顔色」という意味が 15 世紀ごろより存在する。(7)は *OED* での定義、この意味での使用例は(8)である。

- (7) IV. As a colour. 14. A fresh pink or ruddy hue of the complexion, esp. in the cheeks, regarded as a sign of health or vitality. Usually in *plural*.

(OED)

- (8)a. beauty there (whoeuer seeks) sits inthron'd vpon her cheeks, in a colour, **red as roses**...

(EEBO/1626)

- b. Her skin was as smooth as velvet; her cheeks as **red as a rose**; her lips like two cherries cheek by cheek

(Google Books/1830)

- c. He's slim and he's strait as the poplar tree, His cheeks are as **red as a rose**: looks like a squire of higher degree, When dressed in his Sunday clothes.

(Google Books/1818)

ここまで *red as blood/fire/rose* の 3 つの強意直喩表現の使用特徴を、N1 と文脈を中心にして取り上げた。3 つの強意直喩がどの N1 に使えるかは一様ではなく、*red as fire/rose* よりも *red as blood* の方が広範囲に使用できる。次節ではそれぞれ 3 つの強意直喩の特徴—*red as blood* の文脈と N1 の広さの理由、*red as fire* の身体部位語彙の増加の原因、*red as rose* が健康な血色を表す理由について考察する。

5 考察

5 節では、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の使用特徴が生じる理由について考察を行う。

5.1 *red as blood*

red as rose/fire と比較すると様々な N1 に使用できるのが *red as blood* の特徴である。なぜこの直喩が EEBO の時代と近現代を通じて最もよく使用されるのだろうか。

まず、キリスト教が言葉に影響している可能性が考えられる。*red as blood* の「無形/抽象概念」の N1 には罪があるが、sin が赤い(緋色)という記述には典拠があり、これは Isaiah 1:18 に見られる。*white* を用いた強意直喩表現も使用される箇所である。

- (9) Come now, and let us reason together, saith the Lord: though your **sins be as scarlet**, they shall be as white as snow; though they be red like crimson, they shall be as wool.

(Isaiah 1:18)

また、EEBO の例には月食に *red as blood* が使用されているものがある。

- (4)d. but in the first watch of the night the moon suffered an eclipse; and losing her brightness, became afterwards **red as blood**, and then waxed dim and dark...

(EEBO/1674)

Revelation で月食が起こる様も、*blood* に喩えられている。

- (10) And I beheld when he had opened the sixth seal, and, lo, there was a great earthquake; and the sun became black as sackcloth of hair, and the moon became **as blood**;

(Revelation 6:12)

他に、ナイル川の水が血に変わる(Exodus 7:17-25)、ワインを契約の血と呼ぶ(Matthew 26:28, Mark 14:24, Luke 22:20)といった場面で *blood* は聖書に出現する。特に、ぶどう酒は契約の血であるという最後の晩餐でのイエスの言葉があるため、英語の *blood* は日本語の「血」に比べれば殺人や暴力といったイメージが強調されにくいと考えられる。*OED* の *blood* の項目には「命を維持するもの、生命」という意味がある。

- (11)I. 4. Blood regarded as the fluid which sustains life, lifeblood; (hence) the vital principle, that upon which life depends; (metonymically) life, lives.

(OED)

また、この定義での初例は(12)で聖書からの引用であり、ラテン語の注釈がつけられている。

- (12) OE *West Saxon Gospels: Matt.* (Corpus Cambr.) xxvii. 4 Ic syngode þa ic sealde þæt rihtwise blod [L. *sanguinem iustum*].

(OED)

ラテン語の “*sanguinem*” が “*blod*” に当たるが、これが語源になった英語での *sanguine* は、「紅色の、血の」という意味とともに「快活な、陽気な、楽天的な(*cheerful*)」の意味がある¹⁰。このような言葉も *red as blood* の直喩表現に影響して、*red as blood* が様々な N1 に用いられる素地を作っていると考えられる。

また、高頻度の直喩という側面に着目して、この *red as blood* を分析する必要があるだろう。色彩語を含む強意直喩表現は、それぞれの色彩語においてもっとも頻度の高い N2 と、2 番目に高頻度の N2 との間には用例数に開きが出る傾向がある。それが最も顕著なのは the Corpus of Contemporary American English(COCA)のコーパスである。表 5 は COCA で *white/black/red as* に続く名詞を検索(コロケーションで右 4 語)したもので、それぞれ上位 5 語の名詞と頻度を示している。

¹⁰ 『ジーニアス英和大辞典』参照。

表5 *white/black/red as* に続く N2 の頻度(COCA)

<i>white</i>	<i>black</i>	<i>red</i>
snow 186	night 104	blood 64
sheet 105	coal 44	hair 16
ghost 53	pitch 27	fire 13
bone 23	ink 20	beet 14
paper 22	midnight 19	rose 12

white の強意直喩表現の場合は、1 位の *snow* と 2 位の *sheet* の間に 81 例、*black* の場合は *night* と *coal* の間に 60 例、*red* では *blood* と *hair* の間に 48 例の差がある。つまり、色彩語を含む強意直喩表現の N2 は、ひとつの名詞に集中しやすい傾向がある。

white as snow も *red as blood* と同様に、様々な文脈に現れる強意直喩表現である。*white as snow* の用例の中には、(13)のように、*snow* の特徴が際立っていると判断しにくいもの、つまり *white* という色が中心的な情報であり、雪のもつ冷たさや冬らしさが生かされていないものがある。

(13) If these men stay here much longer my hair will be **white as snow**.

(HUM19UK)

N2 の特徴が捨象されるという現象が高頻度語に共通して見られるならば、強意直喩表現と色彩語メタファーの性質についての示唆となる。紙幅の関係上、この問題点は別稿にて扱うこととする。

5.2 *red as fire*

red as fire は、激しい感情を感じる場面で身体部位に使用される例が EEBO と近代のコーパスで見られ、さらに、身体部位の語彙が近代になって多様化するという現象が見られた。この多様化は *fire* という N2 にどう着目するかが時代を経て変わった結果生じたと考えられる。すなわち、EEBO の時代には激しいものとしての *fire* が、19 世紀以降は熱いものとしての *fire* という側面が生かされている。

EEBO の例では、睨む目と “*Four horses fierce*” の N1 の例が見られる。(14a)の媒体 *fire* は (15) に示した OED での *fire* の定義が含まれていると考えられる。睨んでいる様が激しいために、激しさの象徴である *fire* が媒体として選ばれている。(14b)の例は動物の N1 であるため、*red* という情報は主に毛皮の色を指すと推測されるが、*fierce* な馬であるため、それとイメージが合致する *fire* が N2 に選択されていると考えられる。

(14)a. with a furious looke he star'd, with eies enfiar'd as **red as any fire**

(EEBO/1614)

b. *Four horses fierce*, as **red as flaming fire**...

(EEBO/1607)

(15) 15. Reddening of the face or flashing of the eyes, esp. as a sign of strong emotion or animation; an instance of this.

(OED)

19 世紀以降の例では、熱さの典型としての *fire* がより顕著と言える。EEBO の時代にもこの観点が反映された例があるが近代の *red as fire* は身体部位に、より安定して使用されており、身体部位の持ち主の感覚により近い描写がなされていると捉えられる。*as hot as fire* という直喩表現、“*He was burning with fever.*” “*My cheeks burned with shame.*” などのメタファーが存在するように、*fire* が熱いという認識は、他の 2 つの直喩—*red as blood*, *red as rose*—よりも際立っているため重要である。怒りや焦りなどを感じた際に体が熱くなるという身体基盤によりメタファーは生まれる。¹¹ 強意直喩表現は文学テキストに頻繁に用いられるが、熱さを感じる体の箇所を文中で細かく指定することで、その場面の興奮と感情を読者に効果的に伝達するという書き手の意図が、N1 の語彙増加に影響したのではないかと考えられる。

¹¹ 身体部位名詞の増加と身体基盤の関連については、大森文子教授のご教示による。

5.3 red as rose

red as rose は主に健康な顔色を表す際に用いられることを 4 節で確認した。ローズという色について福田(2017)は「欧米諸言語におけるローズという色名は、花の名からとられた色名としてはおそらく最古のものである。古代ギリシアの詩人ホメロスが曙の空を形容し」と述べている(2017:38)。EEBO にも昇る太陽の N1 の例があるが、近代になるにつれて、頬の色に使うのが優勢となる。*lips* に *red as rose* が使用される例もあるが、なぜ *cheeks* の N1 に用いるのが定着していくのだろうか。これは血色・バラともに複数の側面が認識されることが影響しているだろう。

rose が媒体として現れる強意直喩表現 *fresh as a rose* が OED の形容詞 *fresh* の項目で挙げられている。

(16)P1. In similes and comparisons suggesting newness, vitality, etc., such as *fresh as a daisy*, *fresh as paint*, *fresh as a rose*, etc.

(OED)

vitality は頬の血色とも関連する概念であるため、*rose* という N2 が頬に使用されると考えられる。しかし、同時に *rose* は transience をも表す。*rose* の比喩義の一つには(17)の意味が見られる。

(17) II. In allusive, emblematic, or figurative uses. 4. a. A rose as distinguished by or emblematic of surpassing beauty, fragrance, purity, or rich (esp. red) colour (often in similitive use); frequently also with implication of transience. Cf. sense A. 5 and *fresh as a rose* at FRESH *adj.*, *n.*¹, and *adv.* Phrases 1; *red as a rose* at RED *adj.* and *n.* Phrases 1.

(OED)

つまり、美しさや香り、純潔さ、色において優れているものというイメージがバラにあり、また、儚さの含意があると説明がされている。人の顔色は一定ではなく、環境や感情によって紅潮したり、蒼白になったりする。色彩語、あるいは色彩語を含む直喩表現が使用される文脈では、顔色の対比がしばしば行われ、人間の顔色の不安定さがわかる。

(18)a. he waxe rede as a rose / &; after becam pale &; dede as ashes...

(EEBO/1477)

b. then collour comes and goes, some tyme as pale as earth i looke, some tyme as red as rose

(EEBO/1563)

c. "Nothing!" she says, faintly, turning first milk-white, then red as a rose in her burning prime.

(HUM19UK)

頬の血色は活力や美しさの証であるが、状況によっては消えてしまうものである。バラも同様の特徴をもつため、*red as rose* の主な N1 は顔色であるという使用傾向が生じていると言える。

5.4 考察のまとめ

4 節と 5 節で *red as blood/fire/rose* の強意直喩表現の使用傾向を、N1 をもとに整理し、使用傾向の生じた原因について分析を行った。*red as blood* は叙述対象となる言葉が豊富であるという特徴が見られた。これについては聖書、*blood* 以外の血に関連する語彙からの影響を指摘した。また、*red* を含む強意直喩表現の中では高頻度であるという点を踏まえ、*white as snow* に起こったように、*blood* の特徴が捨象されているために、幅広い N1 に用いられるという主張を行った。*red as fire* については、近代以降の身体部位の語彙が多様に見られる点について考察した。激しさの象徴としての *fire* が EEBO では顕著であり、その後熱さを表すものとしての *fire* に着眼点が移動したために、身体部位語彙が広まったと考えられる。*red as rose* は健康な血色を表すという特徴があり、なぜ “face” “cheeks” の N1 が *rose* という N2 をとるのかについて分析した。人間の顔色は一定ではないため常に血色があるわけではないという点が *rose* と類似していると言える。*rose* は美しさ、生き生きとしたものであるが、儚さをも表す。美しい赤さは簡単に消えて蒼白になるために、*rose* という媒体が選択されていると考えられる。

6. 結論と課題

本稿では *red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の 3 つの強意直喩表現を比較し、使用特徴について考察をした。直喩の研究において、N1 が注目されていない点、慣用化した直喩は N2 の認識が現代と異なる可能性を踏まえ、*red as blood*, *red as fire*, *red as rose* の叙述対象と使用文脈を中心に用例を観察し、3 つの強意直喩表現それぞれの特徴を指摘した。*red as blood* は使用できる N1 が幅広く、これは聖書の言葉と、*blood* に関連する意味をもつ語彙が原因の一つと考えられる。また、*red* を含む強意直喩の中では、*red as blood* が最も頻度が高く、これも *blood* の認識に関連していることを論じた。*red as fire* は、感情の昂りにより顔が赤くなるという文脈に使用される。また、近代以降の例では N1 の身体部位の名詞が豊富になり、この理由について分析した。*fire* の激しさから *fire* の熱さに注目する点が変わったという主張を行い、また、文学作品で描写する際に、身体部位を指定し、その場所と温度・感情を関連づけることで読者に臨場感を与えるという考察をした。*red as rose* は顔の健康な赤みを表すのが主な使用であり、これは近代の例ほど顕著であった。*red as rose* がきれいな血色を表すという特徴は、その血色の消えやすさとも繋がっている。血色とバラの間には、決して安定したものではないという類似点があることを、顔色の対比を行った例と *OED* の *rose* のもつ比喩義を提示して示した。

強意直喩表現の高頻度の N2 がどう認識されているかは今後詳細に論じる必要がある。*white as snow* と *red as blood*、その他の色の直喩について、N2 の特徴の捨象を分析するために使用傾向を観察するのが課題の一つである。また、*red as fire* の認識の変化については、*fire* の激しさと *fire* の熱さという 2 つの側面を挙げたが、両者はどう異なるのか議論を深めなければならない。*red as rose* についても、*cheeks* の他の身体部位、特に、赤さが強調される身体部位の *lips* との比較や、美しい白さとも関連させて今後分析をしていく。

参考文献

- Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic Color Terms, their universality and evolution*. Berkley: University of California Press.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. & M. Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lindquist, H. (2009). *Corpus linguistics and the description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳(2016). 『英語コーパスを活用した言語研究』. 東京: 大修館書店.)
- Moon, R. (2008). “Conventionalized as-similes in English: A problem case”. *International Journal of Corpus Linguistics*. 13(1), 3-37.
- Norrick, N. (1986). “Stock similes”. *Journal of Literary Semantics*, XV(1), 39-52.
- Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.
- Svartengren, T. H. (1918). *Intensifying Similes in English*. Lund: Gleerupska.
- Tartakovsky, R., Fishelov, D., & Y. Shen. (2019). “Not as clear as day: On irony, humor, and poeticity in the closed simile,” *Metaphor and Symbol*, 34(3), 185-196.
- Trim, R. (2011). *Metaphor and the historical evolution of conceptual mapping*. London: Palgrave Macmillan.
- de Vries, A. (1974). *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam and London: North-Holland Publishing Company. (山下主一郎ほか訳(1984). 『イメージ・シンボル事典』. 東京: 大修館書店)
- Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- 菊地礼(2022). 「直喩による程度表現の働き」. 『表現研究』. 第 115 号, 14-23.
- 久野愛. (2021). 『視覚化する味覚—色を彩る資本主義』. 東京: 岩波書店.
- 須賀川誠三. (1999). 『英語色彩語の意味と比喩—歴史的研究』. 東京: 成美堂.
- 瀬戸賢一. (1997). 『認識のレトリック』. 東京: 海鳴社.

- 竹森ありさ. (2022). 「色彩語 white を含む強意直喩表現の分析—*white as snow/ a sheet/ marble* の比較—」『英語のレトリック・日本語のレトリック(言語文化共同プロジェクト 2021)』.(大森文子編集).大阪大学大学院言語文化研究科, 43-53.
- 新妻明子. (2013) 「心的状態を表す英語の色彩語メタファー：認知意味論に基づく意味拡張のプロセス」.『常葉大学短期大学部紀要』第 44 号, 47-62.
- 福田邦夫 . (1994). 『ヨーロッパの伝統色—色の小辞典』.東京：読売新聞社.
- . (1999). 『色の名前はどこからきたか—その意味と文化』 東京：青娥書房.
- . (2017). 『色の名前事典 507 』. 東京：主婦の友社.
- 吉村耕治. (1997). 「中期英語の色彩表現の曖昧性」.『英語青年』. 142(10), 550-554.
- 渡辺秀樹. (2005). 「強意的頭韻直喩 "as dead as a/the dodo" の発達と異種」.『言語文化研究』, 第 31 号, 163-186.

辞書・コーパス・Web サイト

- 『ジーニアス英和大辞典』 KONISHI Tomoshichi, MINAMIDE Kosei and Taishukan, 2001 -2011
The Oxford English Dictionary. Oxford University Press, March 2023. (<https://www.oed.com>)
- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English* (COCA). Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Davies, Mark. (2004) *British National Corpus* (from Oxford University Press). Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/>.
- Davies, Mark. (2017) *Early English Books Online Corpus*. Available online at <https://www.english-corpora.org/eebo/>.
- Google Books*. (<https://www.english-corpora.org/googlebooks/>)
- HUM19UK*, Version 1. (2019). University of Huddersfield, Utrecht University, University College Roosevelt, Middelburg. (<https://www.linguisticsathuddersfield.com/hum19uk-corpus>)
- Bible Gateway* <https://www.biblegateway.com>

サイト最終閲覧日 2023 年 4 月 30 日

フレーム意味論と直接スコープから見たベトナム語、日本語および英語の感情概念 ーベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」、英語の *anger* を比較してー

DOAN NGOC MINH TRAN

1. はじめに

Lakoff and Kövecses (1987)は、心理学の観点に加え、認知言語学の観点から、感情を表す語（以下、「感情語」と呼ぶ）に注目し、英語の感情語の一つである *anger* の比喩表現を分析した。彼らは、「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」「*anger* は容器内の液体」といった身体的経験に基づいたメトニミーとメタファーを抽出し、感情の理解に関して、メトニミーとメタファーは重要な役割を果たしているとして述べる。また、英語話者が、*anger* に関する出来事を理解し、行動しているのは、感情の原因、生理的変化、反応などといった典型的な理解モデルからなる知識を持っているためであると指摘し、*anger* の典型的な理解モデルとして以下の5つのステージを提示した (p.211)。さらに、感情に対応した身体的経験、特に生理的経験は人間に共通しているため、感情の理解に関して、身体化された文化普遍的な基本モデルがあると主張している (Kövecses 2000:146)。

1. Offending Event → 2. Anger → 3. Attempt at control → 4. Loss of control → 5. Act of Retribution

表1: *anger* の典型的な理解モデル (Lakoff and Kövecses 1987 : p.211)

2節でも確認するように、確かに Kövecses らの研究は、感情の普遍的側面に注目することで大きな成果を挙げていると言えるかもしれない。しかし、その一方で、3節以降に議論するように、感情に関する従来の議論の大半は生物学的な観点から見た感情の普遍性のレベルに留まるか、あるいはそれを越えた言語の機能と感情の関わりということに関しては、英語の言語文化の影響下でなされてきたものであるという印象を受ける。したがって、Kövecses らの研究はベトナム語や日本語など他の言語文化では「感情」がどのように捉えられているのかが正確に把握できていない可能性が残る。

このことを前提に、本稿では、英語の *anger* とベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」に関する感情語は母語話者のどのような背景知識を活性化するかを調査する心理学的なテストを行い、その結果に基づく認知言語学的分析を行うことを目的とする。特に、3.3節と3.4節に詳しく議論するように母語話者を対象に、英語の *anger* とベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」の理解を調査してみると、言語ごとに固有の理解方式があることを指摘する。より具体的には、個人主義文化である英語の言語文化で使われる *anger* は、個人の権利と利益が侵害される観点からの解釈を中心とし、相手との関係に関わらず、自分の状態と攻撃的な態度に焦点を当てられる傾向にある。一方、集団主義文化に分類される日本語の「怒り」やベトナム語の *giận* は、集団の中の慣習を破ったことに注目した解釈を中心とし、相手と自分の関係にまず焦点が当てられるという特徴が見られることを議論する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2節で先行研究を概観する。続いて、第3節では、2つの調査結果を示し、英語の *anger* とベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」の理解モデルがそれぞれに持つ個別性について議論する。第4節では、3つの言語の理解モデルを提案する。第5節では、本稿のまとめを述べる。

2. 先行研究

本節では「感情」に関する先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。まず、2.1節では、「感情」を文化普遍的なものとする見なす先行研究の代表例として、生理学的観点から見た「基本感情説」(Ekman 1973)を紹介する。続いて、2.2節では、メタファーの観点から見た「感情の概念化」(Lakoff and Kövecses 1987; Kövecses 2000)について説明する。それから、感情を文化の産物と見なす、社会文化心理学と言語学の観点からの先行研究を見る (Markus and Kitayama 1991; Jozefien De Leersnyder; Boiger and Mesquita 2015; Mesquita 2001; Wierzbicka 2001; Lutz 1988, 2016)。

2.1. 「感情」を生理学基盤に基づく文化普遍的なものとみなす先行研究

生理学の分野では、身体的経験を重視し、感情を「長い進化の歴史によって定められた、先天的に設定された脳の装置に応じて生物学的に決定されたプロセスである」(Damasio 1999 : p.51)¹と見なす。言い換えれば、人は文化を問わず普遍的に「基本感情」を持ち、基本感情は人類に普遍的であるということである。そのような考え方の代表であるエクマン(1973)は、*surprise, fear, anger, sad, disgust, happy* の感情とそれを表す顔の表情が全人類に普遍的であり、生物学的基盤を持つと述べる。

身体的経験が言語の重要な基盤をなしていると考える認知言語学の分野では、「感情」の概念化が、言語表現の分析を通して様々な観点から論考されてきた。初期の研究として、Lakoff and Kövecses (1987)は、認知言語学の観点から、英語の感情語の一つである *anger* の比喩表現を分析した。彼らは、「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」「*anger* は容器内の液体」といった身体的経験に基づいたメトニミーとメタファーを抽出し、感情の理解に関して、メトニミーとメタファーは重要な役割を果たしていると述べる。

- 「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」の一般的なメトニミー

(a) Billy's a *hothead*. (体温の上昇) (Kövecses 1987: p.197 斜字は原文による)

- 「*anger* は火である」のメタファーと「*anger* は容器内の熱い液体である」のメタファー

(b) She was doing a *slow burn*.

(c) You make my *blood boil*. (Kövecses 1987: pp.198–202 斜字は原文による)

まず、(a) は、「*anger* の生理的反応は *anger* を代表する」という一般的なメトニミーを利用している。また、Lakoff and Kövecses によれば、(b)(c) に見られるように、怒りの生理学的影響の文化モデルのうち、特に「熱」を強調するという特徴は「*anger* は火である」と「*anger* は容器内の熱い液体である」という一般的なメタファーを形成するとされる。

つまり、Kövecses らは、感情に関する慣用表現はばらばらに存在するのではなく、メタファーなどを基盤にした一貫性を持ち、また、感情を引き起こす典型的な状況やそれによって起こる身体の生理的变化は「典型的シナリオ」(典型的理解モデル) の形で構造化されると主張している。

“1. Offending Event→2. Anger→3. Attempt at control→4. Loss of control→5. Act of Retribution”

表 1 : *Anger* の典型的な理解モデル (Lakoff and Kövecses 1987 : p.211 再掲)

渡辺 (2018 : p. 2) によれば、上述した Kövecses の一連の感情論は非常に強い影響力を持ち、この研究を出発点として、日本語や中国語などの研究でも、*anger* に相当するとされる感情概念の分析が多く提案され、感情語研究の分野では「怒り」をテーマとする一分野を形成しているという。

Kövecses (2000) では、Lakoff and Kövecses (1987) が英語の理解モデルの妥当性を確認するために使用した *but-test*² を用いてハンガリー語母語話者を対象にした調査を行い、英語と同様の結果が得られたと報告している (p.144)。ここで、*but-test* とは (d)(e) のような例文を用いたテストである。

(d) Max got angry, but he didn't blow his top.

(e) *Max got angry, but he blew his top.

(Lakoff and Kövecses 1987 : p.217)

¹ “biologically determined processes, depending on innately set brain devices, laid down by a long evolutionary history.” (Damasio, 1999: p.51).

² この *but-test* というのは、典型的理解モデルと呼ばれるものが実際に典型的であることを検証するために使用される言語テストである。

一般に、*but* を用いた文の後件では、前件からの期待に反する状況が表される。したがって、英語の *anger* のように、復讐意欲の含意がある感情語が前件にあるとき、(d) のような内容が後件に置かれれば、*but* を適切に用いていると判断される。一方、(e) のように、前件から十分予想できる内容が後件で表されてしまうと、*but* の使用は容認されない。

Kövecses は、英語の *anger*、ハンガリー語の *duh*、日本語の「怒り」、中国語の *nu* の比喻表現の分析から、4つの文化は、感情の理解に関して、“Cause → Emotion → Control → Loss of Control → Behavioral Response”という同様の基本構造を有すると主張している (p.58)。さらに、Kövecses は、*anger, sadness, joy, fear, love* の5つの感情を基本感情と位置付けている (p.3)。Kövecses によれば、普遍的な生理学の観点から考えると、異なる文化のメンバーは、普遍的な生理学と矛盾する方法で自分の感情を概念化することができない。一方、普遍的な生理学によって課せられた制約の中で、さまざまな方法で自分の感情を概念化することを選択できる (p.165)。

しかし、Kövecses が提案した *anger* の典型的理解モデルには、必ずしも普遍的とは言えない部分も存在すると言える。例えば、ベトナム語の *giận*³ という感情語の例を見てみよう。Kövecses の提案に当てはまる表現も見られる一方で、*giận* の理解モデルには、*anger* の理解モデルと異なり、復讐意欲の含意が義務的ではないという特徴が見られる。このことを、(f)(g) を例に見てみよう。

● ベトナム語：

(f) Cô ấy giận nhưng cô ấy im lặng. (作例)
彼女 あの giận が 彼女 黙る
(あの彼女は giận したが、黙った。)

(g) Cô ấy giận nên cô ấy im lặng. (作例)
彼女 あの giận だから 彼女 黙る
(あの彼女は giận したので、黙った。)

ベトナム語の *giận* は、*anger* と異なり、復讐意欲が必ずしも義務的ではないことを見てみよう。まずは、英語の例 (d) で見たのと同様の例として (f) を見られたい。(f) のように、逆接を表す *nhưng* を用いた文の場合、前件に *giận* を用い、後件で「攻撃的な行動からは予想しづらい行為(すなわち、黙ること)」を表せば、適切な文として容認される。しかし、これに対して、ベトナム語の *giận* では、(g) のように、前件と後件の内容を変えずに、順接を表す *nên* を使用することも可能である。この場合、*giận* は「悲しさ」のような受動的な感情を表すため、*nên* を使っても不自然ではなくなるのである。

すなわち、感情の概念化を説明する際、Kövecses らによる「身体の生理的経験基盤」に基づくアプローチは確かに有用であるものの、メタファーとメトニミーのみに頼った分析では、ある言語の母語話者が「感情」をどのように理解しているかを十分に説明できない問題も残ると言える。

2.2.感情を「文化」の産物と見なす観点

続いて、感情を「文化」の産物と見なす先行研究を概観する (Markus and Kitayama 1991; De Leersnyder, Boiger, & Mesquita 2015; Mesquita 2001; Wierzbicka 2001; Lutz 1988, 2016)。その上で、本稿の立場を述べる。

³ “English – Vietnamese Dictionary” (Vietnam Institute of Linguistics 1993 : p.52) によれば、英語の *anger* は“sự tức giận (類別詞 + tức giận)”に訳された。しかし *tức giận* は「tức + giận」という二つの単語から成る複合語である。*tức* の基本義(詰まる)は「体の特定の部分に何か引っかけたり、圧迫されたりして、非常に不快な状態」を指す。それ以外は、*sự nóng giận* (熱い + giận), *sự giận dữ* (giận + 強い), *con giận* (短期的な giận の状態) などの名詞もある。本稿では、生理的反応を表す語を除いた *giận* を研究対象とする。

2.2.1. 社会文化心理学による「自己」と「感情」の解釈 (Markus and Kitayama 1991; De Leersnyder, Boiger, & Mesquita 2015; Mesquita 2001)

・文化による「自己」と「感情」の解釈 (Markus and Kitayama 1991)

Markus and Kitayama (1991) によれば、文化が異なる場合、自己、他者、および両者の相互依存の解釈は著しく異なるという。そして、そのような解釈の違いによって社会状況の解釈も制約を受けるため、社会状況の認識も異なるとされる。

例えば、集団主義が中心的な東洋文化では「個人同士の基本的な関連性を主張するという個性」が明確であり、「他者への配慮や調和のとれた相互依存」が強調される。このような自己観を「相互協調的自己観 (interdependent construal of the self)」と呼ぶ。一方、個人主義が中心的な西洋文化では、個人は「自己に注意を払い、独自の内的属性を発見して表現する」ことにより、他者からの独立を維持しようとする。このような自己観を「独立的自己観 (independent construal of the self)」と呼ぶ (pp.226–227)。

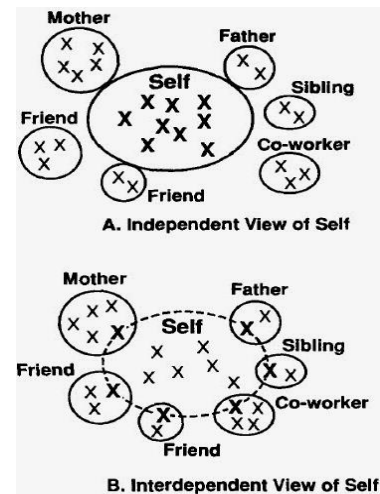


図 1：独立的自己観と相互協調的自己観
(Markus and Kitayama 1991 : p.226)

したがって、Markus and Kitayama は、感情的な経験は自己の解釈によって体系的に変化し、かつ、自己の解釈によって「自己中心的感情 (ego-focused emotions)」と「他人中心的感情 (other-focused emotion)」という 2 つの感情があると主張する。その違いが具体的に現れることとして、独立的自己観の人の感情表現は、anger、sadness、fear などの内なる感情を文字通りに表現するのに対して、相互協調的自己観の人の感情表現は、相手と自分の関係を反映することが多く、内面の感情に直接関係しないことがある (p.236)。

・「感情」は文化的価値を反映する (De Leersnyder, Boiger, Mesquita 2015; Mesquita 2001)

De Leersnyder et al. (2015) によれば、同じ文化の人であれば、人間関係のゴールを共有すると、同じ感情を経験する傾向があるという。つまり、感情の経験よりも、文化の基準に基づく状況の評価が先立つということである。また、状況評価の違いの根底には文化間の価値判断の違いがある可能性も指摘されている。

- 1) “Differences in the most important cultural values may underlie some of the differences in appraisals: People will appraise emotional situation according to their meaning with regard to important values.”
(De Leersnyder, et al. 2015 : pp.12-13)

例えば、個人主義文化の社会では、個人の自律性を維持しながら、お互いの独立をサポートする。したがって、個人の自尊心や自律性の反映と言える anger のような感情は、高く評価される。対照的に、日本のような集団主義文化における社会では、相互に依存し、互いの期待に適応することをゴールとする。その場合、自分の行動を調整する必要があるため、自分の欠点を反省することが重要な価値を持つ。したがって、他者との調和を促進する「恥」のような感情が、引き起こされやすくなる (pp.7-8)。

Mesquita (2001) の研究では、個人主義者と集団主義者の文脈における感情の違いに関する仮説を検証するために、心理学的調査が実施された。個人主義の文化に属するオランダ人と集団主義の文化に属するスリナム人およびトルコ人を対象者として、6 種類の場面における感情に関する自己報告を行った。その結果、個人主義の文化と集団主義の文化における感情は以下のようになったという。

個人主義の文化における感情	集団主義の文化における感情
・個人の基準および目標に基づく ・個人の主観的な感情に焦点を当てる ・相対的な社会的地位への影響はあまり重視されていない	・社会的価値の評価に基づく ・大部分は、個人の内面ではなく、現実を反映している ・自己の主観性に限定されるのではなく、自己と他者の関係に属している

表 2：個人主義の文化と集団主義の文化における感情の特徴 (Mesquita 2015 に基づく)

つまり、感情は集団主義と個人主義の文化の核となる特徴を反映すると言える。そのため、相互作用や人間関係の中で展開される感情というものの自体が、文化によって異なる可能性があると考えられる。

2.2.2. 言語に着目した「文化固有の感情」 (Wierzbicka 2001; Lutz 1988; Lindquist, Gendron, and Satpute 2016)

続いて、言語に着目した感情の普遍性の議論を見てみよう。Wierzbicka (2001) は、様々な言語における感情表現の研究を基に、エクマンの基礎的感情モデルに反対している。Wierzbicka によれば、感情に関する議論の多くが英語の感情語を基にしており、かつ議論自体も英語でなされているため、それぞれの言語文化の文化固有の感情を正確に理解できないという。エクマンのモデルに代わって、Wierzbicka (2001 : p.17) は、*anger* などの感情語は、特定の文化モデルの価値観や先入観などを反映すると主張する。つまり、感情の経験は、文化シナリオを背景にしているということである。

続いて、文化人類学における研究も見ておく。Lutz (1988) は、感情語は、共通の文化的背景を持つ聞き手に、精巧な「シナリオ」やフレームを呼び起こすと主張している (p.10)。有名な例として、集団主義文化のミクロネシアの Ifaluk (イフォラック) 語の *song* という感情が挙げられる。

イフォラックは太平洋西部カロリン諸島の珊瑚環礁であり、人口は約 430 人である。イフォラックの価値観の最も重要な特徴は、非攻撃性、家庭内および家庭間での協力と分かち合い、そして、集団内の服従に重点を置く点である (Lutz 1982 : pp.113-114)。イフォラックの人々の間では、*song* (正当な怒り) という感情概念がよく使用され、日常生活に浸透している。*song* は、英語の *anger* のように「望ましくないことに対する不快感」を指すが、その不快感が生じる原因という点で *anger* とは異なる。*anger* は、感情発生の主な原因が個人の欲求を拘束されることであるが、それに対して、*song* はだれかが島の道徳的価値観や規則を侵害したときに生じる感情であるという。Lutz (1988 : p.178) は、個人主義のアメリカで用いられる *anger* は、個人の権利に対する感情を表す一方で、イフォラックの *song* は、社会的規範に対する感情を表し、かつ、個人は権利の結びつきとしてではなく、人間関係の構成要素として見なされていることを指摘している。

心理学の分野でも、感情を個別のカテゴリーとして認識する際に、言語が担う役割を強調する立場がある (池田 2018)。例えば、心理構成主義と呼ばれるアプローチでは、言語が表象する概念化によって、生理学的状態 (core affect・コアアフェクト) の解釈がなされ、はじめて感情として経験されると主張している (Lindquist et al. 2016 : p.580)。コアアフェクトは、「感情価」と「覚醒度」という 2 つの要素から構成される (Russell : 2003)。



図 2 : Core Affect (Russell 2003 : p.148)

・感情価 (valance) (横軸) : 「感情がポジティブかネガティブか」を表す。

・覚醒度 (arousal) (縦軸) : 「感情状態の強さ」を指す。高い覚醒度は「行動を準備する活性化された状態」である。一方、低い覚醒は「無気力や休みの状態」を指す。

例えば、図 2 が示すように、英語の *sad* は *displeasure* + *deactivation* の感情である。

これまで見てきたように、人間は生物学的基盤や進化的基盤を共有する側面があるとしても、抽象的な感情の捉え方には、文化もさまざまな形で影響を与えられ考える。つまり、Ekman や Kövecses らが提案した英語の基本感情も、英語文化を反映している可能性がある。そのため、ある言語文化が感情をどのように捉えているかを知るためには、生物学的基盤や身体的反応だけでなく、母語話者がその感情に対して有する背景的知識を知る必要がある。

次節以降は、英語の *anger* と日本語の「怒り」とベトナム語の *giận* に関する感情語が母語話者にどのような背景的知識を活性化するかという心理学的なテストを行い、その結果に基づく認知言語学的分析を行い、Kövecses の理解モデルの妥当性について検討する。

3. 母語話者による「感情」に関する「背景的知識」の心理学的実験

本節では、英語の *anger* と日本語の「怒り」とベトナム語の *giận* が、それぞれの母語話者にどのように捉えられているかを調べるために行った 2 つの心理学的実験の結果を示す。続いて、認知言語学の「フレーム」(Fillmore 1982) と「スコープ」(Langacker 2008) の考えを援用し、その結果に基づく認知言語学的分析を行う。

3.1. 前提となる諸理論 : 「フレーム」(Fillmore 1982)、「直接スコープ」(Langacker 2008)

・ フレーム (Fillmore 1982)

フレームとは、言語表現によって喚起される「背景的知識」であり、その表現の意味を正しく理解するために必要不可欠なものであるとされる (Fillmore : 1982)。例えば、BUY という語を理解するには「買う人はお金を売り手に渡すということと引き換えに、商品を受け取る」という商取引の背景的知識が必要である。逆に、BUY という語は「商取引」のフレームを喚起するとも言える。

・ 直接スコープ (Langacker 2008)

Langacker (2008 : p.63) によれば、直接スコープ (immediate scope) とは、「指示対象を特徴づけるのに最も関与性があり、際だっている領域 (onstage region—注目を集める一般的な領域)」とされる。例えば、英語の NIECE は、親族関係のシステムを背景的知識としている。しかし、NIECE の概念を理解するために、親族システム全体が必要なわけではない。図 2 に示すように、すくなくとも <親><自己><兄弟姉妹の子供> が NIECE の直接スコープを構成する (Croft 2018 : p.63)。

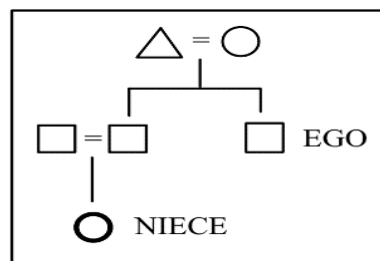


図 3 : NIECE の直接スコープ (Croft 2018 : p.63)

3.2. 実験①：感情経験の自己報告（英語の *anger*、ベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」）

【目標】：それぞれの感情語が母語話者のどのような背景的知識を活性化するかを調査する。

【方法】被験者：英語母語話者（2人）日本語母語話者（3人）ベトナム語母語話者（3人）

実験の流れ：用意した Google Form（参考文献 図 4）に母語で「自分の感情経験を思い出しながら、それについて詳細に記入してもらう。

【仮説】：個人主義文化の英語は「自己中心の背景的知識を活性化する」一方、集団主義文化のベトナム語と日本語は「他人と自分の関係中心の背景的知識」を活性化する。

【結果】

・日本に住んでいる 40 代のアメリカ人男性（母語：英語）

“My coworker who is Japanese asked me about a student that was supposed to start a new class the following week. I said next week is impossible to start because the textbook we will use won't arrive in time. The student can't start next week, in two weeks can start. The coworker asked me again. I gave the same reply. I was asked can't the student start anyways, I said no. This went on several more times. **I was getting upset. I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over. I was confused and frustrated why I was asked the same thing so many time. Why ask me the question if you don't value my opinion. My tone of voice changed as I was getting upset.**（一部省略）”

・20 代のベトナム人男性（母語：ベトナム語）

“I don't have a close friend, so I'll write a story about **a family member I consider my best friend**. She and I quarreled in the night just before New Year's countdown only 3 hours left. The problem of **giận nhau (giận + mutual)** was only a tiny thing, but no one gave up. Hence, it became a big deal and **brought me a horrible experience** after 25 years of living in this world. It started when I asked that person to help me do something. Still, instead of talking softly, she suddenly raised her voice at me, even though I said it a second time in a very soft voice, hoping she would calm down. "Calm down and talk softly," but it doesn't work. And now I couldn't keep my composure and we started talking loudly to each other. **As a result, one person cried, and the other left just 2 hours before New Year's Eve.**”

・20 代の日本人男性（母語：日本語）

「ある日、深夜にあるコンビニに食料を買いに行きました。深夜帯だったので、他のお客さんはいませんでした。たくさんの食べ物を買い込み、レジに行くと、店員がいませんでした。呼ぶと、**アルバイトと思われる店員**が店の奥からのっそり、面倒そうに出てきました。レジ袋に商品を詰めてもらったのですが、商品の大きさのバランスが合っておらず何度も袋が崩れました。確かにたくさんの商品を一度に購入して手間をかけさせてしまいましたが、もう少し丁寧に扱って欲しかったし、もし無理なら私に任せてほしかったです。最後には、袋の中からある商品がこぼれ出てしまい、床に落ちてしまったので、店員は無言でレジを出ていき、新しい商品は無言で嫌そうに差し出しました。今までの面倒臭そうな接客態度、**買いたい商品を雑に扱われたこと、そして、まるで商品を落としたのが購買者である私の責任であるかのような姿勢に対して残念に思うと同時に、怒りが湧き、**帰宅後にカスタマーセンターに報告しようかと思いましたが、それほどの問題でもないと思い、やめておきました。（一部省略）」

【考察】

上記の3つのストーリーは、一見すると、「あることに対する不快感」という点で共通しているように見える。しかし、個人主義文化の英語は「自己中心の背景的知識を活性化する」一方で、集団主義文化のベトナム語と日本語は「他人と自分の関係中心の背景的知識」を活性化するという大きな相違点が見られる。表3を参照されたい。

個人主義文化（英語）	集団主義文化（日本語・ベトナム語）
・個人と個人の関係で「個人の権利と利益が侵害される」という観点から記述した。 “My coworker who is Japanese...” “I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over.” “Why ask me the question if you don't value my opinion.”	・「特定の関係ではどう反応すべきか」という社会基準の観点から記述している。そのため、個人と相手とのつながりを具体化する傾向がある（相手との関係を強調する）。 例 日本語：店員と客の関係 「アルバイトと思われる店員-購買者」 ベトナム語：親友関係、家族関係 “...a family member I consider my best friend.”
・相手と自分の状況に焦点を当てず、その代わりに、感情表現を多く使い（getting upset（2）、confusing、frustrated）読み手に「自分がどう感じていたか」という主観的感情を強調する。 例：“I was getting upset. I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over. I was confused and frustrated why I was asked the same thing so many time...My tone of voice changed as I was getting upset.”	・内的世界よりも現実を反映している。感情表現をあまり使わず、相手と自分の状況を全体的に表すことで、読み手をその視点に入り込ませ「その関係で相手はどう対応すべきか」「読み手だったらどう感じているか」を理解してもらうことに焦点を置く。 例 日本語：「店員は無言でレジを出ていき、新しい商品を無言で嫌そうに差し出しました。」 ベトナム語：“...and we started talking loudly to each other. As a result, one person cried, and the other left just 2 hours before New Year's Eve.”

表 3：感情経験の自己報告に基づく英語と日越言語の感情における相違点

【理論的含意】

① 「感情をさらされた原因」の判断基準がそれぞれの言語の文化的価値観により異なる可能性がある。具体的には、英語文化では「個人の権利と利益が侵害されるかどうか」という基準に基づいて判断される一方、ベトナム文化と日本文化では「集団の倫理・常識が侵害されるかどうか」という社会的基準に基づいて判断される。

② 言語表現によって関連する「背景的知識」が喚起される（Fillmore：1982）ため、それぞれの感情語がそれぞれのフレームを喚起する可能性がある。

a. 個人主義文化を背景に持つ英語の *anger* は「個人中心的感情」（Markus and Kitayama（1991）であり、「個人の権利と利益が侵害されることへの感情」という典型的フレームが喚起される（Lakoff and Kövecses 1987）。

b. 集団主義文化を背景に持つベトナム語 *giận* と日本語の「怒り」は「他人中心的感情」である。ベトナム文化は「祖国、親戚、家族との密接な絆」という価値観が大事にされる（Nguyen 2016：pp.34-35）ので、「親密な人がすべきでないことへの感情」が特別視される。

日本文化は「社会の調和的維持を目指した『和』の理念」が重視される（実松 2018：p.171）ため「怒り」は「常識の理不尽な言動への感情」が典型的なフレームとして喚起される。

また、そのフレームに焦点が当てられる要素（直接スコープ）も言語によって異なる。例えば、*anger* は、原因となる相手との関係を特定せず、自分の状態に焦点を当てる。対照的に、ベトナム語と日本語は相手と自分の関係を具現化する傾向がある。

3.3. 実験②：母語話者による *angry - upset/ giận - tức* / 「おこる」 - 「腹が立つ」を用いた例文の作成

【目標】：以上の含意を検証するため、母語話者に感情語を用いて例文を作成してもらう。

【方法】

・被験者

英語母語話者	アフリカ系米国人 (30代-50代 5人) ヨーロッパ系米国人 (10-40代 3人)
ベトナム語母語話者	20代 (8人)
日本語母語話者	20代 (5人) 40代 (3人) 50-70代 (3人)

各言語の感情に関する2つずつの感情語を用いて作文してもらう。その際、必ず感情の「原因」とそれに対する「反応」を入れて、下記の形式で作文してもらう。

英語と日本語の感情語は、実験①の自己報告にあったものである (*upset* と「腹が立つ」)。ベトナム語の場合は、生理的な状態を表す *tức* を使用する。

・例文の形式

1. I was angry that(CAUSE), so I(REACTION).	1. Tôi (cảm thấy) giận vì..., nên tôi... 私 感じる giận ので そして 私	1. 私は (原因) に怒って、(反応) した。
2. I was upset that(CAUSE), so I(REACTION).	2. Tôi (cảm thấy) tức vì..., nên tôi... 私 感じる tức ので そして 私	2. 私は (原因) に腹が立って、(反応) した。

【結果】

① 英語話者の作文：個人の権利と利益が侵害されたという内容（例：あおり運転や騙されるなど）が多い。また、原因の相手を特定せず、被害を受けた個人の状態に焦点を当てる傾向がある (*upset* の場合、感情の度合いが *angry* より弱い)。

- I was **angry** that **someone cut me off in traffic**, so I flipped them off/honked and yelled at them.
- I was **angry** that I **was lied to**, so I wanted to fight.
- I was **upset** that **my new car was totaled** so I filed an insurance claim.
- I was **upset** that I **failed the exam**, so I cried.

② ベトナム語話者の作文：怒りの原因となった人物が自分と親密であるかどうかで区別される。生理的反応を表す *tức*（詰まる）は、個人の権利と利益が侵害されたという内容が多く、また *tức* の基本義である「詰まる」に由来して、「仕方がない」という意味合いの文も見られた。

- Tôi thấy **tức** vì **bị đối xử bất công** nên tôi bỏ đi.
私 見る **tức** から される 不当な扱い だから 私 離れていく
(不当な扱いをされたことに私は *tức* を感じた。だから、(そこから) 離れていった。)

- Tôi **tức** vì **không đánh con nhỏ đó được**, nên tôi trút giận lên bạn thân.
私 **tức** から あの女を殴れなかった だから 私 ぶちまけた 上 親友
(あの女を殴れなかったことに私は *tức* した。そのため、親友にぶちまけた。)

一方、*giận* を使うと、親密な相手としてすべきではないことのコンテキストが典型的となり、「親密な関係」が具現化される傾向がある。「相手を気にかけているから、この感情を覚えた」という側面が強調されている。また、相手が親密であることから、反応の内容としても「攻撃的な態度」ではなく受動的な態度が多く見られる。

g. Tôi **giận** vì người đó đã không làm được những gì họ hứa,
 私 **giận** から あの人 (彼氏) しなかった 得る 複数 何 彼 約束する
 nên tôi đã bỏ về mặc cho họ xin lỗi rất nhiều.
 だから 私 帰ったにもかかわらず 彼 謝る たくさん

(あの人が約束を果たさなかったことに私は **giận** して、彼が謝ったにもかかわらず私は帰った。)

h. Tôi thấy **giận** vì bị leo cây,
 私 見る **giận** から された 約束が守られなかった
 nên tôi ngưng nói chuyện với người đó.
 だから 私 やめる 話す と あの人 (親友)

(約束を守らなかったあの人に私は **giận** して、話すのを辞めた。)

③ 日本語話者の作文：20代の母語話者（5人）と40-70代の母語話者とで、相違が見られる。
 まず20代の日本語母語話者の「怒り」は、個人の権利と利益が侵害されたコンテキストが多い
 (友達に殴られたこと、将棋に負けたこと、彼氏が浮気をしたことなど)。

- i. 私は花粉に腹が立って机を蹴った。
- j. 私は彼氏が浮気をしたことに腹が立って、彼からの手紙を全て燃やした。
- k. 私は、彼氏が浮気したことにおこって、家から彼を追い出した。
- l. 私は将棋に負けたことにおこって、機嫌が悪くなった。

一方、40代以上の母語話者の「怒り」は、規則、常識、決まりごとに対する理不尽な言動のコンテキストが多い。また、それゆえ、反応としても「復讐」ではなく、「過ちや罪、欠点などを指摘する」という内容が多く見られる。

- m. 息子が嘘をついたのでお父さんが腹を立て、息子を叩いた。
- n. 私は政府の政策に腹が立って、新聞へ投書した。
- o. 私は販売員の対応におこって、商品を買うのをやめた。
- p. 私は店員の態度におこって、本社へクレームをいれた。

このような相違は、「グローバル化の進展により、伝統的には集団主義的である日本において、急激な個人主義化が進んでいる」(荻原 2015) ことで、日本の若者の「怒り」が「他人中心的感情」から「自己中心的感情」になっている可能性がある。

4. 提案：英語の *anger* ベトナム語の *giận* と日本語の「怒り」の典型的な理解モデル

第3節では、英語の *anger*、ベトナム語の *sự tức giận* と日本語の「怒り」の背景的知識に関する実験結果を見た。本稿が示した2つの実験結果からわかるように、生理的状态だけに注目する *anger* の典型的理解モデル (Lakoff and Kovesces 1987) は、ベトナム語と日本語には当てはまらない部分があると言える。ベトナム語の *giận* や日本語「怒り」も「ある事に対する不快感」という点では *anger* と共通しているものの、その判断の基準や、感情に続いて起こる反応がどのような意味を持つかを正確に捉えるためには、言語ごとの文化的価値観を反映した、個別的なモデルが必要であると考えられる。

本節では、認知言語学の「フレーム」「直接スコープ」の概念に加え、心理的構成主義の「コアアフェクト」の概念を援用し、各言語の典型的な理解モデルを提案する。

• 英語の *anger* : 独立した個人からの観点

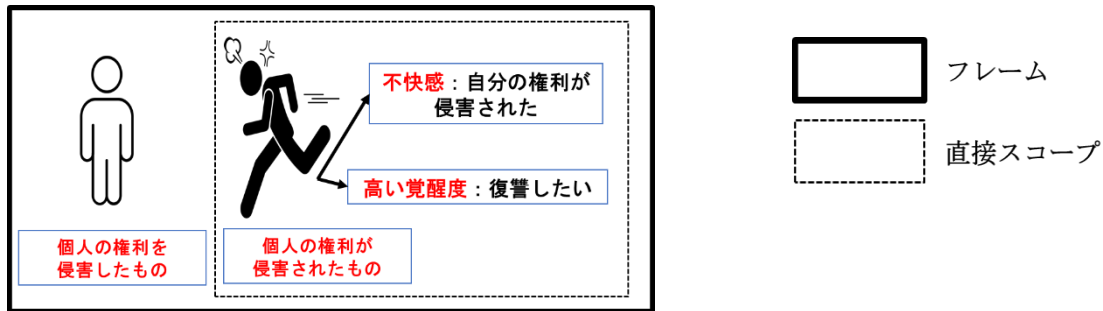


図 5 : 英語の *anger* の典型的理解モデル

Lutz (1988) が指摘しているように、*anger* は、個人の欲求や権利が侵害されたこと（フレーム）への感情である。個人の内面に焦点を当てた感情であるため、原因となった相手特定する必要はなく、もっぱら自分の状態に焦点を当てる（直接スコープ）傾向がある（したがって、受動態や不定代名詞と共に起る傾向がある）。また、その感情の度合いが強くなると、最終的には感情の原因に対して暴力を行使する可能性もある。この点については、Lakoff and Kövecses (1987) の *anger* の理解モデルに一致する。

• ベトナムの *giận* と日本の「怒り」: 集団の一員からの観点

一方、ベトナム語の *giận* と日本語の「怒り」の典型的理解モデルは、*anger* と異なる。これらはいずれも「他人中心的感情」であるため、「原因である相手との関係」を言語の上でも明示する傾向がある。

しかし、文化ごとの価値観によって、ベトナム語と日本語でもフレーム内の要素がそれぞれ異なる。まず、「祖国、親戚、家族と親密な絆を持っている」という価値観が大事にされるベトナム文化では、「親密な人としてすべきでないことへの感情」が特別視される。また、原因となった相手が親密な関係であることから、感情に対する反応としても、典型的には、攻撃的な態度だけでなく受動的な態度が見られる場合もある。そのため、以下の 2 つの例文は、どちらもベトナム語として自然である。しかし、能動的反応であっても、それは「復讐」ではなく「相手に期待していたのに…」という失望感の含意が含まれる。

f) Cô ấy giận nhưng cô ấy im lặng. (作例)
彼女 あの giận が 彼女 黙る
(あの彼女は giận したが、黙った。)

g) Cô ấy giận nên cô ấy im lặng. (作例)
彼女 あの giận だから 彼女 黙る
(あの彼女は giận したので、黙った。)

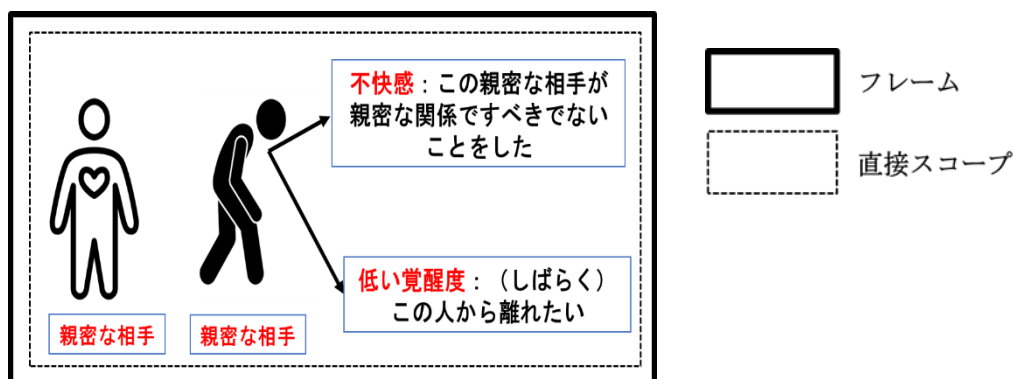


図 6 : ベトナム語の *giận* の典型的理解モデル

一方「社会の調和的維持を目指した『和』の理念」が重視される日本文化の「怒り」では、「常識などに反する理不尽な言動への感情」が典型的なフレームとして喚起される。また、社会的規則を侵害したことが原因となって生じる感情であることから、それに対する反応は「復讐」よりもむしろ「過ちや罪、欠点などを指摘すること」に傾く。

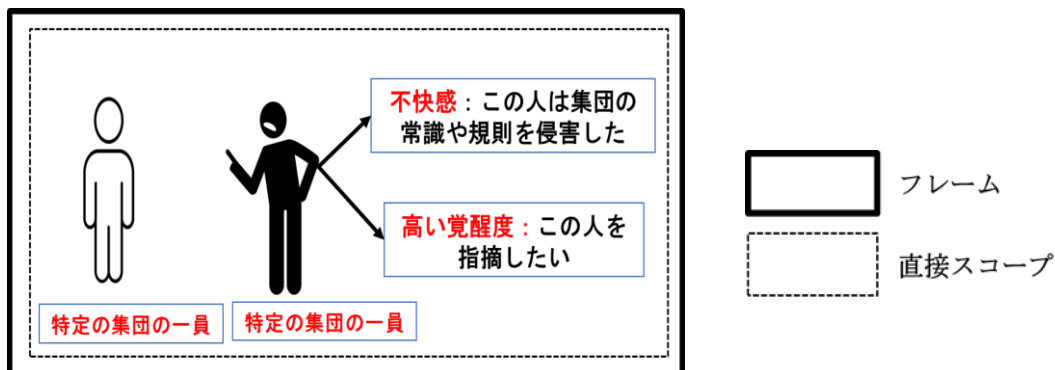


図 7: 日本語の「怒り」の典型的理解モデル

つまり、英語母語話者の *anger* の反応や行動は、部分的には日本語話者やベトナム語話者においても見られることもあるが、そのような場合であっても、その反応を裏付ける動機は文化によって異なると言えよう。

5. おわりに

本稿では、英語の *anger* と日本語の「怒り」とベトナム語の *giận* について、各感情を母語話者がどのように捉えているかを調べるために、2つの心理学的実験を実施した。その結果を認知言語学の観点から分析および考察し、それぞれの言語文化が有する感情の典型的理解モデルを提案した。

本稿の調査結果が示すように、3つの感情は「ある事に対する不快感」という意味では共通しているものの、その事がどの基準で判断されるか、または、後続する反応がどのような意味を持つかなどは言語ごとに異なる。したがって、文化的価値観を反映した個別的な感情理解モデルが必要となる。Kövecses らが提案した英語の典型的理解モデルも、英語文化の特徴を反映した、言語個別的なモデルであると捉えることができる。

*本稿の執筆にあたり、大阪大学大学院人文学研究科の田村幸誠准教授、同研究科の大森文子教授、大阪大学日本語日本文化教育センターの松浦幸祐特任助教から有益なご助言を頂きました。ここに感謝申し上げます。また調査にご協力いただきました調査対象者の皆様にお礼を申し上げます。

参考文献

- 池田慎之介 (2018) 「感情の経験と知覚における言語の役割—理論的整理と発達の検討—」『心理学評論』61 巻 4 号 pp.423-444.
- 実松 克義 (2018) 「『和』：日本的調和の思想の起源と本質」『紀要論文』応用社会学研究 60 巻 pp.171-190.
- 荻原 祐二 (2015) 「日本社会・文化の個人主義化に伴う不適応問題の解明」 京都 大学、博士(教育学).
- 渡辺 秀樹 (2018) 「英語感情名詞メタファーの系譜 第1回 序 及び fear (The Oxford English Dictionary 引用例を資料として)」『言語文化共同研究プロジェクト 2018』 pp.1-18.
- William Croft, D Alan Cruse (2018) *Cognitive linguistics*. Cambridge University Press.
- Damasio Antonio (1999) *The feeling of what happens: Body and emotion in the making of consciousness*. New York: Harcourt Brace & Company.
- Ekman Paul (1973) *Darwin and Facial Expression A Century of Research in Review*. New York : Academic.
- Fillmore, Charles J. (1982). Frame Semantics in *Linguistics in the Morning Calm*. Hanshin Publishing Co., Seoul. pp. 111-137.
- Lakoff, G., & Kövecses, Z. (1987). “The cognitive model of anger inherent in American English.” In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought*. Cambridge University Press. pp. 195–221.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lindquist Kristen A., Gendron Maria, and Satpute Ajay B. (2016) “Language and Emotion Putting Words into Feelings and Feelings into Words” in Lisa Feldman Barrett, Michael Lewis, and Jeannette M. Haviland-Jones (2016) *Handbook of emotions (4th edition)* . Guilford Press, New York. pp. 579–609.
- Lutz Catherine (1982) “The Domain of Emotion Words on Ifaluk”. *American Ethnologist*, Vol.9, No.1 pp.113-128.
- Lutz, C. A. (1988). “*Unnatural emotions: Everyday sentiments on a Micronesian atoll & their challenge to Western theory*”. University of Chicago Press.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and emotion: Language, culture, and body in human feeling*. Cambridge University Press.
- De Leersnyder, Jozefien; Boiger, Michael; Mesquita, Batja (2015) Cultural differences in emotions. *Emerging trends in the social and behavioral sciences: An interdisciplinary, searchable, linkable resource* 2015.Wiley; Hoboken, NY. pp. 1-15.
- Nguyen, Quynh Thi Nhu (2016) “The Vietnamese Values System: A Blend of Oriental, Western and Socialist Values”. *International Education Studies*; Vol. 9、 No. 12、 pp.32-40.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*、 98(2)、 pp.224–253.
- Mesquita, B. (2001) Emotions in collectivist and individualist contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*、 80(1)、 pp.68–74.
- Russell, J. A. (2003) Core affect and the psychological construction of emotion. *Psychological Review*、 110(1)、 pp.145–172.
- In Jean Harkins, & Anna Wierzbicka (Eds.) (2001) *Emotions in crosslinguistic perspective*. Berlin: Mouton de Gruyter.

辞書類

- Viện ngôn ngữ học [(Vietnam) Institute of Linguistics] (1993) *Từ Điển Anh - Việt* [English – Vietnamese Dictionary]. Ho Chi Minh City General Publishing House.

1.まず、「親友に打ち明けている場面」を想像してください。

★

そして会話の話題は、あなたの怒りの出来事です。友達が理解できるように、その話を詳しく述べてください。

(*たとえば、何が、または誰があなたを怒らせたのか、その時に、何をしたかったのか、どのように行動したのかなど)。

※もちろん自分の本当のストーリーでも、作り話でも良いです(^^~)。



図 4：実験①の GOOGLE FORM

期待値からみた取り立て助詞—複合表現シハシナイの特徴をめぐって—
人文学研究科 言語文化学専攻 博士後期課程2年 山倉佐恵子

第1節 はじめに

日本語学の研究において、助詞「は」の意味に関する議論は多くあるのに対して、「は」を含む「～しはしない」という文末形式が表す意味の議論は、それほど盛んではないようである。この形式は、助詞「は」が動詞連用形に接続する形をとり、例えば「逃がしはしない」、「渡しはしない」のように用いられる。このうち、助詞「は」は、「取り立て助詞」に分類され、「も」、「でも」、「さえ」などと同列に論じられることが一般的である（[寺村, 1991]など）。特に、「も」は他のものを累加して表す助詞であり、「は」は他のものを排他的に表わす助詞として比較されることもしばしばである。このような研究の流れから考えると、「も」が表す累加の機能との対照の中で、「は」や「～しはしない」が表す排他的意味を考察することも十分可能であると思われる。したがって、本論文では、「～しはしない」の「は」が表す意味について、助詞「も」の意味解釈に用いられる「E 値のスケール [山中, 1991b]」という概念を用いて分析と考察を行う。具体的には、「ある事態の成立を期待・予測する度合い」である E 値という概念を用いて、対比の「は」と「も」を比較する形で、「は」が含意する「ある事態の成立を期待・予測する度合い」を明らかにしたい。

第2節 先行研究

2.1 節 「～しはしない」に関する先行研究

本節では、「～しはしない」という形式を扱う先行研究を概観する。まず、「～しはしない」は、例えば以下のような形で用いられる。なお、以下では、(1)や(2)のように、「逃がしはしない」や「行きはしない」といった形であっても、便宜上「～しはしない」と呼ぶ。

- (1) 「いや、逃がしはしないぞ」 隆之は、降魔の剣を握りしめ、強く念じた。
（『一千年の陰謀』井沢元彦 角川書店 BCCWJ）
- (2) 「知っていれば雨がふるのに岩のほうまで行きはしないわ」 青木[1992:273]

「～しはしない」の意味について、先行研究では、「意味が曖昧である」[日本語記述文法研究, 2009:29]といった記述や、「（「は」の主な役割である主題提示や）対比や譲歩の感じられない例」[青木, 1992:275]といった記述が見られる。このような記述は、助詞「は」の基本的な役割に「主題」と「対比」の二つがあるという記述を前提にした上で、しかし、名詞修飾節などで使われている「は」は「主題」を表さず、また、「対比」としては具体的内容に欠けるという現象を背景に持つものと考えられる。しかし、「～しはしない」における「は」は、主節に現れるものであり、かつ、否定形に接続するという同様の形で多くの用例も見られる。さらに、もし先行研究の指摘通り、「～しはしない」の「は」に曖昧な意味しかないのであれば、この形式が存在する理由についてさらなる説明が必要となるはずである。上記の理由から、本稿では、「～しはしない」という形式は、この形式で一定の意味をなすと仮定し、議論を進めることとする。ただし、「～しはしない」という1つの形式が持つ意味を明らかにするために、その一部を形成する助詞「は」の意味的貢献という観点からも分析を試みる。

2.2 節 助詞「も」に関する先行研究

続いて、「も」に関する先行研究を見ておこう。先述したように、「は」は「も」との比較の中で分析されることが多かった。確かに、文の主題を表す機能に関して言えば、もっぱら「は」が議論の中心となるため、完全に同列の扱いとはいえないが、指示対象を他と対比するか並列するかという点で対称性が読み取れることから、「は」と「も」の比較は十分に可能であると考えられる。

「も」は、取り立て助詞、すなわち、「ある事態を他の事態から取り立てることで強調する助詞」とであるとされる。より具体的には、並列的な事物を累加して含意するのが基本的な機能である。例えば、(3)では、「彼」を取り立て (4a) の意味を表すと同時に、(4b) のように、彼以外の誰か、例えば「彼女」が運転することも連想させる。

- (3) 彼も運転する
(4) a. 彼が運転する
b. 彼以外（彼女、あなたなど）が運転する

ここで、「も」の用法の一つとして、「意外の「も」」と呼ばれる用法を確認しておきたい。「意外の「も」」とは「類似する情報のうちスケール上値がもっとも低い意外な情報だけを「も」で表現する [定延, 1993:148]」用法であるとされる。例えば(5)では、「他の誰かが愛想を尽かしても、親は愛想を尽かさないだろう」という想定が存在する。しかし「その親でさえ愛想を尽かした」というのが「も」が表す意味になる。ここで、「他の誰かが愛想を尽かしても…」という想定は、「Xが愛想を尽かす」ことに関して「親」が「X」に該当しないという想定だと言い換えることができる。なお、定延[1993]における「スケール」という概念は、山中[1991b]による「E 値のスケール」という概念を援用したものであるが、これについては 2.3 節で詳しく説明する。

- (5) 親も愛想を尽かした。

なお、「意外の「も」」に関する重要な特徴の一つとして、「も」が提示する並列的な「X 以外の要素」は、ことさら意外性がなくとも、「文面から大体予想されるもの」[沼田, 2009:135]であればかまわない点が挙げられる。例えば、(6b)の「親以外の誰か」は、現実世界に実在しない存在（例えば想像の中の不特定の存在）であっても文は成り立つ。さらには、(7)のように、「首相以外」の存在が文脈の中で明示されていなくとも、意外性の意味は理解される。

- (6) a. 親が愛想を尽かした
b. 親以外の誰か—例えば他人—も愛想を尽かすが、親は愛想を尽かさないと思った。
[沼田, 2009:134]
(7) 緑化運動には首相も乗り出すほど、力を入れられた。[沼田, 2009:135]

本節で見た「意外の「も」」がもつ2つの意味的特徴、すなわち、(i)E 値を含意することと、(ii)「X 以外」の要素は文面から予想されるものであることは、本論文で扱う「～しはしない」の「は」の意味とも大きく関わる。

2.3 節 「E 値のスケール」に関する先行研究 [山中, 1991b]

本節では、2.2 節で言及した「E 値 (EXPECT 値) のスケール」について概観する。これは「命題成立可能性のスケール [定延, 1993]」とも呼ばれる概念で、次のように定義される。

- (8) 「話し手が表現時以前の聞き手との共通認識から提示した要素が命題関数を満たすことに関して、期待・予測する主観的な評価の度合い」[山中, 1991b]

換言すると、E 値とは「ある事態の成立を期待・予測する度合い」である。E 値は、スケールを内包するための先行文脈が必要であるとされるため、文脈と取り立てた「X」によって含意の受け取りやすさも異なってくる。特に含意されやすいのは、語自体が段階性を有する場合である。例えば(9)の「社長」のように、階級のある語はスケールが含意されやすい。「社長」という語からは、「部長」や「課長」といった役職に関する他の要素が想起されやすいのと同時に、それら他の役職と比べて「典型的にはペコペコしない」という知識も喚起される。このような前提知識を基に、(9)からは「普通はペコペコしない社長がペコペコする」という含意が解釈されるわけである。

- (9) あの人には、社長もペコペコする。

このような、「社長」「専務」「部長」といった役職に関して、「X がペコペコする」の E 値を図式化したものが図 1 である。図 1 では、「部長や専務は、社長に比べるとペコペコしやすい」というような段階性、すなわち、「X がペコペコする」に対する E 値のスケールが表されている。

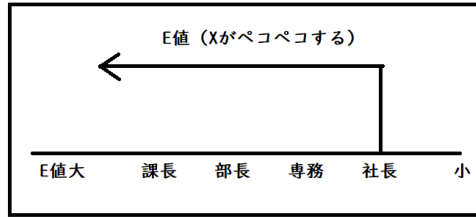


図1：E 値のスケール[山中，1991b]

本稿では、以上で見たE 値という概念が助詞「は」の意味にも関わると仮定し、考察を進める。その上で、E 値はあくまで「X」と「X 以外」の二つの間に成り立つものだとする沼田[2009:137]の考えに沿う。沼田[2009]では、「も」がE 値を有し取り立てる際に視野に入っているのは「X」と「X 以外」のE 値の差だとしている。つまり、沼田の主張は、「も」におけるE 値に関して、「X 以外」の諸要素間の差は問題にならないということだとまとめられるが、本稿では、助詞「は」においても沼田の主張が適用できるものとする。

- (10) 彼は努力してとうとうラテン語も理解できるようになった。
- (11) 「例えば上の例の場合、「自者」¹「ラテン語」に対する「他者」は、文脈に明示されない限り、「ラテン語」より「理解できるようになる」のが容易である言語と考えられる。それには例えば、「ロシア語」や「ギリシャ語」等を想定することができる。彼に「ロシア語」や「ギリシャ語」を他者として、その際「ロシア語」や「ギリシャ語」についても「理解できるようになる」可能性の高低の序列が問題になるかというところではない。「も」²は「自者」と「他者」の可能性の高低は問題にするが、「他者」の中の個々の要素の序列は問題にしない。」[沼田，2009:137]

第3節 E 値から見る助詞「も」

本節では、E 値を「X」と「X 以外」の二者間に働くものとして見た場合、その働き方を示すことを目的とする。これについて、澤田[2007]は、可能性の世界と現実世界の関連としてE 値のスケールの変化を(13)のように述べている。また、(13)を図示したものが図2と図3である。

- (12) 花子も笑った。
- (13) (12)の例では、「太郎と次郎と花子について、花子が一番笑わない人物である」という共通知識が話し手と聞き手にあったとしよう。そこで(12)が発話された場合、まず、花子が笑ったことで、花子は現実世界の笑った人物の集合に関連づけられ、花子以外に笑った人がいることを含意される。同時に可能性の世界では命題を成立させる要素としてE 値が小さかった要素（花子が笑う）が、現実世界でその命題を成立させたことによって、可能性の世界のE 値のスケールは変化する。つまり、E 値の小さい命題「花子が笑う」が成立したことから、現実世界にある命題を成立させる要素の集合に「花子」は関連づけられ、同時に可能性世界にあるE 値のスケールは変化する。」[澤田 2007:20]

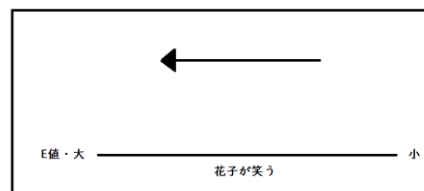


図2：命題が成立する前の EXPECT 値のスケール[澤田 2007:21]

¹ 「自者」は本稿における「X」にあたり「他者」は本稿における「X 以外」にあたる。

² 本稿における「意外の「も」」を指す。

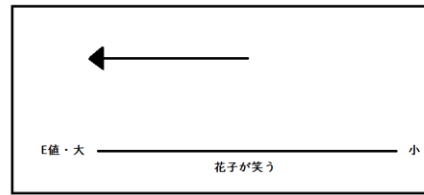


図 3：命題が成立した後の EXPECT 値のスケール[澤田 2007:21]

本稿では、「X」と「X以外」の双方を、想定の中にあると仮定して、E 値を「X」と「X以外」に共通する一つの命題に設定されるものだととらえる。そして E 値の低い「X」が E 値の高い「X以外」に含まれるという、状況を同じ仮想世界にあるということを図 4 のように表す。図 4 は、(14)の「花子も笑った」という文において、「X が笑う」という命題に関して、太郎と次郎という E 値の高い「X以外」と花子という E 値の低い「X」が存在することを表している。そして E 値の低い「X」も、E 値の低い「X以外」と同じ群に含まれることが示されている。

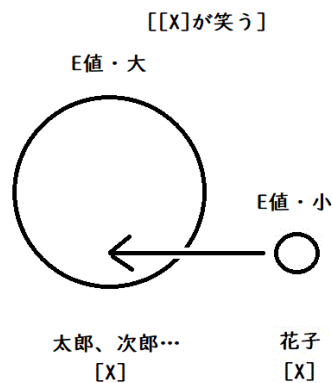


図 4：(12)における「も」の働き

- (14) 花子も笑った。(=(12))
 (15) a. 花子が笑う。
 b. 花子以外の誰か—例えば太郎や次郎—が笑うが、(普段は笑わない) 花子は笑わないと思った。

図 4 の形にすることで、(15b)の含意の上で(15a)が成り立ったことが表現され、累加の「も」が使用される理由も明確に示すことができる。つまり、「も」は「X以外」の集合に「X」が追加されることを表しているのである。この集合とそれに追加される要素として「X」と「X以外」を捉えることで、「も」の否定形の場合および「は」の文も統一的に説明することが可能になる。

否定文(16)の場合は、E 値による成立を問われる命題は「X が笑わない」とであると解釈できる。この文における前提は「(普段はとてもよく笑う花子が) 笑わなかった」などが仮定できよう。「X以外」には太郎や次郎など、E 値の高い人物、つまり、「X が笑わない」の可能性が高い人物が当てはまると考えられる。「花子」は笑わない可能性の低い人物であるのに、その花子が笑わなかったということが、(16)では示されるわけである。

- (16) 花子も笑わなかった。
 (17) 花子も笑わなかった。
 (18) a. 花子が笑わない。
 b. 花子以外の誰か—例えば太郎や次郎—が笑わないが、(普段はよく笑う) 花子は笑うと思った。

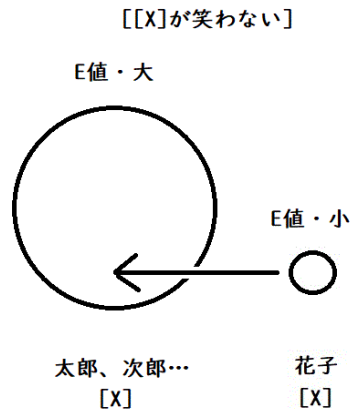


図5：(16)における「も」の働き

このように「も」は、肯定文の場合も否定文の場合もE値の低い要素を示し、その「X」が成立してしまうという含意が見ることができた。次節では、このような「X」と「X以外」の関連性から「は」についても分析を行っていく。

第4節 E値から見る助詞「は」

同様に、E値と「は」の関係を見よう。「も」と比較するために、「も」の議論とほぼ同じ用例を用いて分析を進める。しかし、「は」は主題の意味にも解釈されやすいため、対比の文脈を強調しながら行いたい。まず名詞に接続する一般的な対比の「は」におけるE値について考える。

(19) (太郎や次郎などは笑わなかったが) 花子はは笑った。

(20) 社員Aはぺこぺこしたが、社員B はぺこぺこしない。

このような文の中には、「太郎と次郎が笑わなかったのだから、花子も笑わないだろうと思った」や「社員Aはぺこぺこしたのだから、社員Bもぺこぺこするだろう」のような想定が存在する。このことから「は」で取り立てられた事物は、「反対の事態のE値の高さ」を持つと仮定できる。「花子は笑った」の場合は、「花子が笑わない」ことに対するE値が高く、「社員Bはぺこぺこしない」の場合は、「社員Bがぺこぺこする」ことに対するE値が高いという具合である。

(21) [X以外]は笑わないが、花子は笑う。

前提：太郎や次郎などが笑わないのなら、花子も笑わないだろう

→「花子が笑わない」というE値が高い

これを「X」と「X以外」の対立という観点で分析すると、「X以外」は太郎や次郎などにあたる。命題の内容としては「太郎や次郎などが笑わない」であるため、「は」の場合は「X以外」のE値も高いと考えられる。E値の高い「太郎や次郎など」の集合から、同じくE値の高い「X」だけを独立させて事態「Xが笑わない」が不成立であることを表すのである。そのため、含意は(23)および図6の通りになる。

(22) 花子は笑う。

(23) a. 花子が笑う。

b. 花子以外の誰か—例えば太郎や次郎—も笑わないので、花子も笑わないと思った。

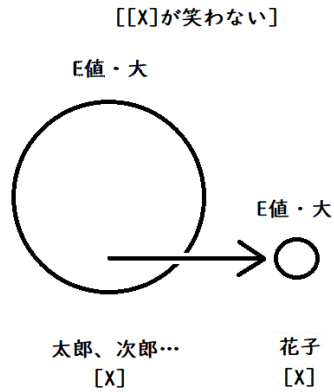


図 6 : (23)における「は」の働き

さらに、「は」の場合に「反対の事態の E 値の高さ」があることは、否定形でも共通して確認することができる。(24) では、「太郎や次郎は笑ったが、花子は笑わなかった」という前提が仮定できる。ここでの命題は、「X が笑う」という事態だと考えられる。「花子」は「X が笑う」の「X」に入り命題を成立させることに対して E 値が高い要素だったと言えよう。

- (24) 花子は笑わなかった。
 (25) 花子は笑わなかった。
 (26) a. 花子が笑わない。
 b. 花子以外の誰か—例えば太郎—も笑うので、花子も笑うと思った

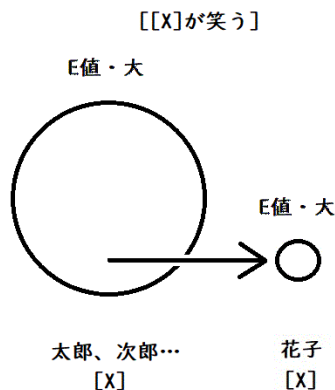


図 7 : (24)における「も」の働き

このように、「も」は E 値が低く、「は」は反対の事態の E 値が高いことが確認できた。そして動詞連用形に接続する場合も、同様に E 値に対する含意があると考ええる。次節で分析を行う前に、「は」、「も」と肯定文、否定文の E 値の対応関係をもう一度ここでまとめたいと思う。

- (27) 花子も笑った。
 前提：太郎や次郎などが笑うが、(いつも笑わない) 花子は笑わないだろう
 →「花子が笑う」という E 値が低い
 (28) 花子も笑わない
 前提：太郎や次郎などが笑わないが、(いつもよく笑う) 花子は笑うだろう
 →「花子が笑わない」という E 値が低い
 (21) (「X 以外」は笑わないが)、花子は笑う。
 前提：太郎や次郎などが笑わないのなら、花子も笑わないだろう
 →「花子が笑わない」という E 値が高い

- (29) 「X 以外」は笑うが、) 花子は笑わない。
 前提：太郎や次郎などが笑うのなら、花子も笑うだろう
 →「花子が笑う」という E 値が高い

第 5 節 E 値から見た動詞連用形と助詞「も」

続いて、動詞連用形に接続した場合も「も」は「E 値の低さ」、「は」は「反対の事態の E 値の高さ」を表していることを確認する。分析には実例を用いて、含まれる前提と E 値が文脈に則していることを観察していく。なお、「も」については、「～しはしない」と対応する形として、「～しもする」「～しもしない」などを対象にする。

- (30) 「あんた、これからどうするつもりなの」と言いながら棚谷は、それにしても
 いったい俺はそんなことを他人事のように訊けた義理かと心中ちょっとおかしくな
 りもする。(「花腐し」松浦寿輝 講談社 BCCWJ)
 (31) 御神輿は、あらぬ向かう側を練つて、振向きもしないで四五十間ずつと過ぎる
 (泉鏡太郎「祭のこと」『鏡花全集 卷二十七』岩波書店 青空文庫)

(30)は、話者の棚谷が、相手にアパートの立ち退きを要求しながら今後について尋ねている状況である。このシーンの直前には、棚谷自身も自身の会社が倒産寸前という描写がある。自分の会社が倒産寸前の状況で、他の人物に今後を尋ねることが「ちょっとおかしくなる」と述べているわけである。ここで重要なのは、棚谷の状況は、何かをおかしく思いにくい身の上だという点である。その期待しがたい「おかしくなる」という行為が成り立っていることが「～しもする」により示されている。そのため事実と想定としては、(34ab)が含意されていると考えられる。

- (32) 棚谷は(中略)ちょっとおかしいという気持ちになりもする。
 前提：「X 以外」にはなるが、おかしいという気持ちにはならないだろう。
 →「おかしいという気持ちになる」という E 値が低い
 (33) 棚谷は(中略)ちょっとおかしいという気持ちになりもする。
 (34) a. ちょっとおかしいという気持ちになる。
 b. おかしいという気持ち以外の何か—例えば諦めの気持ちなど—にはなるが、おかしいという気持ちにはならないと思った。

ここでの特徴は、「X」と「X 以外」に値するものが事態である点である。「X」には、「ちょっとおかしいという気持ちになる」ことが入り、「X 以外」には「ちょっとおかしいという気持ちになる以外の何かになる」ことが入るが、これは意外性のない事態一般を指すため、以降は単に「～する」と表す。E 値の高い「X 以外」が成り立つ上に、E 値の低い「X」、「ちょっとおかしいという気持ちになる」ことも成り立つという含意が確認できる。これを図示したものが図 8 である。

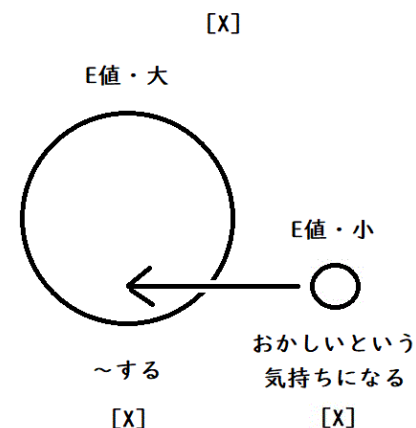


図 8：(30)における「も」の働き

次に、否定文にも同様の含意があることを確認していきたい。(31)は、長患いをしている女性店員がお祭りの音を聞いて、店先まで神輿を見に行ったが、神輿は単に彼女を通り過ぎるという場面である。この少し前では「盛り上がるお神輿は人が担ぐのではなく、霊とともに人の波を思うがままに操る」「御神輿は行きたい方へ行き、めぐりたい方へめぐる。ほとんど人間業ではない。」のように、神輿の神がかりに関する描写がある。そんなお神輿が、患いで店も寂れ落ち込む女性に振り向くことさえなく行ってしまう状況である。ここで、(31)の意味は図9のように表される。

- (35) お神輿は（中略）振り向きもしないで四五十間ずつと過ぎる。
前提：「X以外」はしないが、振り向くことはするだろう
→「振り向かない」のE値が低い
- (36) お神輿は（中略）振り向きもしないで四五十間ずつと過ぎる。
- (37) a. 振り向きもしないで過ぎる。
b. 振り向かないで過ぎる以外の何か—例えば立ち止まるなど—にはなるが、振り向かないで過ぎることはしないと思った。

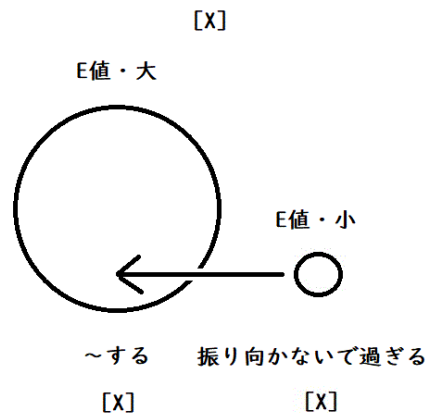


図9：(31)における「も」の働き

第6節 E値から見た「～しはしない」

それでは「～しはしない」におけるE値の分析に移ろう。(38)は、(1)の前後の文脈を取り出した例である。話者である隆之が敵の李煌を追う場面が書かれている。(38)の末行で隆之は「逃がしはしないぞ」と述べているが、一般的に考えて建物の中の人物がヘリコプターに乗っている人を逃がさないというのは難しい。他にも「屋敷があと一分で爆発する」など、李煌を逃がす原因となりうる要素はいくつも見られる。したがって、(39)のように、隆之は李煌を「逃がす」ことのE値が高いと言える。そのようにE値が高いという含意がありながらも、「逃がさない」と述べていることが、「～しはしない」の使用から解釈できるのである。「逃がす」ことへのE値の高さと、「逃がさない」という発言の両方を図に表すと図10のようになる。

- (38) 「ここまで来て、劉道士を倒した手並みは褒めてやる。だが、これまでだ。まもなくこの屋敷は爆発する」
「なんだと？ お前はどこにいる？」
「わしか。わしは空の上だ。バルコニーに出てみろ」
「なんだと？」 隆之は、急いでバルコニーに通じるガラス戸を開け、外に出た。かなり高空にヘリコプターがホバリングしていた。
「わかったか。あと一分でそこは爆発する。わしはお前の最期を見届けてから、ここを去ることにする。さらばだ、小僧」
「いや、逃がしはしないぞ」 隆之は、降魔の剣を握りしめ、強く念じた。
(『一千年の陰謀』井沢元彦 角川書店 BCCWJ)

- (39) 「(X 以外) はするが、) 逃がしはしないぞ
 前提：屋敷が爆発するのなら、逃がすだろう (捕まえそこねるだろう)
 → 「(敵を) 逃がす」のE 値が高い
- (40) 「逃がしはしないぞ」
- (41) a. 逃がさない
 b. 逃がさない以外の何か—例えばビルが爆発するなど—は起こるかもしれないが、逃がすことはしない

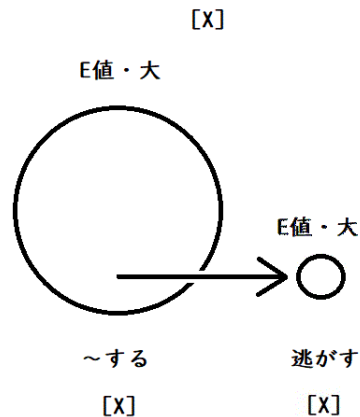


図 10：(38)における「は」の働き

同様の例として、(42)を見てみよう。(42)の背景を少し説明すると、話し手である禎輔は、聞き手である昌作が自分の妻と恋仲にあると勘違いし、昌作を九州に左遷させようとする。禎輔の勘違いを知った昌作が、禎輔を問い詰めると、禎輔は、過去に昌作の母と恋仲にあったこと、そして、それがもとで昌作を左遷しようとしたことを述べる、という場面である。(42) のセリフは、昌作の左遷は達子との誤解とは関係ないことを言おうとしたものであるが、自分の母が禎輔と恋仲にあるとは知らない昌作にとって、どんな男でも妻と親しくすれば、その人に対して「馬鹿げた考えを起こす」のはE 値の高いことと思われる。これを図に表すと図 11 のようになる。

- (42) 「全く別の男なら、いくら達子と親しくしようと、僕はあんな馬鹿げた考えを起しはしない。然し君は、君のお母さんの子だ。それがいけないのだ。」
 (豊島与志雄「野ざらし」『豊島与志雄著作集 第二巻 (小説Ⅱ、1-13-22)』未来社青空文庫)
- (43) 「(X 以外) はするが、) 馬鹿げた考えを起こしはしない
 前提：ある男に馬鹿げた考えを起こすのなら、(全く別の男でも) 馬鹿げた考えを起こすだろう
 → 「(全く別の男でも) 馬鹿げた考えを起こす」のE 値が高い
- (44) 「馬鹿げた考えを起こしはしない」
- (45) a. 馬鹿げた考えを起こさない
 b. 馬鹿げた考えを起こさない以外の何か—例えば嫉妬するなど—はするかもしれないが、馬鹿げた考えを起こすことはしない

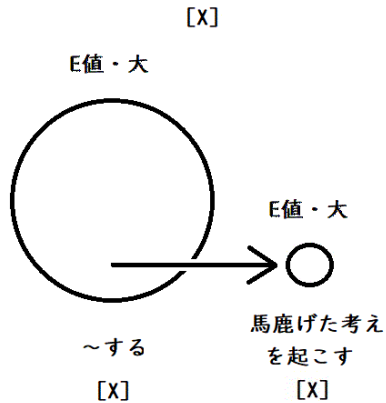


図 11：(42)における「も」の働き

第7節 まとめ

連用形に接続する「は」と「も」の両方に、E 値に基づく含意があることが確認できた。なお、「も」の「E 値の低さ」と「は」の「反対の事態の E 値の高さ」は、他の用例でも観察できる。例えば、(46) は「～しはしないか」という疑問形であるが、「拇指の腹が痛くなる」が成立する可能性が高いという想定があると言える。さらに、「～しはしない」は「～しはしないか」の形で多数観察される特徴もある。こういった動詞連用形と取り立て詞にまつわる含意について、より一層の考察を行っていきたい。

- (46) 第二は、松山がスポーツ好きで、「ええいッ」と大声をあげて場に積んである麻雀牌をひっぱってくることだ。気を付けていると、その度に、彼は麻雀牌の面に刻みつけてあるしるしをギュッと強く撫でまわした。それがために、拇指の腹が痛くなりはしないかと思われた。(海野十三 「麻雀殺人事件」『海野十三全集 第1巻 遺言状放送』三一書房 青空文庫)

参考文献

- 青木伶子. (1992). 『現代語助詞「は」の構文論的研究』. 笠間書院.
 定延利之. (1993). 「心的な情報処理操作と用法の派生—モをめぐる—」. 『高度な日本語記述文法作成のための基礎的研究』 平成4年度文部省科学研究費補助金総合研究 研究成果(A)報告書.
 定延利之. (1995). 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」. 『日本語の主題と取り立て』. くろしお出版, 227–260.
 澤田美恵子. (2007). 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』. くろしお出版.
 寺村秀夫. (1991). 『日本語のシンタクスと意味 III』. くろしお出版.
 沼田善子. (2009). 『現代日本語とりたて詞の研究』. ひつじ書房.
 日本語記述文法研究会. (2009) 『現代日本語文法5 とりたて・主題』. くろしお出版
 山中(澤田)美恵子. (1991a). 「「も」の焦点とスコープ」. STUDIAM 18 大阪外国語大学大学院研究室.
 山中(澤田)美恵子. (1991b). 「「も」「でも」「さえ」の含意について」. 『日本語と中国語の対照研究』, 第14号, 25–39.

Elizabeth Camp's Misreading of Davidson's Theory of Metaphor

Luke Malik

lukemalikosaka@lang.osaka-u.ac.jp

Abstract

There is a radical interpretation of Donald Davidson's theory of metaphor which seems to be viewed as the orthodox or textbook reading of his theory. It is claimed that Davidson's theory is a noncognitivist theory of metaphor. The authors who make this claim offer criteria by which to classify theories of metaphor into cognitivist and noncognitivist schools. Applying the criteria to the radical interpretation of Davidson's theory helps to make sense of their claim. But there are two problems. First, the criteria fail. Second, the radical noncognitivist interpretation of Davidson's theory cannot be supported by the evidence that is adduced for it. This paper aims to highlight these issues by focusing on Elizabeth Camp's (2013) article "Varieties of Metaphor."

Introduction

There is a textbook interpretation of Donald Davidson's theory of metaphor. Textbook because it appears in the philosophical textbooks on metaphor (Camp and Reimer 2006). Advocates of this interpretation, in whole or part, include Elizabeth Camp (2006a, 2006b, 2013), Chris Genovesi (2020), Ernie Lepore and Matthew Stone (2010, 2014), Jakub Matcha (2019), Marga Reimer (2006, 2007), and Richard Rorty (1987). Based on the textbook interpretation of Davidson's theory, these authors classify it as a noncognitivist theory of metaphor. Camp (2006a, 2006b, 2013) provides much of the impetus for the reading in question. But it can be shown that Camp's reading of Davidson does not find support in his writings. In fact, at times, Camp seems to misrepresent Davidson's writings by quoting him out of context or splicing together a single passage from two disparate paragraphs. It is my intention to provide evidence for this claim. My focus falls on Camp 2013 paper, Varieties of Metaphors. I conclude by providing a simple criterion for distinguishing cognitivist theories of metaphor from noncognitivist theories of metaphor.

Elizabeth Camp on Davidson's Theory of Metaphor

In the first third of her 2013 paper "Varieties of Metaphors," Camp argues that Davidson's paper on metaphor is inconsistent. She tells us that there is no consistent reading of Davidson's view. The most plausible reading, she concludes, is the one that interprets Davidson's theory as a noncognitivist theory of metaphor.

I note that it doesn't appear possible to render all of Davidson's claims about metaphors and meaning in "What Metaphors Mean" consistent: in particular, the claim that metaphors can be assertions (WWM 43) appears to conflict directly with [his] central negative thesis. The most plausible overall reading, though, is *a radically noncognitivist one, on which metaphorical utterances fail to have or otherwise express any (nonliteral) propositional, cognitive contents* (Camp 2013, 365, my italics).

This passage tells us that noncognitivist theories of metaphor deny that metaphorical content is propositional (if such propositionality is nonliteral) and cognitive. However, we should suppose that noncognitivist theories can allow that metaphorical utterances have or express (nonliteral) propositional content, or meanings, or cognitive content, but not both. But this supposition causes its own problems. First, let me say why we must make the assumption.

Positivist theories of metaphor need not deny nonliteral meaning or propositionality to metaphorical utterances. Positivists take up many noncognitivist positions. There are noncognitivist theories of aesthetics,

ethics, evaluative statements, metaphysics, religion, and so on. But positivists still talk about aesthetic, ethical, metaphysical, and religious propositions (Ayer 1936, Carnap 1935, Stevenson, 1937). These are not propositions with literal, truth conditional content and, for this reason, they are deemed to lack cognitive content. It is in this sense that these theories are noncognitivist. Based on this, we can suppose that, similarly, a positivist theory of metaphor can (a) allow metaphorical propositional content, whilst (b) denying that such content is literal or cognitive. Thus, the theory will allow for metaphorical propositionality whilst taking up a classic noncognitivist stance.

Second, C L Stevenson's emotivist theory of ethics is, perhaps, the most (in)famous noncognitivist theory of ethics. Stevenson (1937) clearly associates ethical statements with emotivist meanings, but, again, denies that they are literally meaningful. By analogy, we can suppose that metaphorical statements may have metaphorical or emotivist meanings which are not literal. In fact, the metaphorical expression "old maid" is an example that Stevenson explicitly associates with an emotivist meaning (Stevenson 1937, 23) pointing us to a emotivist theory and, therefore, noncognitivist theory of metaphor.

Last, Rudolf Carnap's theory of evaluative statements (actually labelled "non-cognitivism" by Carnap (Schilpp 1963)) associates evaluative statements with pure optatives. These express noncognitive attitudes to propositions and formally reduce to an optative or wish sign (akin to Frege's assertion sign and a proposition, $\vdash p$). An optative is thus analysed thus: "utinam p ," with utinam being the optative or wish sign, and p the proposition. In such a theory evaluative statements entail propositions. These take the form of declarative sentences. But these sentences need not be literal. For example, consider "Go to hell." Following Carnap, this is associated with an optative: "Would it be that you go to hell," or, more formally, "Utinam *you go to hell*." The proposition associated with the interpretation is "you go to hell." It is not literal on a positivist reading since "hell" makes no literal contribution to the proposition. If we treat metaphorical statements similarly, as evaluative statements, or optatives, this suggests that metaphorical statements may be associated with nonliteral propositional content in a noncognitivist theory of metaphor.

I conclude, therefore, that positivist statements and theories suggest that a positivist consideration of metaphor may be noncognitivist but allow that metaphorical statements or utterances express, have, or imply nonliteral meanings or nonliteral propositional content.

At the same time, Davidson's theory of metaphor implies, at least, two kinds of cognitive content: content associated with literal propositions and imagistic content (Davis 1983). For Davidson, metaphorical utterances have or express literal propositions, which are cognized and cognitively active in metaphorical interpretation (e.g. Davidson 2001, 261; Johnson 2008, 46¹; Lepore and Stone 2010, 174²; Stern 2008, 263³). This process leads to cognitive effects, which are mental images, imaginings, or picturings. Davidson even speaks of visions (Davidson 2001, 257, 264). This is what a metaphorical speaker is trying to cause to occur in the mind of an interlocutor when speaking metaphorically. Thus, if Davidson's theory is noncognitivist, at least one noncognitivist theory implies that metaphorical utterances come with cognitive content: literal propositional content and images. It may be argued that the images in question are effects and not expressed by the utterances in question, but, rather, caused. Indeed, as we shall see, Camp (2013) argues that Davidson's theory is a causal theory of metaphor. But even if we allow this, metaphorical utterances, according to Davidson, *have to* express literal content that is cognized and cognitively active in causing the aforementioned effects. Such content *is* cognitive content. In fact, this speaks to a contradiction at the heart of the criteria that Camp offers for classifying noncognitivist theories above.

I also want to note that, Davidson's theory of language implies that language, its interpretation, and the differentiation of linguistic activities and behaviours require the communication and recognition of beliefs and intentions in a *holistic* manner. (Davidson 2001, 143, 144, 147, 155, 186, 195, 280; see also Wheeler 2003, 189).

Davidson also speaks of distinguishing metaphorical uses from other uses of language through recognising the intention with which a sentence is uttered (Davidson 2001, 258). Lepore and Stone, in interpreting

¹ Cited below.

² Cited below.

³ Cited below.

Davidson, speak about a “metaphorist’s intention.” The intention to speak metaphorically is conveyed by understanding the literal propositional content of the metaphor in its context of use:

The metaphorist’s intention needn’t be to communicate a proposition affirming noticed similarities, but rather for his hearer to understand the *proposition literally expressed*; and then, through that understanding perhaps be prompted (contingent on his background information) to look for certain similarities (Lepore and Stone 2010, 174).

The above evidence, therefore, suggests that Davidson’s general theory of language and his theory of metaphor imply that metaphorical utterances express cognitive attitudes, not only their literal content, as Lepore and Stone note above, but beliefs and attitudes that entail beliefs. This can only be done linguistically, which suggests even metaphorical utterances express cognitive content to some extent.

Thus, it seems that noncognitivist theories are consistent with allowing metaphorical utterances to express, have, or imply (nonliteral) propositional content or meaning, or express, have, or imply other kinds of cognitive content: images, literal propositional content, or cognitive attitudes. Noncognitivist theories do not need to deny both. Therefore, we need to think of noncognitivist theories as implying the failure of either nonliteral propositionality or cognitive content altogether. But this leads to another problem. *Cognitivist* theories are consistent with allowing metaphorical utterances *only* literal propositional content. That is, denying nonliteral content to metaphorical utterances, as Davidson does, is not sufficient for noncognitivism. To see this consider the theories below.

Conceptual metaphor theory (CMT) is, perhaps, the most famous cognitivist theory of metaphor. But CMT is compatible with metaphorical sentences and utterances having only literal propositional content. For Lakoff and Johnson (1980), the pertinent linguistic distinction is between the literal and the figurative. Metaphor is conceptual and structures both. For example, talk of arguments is structured by the conceptual metaphor ARGUMENT IS WAR, but this does not mean that talk of arguments, thus structured, is not literal. This is what Lakoff and Johnson say:

Our conventional ways of talking about arguments presuppose a metaphor we are hardly ever conscious of. The metaphor is not merely in the words we use—it is in our very concept of an argument. The *language of argument is not poetic, fanciful, or rhetorical; it is literal* (Lakoff and Johnson 1980, 5, my italics).

The sentences in question are literal with respect to semantic content. But, following CMT, such sentences are metaphorical with respect to their conceptual mappings. Consider the sentence “Kaline is in Texas.” Heim and Kratzer provide the tools for a semantic reduction (Heim and Kratzer 2000, 65). But the sentence incorporates an ontological metaphor (PLACES ARE CONTAINERS) using “in” to make Texas into a container (see Lakoff and Johnson 1980, 29-30). Thus, it is consistent to think that an utterance of a sentence like “Kaline is in Texas” expresses literal truth conditions and, therefore, literal propositional content (and no more), whilst being structured or organised metaphorically. But CMT is obviously not a noncognitivist theory of metaphor.

Another theorist to consider is Francois Recanati. Recanati (2004) implies that utterances that are identified as metaphorical are literal in what he calls a *primary literal sense* (abbreviated to “p-literal meaning” by Recanati (2004)). Their metaphorical character comes to the fore when the type meaning (abbreviated to “t-literal meaning” by Recanati (2004)) of the words uttered and the utterance’s primary literal meaning give rise to a certain tension. This is accompanied by an awareness of the subpersonal *cognitive* processes that generate the utterance meaning. Consider, then, an utterance of the following sentence:

- (1) The ATM swallowed my card

The utterance has truth conditions or propositional content. This is determined by various pragmatic processes. Saturation is one, it selects content for indexicals, here “my;” enrichment is another, it restricts the

scope of expressions, here “the;” and loosening is another, the meaning or concept associated with “swallow” is derestricted to allow ATMs to swallow. Recanati writes:

There can be no real swallowing on the part of an ATM, since ATMs are not living organisms with the right bodily equipment for swallowing. By relaxing the conditions of application for 'swallow', we construct an ad hoc concept with wider application. (Recanati 2004, 26).

Putting saturation to one side, the pragmatic processes in question are not inferential (i.e. not processes that produce implicatures) and they are not above the level of awareness. But they produce propositions. These propositions can be evaluated for truth and they are associated with literal meaningfulness. Thus (1) is not only true or false but literally true or false. These points are made in the following passage:

The paradigm case of nonliteral meaning is metaphor. *Now metaphor, in its most central varieties, I count as p-literal.* To re-use an example from chapter 2, if I say that the ATM swallowed my credit card, I speak metaphorically; there can be no real 'swallowing' on the part of an ATM, but merely something that resembles swallowing. Still, an ordinary hearer readily understands what is said by such an utterance, without going through a two-step procedure involving the prior computation of the 'literal' meaning of the utterance (whatever that may be) and a secondary inference to the actual meaning. Knowing the linguistic meaning of 'swallow', and knowing what sometimes happens with ATMs, the hearer unreflectively constructs the sense in which the ATM can be said to 'swallow' the card by adjusting the meaning of the word to the situation talked about. (Recanati 2004, 76, my italics).

The adjustment of the word to the context means a sentence like (8) involves “sense extension” (Recanati 2004, 77). The sense extension of some utterances is more easily recognised than others: “there is a continuum between ordinary cases of sense extension that we don't even perceive (the ATM swallowing the credit card) and more dramatic cases of metaphor whose nonliteral character cannot be ignored.” (Recanati 2004, 77).

Consider the following sentence:

(2) A fisherman is a spider (Glucksberg 2008, 76)

According to Sam Glucksberg (2008), this is an example of a bad metaphor. It may help to exemplify the point that Recanati is making. With an utterance of (1), we don't perceive the sense extension with “swallow,” but with an utterance of (2), we notice the sense extension with “spider.” We might, for example, stop and think what aspect of the meaning of “spider” allows it to be extended such that it incorporates fishermen. It is this kind of noticing that brings to our attention the metaphorical nature of an utterance. And under these circumstances we are apt to consider such utterances as nonliteral, *despite their primary literal sense*:

The more noticeable the conflict, the more transparent the departure from t-literal meaning will be to the language users. Beyond a certain threshold, cases of sense extension will therefore count as special and nonliteral in the ordinary sense, *despite their p-literal character.* (Recanati 2004, 77, my italics).

The main point for us is that metaphorical utterances have literal truth conditions. That is, following Recanati, metaphorical utterances have literal, propositional content. Such content is determined pragmatically. This means it is not determined semantically *but is determined cognitively*. Yet, if we hold that a theory of metaphor that denies nonliteral meaning to metaphorical utterances is noncognitivist, we must conclude that Recanati's theory is noncognitivist. This seems absurd given the cognitive grounds and cognitive determination of the propositional content associated with metaphorical utterances and their meaning by Recanati.

I conclude that there are severe problems with Camp's criteria. Let us, next, consider another claim that Camp

makes in the passage cited above. If you recall, Camp claims that Davidson's writings on metaphor are inconsistent. But I do not believe that she provides compelling evidence for this claim. Let me try to demonstrate this.

I start by noting that there do seem to be inconsistent elements in Davidson's writings on metaphor. This seems to be one of the most egregious:

The concept of metaphor as primarily a vehicle for *conveying ideas*, even if unusual ones, seems to me as wrong as the parent idea that a metaphor has a special meaning (Davidson 2001, 246, my italics).

But later, we get this:

We say Mr S. is like a pig because we know he isn't one. If we had used a metaphor and said he was a pig, this would not be because we changed our mind about the facts but because we chose to *get the idea across* a different way (Davidson 2001, 257, my italics).

But how can we get an idea across in another way by changing from the simile to the metaphor if metaphors are not a vehicle for conveying ideas? The two passages seem to conflict. However, there may be no inconsistency. The simile conveys or expresses the idea (of a likeness), the metaphor gets the idea (of a likeness) across in another way. Camp interprets Davidson as arguing that metaphors *cause* psychological effects (Camp 2001, 364). Thus we might say the simile *conveys* the idea, but the metaphor *causes* the idea. This difference between conveying and causing may resolve the contradiction. Importantly, the passages are also compatible with saying metaphors *convey* literal meanings which work their magic by *causing* (or producing by some cognitive mechanism) further cognitive effects (e.g. seeing a similarity, etc.). Let's next think about some inconsistencies that Camp finds in Davidson's paper on metaphor.

As we saw above, Camp presents us with an example of inconsistency. Davidson says metaphors can be assertions. She claims this is inconsistent with his negative claim. The negative claim is this: metaphors do not have cognitive content over and above their literal content. Is there really an inconsistency here? Let's take a careful look at three passages where Davidson speaks about assertion in his paper on metaphor. Here is the first:

We can learn much about what metaphors mean by comparing them with similes, for a simile tells us, in part, what a metaphor merely nudges us into noting. Suppose Goneril had said, thinking of Lear, 'Old fools are like babes again'; then she would have used the words to assert a similarity between old fools and babes. What she did say, of course, was 'Old fools are babes again', thus using the words to intimate what the simile declared (Davidson 2001, 253)

In this passage, simile is contrasted with metaphor. Simile is said to assert, but metaphor is said to *intimate what the simile asserts*. There is no inconsistency here and this interpretation does not contradict the negative claim, for the metaphor need only possess its literal meaning to intimate what the simile asserts. What is intimated may go beyond the literal meaning in question, but, as Davidson says, this does not entail meaning (Davidson 2001, 256). An analogy may be made to hints. A hint may be given using a sentence with a literal meaning. What the hint leads us to discover is not part of the meaning of the sentence in question (Lepore and Stone 2010, 171). The same may be true for metaphors. A metaphor may lead us to discover a similarity, but it is not part of the metaphor's meaning. Let's look at a second passage:

The simile says there is a likeness and leaves it to us to pick out some common feature or features; *the metaphor does not explicitly assert a likeness*, but if we accept it as a metaphor, we are again led to seek common features (not necessarily the same features the associated simile suggests, but that is another matter) (Davidson 2001, 255, my italics).

Again, simile and metaphor are contrasted. The former asserts a likeness. The metaphor, it is said, does not assert *the likeness*. Again, there is no reason to think that there is anything here that contradicts the negative claim. Here is a third passage.

In lying, one must make an assertion so as to represent oneself as believing what one does not; in acting, assertion is excluded. Metaphor is careless of the difference. It *can be an insult, and so be an assertion*, to say to a man 'You are a pig'. But no metaphor was involved when (let us suppose) Odysseus addressed the same words to his companions in Circe's palace; a story, to be sure, and so no assertion—but the word, for once, was used literally of men (Davidson 2001, 259, my italics).

In this passage, assertion is introduced to us in the way that Davidson often talks of it. *An assertion is an act of representing oneself as believing something*. For Davidson, assertion is an act that involves representing oneself as believing something and intending to represent oneself as believing it (Engel 2008, Kölbel 2013, Pagin and Neri 2021). Evidence for the conclusion is easily found in Davidson's work:

[I]t is clear that speech requires a multitude of finely discriminated intentions and beliefs. A person who *asserts* that perseverance keeps honour bright must, for example, *represent himself as believing* that perseverance keeps honour bright, and he must *intend to represent himself as believing it* (Davidson 2001, 186, my italics).

It is worth pointing out that the utterance of the sentence "perseverance keeps honour bright" *is* metaphorical. Davidson uses it as an example of an assertion, which is defined as an act with certain properties. These properties help make sense of the metaphor from the previous passage and in no way requires us to deny the negative thesis.

In the previous passage, "He is a pig" is taken metaphorically. It is also said to be an insult and, therefore, an assertion. Thus, though the sentence is spoken metaphorically, it makes an assertion. This simply means that uttering the sentence involves an act of representing oneself as believing that someone is a pig and intending to represent oneself as believing that someone is a pig. Doing this does not contradict the so-called negative thesis. What the speaker is representing herself as believing and intending to represent herself as believing need entail nothing over and above the literal content of the sentence that is uttered. That is, no secondary meaning is implied. Thus, the negative thesis is not contradicted.

Indeed, making an assertion suggests a way to get the metaphorical use of a sentence across to one's target audience. The absurdity of making an assertion like "He is a pig" is what leads us to take the utterance of the sentence metaphorically. Consider the following passages:

The argument so far has led to the conclusion that as much of metaphor as can be explained in terms of meaning may, and indeed must, be explained by appeal to the literal meanings of words. A consequence is that *the sentences in which metaphors occur are true or false in a normal, literal way* (Davidson 2001, 256-257, my italics)

And next:

Patent falsity is the usual case with metaphor, but on occasion patent truth will do as well. 'Business is business' is too obvious in its literal meaning to be taken as having been uttered to convey information, so we look for another use; Ted Cohen reminds us, in the same connection, that no man is an island. The point is the same. *The ordinary meaning in the context of use is odd enough to prompt us to disregard the question of literal truth* (Davidson 2001, 258, my italics).

Metaphors are true or false in the *normal, literal way*. It is the uninformative truth or blatant falsity of an utterance which leads us to take it metaphorically. In the context of use, the literal meaning of the sentence is so odd that it prompts us to put the literal truth or falsity of the sentence to one side and think of the sentence metaphorically. This is not at odds with what has been said. A user uses a sentence to make an assertion, representing themselves as believing and intending to represent themselves as believing what is said, yet with the additional intention that her audience take what was said metaphorically. The outright weirdness of the assertion (in the context of use) nudges us to do just that. That is, we recognise the metaphorical intention and take the utterance metaphorically. In doing so, one puts the literal truth and falsity of the uttered sentence to one side and lets it work its cognitive magic.

I just said that individuals that use metaphor have the intention to speak metaphorically and implied it is something that they wish to convey by using a sentence. This, too, is entirely consistent with Davidson's writings. For example, it is implied by passages like the following:

[A] woman who believed in witches but did not think her neighbour a witch might say, 'She's a witch', *meaning* it metaphorically; the same woman, still believing the same of witches and her neighbour but intending to deceive, might use the same words to very different effect. Since sentence and meaning are the same in both cases, it is sometimes hard to prove which *intention* lay behind the saying of it; thus a man who says 'Lattimore's a Communist' and means to lie can always try to beg off by pleading a metaphor (Davidson 2001, 258, my italics)

Someone might say "she is a witch." She may be lying or speaking metaphorically. (She may be speaking truthfully.) Intentions divide the saying between these possibilities. Having intentions to speak metaphorically are, therefore, consistent with Davidson's theory and there is nothing in Davidson's work which suggests that the speaker does not intend to convey metaphorical intentions by the words they use. In fact, to the contrary. Using a sentence that is *odd enough so that the hearer takes the sentence metaphorically* suggests a way of sharing the intention to speak metaphorically. And none of this contradicts the thesis that the sentence used metaphorically lacks a special metaphorical sense. Talk of intentions is also consistent with other interpreters of Davidson. As we have seen, Lepore and Stone (2010) talk about a "metaphorist's intention" when introducing Davidson's theory.

So, we have seen passages on assertion in Davidson's work do not imply inconsistency. Metaphor involves the assertion of literal content and assertion involves positioning oneself relative to such content, i.e. representing oneself in a certain way. We have also seen that making such assertions help convey intentions that identify one's linguistic activity as metaphorical activity. I want now to point out some further problems with Camp's reading of Davidson.

Camp claims that Davidson believes that metaphor is not an ordinary part of language. But we have seen a passage above where he says the metaphorical sentence is true or false in the normal, literal way. Of course, it is. The meaning of a sentence in which a metaphor occurs is literal and, therefore, has truth conditions. Here are further passages from Davidson's text that demonstrate in what sense he thinks metaphor is ordinary:

[U]nderstanding a metaphor is as much a creative endeavour as making a metaphor, and as little guided by rules...These remarks *do not, except in matters of degree, distinguish metaphor from more routine linguistic transactions*: all communication by speech assumes the interplay of inventive construction and inventive construal. What metaphor adds to the ordinary is an achievement that uses no semantic resources beyond the resources on which the ordinary depends. There are no instructions for devising metaphors; there is no manual for determining what a metaphor 'means' or 'says'; there is no test for metaphor that does not call for taste (Davidson 2001, 245, my italics)

Metaphors are not different in *kind* from routine linguistic communication. Nevertheless, there *is* something special about them. What is special about them is not linguistic, it is psychological. To spell it out:

1. Metaphor results in a *psychological* achievement that ordinary language does not, but
2. Metaphor does this by relying on the very same semantic resources that ordinary language does

Thus, there are no *special* rules, principles, maxims, manuals, etc. that give rise to the metaphorical achievement (e.g., its cognitive effects). But the passage doesn't say there are *absolutely no rules*, etc. that contribute to the metaphorical achievement. There are; *they are the ordinary, boring (semantic) ones*.

Let's take a look at how that may work. Ordinary semantic resources determine literal content and in the literal context, the literal content is conveyed. But the same *has* to be true of the metaphorical context given the necessity of literal meaning to metaphorical effect. We have seen the literal meaning conveys the intention to speak metaphorically and the understanding of the literal meaning was said to prompt the metaphorical effect. Critics and advocates of Davidson's theory concur on this. For example, Mark Johnson, a prominent

critic of Davidson, writes:

Metaphor is only a pragmatic effect achieved by using a certain literal utterance to induce the hearer to notice something. Davidson says that *a metaphorical utterance uses its literal meaning* to “intimate” or “suggest” some nonpropositional insight: (Johnson 2008, 46, my italics)

Moreover, Davidson is clear on this, writing: “an adequate account of metaphor must allow that the primary or original meanings of words remain active in their metaphorical setting” (Davidson 2001, 249). Thus, discussing Davidson, Josef Stern writes: “Even while used or interpreted metaphorically, the literal meaning of [the metaphorical expression] is active” (Stern 2008, 263). Thus, literal meaning not only conveys the intention to speak metaphorically, and not only prompts or induces the metaphorical effect, but remains active in the processes and mechanisms associated with the metaphorical effect.

The essential point is this: ordinary semantic resources determine the literal meaning of a sentence, which *is conveyed, conveys intentions, and remains active* in the metaphorical context. The difference between the literal context and the metaphorical context is that something else is achieved in the latter, this is the metaphorical effect. *It is psychological, it is not linguistic*. Metaphor, therefore, does not add a new kind of communicative act to the set of ordinary communicative acts. Nor does metaphor add any new kind of meaning to the set of ordinary linguistic meanings associated with the sentence spoken metaphorically. If metaphor adds anything at all to the world, it is a psychological event.

But surely the following passage is inconsistent with what has just been said. If so, it will support Camp’s inconsistency claim.

Metaphor is the dreamwork of language and, like all dreamwork, its interpretation reflects as much on the interpreter as on the originator. The interpretation of dreams requires collaboration between a dreamer and a waker, even if they be the same person; and *the act of interpretation is itself a work of the imagination* (Davidson 2001, 245, my italics)

This passage introduces Davidson’s paper on metaphor. It may seem to suggest that the ordinary semantic rules *don’t* apply to the interpretation of metaphor. Davidson says the metaphorical interpretation is the work of the imagination. For the sake of argument, I assume that the imagination is not governed by the ordinary semantic resources of language. Thus, this passage seems to be inconsistent with what was said above. But it is not. It does not imply the metaphorical interpretation is not reliant on the ordinary semantic resources we have been talking about. There is a logical chain of dependency and it can be spelt out like this.

1. Metaphorical interpretation relies on metaphorical effect.
2. Metaphorical effect relies on literal language.
3. Literal language relies on the ordinary semantic resources of language.
4. Therefore, metaphorical interpretation relies on the ordinary rules of language.

The thing to take away is this: The metaphorical interpretation may not be determined by ordinary semantic resources, but it is dependent on them (for putting together the metaphor’s literal content).

It is interesting to consider further the passage under discussion. Davidson implies that the interpretation of metaphor is a collaborative act of communication. This implies that beliefs and intentions are shared. For example, the intention to represent oneself as believing what one has said *and* the intention to speak metaphorically. And, of course, because intentions imply beliefs and desires for Davidson, beliefs are shared too. As Samuel Wheeler says of Davidson: “intentions are ascribed along with beliefs, desires, and meanings of utterances, in a holistic way” (Wheeler 2003, 189). In other words, both noncognitive and cognitive attitudes are shared.

But, perhaps, the passages implies other inconsistencies. In Freud (1989), dreamwork is the logic that translates latent content (i.e. subconscious content) into manifest content (i.e. dream content). In interpreting the dream, one moves from the manifest content to the latent content. The interpretative act, Davidson suggests, is creative and imaginative. Now, Davidson says metaphor is the dreamwork of metaphor and

intimates that metaphorical interpretation is like the interpretation of the dreamwork. Taking the analogy seriously, this implies metaphor translates latent content into manifest content and it is the work of the interpreter to work backwards from the manifest content to the latent content. This is the creative work of the imagination. This may suggest an inconsistency. For it seems that content different to the literal content is being shared by a metaphor. However, I think it is still possible to read Davidson consistently. For example, we can say: All the speaker conveys to the hearer is a literal sentence meaning (linguistically encoded content), no more, no less. If anything else is shared, it is non-propositional content, which by its very nature cannot be conveyed by a propositional vehicle like a sentence or utterance.

But what about the talk of “metaphorical interpretation,” doesn’t this entail metaphorical meaning? No. Metaphorical interpretations are psychological events which are ways to make sense of metaphorical effects. To confuse a metaphorical interpretation with the meaning of the sentence used metaphorically is simply wrong and unnecessary. To this end, Davidson writes:

The theorist who tries to explain a metaphor by appealing to a hidden message, like the critic who attempts to state the message, is then fundamentally confused. No such explanation or statement can be forthcoming because *no such message exists* (Davidson 2001, 263, my italics).

Continuing:

Not, of course, that interpretation and elucidation of a metaphor are not in order. Many of us need help if we are to see what the author of a metaphor wanted us to see and what a more sensitive or educated reader grasps. The legitimate function of so-called paraphrase is to make the lazy or ignorant reader have a vision like that of the skilled critic. The critic is, so to speak, in benign competition with the metaphor maker. The critic tries to make his own art easier or more transparent in some respects than the original, but at the same time he tries to reproduce in others some of the effects the original had on him. In doing this the critic also, and perhaps by the best method at his command, calls attention to the beauty or aptness, the hidden power, of the metaphor itself (Davidson 2001, 263-264, my italics).

This is how Davidson ends his paper. Again, he makes sure to make the point that a metaphor has no hidden meaning. But it does not follow that metaphorical interpretation or elucidation does not occur, nor that it is not useful. Interpretation and elucidation are useful because they aid the vision, picture, image, or imagining that the metaphor effects. They, however, must not be confused for what the metaphor means, for that is simply the literal meaning of the sentence used metaphorically.

The view presented thus far contrasts with Camp’s view. I have argued that Davidson sees metaphor as linguistically ordinary, but Camp argues differently. One passage that is cited by Camp in the attempt to show that metaphor is not an ordinary aspect of language for Davidson is this:

Similarly, he says, “metaphor” is not “a form of communication alongside ordinary communication [which] conveys truths or falsehoods about the world much as plainer language does” (Camp 2013, 363).

But this is not quite what Davidson says! The full passage from which the above citation is taken is this:

The central mistake against which I shall be inveighing is the idea that a metaphor has, in addition to its literal sense or meaning, another sense or meaning. This idea is common to many who have written about metaphor: it is found in the works of literary critics like Richards, Empson, and Winters; philosophers from Aristotle to Max Black; psychologists from Freud and earlier to Skinner and later; and linguists from Plato to Uriel Weinreich and George Lakoff. The idea takes many forms, from the relatively simple in Aristotle to the relatively complex in Black. The idea appears in writings which maintain that a literal paraphrase of a metaphor can be produced, but it is also shared by those who hold that typically no literal paraphrase can be found. Some stress the special insight metaphor can inspire and make much of the fact that ordinary language, in its usual functioning, yields no such insight. *Yet this view too sees metaphor as a form of communication alongside ordinary*

communication; metaphor conveys truths or falsehoods about the world much as plainer language does, though the message may be considered more exotic, profound, or cunningly garbed (Davidson 2001, 246, my italics).

Let's pick out the key points here. First, Davidson is rebelling against the view that metaphor has an additional meaning to its literal meaning. Second, Davidson points out that some theorists have held this view. Third, he says these theorists are of two kinds, those who think metaphor can be literally paraphrased and those who think it cannot be literally paraphrased, yet, he claims, both may have held the view that metaphor has an additional meaning. Fourth, he tells us these thinkers cite the special insights that metaphor gives us and it is contrasted with what ordinary language provides. In this way, *the thinkers in question* contrast metaphorical language with ordinary language. At the same time, however, *those very same theorists* think metaphorical communication is ordinary communication in doing many of the things that ordinary language does (like conveying truths). The implication is that there is some tension here. The tension does not lie with Davidson. Rather, *Davidson is associating the tension with the theorists in question*. Davidson is not rejecting the idea that metaphor is linguistically ordinary, *he is pointing out a tension in the opposing views*, a view that treats metaphor as both linguistically ordinary and linguistically extraordinary.

To sum up, I think I am right in arguing that Davidson thinks of metaphor as an ordinary part of language and special only in its psychological effects. I want, next, to turn to a compelling aspect of Camp's interpretation of Davidson. It is also common amongst interpreters of Davidson (e.g. Rorty 1987). The problem is the evidence that Camp adduces for it isn't very strong.

In interpreting Davidson, Camp argues that Davidson implies that metaphor does not work its magic rationally, but rather works causatively, *merely causing* a metaphorical effect. Camp is aiming to buttress her "strong" (Camp 2013, 363) and "radical" (Camp 2013, 361) noncognitivist reading of Davidson. To make her point, she writes:

To put the point in Gricean terms, it is generally assumed that in order to count as nonnatural meaning, an utterance's effects must be connected to the utterance in a rational way: that is, as Grice says, the production of the intended effect "must be something which in some sense is *within the control of the audience, or [such] that in some sense of 'reason' the recognition of the intention behind x is for the audience a reason and not merely a cause*". But with metaphor, Davidson seems to claim, the requisite rational structure is absent. Thus, at various points, he speaks of metaphors (along with similes and other analogical devices) as "inspiring" or "prompting" recognition of some fact or similarity, or as "inviting" or "bullying" hearers into drawing a comparison – all verbs that suggest a causal rather than a rational mechanism of production. Similarly, he says that "Joke or dream or metaphor can, like a picture or a bump on the head, make us appreciate some fact – but not by standing for, or expressing, the fact" (Camp 2013, 364, my italics).

Camp highlights verbs like "inspiring," "prompting," "inviting," and "bullying" from Davidson's text. These verbs are meant to be verbs that suggest *mere causes* rather than reasons. Below are passages from Davidson's paper on metaphor that employ those verbs. Unfortunately, I do not think that they support Camp's conclusions. Consider first the relevant passages in which the verbs "inspire" and "prompt" occur. Here is one such passage:

Metaphor makes us see one thing as another by making some literal statement that *inspires* or *prompts* the insight. Since in most cases what the metaphor *prompts* or *inspires* is not entirely, or even at all, recognition of some truth or fact, the attempt to give literal expression to the content of the metaphor is simply misguided (Davidson 2001, 263, my italics)

Presumably, in interpreting this passage, we should read "inspire" and "prompt," as synonymous with "merely cause." With this in mind let us interpret the passage. Metaphors involve making literal statements. The literal statements, or their contents, *merely cause* someone to see one thing as another. This effect, the seeing of one thing as another, is something that cannot itself be given literal expression. The relationship between the literal statements, or their contents, and the seeing of one thing as another is not rational. The literal statements, or their contents, do not give us *reasons* to see one thing as another; they *merely cause* us

to see one thing as another. The problem is interpreting “inspire” and “prompt” to be synonymous with “merely cause” doesn’t entail noncognitivism because the interpretation is consistent with cognitivism. Thus, the interpretation cannot support Camp’s noncognitivist conclusions. Let me demonstrate.

Davidson argues that there are two kinds of simile theory. There is the elliptical simile theory, which says that a metaphor is an elliptical simile. The theory, according to Davidson, “makes no distinction in meaning between a metaphor and some related simile and does not provide any ground for speaking of figurative, metaphorical, or special meanings.” (Davidson 2001, 254). This is in contrast to a more “sophisticated” version of the simile theory. This theory too identifies a metaphor with a simile. But in this case, the simile is treated as the figurative, metaphorical, or special meaning of the metaphor (Davidson 2001, 253-254). Davidson says there is a “difficulty of identifying the simile that corresponds to a given metaphor.” (Davidson 2001, 253). This suggests that the simile the metaphor is associated with is something that is worked out (as in a Gricean theory (see Grice 1975)). This second theory is, therefore, I presume, cognitivist: The metaphorical meaning is an extra meaning and this meaning is cognitively assigned to the utterance in question. But this theory may be given a causal reading too.

To see this, let us suppose that we are advocates of the sophisticated simile theory of metaphor. We propose that the utterance of a sentence ‘X is Y’, in the appropriate context of use, leads us to grasp the intention to speak metaphorically. This, in turn, leads us to work out the metaphorical meaning, which is a simile. This involves a cognitive process. This simile, we may legitimately say, “prompts” or “inspires” the seeing of one thing as another. Following Camp, we may interpret “prompt” and “inspire” as causal verbs. We conclude the theory suggests metaphorical meanings *merely cause* the seeing of one thing as another. Since the sophisticated simile theory is a cognitivist theory, but we interpret the metaphorical meaning as merely causing a metaphorical effect rather than providing a reason for it, we can conclude that interpreting “prompt” and “inspire” causally does not support noncognitivism. A response might be that the whole process is not merely causal because grasping the intention to speak metaphorically leads to the metaphorical meaning which causes the effect. It might also be said that the intention can be used as a reason for why we ultimately come to think of one thing as another. *But exactly the same can be said of Davidson’s theory.*

If we accept the response noted, we need not be convinced that the words in question really imply mere causality when reading Davidson’s theory. Davidson says metaphor involves making a literal statement that “prompts” and “inspires” the metaphorical effect. We have argued that the literal meaning of such a statement conveys the intention to speak metaphorically, and induces and is active in the process of metaphorical interpretation. Understanding the literal meaning of the statement, in the context in which it is made, leads us to grasp the intention to speak metaphorically. On grasping the metaphorical intention, the literal meaning of the statement “prompts” or “inspires” the metaphorical effect. We can rationalise our understanding of the use of the sentence in question (to ourselves or others) by pointing to the “metaphorist’s intention” and justify our grasping of the intention by pointing to the odd nature of the sentence’s occurrence in the context of use. That is the literal statement being made (in the particular context of use) and the grasping of the metaphorist’s intention is a reason for why we have come to see one thing as another. In effect, the causal reading of “prompt” and “inspire” does not indicate noncognitivism, and, in fact, there are reasons not to read “prompt” and “inspire” causally when interpreting Davidson.

Next, let’s look at the three passages containing the verb “invite” and attempt to interpret them in line with Camp’s claim that the verb implies mere causation, not reason. Here is the first:

Metaphor and simile are merely two among endless devices that serve to alert us to aspects of the world by *inviting* us to make comparisons. (Davidson 2001, 256, my italics).

Following Camp, this passage says that linguistic devices like metaphors and similes merely cause us to make comparisons. But, as Davidson says, they are just two of the endless devices that *invite* us to make comparisons. Other examples of these endless devices might be comparatives, juxtapositions, parallel structures, superlatives, etc. Interpreting “invite” unequivocally in the passage above means these must be devices that *merely cause* comparison too. It seems Davidson must be saying that *all* linguistic comparison devices, literal or not, merely cause us to make comparisons. There is no recognition of the intention behind the use of linguistic comparison devices that is a reason to make a comparison. This wouldn’t fit with the

general picture of language that Davidson gives us, especially with respect to linguistic activity. I cite the following passage (referred to above):

[I]t is not reasonable to suppose we can interpret verbal behaviour without fine-grained information about beliefs and intentions (Davidson 2001, 147).

The fine-grained nature of the information about beliefs and intentions suggests that such beliefs and intentions are reasons to think that so and so is behaving linguistically in such and such a way as opposed to another. This does not speak to a merely causal process.

Here is the second passage of interest:

Absurdity or contradiction in a metaphorical sentence guarantees we won't believe it and *invites* us, under proper circumstances, to take the sentence metaphorically (Davidson 2001, 258, my italics)

The second passage, following Camp, should be interpreted as saying absurdity and contradiction in a metaphorical sentence *merely cause* us to take the sentence metaphorically. But we can interpret Davidson differently and consistently with what has been said already. A sentence is used to communicate literal content, it is taken to be absurd or contradictory, this leads to the belief that the sentence cannot be true, and this causes us to take the sentence metaphorically. Taking a sentence to be absurd or contradictory implies a belief; believing a sentence cannot be true is a belief; and taking a sentence to be metaphorical suggests a belief. Each belief leads to the next. This is not a *mere* causal process. It is a rational one since it involves a chain of beliefs. To be consistent with what Davidson and his interpreters say, this chain of beliefs may be thought of as following from the *recognition of the metaphorist's intention*.

Here is a third passage:

It may be remarked with justice that the claim that a metaphor *provokes* or *invites* a certain view of its subject rather than saying it straight out is a commonplace; so it is. Thus Aristotle says metaphor leads to a 'perception of resemblances'. Black, following Richards, says a metaphor 'evokes' a certain response: 'a suitable hearer will be led by a metaphor to construct a . . . system.' This view is *neatly summed up by what Heracleitus said of the Delphic oracle: 'It does not say and it does not hide, it intimates* (Davidson 2001, 261-262, my italics).

In this third passage, expressions like "provokes," "invites," "leads to," and "evokes," are all associated with a metaphorical function that is summed up by drawing on Heracleitus. This associates the aforementioned words with another. The association is with the word "intimate." Intimation doesn't speak to a simple causal relation. Intimation implies implication or hinting. Both speak to cognitive relations that are not merely causal since both involve inferences. This passage, then, along with the others cited does not require us to take "inspire" as synonymous with mere causality. Moreover, the mentioned authors are cognitivists.

Let's think next about the time that Davidson uses the word "bully." He is discussing T. S. Eliot's "Hippopotamus."

Metaphor and simile are merely two among endless devices that serve to alert us to aspects of the world by *inviting* us to make comparisons...Here we are neither told that the Church resembles a hippopotamus (as in simile) nor *bullied* into making this comparison (as in metaphor), but there can be no doubt the words are being used to direct our attention to similarities between the two. Nor should there be much inclination, in this case, to posit figurative meanings, for in what words or sentences would we lodge them? The hippopotamus really does rest on his belly in the mud; the True Church, the poem says literally, never can fail. The poem does, of course, intimate much that goes beyond the literal meaning of the words. But intimation is not meaning. (Davidson 2001, 256).

We have already considered the first part of this passage above. Davidson is referring to those endless devices that alert us to aspects of the world by *inviting* us to make comparisons. He contrasts some of those devices (which appear in the cited poem) with simile and metaphor. Similes tell of or assert a likeness. Metaphors

bully us into making a comparison. But the word “bully” is not synonymous with the word “cause.” *It is being used metaphorically*. But if this is true, following Davidson, we must conclude the phrase or sentence in question *has no paraphrase*. We should not conclude that “metaphor bullies” means “metaphor merely causes” or provide it any other paraphrase in the context of use. The interpretation of “metaphor bullies” is like the dreamwork, a work of the imagination and *that work should not be read into the expression*. This is a deconstructive contact point in Davidson’s work. The best we can do, here, following Camp, is to say Davidson wants us to see metaphors as bullies. Bullies interact with victims in complex ways, many of which do not suggest seeing metaphor’s effect on us as a merely causal effect.

We have seen that when we consider the words that Camp highlights, we don’t have strong reasons to think they are being used to express mere causality. But something else that we might have noticed is that Davidson uses the word “intimate.” He does so on several occasions. This can suggest a second meaning (though Davidson rejects that implication, as he says: “intimation is not meaning” (Davidson 2001, 256)). This kind of thought brings us to another interpretation of Davidson’s work that Camp offers; one she rejects. It would seem to identify inconsistency in Davidson’s paper. But as we shall see, the interpretation is not supported by Davidson’s writing.

Camp introduces two readings of Davidson. The noncognitivist reading and what she calls the weak reading. The weak reading acts as an alternative to her noncognitivist interpretation. She introduces the weak reading like so:

The weakest reading of the central thesis is simply the denial of the view that words themselves change meanings when used metaphorically (Camp 2013, 362).

She thinks this view is consistent with a reading of Davidson’s theory that allows for speaker’s meaning:

The weak interpretation of the central thesis is weak in the sense that it holds that this criterion for word or sentence meaning is compatible with allowing that metaphor exemplifies some other, more context-bound species of speaker’s meaning (Camp 2013, 362).

She finds evidence for Davidson seeming to *accept* the view in question saying: “*Davidson does appear to embrace metaphorical speaker’s meaning* at several points in “What Metaphors Mean”” (Camp 2013, 362, my italics). To support this claim, she writes: “he grants that metaphor “is effective in praise and abuse, prayer and promotion, description and prescription”” (Camp 2013, 362).⁴ And she states that Davidson thinks that metaphors can serve as assertions, lies, and promises, quoting him thus:

What makes the difference between a lie and a metaphor is not a difference in the words used or what they mean (in any strict sense of meaning) but in how the words are used. Using a sentence to tell a lie and using it to make a metaphor are, of course, totally different uses, so different that they do not interfere with one another, as say, acting and lying do. . . . It can be an insult, and so an assertion, to say to a man “You are a pig”. . . . What distinguishes metaphor is not meaning but use – in this it is like assertion, hinting, lying, promising, or criticizing. (Camp 2013, 363)⁵

From this point forward, I will use the expression “weak reading” to refer to (a) the thesis that words do not change their meaning when used metaphorically, *and* (b) the thesis that words and sentences used metaphorically have metaphorical speaker’s meaning. Ultimately, Camp rejects the weak reading for the strong or radical reading, her “noncognitivist” reading. The important point for us is that evidence for the weak reading and evidence for the strong reading are evidence for the inconsistent nature of Davidson’s writing. The problem is that what Camp adduces as evidence for the weak reading is not evidence for it. Let’s look at each of the quotes above in context.

Davidson is said to grant that metaphor is effective in praise and abuse, prayer and promotion, description and prescription. This is supposed to be evidence for the weak reading. But it is difficult to understand why. We might say literal meaning is effective in praise and abuse, prayer and promotion, description and

⁴ This is the *first* quote of importance considered below. As we shall see, it is quoted out of context.

⁵ This is the *second* quote of interest considered below. As we shall see, it is a mix of disparate paragraphs.

prescription. This does not imply literal meaning has a context-specific speaker's meaning. And if Davidson holds that the metaphorical meaning *is* nothing over and above the literal meaning of the sentence used metaphorically, he *is* just saying that literal meaning is effective in praise and abuse, prayer and promotion, description and prescription.

Let's look at the quote in context:

In the past those who have denied that metaphor has a cognitive content in addition to the literal have often been out to show that metaphor is confusing, merely emotive, unsuited to serious, scientific, or philosophic discourse. My views should not be associated with this tradition. Metaphor is a legitimate device not only in literature but in science, philosophy, and the law; *it is effective in praise and abuse, prayer and promotion, description and prescription*. For the most part I don't disagree with Max Black, Paul Henle, Nelson Goodman, Monroe Beardsley, and the rest in their accounts of what metaphor accomplishes, except that I think it accomplishes more and that what is additional is different in kind (Davidson 2001, 246-247, my italics).

Davidson has just denied that metaphor says anything beyond its literal meaning (Davidson 2001, 246). In this passage, he is contrasting his view with another set of theorists. According to Davidson, these theorists believe that:

- A. Metaphor has no additional meaning except for its literal content, and
- B. Metaphor should not be used in serious discourse because it is confusing or emotive

Davidson contrasts himself with thinkers who take up this view. He may believe A. But he does not accept B. Davidson holds that metaphor is of use in literature, science, philosophy, and law, and is effective in doing a lot of other things (i.e., it can be useful in praise and abuse, prayer and promotion, description and prescription). I cannot see how this implies that metaphor has a speaker's meaning. It might be *compatible* with speaker's meaning, but Camp is arguing something different. She is arguing that Davidson *appears to embrace metaphorical speaker's meaning*. Yet, it is clear this is not the point he is making.

Camp may think it is the use-based nature of Davidson's theory that implies the weak reading. Use-based theories of metaphor are usually pragmatic theories and pragmatic theories, like Searle's, do identify metaphor with speaker's meaning (Searle 1979). However, as we will see below, *when Davidson draws attention to metaphor's use-based nature, he explicitly denies metaphors have any special meaning, however indirect* (see Davidson 2001, 259⁶).

Let's turn to the second quote cited by Camp above. This quote is not from a single paragraph. It is from two different paragraphs. Below are those passages in full. This is the first:

What makes the difference between a lie and a metaphor is not a difference in the words used or what they mean (in any strict sense of meaning) but in how the words are used. Using a sentence to tell a lie and using it to make a metaphor are, of course, totally different uses, so different that they do not interfere with one another, as say, acting and lying do. In lying, one must make an assertion so as to represent oneself as believing what one does not; in acting, assertion is excluded. Metaphor is careless of the difference. It can be an insult, and so be an assertion, to say to a man 'You are a pig'. But no metaphor was involved when (let us suppose) Odysseus addressed the same words to his companions in Circe's palace; a story, to be sure, and so no assertion—but the word, for once, was used literally of men (Davidson 2001, 259)

We have already analysed this passage. A metaphor like "he is a pig" can be an insult and, therefore, an assertion. Someone represents themselves as believing that he is a pig and intends to represent themselves as believing that he is a pig, and the sentence is true or false. (It's obviously false if "he" picks out a human, dog,

⁶ This passage is cited below.

robotic cleaner, etc.) Using the metaphor makes a literal assertion, which is true or false in an ordinary manner. Ordinary semantic resources are involved (in determining truth conditions and the relevant propositions). What is additional is the psychological effect triggered by understanding the intention behind the sentence, and working out an interpretation of how we are supposed to see the denoted individual. None of this requires a speaker's meaning and the passage is consistent with the rest of Davidson's text, which *tells us that there are no extra meanings when speaking metaphorically*.

Let's look at that second passage to see what is said in it:

No theory of metaphorical meaning or metaphorical truth can help explain how metaphor works. *Metaphor runs on the same familiar linguistic tracks that the plainest sentences do*; this we saw from considering simile. *What distinguishes metaphor is not meaning but use—in this it is like assertion, hinting, lying, promising, or criticizing. And the special use to which we put language in metaphor is not—cannot be—to 'say something' special, no matter how indirectly*. For a metaphor says only what shows on its face—usually a patent falsehood or an absurd truth. And this plain truth or falsehood needs no paraphrase—its meaning is given in the literal meaning of the words (Davidson 2001, 259, my italics).

In this passage, Davidson starts by denying that theories of metaphorical meaning, *such as those that associate metaphorical meaning with speaker's meaning*, can tell us how metaphor works. Again, he says there are no special linguistic rules that govern metaphor; the only rules that matter are the ordinary, boring ones. Nothing in this suggests metaphors have a secondary meaning.

Davidson continues, arguing that metaphor is distinguished by use. It is *like* assertion, hinting, lying, promising, or criticising *in this respect*. They all are analysed in respect of use and this is the respect in which they are alike. And, most importantly, *he follows by clearly emphasising that analysing metaphor in terms of use cannot conclude in positing a second meaning, metaphor does not say anything over and above what it says ordinarily*. There is, therefore, no evidence for and a lot of evidence against Camp's weak reading.⁷ Camp has put together two different paragraphs in order to associate Davidson with an idea that both paragraphs separately deny.

To summarise, no evidence supports the view that Davidson writes inconsistently about metaphor and there are no passages that we have found that cannot be read consistently. Further, there is little evidence for Camp's noncognitivist or cognitivist readings of Davidson. Camp's criterion for classifying noncognitivist theories of metaphor also seems to fail.

Conclusion

We have seen that Camp's (2013) reading of Davidson's theory of metaphor cannot be supported by the evidence that she adduces for it. We have also seen that the criteria she gives for distinguishing cognitivist theories of metaphor from noncognitivist theories of metaphor are problematic. In fact, this is something that philosophers have struggled to provide. For example, Camp and Reimer offer the following criteria:

The central claim of [non-cognitivist] theorists is that a sentence used metaphorically has no distinctive cognitive content aside from its literal content. Non-cognitivists thus resemble Griceans

⁷ It is important to note at this point that there do seem to be thinkers that have interpreted Davidson or his supporters in the weak sense that Camp talks about. Perhaps, Camp has these authors in mind. For example, Lynne Tirrell (1991) tells us that Davidson actually accepts the simile theory of meaning and intimates that the simile is a secondary meaning of the sentence used metaphorically: "For Davidson, the literal semantic meaning of the simile is the basic pragmatic meaning of the metaphor." (Tirrell 1991, 339). Mark Johnson (2017) seems to associate a theory of metaphor that could be taken as exemplifying Camp's weak reading with Richard Rorty (who is a supporter of Davidson's view). Johnson tells us that Rorty believes that metaphors have no meaning (apart from their literal sense), but they attain another literal meaning through certain pragmatic processes: "[Rorty] merely asserts that the metaphor becomes the vehicle that motivates us imaginatively to construct a new language game within which the metaphor then becomes literal...When this process is complete, the original metaphor ceases to be a metaphor and is transformed into a literal expression or term that, miraculously, *does* have a meaning and truth conditions within the new language games" (Johnson 2017, 170).

in denying that the words uttered themselves have any special meaning. They depart from Griceans, though, in also denying that there is any determinate propositional thought which the speaker intends to communicate by means of those words. (Reimer-Camp 2006, 857).

Non-cognitivist about metaphor, then, are taken to hold that:

1. When a sentence is used metaphorically, it has no cognitive content apart from its literal content
2. When a sentence is used metaphorically, there is no determinate propositional thought that the speaker intends to communicate by using the words they use

There are problems with these conditions. One big problem is that they render Grice's cognitivist theory of metaphor noncognitivist. Grice, as acknowledged, accepts 1. But Gricean theory also entails 2 (Allott 2018; Grice 1975, 58; Martinich 1980, 44; Sperber and Wilson 2015, 120).

I suggest, as an alternative, that the simplest way to classify theories of metaphor as noncognitivist (in the way that philosophers want to) is to start by saying that a theory of metaphor is noncognitivist iff it implies that metaphorical sentences/utterances have no propositional content (literal or nonliteral, determinate or indeterminate) that is determined cognitively. This should, I believe, correctly classify theories of metaphor into noncognitivist/noncognitivist camps. For example, Davidson's theory is noncognitivist because it has no propositional content determined cognitively. Positivist theories of metaphor are noncognitivist because metaphorical propositions are not cognitively determined. CMT and Recanati's theories may associate metaphorical meanings with literal content alone, but, in each, literal content is determined cognitively. Thus, they are cognitivist theories of metaphor. Likewise, Grice's metaphorical meanings are determined (to the extent they are determined) cognitively. This criterion, therefore, looks promising avoiding the problems with the various criteria introduced by Camp.

References

- Allott, N. 2018, "Conversational Implicature." In Mark Aronoff (ed.), *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, accessed 25 August 2022, Oxford: Oxford University Press.
doi:10.1093/acrefore/9780199384655.013.205
- Ayer, A. J. 1936. *Language, Truth, and Logic*. Gollancz.
- Carnap, R. 1935. *Philosophy and Logical Syntax*. Keagan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd.
- Camp, E. 2006a. "Contextualism, Metaphor, and What is Said." *Mind and Language*, Vol 21 No. 3: 280-309
- Camp, E. 2006b. "Metaphor in the Mind: The Cognition of Metaphor." *Philosophy Compass* 1/2: 154–170, 10.1111/j.1747-9991.2006.00013.x
- Camp, E. 2013. "Varieties of Metaphor." Companion to Donald Davidson, First Edition. Edited by Ernie Lepore and Kirk Ludwig. John Wiley & Sons.
- Davidson, D. 2001. *Inquiries into Truth and Interpretation* Clarendon Press.
- Davies, M. 1983. "Idiom and Metaphor." *Proceedings of the Aristotelian Society*, Volume 83, Issue 1: 67-85.
- Engel, P. 2008. "In What Sense Is Knowledge the Norm of Assertion?" *Grazer Philosophische Studien*, 77 (1): 99-113.
- Freud, S. 1989. *Introductory Lectures on Psycho-Analysis*. In J. Strachey (ed.) W. W. Norton & Company.

- Genovesi, C. 2020. "Metaphor and What Is Meant: Metaphorical Content, What Is Said, and Contextualism." *Journal of Pragmatics*, 157: 17-38.
- Glucksberg, S. 2008. "How Metaphors Create Categories-Quickly." In Raymond Gibbs (ed.), *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 67-83.
- Grice, P. 1975. "Logic and Conversation." In Donald Davidson & Gilbert Harman (eds.), *The Logic of Grammar*. Dickenson Pub. Co. Pp. 64-75.
- Heim, I and Kratzer, A. 2000. *Semantics in Generative Grammar*. Blackwell Publishers Inc.
- Johnson, M. 2008. "Philosophy's Debt to Metaphor." In Raymond Gibbs (ed.), *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 39-53.
- Johnson, M. 2017. *Embodied Mind, Meaning, and Reason: How Our Bodies Give Rise to Understanding*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Lepore, E. and Stone, M. 2010. "Against Metaphorical Meaning." *Topoi*, 29: 165-180.
- Lepore, E. and Stone, M. 2014. "Philosophical Investigations into Figurative Speech, Metaphorical and Irony." *Protosociology*, 31: 75-87.
- Kölbel, M. 2010. "Literal Force: A Defence of Conventional Assertion." In: Sawyer, S. (ed.) *New Waves in Philosophy of Language. New Waves in Philosophy*. Palgrave Macmillan, London.
https://doi.org/10.1057/9780230248588_7
- Martinich, A. P. 1984. "A Theory for Metaphor." *Journal of Literary Semantics*, Vol 13, Issue 1: 35-56.
- Matcha, J. 2019. "Metaphor in Analytic Philosophy and Cognitive Science." *Revista Portuguesa de Filosofia*, 75(4): 2247-2286.
- Pagin, P. and Neri, M. 2021. "Assertion." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2021 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2021/entries/assertion/>>.
- Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge University Press.
- Reimer, M. and Camp, E. 2006. "Metaphor." In Ernest Lepore & Barry C. Smith (eds.), *The Oxford Handbook to the Philosophy of Language*. Oxford University Press. Pp. 845-863.
- Reimer, M. 2007. "Metaphorical Meanings. Do You See What I Mean?" *Baltic International Yearbook of Cognition, Logic, and Communication*, Vol 3, Article 5.
- Rorty, R. and Hesse, M. 1987. "Unfamiliar Noises." *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volumes, Vol. 61: 283-311
- Schilpp, A. P. 1963. *The Philosophy of Rudolf Carnap*. La Salle, IL, USA: La Salle, Ill., Open Court.
- Searle, J. 1979. *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and Wilson, D. 2015. "Beyond Speaker's Meaning." *Croatia Journal of Philosophy*, Vol. XV, No.44: 117-149.
- Stern, J. 2008. "Metaphor, Semantics, and Context." In Raymond Gibbs (ed.), *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 262-280.

Stevenson, C. L. 1937. "The Emotive Theory of Ethical Terms." *Mind*, Vol. 46. No. 181: 14-31.

Tirrell, L. 1991. "Reductive and Nonreductive Simile Theories of Metaphor." *The Journal of Philosophy*, Vol 88, No. 7: 337-358.

Wilson, D. and Sperber, D. 2015. "Beyond Speaker's Meaning." *Croatian Journal of Philosophy* Vol. XV, No. 44, 2015: 117-149.

Wheeler III, S. C. 2003. "Language and Literature." In Kirk Ludwig (ed.), *Donald Davidson. Contemporary Philosophy in Focus*. Cambridge University Press. 183-207.

執筆者紹介（掲載順）

大森文子（OMORI, Ayako）

人文学研究科言語文化学専攻 言語認知科学講座 教授

渡辺秀樹（WATANABE, Hideki）

大阪大学名誉教授 関西外国語大学外国語学部 教授

村上スミス・アンドリュー（MURAKAMI-SMITH, Andrew）

人文学研究科言語文化学専攻 表象文化論講座 准教授

中畠浩貴（NAKAJIMA, Hirotaka）

人文学研究科言語文化学専攻 言語認知科学講座 講師

福本広光（FUKUMOTO, Hiromitsu）

言語文化研究科言語文化専攻 博士後期課程

（三重大学全学共通教育センター 特任講師）

中村瑞樹（NAKAMURA, Mizuki）

言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程

竹森ありさ（TAKEMORI, Arisa）

言語文化研究科言語文化専攻 博士後期課程

DOAN Ngoc Minh Tran

人文学研究科言語文化学専攻 博士後期課程

山倉佐恵子（YAMAKURA, Saeko）

人文学研究科言語文化学専攻 博士後期課程

MALIK, Luke

マルチリンガル教育センター英語教育推進部会 特任准教授

（2023 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2022

レトリックと文法

2023 年 5 月 31 日 発行

編集発行者

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻